

茨城県教育財団文化財調査報告第149集

(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

熊の山遺跡
(上巻)

平成11年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

210.231

7.566

↓
N1C

茨城県教育財団文化財調査報告第149集

(仮称)島名・福田坪地区特定土地地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

くまやま
熊の山遺跡
(上巻)

平成11年3月

寄贈	平成
歴史・人類学系	年
	月
	日

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

00603032



第561号住居跡出土「掛計算九九」刻書須惠器片



上：熊の山遺跡遠景（南から北方向を望む）下：熊の山遺跡近景

序

茨城県は、昭和38年に筑波研究学園都市計画地域の指定を受けて以来、我が国最大のサイエンスシティとして、国や民間の研究機関、大学、また関連の工場等を集中的に誘致し、日本の科学技術の研究開発の核として、さらに、国際交流の拠点としての国際都市にふさわしい町づくりを進めております。

この新しい町づくりに欠かせない交通機関である常磐新線の整備は、つくばと東京圏を直結し、人・物・情報の交流を盛んにするだけでなく、地域活性化の大きな力となります。そこで、平成6年7月に県、市、地権者の三者協議が合意に達し、新線開発と沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業が進められております。

この予定地内に熊の山遺跡が存在していたため、財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成7年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に平成8年度に「(仮称) 島名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」、平成9年度に「(仮称) 島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」として刊行しました。

本書は、平成9年度に調査を行った熊の山遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として、御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県からいただいた多大なる御協力に対し、心から御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成11年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成9年4月から平成10年3月まで発掘調査を実施した茨城県つくば市大字島名字香取1964番地ほかに所在する、熊の山遺跡の一部の発掘調査報告書である。
- 2 熊の山遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	橋 本 昌	平成7年4月～	
副 理 事 長	中 島 弘 光	平成7年4月～	
副 理 事 長	齋 藤 佳 郎	平成8年4月～平成10年3月	
副 理 事 長	川 俣 勝 慶	平成10年4月～	
常 務 理 事	齋 藤 紀 彦	平成9年4月～	
事 務 局 長	西 村 敏 一	平成9年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	沼 田 文 夫	平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	河 崎 孝 典	平成9年4月～平成10年3月
	課 長	鈴 木 三 郎	平成10年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～
	課 長 代 理	清 水 薫	平成9年4月～平成10年3月
	主 任 調 査 員	小 高 五 十 二	平成8年4月～平成10年3月
	主 任 調 査 員	池 田 晃 一	平成10年4月～
	主 任	川 崎 教 司	平成10年4月～(平成10年4月～9月 主事)
経 理 課	課 長	鈴 木 三 郎	平成9年4月～平成10年3月
	課 長	佐 藤 健	平成10年4月～
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	清 水 薫	平成10年4月～
	主 任	小 池 孝	平成7年4月～平成10年3月
	主 任	宮 本 勉	平成9年4月～
	主 任	木 下 光 保	平成10年4月～
調 査 第 二 課	課 長	和 田 雄 次	平成8年4月～平成10年3月
	調 査 第 一 班 長	鶴 見 貞 雄	平成9年4月～平成10年3月
	首 席 調 査 員	吉 澤 義 一	平成9年9月～平成10年3月 調査
	主 任 調 査 員	吉 原 作 平	平成9年4月～平成10年3月 調査
	主 任 調 査 員	原 信 田 正 夫	平成9年4月～平成10年3月 調査

調 査 第 二 課	主任調査員	川上直登	平成9年4月～平成10年3月 調査
	主任調査員	川津法伸	平成9年4月～6月 調査
	主任調査員	平石尚和	平成9年4月～8月 調査
	主任調査員	川又清明	平成9年4月～8月 調査
	主任調査員	仙波 亨	平成9年7月～9月 調査
	主任調査員	小林 孝	平成9年8月 調査
	主任調査員	川村濟博	平成9年8月 調査
	主任調査員	菱沼良幸	平成9年9月～平成10年3月 調査
	主任調査員	矢ノ倉正男	平成9年10月～平成10年3月 調査
整 理 課	課 長	川井正一	平成10年4月～
	首席調査員	萩野谷 悟	平成10年4月～
	主任調査員	吉原作平	平成10年4月～平成11年3月 整理・執筆・編集
	主任調査員	原信田正夫	平成10年4月～平成11年3月 整理・執筆・編集

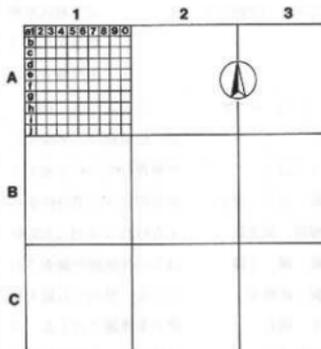
- 3 本書で使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、第1章～第3章第1・2節、第3節3の(1)第111号住居跡～第649号住居跡、(2)～(7)、4、第4節は吉原が、第3章第3節1、2と3の(1)第650号住居跡～第724号住居跡は原信田が執筆し、編集は、吉原・原信田が行った。
- 5 本書の作成にあたり墨書・刻書土器については、国立歴史民俗博物館教授の平川 南氏に御教示をいただいた。10世紀の土師器については、宮城県教育庁文化財保護課の村田晃一氏に御教示をいただいた。古墳時代の土器については、北茨城市中妻小学校教諭の樫村宣行氏に御教示をいただいた。
- 6 船の山遺跡出土の天部立像および耳環に関する自然科学的調査については、東京国立文化財研究所保存科学部早川泰弘氏、榎本淳子氏、平尾良光氏に依頼した。
- 7 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 8 遺跡の概略

ふりがな	(かしょう) しまな・ふくつばちくといとちくかくせいりじぎょうちないまいざうふんかびちやうさほうこくしょ		
書 名	(仮称) 島名・福田坪地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書		
副 書 名	熊の山遺跡		
巻 次	Ⅲ		
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告		
シリーズ番号	第149集		
著 者 名	吉原作平 原信田正夫		
編 集 機 関	財団法人 茨城県教育財団		
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587		
発 行 日	1999(平成11)年3月19日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
熊の山遺跡	茨城県つくば市 大字島名字香取 1964番地のほか	08220-214	36度 3分 41秒	140度 3分 46秒	19 ～ 22m	19970401 ～ 19980331	33,421㎡	(仮称) 島名・ 福田坪地区特 定土地区画整 理事業に伴う 事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
熊の山遺跡	旧石器 縄文				剥片		熊の山遺跡は、平成9年 度整理分を含めて過去3 か年間で、古墳時代から 平安時代にかけて650軒 以上の住居跡が調査され ている。県内でも最大規 模の集落跡と言える。こ の地域は、古代の行政組 織で常陸国河内郡島名郷 に属しており、熊の山遺 跡はその中心集落跡にな るものと考えられる。		
					縄文土器片 石鏃 石斧 磨石				
	集落跡	古墳	竪穴住居跡	50軒	土師器 須恵器				
			掘立柱建物跡	1棟	鉄鏃 鎌 土錘 支脚 紡錘車 勾玉 砥石 石製模造品				
			奈良・平安	竪穴住居跡 掘立柱建物跡	182軒 17棟	土師器 須恵器 灰輪陶器 鉄鏃 刀子 鎌 土錘 腰帯具 瓦			
	墓地跡	中世		地下式墓	9基	天部立像 陶器			
				火葬施設	5基	磁器 土師質土器			
				井戸	14基	古銭			
				方形竪穴状遺構	5基				
		道路状遺構	1条						
近世			道路状遺構	1条	銅銭 陶器 磁器 土師質土器 煙管				
			その他	時期不明		土坑	352基	人骨片	
墓塚	2基								
溝	10条								
不明遺構	2基								

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第K系座標に準拠し、X軸=+57,400m、Y軸=+54,000mの交



第1図 調査区呼称方法概念図

点を基準点(A1a)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m方眼の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a区」、「B2b区」のように呼称した。

2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

- 遺構 住居-S I 掘立柱建物跡-S B 柵-S A 土坑-S K 井戸-S E 溝-S D
 道路跡-S F 不明遺構-S X ビット-P
 遺物 土器・陶器-P 土製品-D P 石製品-Q 金属製品・古銭-M 拓本土器-T P
 土層 攪乱-K

3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

- 土器 ○ 土製品 □ 石製品 △ 金属製品

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺跡の全体図は縮尺200分の1、住居跡や掘立柱建物跡、土坑、井戸、不明遺構は60分の1・80分の1に縮尺し掲載した。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もある。
- (3) 「主軸方向」は、炉・竈をもつ住居跡ではそれらを通る線を主軸とし、他は長軸を主軸として、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E、N-10°-W)。なお、[]を付したものは推定である。
- (4) 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径 E-高台高 F-つまみ径 G-つまみ高とし、単位はcmである。なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。
- (5) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、実測番号(Pなど)、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

総目次

—上巻—

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 熊の山遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 3区の遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	9
① 古墳時代	9
② 奈良・平安時代	16
(2) 溝	21
(3) 土坑	21
2 5区の遺構と遺物	23
(1) 竪穴住居跡	23
① 古墳時代	23
② 奈良・平安時代	73
③ 時期不明	99
(2) 掘立柱建物跡	100
(3) 櫛列跡	102
(4) 溝	103
(5) 井戸	104
(6) 地下式墳	108
(7) 土坑	111
① 火葬施設	111
② 墓塚	112
③ その他	114
(8) 遺構外出土遺物	115

3 7区の遺構と遺物	119
(1) 竪穴住居跡	119
① 古墳時代	119
② 奈良・平安時代	193
- 下 巻 -	
② 奈良・平安時代	399
③ 時期不明	515
(2) 掘立柱建物跡	517
(3) 溝	536
(4) 井戸	539
(5) 道路状遺構	545
(6) 地下式墳	547
(7) 土坑	553
① 方形竪穴状遺構	553
② 火葬施設	557
③ 墓塚	559
④ その他	559
(8) 遺構外出土遺物	561
第4節 まとめ	577
付 章	589
熊の山遺跡出土の天部立像および耳環に関する自然科学的調査	589

写真図版

插图目次

—上 卷—

第 1 图	調査区呼称方法概念图	第 32 图	第 424 号住居跡出土遺物実測図 ……	51	
第 2 图	周辺遺跡位置図 ……………	6	第 33 图	第 426 号住居跡・出土遺物実測図 ……	53
第 3 图	基本土層図 ……………	7	第 34 图	第 427 号住居跡・出土遺物実測図 ……	55
第 4 图	熊の山遺跡調査区設定図 ……………	8	第 35 图	第 429・436 号住居跡実測図 ……………	57
第 5 图	第 422A・422B 号住居跡実測図 ……………	10	第 36 图	第 432 号住居跡・出土遺物実測図 ……	58
第 6 图	第 422A 号住居跡出土遺物実測図(1) ……………	11	第 37 图	第 433 号住居跡・出土遺物実測図 ……	60
第 7 图	第 422A 号住居跡出土遺物実測図(2) ……………	12	第 38 图	第 435 号住居跡出土遺物実測図 ……	62
第 8 图	第 422A 号住居跡出土遺物実測図(3) ……………	13	第 39 图	第 437 号住居跡・出土遺物実測図(1) ……………	65
第 9 图	第 419 号住居跡・出土遺物実測図 ……	16	第 40 图	第 437 号住居跡出土遺物実測図(2) ……	66
第 10 图	第 420 号住居跡・出土遺物実測図 ……	18	第 41 图	第 438・443 号住居跡実測図 ……………	67
第 11 图	第 421 号住居跡・出土遺物実測図 ……	19	第 42 图	第 438 号住居跡出土遺物実測図 ……	67
第 12 图	第 422B 号住居跡出土遺物実測図 ……	21	第 43 图	第 439・441 号住居跡実測図 ……………	69
第 13 图	第 29 号溝断面図 ……………	21	第 44 图	第 439 号住居跡出土遺物実測図 ……	69
第 14 图	第 354 号住居跡出土遺物実測図 ……	23	第 45 图	第 440 号住居跡・出土遺物実測図 ……	71
第 15 图	第 354・424 号住居跡実測図 ……………	24	第 46 图	第 441 号住居跡出土遺物実測図 ……	72
第 16 图	第 380 号住居跡実測図 ……………	26	第 47 图	第 355 号住居跡・出土遺物実測図 ……	73
第 17 图	第 380 号住居跡出土遺物実測図 ……	27	第 48 图	第 378 号住居跡・出土遺物実測図 ……	74
第 18 图	第 383 号住居跡・出土遺物実測図 ……	28	第 49 图	第 379 号住居跡・出土遺物実測図 ……	76
第 19 图	第 385・386 号住居跡実測図 ……………	30	第 50 图	第 386 号住居跡出土遺物実測図 ……	78
第 20 图	第 385 号住居跡出土遺物実測図 ……	31	第 51 图	第 389 号住居跡出土遺物実測図 ……	79
第 21 图	第 388・413 号住居跡実測図 ……………	34	第 52 图	第 390 号住居跡・出土遺物実測図(1) ……………	81
第 22 图	第 388 号住居跡出土遺物実測図 ……	35	第 53 图	第 390 号住居跡出土遺物実測図(2) ……	82
第 23 图	第 389・391 号住居跡実測図 ……………	37	第 54 图	第 392 号住居跡・出土遺物実測図 ……	83
第 24 图	第 391 号住居跡出土遺物実測図 ……	38	第 55 图	第 393 号住居跡・出土遺物実測図 ……	84
第 25 图	第 394 号住居跡・出土遺物実測図 ……	40	第 56 图	第 395 号住居跡・出土遺物実測図 ……	85
第 26 图	第 396 号住居跡・出土遺物実測図 ……	41	第 57 图	第 397 号住居跡・出土遺物実測図(1) ……………	87
第 27 图	第 402・414 号住居跡実測図(1) ……	44	第 58 图	第 397 号住居跡出土遺物実測図(2) ……	88
第 28 图	第 402・414 号住居跡実測図(2) ……	45	第 59 图	第 399 号住居跡・出土遺物実測図 ……	90
第 29 图	第 402 号住居跡出土遺物実測図 ……	45	第 60 图	第 400 号住居跡・出土遺物実測図 ……	92
第 30 图	第 423・435 号住居跡実測図 ……………	49	第 61 图	第 403・404 号住居跡実測図 ……………	94
第 31 图	第 423 号住居跡出土遺物実測図 ……	50	第 62 图	第 403 号住居跡出土遺物実測図 ……	94

第 63 图	第404号住居跡出土遺物実測図	94	第 95 图	第559号住居跡出土遺物実測図(2)	141
第 64 图	第413号住居跡出土遺物実測図	96	第 96 图	第559号住居跡出土遺物実測図(3)	142
第 65 图	第428号住居跡・出土遺物実測図	97	第 97 图	第566・567号住居跡実測図	144
第 66 图	第443号住居跡出土遺物実測図	99	第 98 图	第566号住居跡出土遺物実測図	144
第 67 图	第425号住居跡実測図	100	第 99 图	第590号住居跡・出土遺物実測図	146
第 68 图	第15号獨立柱建物跡・出土遺物 実測図	101	第100图	第623号住居跡・出土遺物実測図	148
第 69 图	第1号槽列跡実測図	102	第101图	第632号住居跡・出土遺物実測図	150
第 70 图	第2号槽列跡実測図	102	第102图	第634・636・637号住居跡実測図	152
第 71 图	第17B・24号溝断面図	103	第103图	第634号住居跡出土遺物実測図	153
第 72 图	第11・12・13・14・15号井戸実測図	105	第104图	第639・641号住居跡実測図	155
第 73 图	第11号井戸出土遺物実測図	106	第105图	第641号住居跡出土遺物実測図	155
第 74 图	第5号地下式墳実測図	108	第106图	第648号住居跡・出土遺物実測図	156
第 75 图	第6・7号地下式墳実測図	110	第107图	第653・654号住居跡実測図	158
第 76 图	第552・554・251号土坑実測図	111	第108图	第653号住居跡出土遺物実測図	159
第 77 图	5区土坑出土遺物実測図	113	第109图	第656号住居跡実測図	161
第 78 图	5区遺構外出土遺物実測図(1)	116	第110图	第656号住居跡出土遺物実測図	162
第 79 图	5区遺構外出土遺物実測図(2)	117	第111图	第657号住居跡・出土遺物実測図(1)	165
第 80 图	第529号住居跡実測図	119	第112图	第657号住居跡出土遺物実測図(2)	166
第 81 图	第529号住居跡出土遺物実測図	120	第113图	第658号住居跡実測図(1)	168
第 82 图	第533・534号住居跡実測図	122	第114图	第658号住居跡・出土遺物実測図(2)	169
第 83 图	第533号住居跡出土遺物実測図(1)	124	第115图	第658号住居跡出土遺物実測図(3)	170
第 84 图	第533号住居跡出土遺物実測図(2)	125	第116图	第692・694・696号住居跡実測図	174
第 85 图	第536A・536B・538A・538B号 住居跡実測図(1)	128	第117图	第694号住居跡出土遺物実測図	175
第 86 图	第536A・536B・538A・538B号 住居跡実測図(2)	129	第118图	第700・701・707号住居跡実測図	176
第 87 图	第538A号住居跡出土遺物実測図	129	第119图	第710号住居跡・出土遺物実測図(1)	177
第 88 图	第542・543号住居跡実測図	130	第120图	第710号住居跡出土遺物実測図(2)	178
第 89 图	第543号住居跡出土遺物実測図	131	第121图	第718号住居跡・出土遺物実測図(1)	180
第 90 图	第544号住居跡・出土遺物実測図(1)	133	第122图	第718号住居跡出土遺物実測図(2)	181
第 91 图	第544号住居跡出土遺物実測図(2)	134	第123图	第718号住居跡出土遺物実測図(3)	182
第 92 图	第550号住居跡・出土遺物実測図	136	第124图	第721・722・723号住居跡実測図(1)	186
第 93 图	第553号住居跡・出土遺物実測図	137	第125图	第721・722・723号住居跡実測図(2)	187
第 94 图	第559号住居跡・出土遺物実測図(1)	140	第126图	第721号住居跡出土遺物実測図(1)	187

第127图	第721号住居跡出土遺物実測図(2) …	188	第163图	第561・571・572号住居跡実測図 …	239
第128图	第723号住居跡出土遺物実測図 ……	191	第164图	第561号住居跡出土遺物実測図 ……	240
第129图	第111号住居跡・出土遺物実測図 …	193	第165图	第562号住居跡・出土遺物実測図(1) ……………	243
第130图	第528A・528B号住居跡実測図 ……	195	第166图	第562号住居跡出土遺物実測図(2) …	244
第131图	第528A号住居跡出土遺物実測図 …	195	第167图	第563号住居跡・出土遺物実測図 …	245
第132图	第528B号住居跡出土遺物実測図 …	195	第168图	第564号住居跡・出土遺物実測図 …	247
第133图	第531号住居跡・出土遺物実測図 …	198	第169图	第565号住居跡・出土遺物実測図(1) ……………	250
第134图	第532号住居跡・出土遺物実測図 …	199	第170图	第565号住居跡出土遺物実測図(2) …	251
第135图	第534号住居跡出土遺物実測図 ……	200	第171图	第567号住居跡出土遺物実測図 ……	252
第136图	第535・557・558号住居跡実測図(1) ……………	202	第172图	第568号住居跡・出土遺物実測図 …	254
第137图	第535・557・558号住居跡実測図(2) ……………	203	第173图	第569号住居跡・出土遺物実測図 …	255
第138图	第535号住居跡出土遺物実測図 ……	203	第174图	第570号住居跡・出土遺物実測図 …	257
第139图	第536A号住居跡出土遺物実測図 …	205	第175图	第572号住居跡出土遺物実測図 ……	259
第140图	第537号住居跡・出土遺物実測図 …	206	第176图	第573A・573B号住居跡実測図 ……	260
第141图	第538B号住居跡出土遺物実測図 …	207	第177图	第573A号住居跡出土遺物実測図 …	260
第142图	第539A・539B号住居跡実測図 ……	209	第178图	第573B号住居跡出土遺物実測図 …	260
第143图	第539A号住居跡出土遺物実測図 …	209	第179图	第574号住居跡・出土遺物実測図 …	262
第144图	第539B号住居跡出土遺物実測図 …	209	第180图	第575・576号住居跡実測図 ……	263
第145图	第540・541号住居跡実測図 ……	212	第181图	第575号住居跡出土遺物実測図 ……	263
第146图	第540号住居跡出土遺物実測図 ……	212	第182图	第577号住居跡・出土遺物実測図 …	265
第147图	第541号住居跡出土遺物実測図 ……	212	第183图	第578号住居跡・出土遺物実測図 …	267
第148图	第542号住居跡出土遺物実測図 ……	215	第184图	第580号住居跡・出土遺物実測図 …	268
第149图	第545号住居跡・出土遺物実測図 …	217	第185图	第581号住居跡・出土遺物実測図 …	269
第150图	第546号住居跡・出土遺物実測図 …	219	第186图	第582号住居跡・出土遺物実測図 …	270
第151图	第547号住居跡・出土遺物実測図 …	221	第187图	第583・585号住居跡実測図 ……	271
第152图	第548号住居跡・出土遺物実測図 …	222	第188图	第583号住居跡出土遺物実測図 ……	271
第153图	第549号住居跡・出土遺物実測図 …	225	第189图	第584号住居跡・出土遺物実測図 …	273
第154图	第551号住居跡・出土遺物実測図 …	226	第190图	第585号住居跡出土遺物実測図 ……	274
第155图	第552号住居跡・出土遺物実測図 …	228	第191图	第586号住居跡・出土遺物実測図 …	276
第156图	第554・555号住居跡実測図 ……	230	第192图	第587号住居跡・出土遺物実測図 …	278
第157图	第554号住居跡出土遺物実測図 ……	230	第193图	第588・655号住居跡実測図 ……	280
第158图	第555号住居跡出土遺物実測図(1) …	232	第194图	第588号住居跡出土遺物実測図 ……	280
第159图	第555号住居跡出土遺物実測図(2) …	233	第195图	第591号住居跡・出土遺物実測図 …	281
第160图	第557号住居跡出土遺物実測図 ……	236	第196图	第592号住居跡・出土遺物実測図 …	283
第161图	第558号住居跡出土遺物実測図 ……	236	第197图	第593号住居跡・出土遺物実測図 …	285
第162图	第560号住居跡・出土遺物実測図 …	238	第198图	第594・595号住居跡実測図 ……	287

第199图	第594号住居跡出土遺物実測図	288	第231图	第613・614号住居跡実測図	326
第200图	第595号住居跡出土遺物実測図	289	第232图	第613号住居跡出土遺物実測図	326
第201图	第596・597・600号住居跡実測図(1)	292	第233图	第614号住居跡出土遺物実測図	328
		第234图	第615号住居跡出土遺物実測図	330
第202图	第596・597・600号住居跡実測図(2)	293	第235图	第616A・616B・617・618号 住居跡実測図	332
		第236图	第616A号住居跡出土遺物実測図	333
第203图	第596号住居跡出土遺物実測図	293	第237图	第616B号住居跡出土遺物実測図	333
第204图	第597号住居跡出土遺物実測図	294	第238图	第617号住居跡出土遺物実測図	335
第205图	第598・599号住居跡実測図	296	第239图	第618号住居跡出土遺物実測図	335
第206图	第598号住居跡出土遺物実測図	296	第240图	第619号住居跡・出土遺物実測図	338
第207图	第599号住居跡出土遺物実測図	296	第241图	第620・621A・622・631号住居跡 実測図(1)	340
第208图	第600号住居跡出土遺物実測図	298	第242图	第620・621A・622・631号住居跡 実測図(2)	341
第209图	第601号住居跡・出土遺物実測図	299	第243图	第620号住居跡出土遺物実測図	343
第210图	第602号住居跡・出土遺物実測図	301	第244图	第621A号住居跡出土遺物実測図	345
第211图	第603号住居跡・出土遺物実測図(1)	303	第245图	第621B号住居跡・出土遺物実測図	346
		第246图	第622号住居跡出土遺物実測図	348
第212图	第603号住居跡出土遺物実測図(2)	304	第247图	第624号住居跡・出土遺物実測図	349
第213图	第604号住居跡・出土遺物実測図(1)	307	第248图	第625号住居跡・出土遺物実測図	352
		第249图	第626号住居跡・出土遺物実測図	354
第214图	第604号住居跡出土遺物実測図(2)	308	第250图	第627A・627B号住居跡実測図	356
第215图	第605号住居跡・出土遺物実測図(1)	309	第251图	第627B号住居跡出土遺物実測図	356
		第252图	第628・629号住居跡実測図	359
第216图	第605号住居跡出土遺物実測図(2)	310	第253图	第628号住居跡出土遺物実測図	360
第217图	第606号住居跡・出土遺物実測図	312	第254图	第629号住居跡出土遺物実測図	360
第218图	第607号住居跡・出土遺物実測図(1)	314	第255图	第630号住居跡・出土遺物実測図	363
		第256图	第631号住居跡出土遺物実測図	366
第219图	第607号住居跡出土遺物実測図(2)	315	第257图	第633号住居跡・出土遺物実測図	367
第220图	第608・609号住居跡実測図	317	第258图	第635号住居跡・出土遺物実測図	369
第221图	第608号住居跡出土遺物実測図	317	第259图	第636号住居跡出土遺物実測図	371
第222图	第609号住居跡出土遺物実測図	317	第260图	第637号住居跡出土遺物実測図	371
第223图	第610・615号住居跡実測図	320	第261图	第639号住居跡出土遺物実測図	374
第224图	第610号住居跡出土遺物実測図(1)	320	第262图	第640・651号住居跡実測図	377
第225图	第610号住居跡出土遺物実測図(2)	321	第263图	第640号住居跡出土遺物実測図	377
第226图	第611・680号住居跡実測図	322	第264图	第642・643号住居跡実測図	378
第227图	第611号住居跡出土遺物実測図	322			
第228图	第612・661号住居跡実測図	324			
第229图	第612号住居跡出土遺物実測図(1)	324			
第230图	第612号住居跡出土遺物実測図(2)	325			

第265图	第642号住居跡出土遺物実測図	……	379
第266图	第643号住居跡出土遺物実測図	……	382
第267图	第644・645A・645B・646号住居跡 実測図(1)	……………	384
第268图	第644・645A・645B・646号住居跡 実測図(2)	……………	385
第269图	第644号住居跡出土遺物実測図	……	385
第270图	第645A号住居跡出土遺物実測図	…	385

— 下 卷 —

第278图	第652号住居跡・出土遺物実測図	…	399
第279图	第654号住居跡出土遺物実測図	……	402
第280图	第655号住居跡出土遺物実測図	……	404
第281图	第659号住居跡・出土遺物実測図	…	406
第282图	第660号住居跡・出土遺物実測図	…	408
第283图	第675・676・684号住居跡実測図(1)	……………	410
第284图	第675・684号住居跡実測図(2)	……………	411
第285图	第675号住居跡出土遺物実測図	……	411
第286图	第676号住居跡出土遺物実測図	……	411
第287图	第677号住居跡・出土遺物実測図(1)	……………	414
第288图	第677号住居跡出土遺物実測図(2)	…	415
第289图	第678号住居跡・出土遺物実測図(1)	……………	418
第290图	第678号住居跡出土遺物実測図(2)	…	419
第291图	第679号住居跡・出土遺物実測図	…	421
第292图	第680号住居跡出土遺物実測図	……	423
第293图	第681号住居跡・出土遺物実測図	…	425
第294图	第682号住居跡・出土遺物実測図(1)	……………	426
第295图	第682号住居跡出土遺物実測図(2)	…	427
第296图	第683号住居跡・出土遺物実測図	…	430
第297图	第684号住居跡出土遺物実測図	……	432
第298图	第685号住居跡・出土遺物実測図(1)	……………	433
第299图	第685号住居跡出土遺物実測図(2)	…	434
第300图	第687号住居跡・出土遺物実測図(1)	……………	436

第271图	第645B号住居跡出土遺物実測図	…	388
第272图	第646号住居跡出土遺物実測図	……	388
第273图	第647号住居跡・出土遺物実測図(1)	……………	391
第274图	第647号住居跡出土遺物実測図(2)	…	392
第275图	第649号住居跡・出土遺物実測図	…	394
第276图	第650号住居跡・出土遺物実測図	…	395
第277图	第651号住居跡出土遺物実測図	……	398
第301图	第687号住居跡出土遺物実測図(2)	…	437
第302图	第688・689・690号住居跡実測図(1)	……………	440
第303图	第688・689号住居跡実測図(2)	……………	441
第304图	第688号住居跡出土遺物実測図(1)	…	441
第305图	第688号住居跡出土遺物実測図(2)	…	442
第306图	第689号住居跡出土遺物実測図	……	442
第307图	第690号住居跡出土遺物実測図	……	447
第308图	第691号住居跡・出土遺物実測図	…	448
第309图	第692号住居跡出土遺物実測図	……	451
第310图	第693・695号住居跡実測図	……………	453
第311图	第693号住居跡出土遺物実測図(1)	…	453
第312图	第693号住居跡出土遺物実測図(2)	…	454
第313图	第695号住居跡出土遺物実測図	……	455
第314图	第696号住居跡出土遺物実測図	……	457
第315图	第697号住居跡・出土遺物実測図(1)	……………	459
第316图	第697号住居跡出土遺物実測図(2)	…	460
第317图	第698・699号住居跡実測図	……………	462
第318图	第698号住居跡出土遺物実測図	……	462
第319图	第699号住居跡出土遺物実測図	……	464
第320图	第700号住居跡出土遺物実測図	……	466
第321图	第702号住居跡・出土遺物実測図	…	468
第322图	第703号住居跡・出土遺物実測図	…	469
第323图	第704号住居跡・出土遺物実測図	…	472
第324图	第705号住居跡・出土遺物実測図	…	473
第325图	第706号住居跡実測図	……………	474
第326图	第707号住居跡出土遺物実測図	……	476
第327图	第708号住居跡・出土遺物実測図	…	478

第328图	第709号住居跡・出土遺物実測図	480	第359图	第21号掘立柱建物跡出土遺物実測図	524
第329图	第711号住居跡・出土遺物実測図	482	第360图	第21号掘立柱建物跡実測図	524
第330图	第712号住居跡・出土遺物実測図	483	第361图	第22号掘立柱建物跡実測図	525
第331图	第713・714号住居跡実測図	486	第362图	第23号掘立柱建物跡出土遺物実測図	526
第332图	第713号住居跡出土遺物実測図(1)	487	第363图	第23号掘立柱建物跡実測図	526
第333图	第713号住居跡出土遺物実測図(2)	488	第364图	第24号掘立柱建物跡実測図	528
第334图	第714号住居跡出土遺物実測図	491	第365图	第24号掘立柱建物跡出土遺物実測図	529
第335图	第715号住居跡・出土遺物実測図(1)	493	第366图	第25・26号掘立柱建物跡実測図	531
第336图	第715号住居跡出土遺物実測図(2)	494	第367图	第27・52号掘立柱建物跡実測図	533
第337图	第716号住居跡・出土遺物実測図	497	第368图	第48号掘立柱建物跡実測図	534
第338图	第717号住居跡・出土遺物実測図(1)	499	第369图	第49号掘立柱建物跡実測図	535
第339图	第717号住居跡出土遺物実測図(2)	500	第370图	第50号掘立柱建物跡実測図	535
第340图	第719号住居跡・出土遺物実測図	502	第371图	第19・20・26・28・30号溝断面図	536
第341图	第720号住居跡実測図(1)	504	第372图	第20号溝出土遺物実測図(1)	537
第342图	第720号住居跡実測図(2)	505	第373图	第20号溝出土遺物実測図(2)	538
第343图	第720号住居跡・出土遺物実測図(3)	506	第374图	第16~21号井戸実測図	540
第344图	第720号住居跡出土遺物実測図(4)	507	第375图	第16号井戸出土遺物実測図	541
第345图	第720号住居跡出土遺物実測図(5)	508	第376图	第22~24号井戸実測図	544
第346图	第720号住居跡出土遺物実測図(6)	509	第377图	第2・3号道路状遺構断面・出土遺物実測図	546
第347图	第722号住居跡出土遺物実測図	514	第378图	第8号地下式竈実測図	547
第348图	第579号住居跡実測図	515	第379图	第9号地下式竈実測図	548
第349图	第589号住居跡実測図	516	第380图	第10号地下式竈・出土遺物実測図	549
第350图	第724号住居跡実測図	517	第381图	第11号地下式竈実測図	550
第351图	第8・12号掘立柱建物跡実測図	518	第382图	第12号地下式竈実測図	551
第352图	第8号掘立柱建物跡出土遺物実測図	519	第383图	第13号地下式竈実測図	553
第353图	第13号掘立柱建物跡出土遺物実測図	519	第384图	第498~501・525号土坑実測図	556
第354图	第13号掘立柱建物跡実測図	520	第385图	第343・353・364・479号土坑実測図	558
第355图	第14号掘立柱建物跡実測図	521	第386图	第321・517・518号土坑実測図	559
第356图	第17号掘立柱建物跡実測図	522	第387图	7区土坑出土遺物実測図	560
第357图	第19号掘立柱建物跡出土遺物実測図	522	第388图	7区遺構外出土遺物実測図(1)	562
第358图	第19号掘立柱建物跡実測図	523	第389图	7区遺構外出土遺物実測図(2)	563
			第390图	7区遺構外出土遺物実測図(3)	564
			第391图	住居跡(6~7世紀)配置図(1)	579

第392図 住居跡（8世紀）配置図(2)	580	第395図 掘立柱建物跡（8～9世紀）配置図(5)	585
第393図 住居跡（9世紀）配置図(3)	582	
第394図 住居跡（10世紀）配置図(4)	583		

表 目 次

- 上 卷 -

表1 熊の山遺跡周辺遺跡一覧表	5
-----------------------	---

- 下 卷 -

表2 熊の山遺跡3区住居跡一覧表	566
表3 熊の山遺跡5区住居跡一覧表	566
表4 熊の山遺跡5区土坑一覧表	567
表5 熊の山遺跡7区住居跡一覧表	569
表6 熊の山遺跡7区土坑一覧表	573
表7 熊の山遺跡7区溝一覧表	576

写真図版目次

- 下 卷 -

- P L 1 7区表土除去, 住居跡作業風景, 作業風景
- P L 2 第419・420・421・422A号住居跡遺物出土状況, 第422A号住居跡完掘, 第422A号住居跡竈遺物出土状況
- P L 3 作業風景, 5区全景, 第354号住居跡遺物出土状況, 第378・379号住居跡完掘, 第379号住居跡竈完掘
- P L 4 第380・383・385号住居跡完掘, 第380・381・383~385号住居跡遺物出土状況
- P L 5 第385号住居跡貯蔵穴遺物出土状況, 第386・388~390号住居跡完掘, 第386・388・389号住居跡遺物出土状況
- P L 6 第390・391・394号住居跡完掘, 第390号住居跡竈完掘, 第391・392・395・396号住居跡遺物出土状況
- P L 7 第397~400・402号住居跡完掘, 第397・402号住居跡遺物出土状況
- P L 8 第402号住居跡遺物出土状況, 第403・404・414・423・435号住居跡完掘, 第413号住居跡竈完掘, 第413号住居跡竈遺物出土状況
- P L 9 第424・426・428号住居跡完掘, 第424・426号住居跡遺物出土状況, 第424・427号住居跡竈完掘
- P L 10 第428・433・435号住居跡遺物出土状況, 第429・432・433・435・436号住居跡完掘
- P L 11 第437~440号住居跡完掘, 第437号住居跡遺物出土状況, 第438号住居跡竈完掘
- P L 12 第440号住居跡遺物出土状況, 第441号住居跡完掘, 第15号掘立柱建物跡完掘, 第5・6・7号地下式横完掘, 第12・13号井戸完掘
- P L 13 第17B・24号溝完掘, 7区全景
- P L 14 7区全景, 第111・532・533号住居跡完掘, 第710・528A・528B・529号住居跡遺物出土状況, 第529号住居跡竈完掘
- P L 15 第533号住居跡竈遺物出土状況, 第535・536A・536B・538A・538B・557・558号住居跡遺物出土状況, 第535・537号住居跡竈完掘, 第536A・536B・537・538A・538B号住居跡完掘
- P L 16 第539A・540・542~545号住居跡完掘, 第539A号住居跡遺物出土状況, 第540・544号住居跡竈遺物出土状況, 第321号土坑完掘
- P L 17 第545号住居跡竈遺物出土状況, 第546・548・550・554・555号住居跡完掘, 第555号住居跡遺物出土状況, 第548号住居跡掘り方状況
- P L 18 第555号住居跡竈遺物出土状況, 第535・557・558・560~563・571・572号住居跡完掘, 第559号住居跡遺物出土状況
- P L 19 第564~568・588号住居跡完掘, 第567号住居跡竈完掘, 第568号住居跡竈遺物出土状況, 第569号住居跡炭化材出土状況
- P L 20 第574・577・578・580・581号住居跡完掘, 第577号住居跡竈完掘, 第579・583号住居跡遺物出土状況

- P L 21 第583・584号住居跡遺物出土状況, 第584・586・587・589・591号住居跡完掘, 第588号住居跡完掘
- P L 22 第596号住居跡遺物出土状況, 第594・597号住居跡完掘, 第592・593・595・599号住居跡遺物出土状況
- P L 23 第597・603号住居跡遺物出土状況, 第597・600号住居跡完掘, 第603号住居跡完掘, 第603号住居跡遺物出土状況
- P L 24 第604・607・608号住居跡遺物出土状況, 第604号住居跡完掘, 第605号住居跡遺物出土状況, 第605号住居跡袖部内遺物出土状況, 第607・608号住居跡完掘
- P L 25 第608・610・612号住居跡遺物出土状況, 第609・611~613号住居跡完掘, 第610号住居跡完掘
- P L 26 第613~615号住居跡完掘, 第613号住居跡遺物出土状況, 第614・615・616A・616B・617・618号住居跡完掘, 第615号住居跡遺物出土状況
- P L 27 第616B・617~619号住居跡完掘, 第617号住居跡完掘, 第619号住居跡遺物出土状況, 第618・619号住居跡遺物出土状況
- P L 28 第620・621A・621B号住居跡完掘, 第620号住居跡遺物出土状況, 第621B号住居跡掘り方状況, 第621A・621B号住居跡遺物出土状況
- P L 29 第623号住居跡完掘, 第621A・624号住居跡遺物出土状況, 第622~624号住居跡完掘, 第622号住居跡遺物出土状況
- P L 30 第624・626号住居跡完掘, 第625~627A号住居跡完掘, 第625号住居跡遺物出土状況, 第626号住居跡遺物出土状況
- P L 31 第627A・627B~630号住居跡遺物出土状況, 第628・630号住居跡完掘, 第630号住居跡完掘, 第630号住居跡遺物出土状況
- P L 32 第631・632・634~637号住居跡完掘, 第631・634~637号住居跡遺物出土状況, 第632号住居跡遺物出土状況
- P L 33 第634・635号住居跡遺物出土状況, 第634・637号住居跡完掘, 第635・637号住居跡完掘, 第637号住居跡袖部断ち割り状況
- P L 34 第638~642・651号住居跡完掘, 第639~641号住居跡遺物出土状況
- P L 35 第642・643号住居跡遺物出土状況, 第642号住居跡完掘, 第643号住居跡遺物出土状況, 第643~645A・645B・647・648号住居跡完掘
- P L 36 第644・645A・645B・647号住居跡遺物出土状況, 第644・645B号住居跡遺物出土状況, 第645B・646・647号住居跡完掘, 第646号住居跡完掘
- P L 37 第647・648・652号住居跡完掘, 第648・652号住居跡完掘, 第648・652号住居跡遺物出土状況, 第652号住居跡遺物出土状況
- P L 38 第653~656号住居跡完掘, 第654・655号住居跡遺物出土状況, 第654・656号住居跡完掘
- P L 39 第657~659号住居跡完掘, 第657号住居跡遺物出土状況, 第658・659号住居跡遺物出土状況, 第658号住居跡完掘
- P L 40 第659・675号住居跡遺物出土状況, 第659号住居跡完掘, 第660・675・676号住居跡完掘
- P L 41 第677~681号住居跡完掘, 第677・680号住居跡遺物出土状況, 第680号住居跡遺物出土状況
- P L 42 第682・684・685号住居跡完掘, 第682号住居跡遺物出土状況, 第684・685号住居跡遺物出土状況

第684号住居跡竈完掘

- P L 43 第687・688号住居跡完掘, 第687~690号住居跡遺物出土状況, 第688号住居跡竈完掘
- P L 44 第688・689号住居跡竈遺物出土状況, 第689~692号住居跡完掘, 第691号住居跡遺物出土状況, 第691号住居跡竈完掘
- P L 45 第692・693号住居跡竈完掘, 第693・695号住居跡完掘, 第693・695号住居跡遺物出土状況, 第693号住居跡竈遺物出土状況
- P L 46 第696・697号住居跡完掘, 第696・697号住居跡竈完掘, 第696・697号住居跡遺物出土状況
- P L 47 第698~701・703・707号住居跡完掘, 第700・701・703号住居跡遺物出土状況
- P L 48 第703・708号住居跡遺物出土状況, 第703・708号住居跡竈完掘, 第704・706・708号住居跡完掘, 第704号住居跡竈遺物出土状況
- P L 49 第709~711号住居跡遺物出土状況, 第709号住居跡竈完掘, 第710号住居跡完掘, 第710号住居跡竈遺物出土状況
- P L 50 第712~714号住居跡完掘, 第712・713号住居跡遺物出土状況, 第712号住居跡竈完掘, 第712号住居跡竈遺物出土状況
- P L 51 第714・715・717号住居跡遺物出土状況, 第715~717号住居跡完掘, 第715号住居跡竈完掘, 第715号住居跡竈遺物出土状況
- P L 52 第717・718号住居跡竈完掘, 第718~720号住居跡完掘, 第718号住居跡遺物出土状況, 第718号住居跡竈遺物出土状況, 第718号住居跡貯藏穴遺物出土状況
- P L 53 第720・721・723号住居跡遺物出土状況, 第720号住居跡貼り床層, 第720号住居跡掘り方状況, 第721~723号住居跡完掘, 第721号住居跡貯藏穴遺物出土状況, 第12号掘立柱建物跡完掘
- P L 54 第13・14・19・21~23号掘立柱建物跡完掘
- P L 55 第23・25~27号掘立柱建物跡完掘, 第20・23・24号井戸完掘
- P L 56 第10~13号地下式墳完掘, 第501・525号土坑完掘, 第435号土坑遺物出土状況
- P L 57 第2・3号道路状遺構完掘, 第19・20・25・26号溝完掘
- P L 58 第421・422A号住居跡出土遺物
- P L 59 第422A・422B・355・380号住居跡出土遺物
- P L 60 第380・383・385・386・389~391号住居跡出土遺物
- P L 61 第391・395~397号住居跡出土遺物
- P L 62 第396・397・400・402・403・426号住居跡出土遺物
- P L 63 第402・427・428・433・435・437号住居跡出土遺物
- P L 64 第437・440号住居跡, 第11号井戸, 第223・238・241・257・284・555号土坑出土遺物
- P L 65 第528A・529・531・532号住居跡出土遺物
- P L 66 第533号住居跡出土遺物
- P L 67 第533・535・536A・538A号住居跡出土遺物
- P L 68 第538A・538B・539A・539B・540号住居跡出土遺物
- P L 69 第542~545号住居跡出土遺物
- P L 70 第546・547・549~553・555号住居跡出土遺物
- P L 71 第555・557号住居跡出土遺物

- P L 72 第559～562号住居跡出土遺物
- P L 73 第562～565・568～570号住居跡出土遺物
- P L 74 第574・578・583・585・588・590・591・594～597・599号住居跡出土遺物
- P L 75 第602・603号住居跡出土遺物
- P L 76 第604～606号住居跡出土遺物
- P L 77 第606～609号住居跡出土遺物
- P L 78 第610・612～615・616B・618号住居跡出土遺物
- P L 79 第618～620・622号住居跡出土遺物
- P L 80 第624・626・627B・629・631・632号住居跡出土遺物
- P L 81 第632・634・635・637号住居跡出土遺物
- P L 82 第639・642・643・645号住居跡出土遺物
- P L 83 第646・647・649～652・654～656号住居跡出土遺物
- P L 84 第656～658号住居跡出土遺物
- P L 85 第658～660・677・678号住居跡出土遺物
- P L 86 第678～682・684号住居跡出土遺物
- P L 87 第685・687・688号住居跡出土遺物
- P L 88 第688・689・691～693号住居跡出土遺物
- P L 89 第694～699号住居跡出土遺物
- P L 90 第700・703・704・706～708号住居跡出土遺物
- P L 91 第710・713号住居跡出土遺物
- P L 92 第714～717号住居跡出土遺物
- P L 93 第718号住居跡出土遺物
- P L 94 第718～720号住居跡出土遺物
- P L 95 第720・721号住居跡出土遺物
- P L 96 第721・722号住居跡出土遺物
- P L 97 第723号住居跡，第13・21・24号掘立柱建物跡，第20号溝出土遺物
- P L 98 第20号溝，第16号井戸，第321・435・517・518・576号土坑出土遺物
- P L 99 5区・7区遺構外出土遺物
- P L 100 5区・7区遺構外出土遺物
- P L 101 7区遺構外鉄製品，各遺構出土土製品・石製品
- P L 102 各遺構，5区・7区遺構外出土石製品
- P L 103 各遺構外，5区・7区出土土器片，7区出土遺物

付 図

- 付図1 熊の山遺跡3区遺構全体図
- 付図2 熊の山遺跡5区遺構全体図
- 付図3 熊の山遺跡7区遺構全体図

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県では、首都とつくば研究学園都市を結ぶ常磐新線の早期開通をめざし、常磐新線の建設とそれに伴う沿線開発に取り組んでいる。

当遺跡のある鳥名地区については、平成6年8月18日、茨城県知事は茨城県教育委員会あてに、常磐新線沿線地域の土地区画整理事業地域内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対して茨城県教育委員会は、平成6年9月19日から27日にかけて現地踏査を行った。平成7年3月8日、茨城県教育委員会から茨城県知事に、常磐新線沿線地域の鳥名・福田坪地区一体型特定土地区画整理事業地域内に熊の山遺跡が所在する旨回答した。同日、茨城県知事から茨城県教育委員会あてに、同事業に係わる熊の山遺跡の取り扱いについて協議があり、文化財保護の立場から再三協議を重ねた。

その結果、現状保存が困難であることから、平成7年3月9日、茨城県教育委員会は茨城県知事あてに、熊の山遺跡を記録保存とする旨回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成7年4月1日から熊の山遺跡の発掘調査を開始した。平成7年度は、17,167㎡までの調査を終了した。

同様に平成8年2月5日に、平成8年度の熊の山遺跡の取り扱いについて協議があり、平成8年2月9日、31,026㎡を記録保存する事になった。しかし、遺構数が多いため平成8年9月、発掘調査計画を変更し、16,050㎡の調査を実施した。平成9年度は、当初調査予定面積は60,784㎡であったが8月1か月間の調査員2名増員に伴い調査面積1,927㎡を追加することになり、合計の調査面積は62,711㎡となった。しかし、平成9年9月の発掘調査計画の変更により、33,421㎡の調査を実施することになった。

第2節 調査経過

熊の山遺跡の発掘調査は、平成9年4月1日から平成10年3月31日までの1年間にわたって、3～9・11区の調査を実施した。遺構番号については、昨年度からの継続である。以下、調査経過について、その概要を記述する。

- 4月 初旬に平成9年度分の発掘調査を開始するため、調査器材の搬入、補助員投入等の諸準備を行った。中旬から5区の西側の一部と7区の調査を開始した。24日に県南都市建設事務所と県教育庁文化課、茨城県教育財団の三者による今後の調査の打ち合わせを行った。
- 5月 4月に引き続き5・7区の調査を行った。12日から4区の東側の一部の調査も並行して行った。
- 6月 引き続き4・5・7区の調査を行った。10日に県南都市建設事務所と今年度新たに表土除去し調査するエリアの境界確認を行った。下旬に4区東側の一部と5区西側の一部の調査を終了し、全員7区の調査に入った。
- 7月 引き続き7区の調査を行った。1日に8区北側に投棄されていた産業廃棄物の処理を行った。7日から重機による表土除去（3～9区の一部、10・11区）を開始した。
- 8月 当月に限り調査担当者の増員があり、計8名の調査員で調査を担当した。3区南側の一部と6区南側の

一部と7区の遺構調査を引き続き行った。25日に重機による表土除去を終了した。月末までに3・6区の調査は終了した。

9月 4日に業者委託による方眼杭打ちを開始した。今年度の調査区域は遺構が多く、重複が激しいため、期間内に調査を終了する事がかなり難しいとの見通しから対応策の検討を進め、29日に委託者である県南部市建設事務所と県教育庁文化課、茨城県教育財団との三者協議を行い、調査面積の縮小が決定した。その結果、平成9年度18,115㎡の調査を行うことになった。

10月 5区東側の一部と7・11区の遺構調査を引き続き行った。特に7・11区は遺構の重複が激しいため、調査が困難であった。

11月 月上旬に5区の東側の一部、中旬に7区の調査は終了し、調査の主力は11区に入った。

12月 引き続き11区の調査を行った。11日から4区南側の一部の調査も並行して行った。

1月 引き続き4・11区の調査を行った。21日から8区北側の一部の調査も並行して行った。上旬から中旬にかけて降雪が多かったため、調査が難航した。

2月 9区北側の一部の調査を開始した。他調査区と並行して行った。今までの調査で出土遺物が多量なため注記が追いつかず、9日から自動注記機を導入することになった。12日に4区南側の一部の調査を終了した。

3月 2日から航空写真撮影のため、遺構清掃を調査と並行して行った。4日に航空写真撮影を実施した。11日に委託者に対する報告会を実施し、14日に遺跡の現地説明会を行い、三百数十名を超える見学者が訪れた。16日から補足調査を行い、23日までに遺構調査を終了した。現場事務所で諸帳簿や諸記録の点検、調査区の安全対策を行い、24日に現場での作業を終了した。



現地説明会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

熊の山遺跡は、茨城県つくば市大字島名字番取1964番地ほかに所在している。昭和62年11月の4町村合併（桜村、谷田部町、大袖町、豊里町、昭和63年1月に筑波町も編入）によるつくば市誕生以前は、筑波郡谷田部町に属していた。

つくば市は、茨城県南西部に位置し、北は真壁郡明野町、同郡真壁町、新治郡八郷町に、東は新治郡新治村、土浦市、南は牛久市、稲敷郡基崎町、筑波郡伊奈町、同郡谷和原村に、西は水海道市、結城郡石下町、同郡千代川村、下妻市に接している。

つくば市の地形は、北は茨城県と福島県境にある八溝山から南に伸びる八溝山地の南端部に位置する筑波山を中心とする筑波山塊に接し、東側を東流して霞ヶ浦に流入する桜川と、西端を緩流して利根川に合流する小貝川の低地、及びそれらに挟まれた、筑波・稲敷台地からなる。筑波・稲敷台地は常総台地の一部で、標高20～25m前後の平坦な台地であるが、花室川、東谷田川、西谷田川などの小中河川によって、浅く開折されている。この台地は、竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体で、その上に板橋層または常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層（0.3～5.0m）、その上に関東ローム層（0.5～2.5m）が堆積し、最上部は腐植土層となっている。

当遺跡は、筑波研究学園都市の西部を北から南に流れる東谷田川右岸の標高約20mの台地上に立地している。この台地は東を東谷田川、西を西谷田川に挟まれ、牛久沼まで南東方向に細長く舌状に伸びている。両河川の沖積低地は、主に水田に利用されている。

水田との比高は約8mである。調査前の現況は畑であった。

参考文献

- ・大山年次、蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 コロナ社 1977年
- ・蜂須紀夫、大森昌衛 『茨城の地質をめぐって』 築地書館 1979年9月

第2節 歴史的環境

つくば市谷田部地区には、東谷田川、西谷田川流域の台地上縁部や中央部と、東谷田川支流の蓮沼川右岸台地上に遺跡が数多く存在しているが、これまでの谷田部地区の遺跡分布調査の結果では、縄文時代以降の遺跡のみで、旧石器時代の遺跡はまだ確認されていない。

縄文時代の遺跡は、境松貝塚(1)、山田遺跡(3)など中期から後期にかけての遺跡が中心である。境松貝塚は谷田部地区の代表的な貝塚であり、縄文時代中期から後期の土器や石器が出土している。貝類は、オキシジミ、ヤマトシジミ、ムラサキガイ、シオフキなどで構成されている。山田遺跡からは縄文時代中期から後期の土器や石器が広範囲にわたって出土し、大規模な集落跡の可能性が予想される。熊の山遺跡周辺では、当遺跡から約1km南下した東谷田川と西谷田川に挟まれた台地の中央部に前野遺跡(2)、さらに500m南にタカドロ遺跡(22)、二町田遺跡(23)が確認されている。タカドロ遺跡と二町田遺跡からは中期から後期にかけての遺物が出土しており、小貝川右岸の台地と東谷田川、西谷田川に挟まれた台地では縄文時代中期から人々の生

活が営まれていたと考えられる。

弥生時代の遺跡は、谷田部地区には2か所確認されているが、熊の山遺跡周辺にはない。

古墳時代の遺跡は、¹下横場遺跡、²面の井古墳群(10)、³関の台古墳群(9)、⁴下河原崎古墳群(12)などの中小の古墳群が数多く確認されている。古墳は大半が径7～25mの円墳である。熊の山遺跡周辺では、当遺跡のすぐ北側に鳥名熊の山古墳群(17)、約1km北に関の台古墳群と関の台遺跡(26)がある。当遺跡の南東約500mには葉節遺跡(6)、南東約1.5kmには覆内遺跡(7)がある。どの遺跡も東谷田川左岸の台地上に位置している。また、対岸の台地上には、東南東約1kmに水堀遺跡(28)、南東約1.5kmに柳橋遺跡(29)がある。特に、鳥名熊の山古墳群は、当遺跡のすぐ北に位置しており、径7～12m、高さ0.5～1.2mの円墳が11基群在している。

平安時代は、「和名類聚抄」によれば、谷田部地区は河内郡八部郷といい、仁徳天皇の妃、八田若郎女のため八田部を置いた所と言われる。また、鳥名も「和名類聚抄」にある「嶋名郷」に比定されている。

奈良・平安時代の遺跡はこれまで確認されていなかったが、平成7年度、茨城県教育財団の調査により、熊の山遺跡の他に、当遺跡から北東約3kmの神田遺跡(30)、約3.5km南の西栗山遺跡(32)、根崎遺跡(31)にこの時代の遺構が存在することが明らかになった。平安時代末には、河間、谷田部、小野崎などに開発領主が出現したという言い伝えもあり、今後の調査の成果が期待できる。

12世紀後半には、常陸西南部をおおう広大な常安保は南野牧とともに村田荘の一部であったが、南野牧の分離とともに村田荘そのものになり、12世紀末にはさらに下妻荘、田中荘を分出し、八条院領として伝領された。谷田部地区の大部分は田中荘域に入る。常安保の開発領主は平直幹と考えられ、下妻荘、村田荘の下の可職は下妻広幹に、田中荘の下の可職は多気義幹に伝えられたと推測されている。しかし、鎌倉幕府の成立後、八田知家の入部により義幹は没落し、田中荘は小田氏の支配下に入る。建暦(1285年)により、一時北条得宗家の手に移るが、室町時代になり、また小田氏の手に戻る。当時、小田氏配下の土豪に小野崎の荒井氏、河間の野中潮氏、鳥名・面野井の平井手氏がいたと伝えられる。

中世以降として確認された遺跡は城館跡がほとんどであるが、熊の山遺跡周辺では北北東へ約2kmの位置に平井手氏の居城と伝えられる面野井城跡が確認されており、当遺跡との関連も考えられる。

註

- (1) 谷田部の歴史編さん委員会 『谷田部の歴史』 谷田部町教育委員会 1975年9月

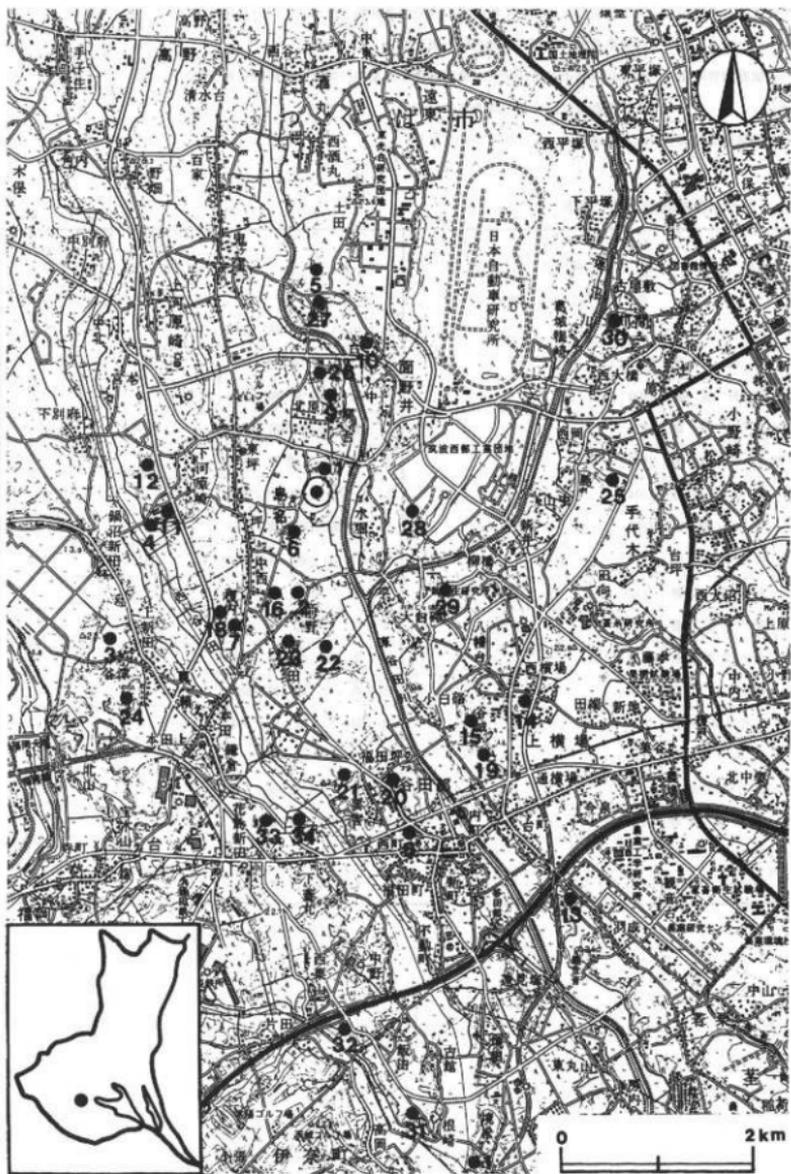
参考文献

- ・註(1)同掲書
- ・茨城県史編纂会 『茨城県史 中世編』 1976年3月
- ・池邊彌 『和名類聚抄郡里群名考證』 吉川公文館 1981年2月
- ・竹内理三 『角川日本地名大辞典 8 茨城県』 角川書店 1973年12月
- ・中山信名 『新編常陸国誌』 峯書房 復刻版 1964年11月
- ・先澤大海 『常陸旧地考』 文政十二年三月(複製)峯書房
- ・江原忠昭 『増補 茨城の地名』 耕人社 1976年1月
- ・茨城県教育財団 『研究学園都市計画桜葉崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)』 『茨城県教育財団文化財調査報告第54集』 1989年9月
- ・茨城県教育財団 『研究学園都市計画桜葉崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』 『茨城県教育財団文化財調査報告第63集』 1991年3月

- ・茨城県教育財団 「研究学園都市計画桜菜崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)」
『茨城県教育財団文化財調査報告第72集』 1992年3月
- ・茨城県教育財団 「研究学園都市計画桜菜崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(N)」
『茨城県教育財団文化財調査報告第93集』 1994年9月
- ・茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』2版 1990年3月

表1 熊の山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代							番号	遺跡名	県遺跡番号	時代							
			旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	鎌倉	江戸				旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	鎌倉	江戸	
○	熊の山遺跡					○	○	○	○	18	ツバタ遺跡	2906				○				
1	境松貝塚	2098		○						19	台成井遺跡	2910		○						
2	前野遺跡	2100		○						20	福田前遺跡	2911		○						
3	山田遺跡	2101		○						21	福田坪池の台遺跡	2912		○						
4	高山遺跡	2103			○					22	タカドロ遺跡	2914		○						
5	和田台遺跡	2104				○				23	一町田遺跡	2915		○						
6	栗柳遺跡	2105					○			24	真瀬新田谷津遺跡	2916		○						
7	榎内遺跡	2106					○			25	刈間遺跡	2917					○			
8	谷田部城跡	2110							○	26	関の台遺跡	2919					○			
9	関の台古墳群	2112					○			27	高田遺跡	2920					○			
10	面の井古墳群	2113					○			28	水堀遺跡	5838					○			
11	高山古墳群	2114					○			29	柳橋遺跡	5839					○			
12	下河原崎古墳群	2115					○			30	神田遺跡	5841	○	○	○	○	○	○	○	○
13	羽成古墳群	2116					○			31	根崎遺跡		○	○		○	○	○		
14	道心塚古墳群	2117					○			32	西栗山遺跡		○	○		○				
15	台町古墳群	2118					○			33	三度山遺跡			○		○				
16	榎内古墳群	2119					○			34	古屋敷遺跡			○		○		○	○	
17	烏名熊の山古墳群	2120					○													



第2図 周辺遺跡位置図

第3章 熊の山遺跡

第1節 遺跡の概要

調査区は、発掘年度の順に従い便宜上1～11区に分けられている。平成7年度の調査区は1～4区、平成8年度の調査区は5～8区、平成9年度の調査区は2～11区である（2・3・4・5・6・8区は数年度に渡り調査した）。2区の東側の一部は、遺構が確認されず、遺物も出土しなかった。4区の一部と8区の一部、10区については、遺構確認調査で終わった。

平成9年度遺構調査した面積は、総面積33,421㎡である。その内今回報告するのは、18,151㎡である。現況は畑地で、主に芝畑として利用されていた。

今回の調査の結果では、古墳時代、奈良・平安時代の集落跡、中・近世の墓地跡の複合遺跡であることが確認できた。遺構は、竪穴住居跡243軒（古墳時代50軒、奈良・平安時代182軒、時期不明11軒）、掘立建物跡18棟、土坑352基、地下式竈9基、井戸14基、溝10条、道路状遺構2条、不明遺構2基を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に298箱出土している。遺物の大部分は古墳時代から奈良・平安時代にかけての土器器、須恵器（坏、椀、高坏、甕、壺、甌など）である。その他の遺物として、管状土錘、支脚、紡錘車、砥石、腰帯具、石製模造品、天部立像、鉄鏝、刀子、鎌、古銭などが出土している。

第2節 基本層序

調査区内（6区）にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った（第3図）。遺構は、第2層上に確認できた。

第1層は、40～45cmの厚さの耕作土層で、暗褐色をしている。

第2層は、5～10cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層との漸移層である。

第3層は、15cmほどの厚さで、明褐色をしたソフトローム層である。

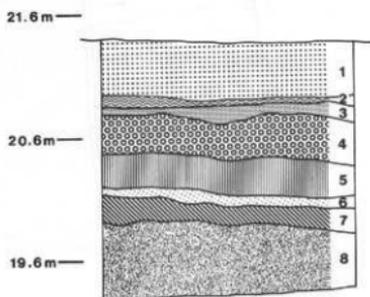
第4層は、30cmほどの厚さで、明褐色をしたハードローム層である。

第5層は、30cmほどの厚さで、暗褐色の粘土混じりの層である。

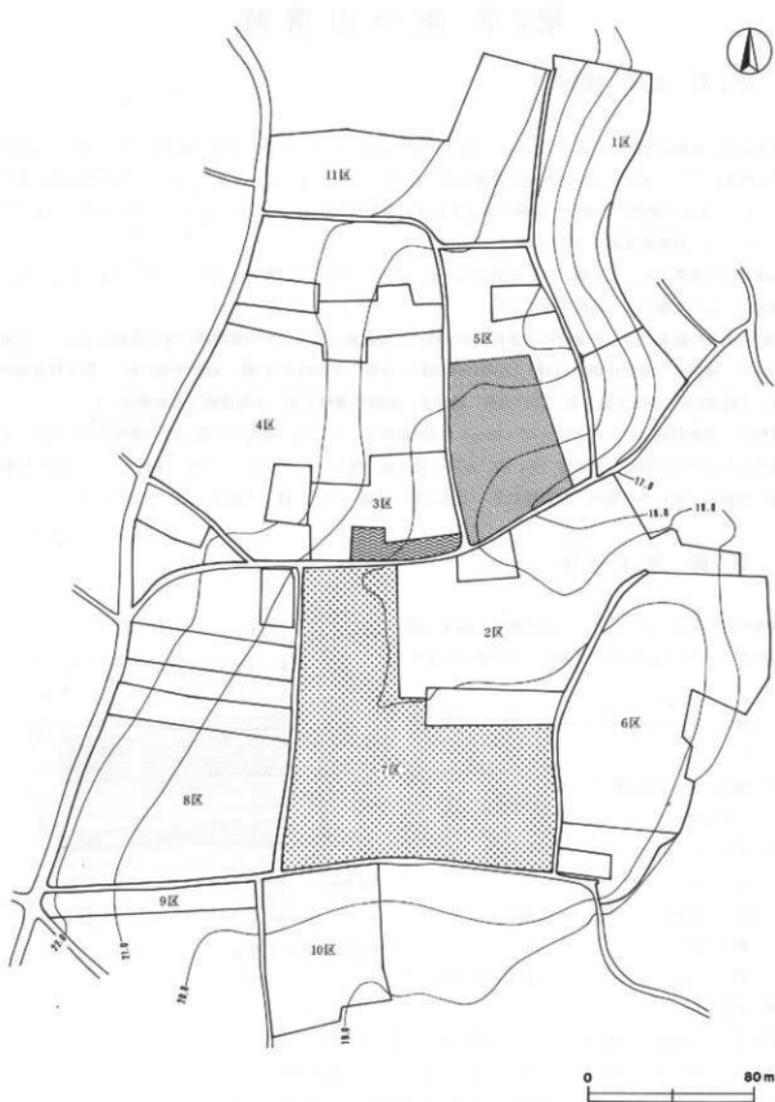
第6層は、10cmほどの厚さで、にぶい黄褐色をした粘土層である。

第7層は、20cmほどの厚さで、砂粒を少量含む黄褐色をした粘土層である。

第8層は、60cmほどの厚さで、砂粒を大量含む明黄褐色をした粘土層である。



第3図 基本土層図



第4図 熊の山道跡調査区設定図

第3節 遺構と遺物

1 3区の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

① 古墳時代

第422A号住居跡(第5～8図)

位置 調査3区中央部, K11h区。

重複関係 北西部の上部が, 第422B号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸7.00m, 短軸6.58mの方形である。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は50～85cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。規模は, 上幅17～37cm, 下幅6～19cm, 深さ11cmで, 断面形はU字形である。

床 ほゞ平坦で, 中央部が特に踏み固められている。東壁下からP₂に延びる溝aと西壁下からP₃に延びる溝b, 同じく西壁下からP₆に延びる溝cの3条が検出された。いずれも上幅16～22cm, 下幅5～13cm, 深さ10～25cmで, 断面形はU字形をしている。覆土は単一層であり, 性格は不明である。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は, 焚口部から煙道部まで131cm, 両袖部幅約127cmである。火床部は, 床面を約7cm掘りくぼめており, 赤変硬化している。天井部は崩落しており, 第3層は砂粒が多量に検出されることから天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており, 内側は火熱を受けて粘土・山砂が赤変硬化してゴツゴツしている。煙道部は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

- 1 灰黄色 ローム粒子多量, 砂粒・粘土ブロック・炭化粒子中量, 焼土粒子少量
- 2 にぶい黄褐色 焼土粒子・砂粒中量, 炭化粒子少量
- 3 にぶい褐色 砂粒多量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量, 砂粒が火を受け赤変硬化している
- 5 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・粒子中量, 砂粒が火を受け赤変硬化している
- 6 暗褐色 焼土粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 焼土粒子少量, 焼土粒子微量
- 9 黒褐色 焼土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量

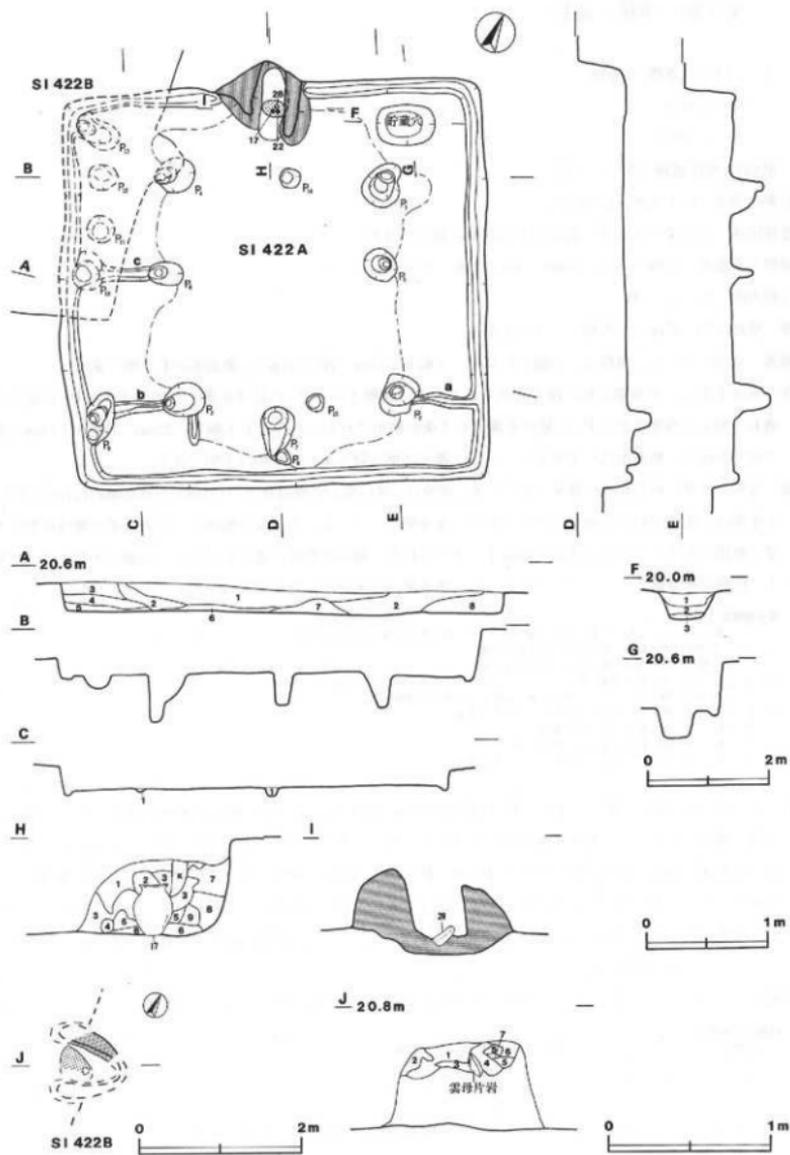
ピット 15か所(P₁～P₁₅)。P₁～P₄は径55～65cmの円形で, 深さ60～80cmであり, 各コーナーに寄った位置で確認されている。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P₅・P₆は径55cmと40cmの円形で, 深さは37cmと48cmである。P₅はP₁とP₂の, P₆はP₃とP₄の中間にあり, 位置的にいずれも補助柱穴の可能性がある。P₇は径40cmの円形で, 深さ38cmであり, P₈は径25cmの円形で, 深さ23cmである。いずれも南壁際中央に南北方向に並んだ状態で検出されることから, 位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。その他は性格不明である。

貯蔵穴 北東コーナー部から検出された。長径96cm, 短径65cmの楕円形で, 深さ47cmである。

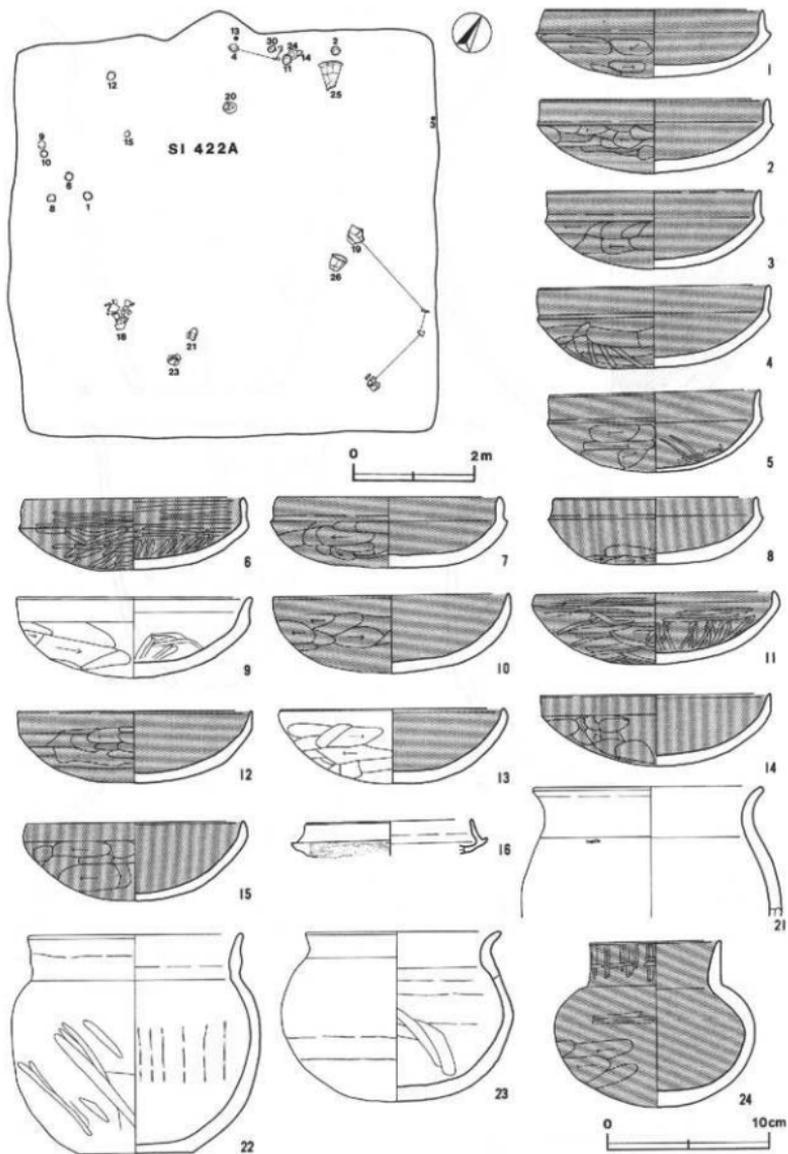
貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

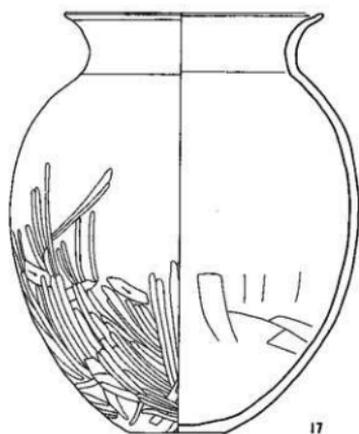
覆土 8層からなる。各層からロームブロックが検出され, 人為堆積と考えられる。



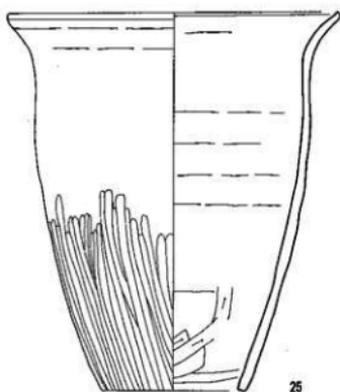
第5图 第422A·422B号住居跡実測图



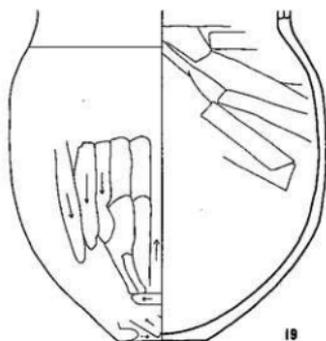
第6图 第422A号住居跡出土遺物実測図(1)



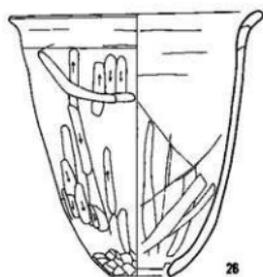
17



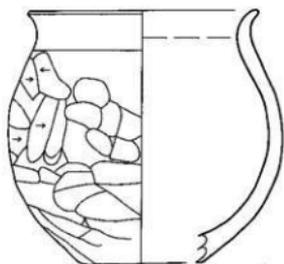
25



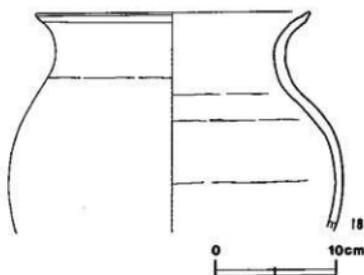
19



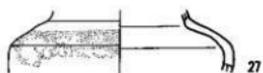
26



20



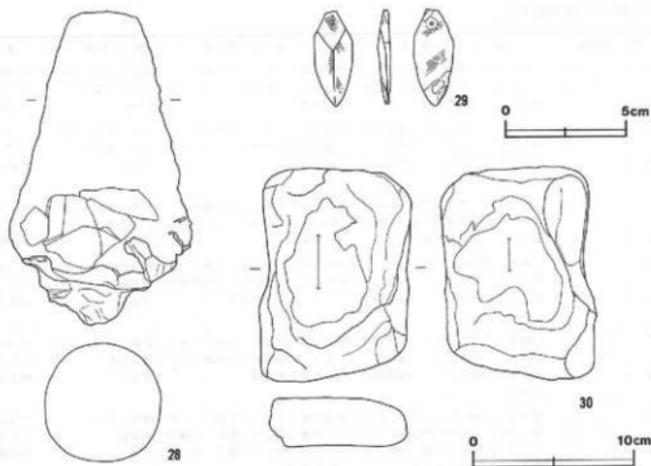
18



27



第7图 第422A号住居跡出土遺物実測図(2)



第8図 第422A号住居跡出土遺物実測図(3)

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・粒子微量
- 7 黒褐色 ローム中・小ブロック・粒子少量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・粒子微量

遺物 土師器片760点、須恵器片10点、灰釉陶器片1点、土製品1点(支脚)、石製模造品1点、砥石1点、礫6点が出土している。第6～8図1・6・10の土師器杯は正位で、8・9の土師器杯は逆位で、西壁際の覆土下層から出土している。3の土師器杯は正位で、19の土師器甕は、横位で東壁際の覆土下層から出土している。15の土師器杯は、西部の覆土下層から正位で出土している。18の土師器甕は、土圧でつぶされた状態で、21の土師器小形甕、23の土師器小形甕は正位で、南西部の覆土下層から出土している。20の土師器小形甕は横位で竈前の覆土下層から出土している。12の土師器杯は正位で竈西側の覆土下層から出土している。2・11の土師器杯は正位で、14の土師器杯は逆位で、竈東側の覆土下層から出土している。ほぼ同位置から、24の土師器壺、25の土師器甕は正位で、土圧でつぶされた状態で出土している。4・13の土師器杯、17の土師器甕、22の土師器小形甕は、竈に据えたままの状態で出土している。5・7の土師器杯、16の須恵器杯、27の須恵器短頸瓶は覆土中から出土している。26の土師器甕は東部の覆土下層から、土圧でつぶされた状態で出土している。28の土製支脚は斜位で竈火床部から出土している。29の剣形石製模造品は、P₉の覆土中から出土している。30の砥石は、竈東側の覆土下層から出土している。灰釉陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀後半から7世紀前半と考えられる。重複している第422B号住居跡より古い。

第 422A 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 6 図 1	坏	A 134 B 42	完形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P 3007 100% P L 58 西陵階覆土下層
	土 師 器					
2	坏	A 140 B 46	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P 3008 95% P L 58 龍泉洞覆土下層
	土 師 器					
3	坏	A 132 B 48	完形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P 3009 100% P L 55 東陵階覆土下層
	土 師 器					
4	坏	A [144] B 50	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 明褐色 普通	P 3010 90% P L 58 龍覆土中
	土 師 器					
5	坏	A 130 B 49	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面ナデ後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 浅黄褐色 普通	P 3011 70% P L 58 覆土中
	土 師 器					
6	坏	A 136 B 44	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後丁寧なへラ磨き、内面丁寧なへラ磨き。口縁部内・外面丁寧なへラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 明褐色 普通	P 3012 90% P L 58 西陵階覆土下層
	土 師 器					
7	坏	A [140] B 44	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙褐色 普通	P 3013 50% 覆土中
	土 師 器					
8	坏	A [124] B 42	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 3014 50% 西陵階覆土下層
	土 師 器					
9	坏	A 144 B 50	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へラ削り、内面丁寧なへラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・小石 褐色 普通	P 3015 95% P L 58 西陵階覆土下層
	土 師 器					
10	坏	A 146 B 48	完形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P 3016 100% P L 58 西陵階覆土下層
	土 師 器					
11	坏	A 146 B 44	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く内彎する。	体部内・外面丁寧なへラ磨き。口縁部外面へラ磨き、内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 3017 95% P L 58 龍泉洞覆土下層
	土 師 器					
12	坏	A 145 B 44	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P 3018 95% P L 58 龍泉洞覆土下層
	土 師 器					
13	坏	A 138 B 46	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 浅黄褐色 普通	P 3019 95% P L 58 龍覆土中
	土 師 器					
14	坏	A 142 B 44	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・小石 浅黄褐色 普通	P 3020 50% P L 58 龍泉洞覆土下層
	土 師 器					
15	坏	A 134 B 48	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 褐色 普通	P 3021 60% P L 58 西陵階下層
	土 師 器					
16	坏	A [102] B (21)	体部上端から口縁部にかけての破片。体部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 良好	P 3022 5% P L 58 体部外面自然積覆土中
	須 恵 器					

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 17 図	壺 土 師 器	A 21.3	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位よりやや上位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。 口唇部は上方につまみ上げる。	底部へう削り。体部外面へう磨き、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P 3023 100% P L 58 体部外面保付着 電覆土中
		B 34.2				
		C 8.0				
18	壺 土 師 器	A 22.4	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	P 3034 40% P L 59 体部内・外面磨滅 南西部覆土下層
		B (18.1)				
19	壺 土 師 器	B (27.0)	口縁部欠損。体部上位一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。	底部へう削り。体部外面へう削り、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・小石 にぶい赤褐色 普通	P 3025 70% P L 58 東室側覆土下層
		C 7.2				
20	小形壺 土 師 器	A 14.0	底部から体部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面へう削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子にぶい黄色 普通	P 3036 70% P L 59 二次焼成 磁前覆土下層
		B 15.6				
		C [7.6]				
第 6 図	小形壺 土 師 器	A [13.8]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい黄色 普通	P 3027 20% 二次焼成 南西部覆土下層
		B (8.0)				
22	小形壺 土 師 器	A 13.0	完形。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。口縁部はやや外傾する。	底部へう削り、木炭灰を残す。体部外面へう削り後へう磨き、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・小石 にぶい赤褐色 普通	P 3028 100% P L 59 磁覆土中
		B 13.5				
		C 7.0				
23	小形壺 土 師 器	A 12.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面丁寧なナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・赤色粒子 灰質褐色 普通	P 3029 80% P L 59 南西部覆土下層
		B 10.5				
24	小形壺 土 師 器	A 8.0	体部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。口縁部は直立する。	体部外面丁寧なナデ後へう磨き、内面ナデ。口縁部外面丁寧なナデへう磨き、内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P 3030 80% P L 59 磁東側覆土下層
		B 10.2				
第 7 図	瓶 土 師 器	A 27.2	体部一部欠損。無底式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面丁寧なナデへう磨き、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄色 普通	P 3031 95% P L 59 磁東側覆土下層
		B 31.0				
		C 12.0				
26	瓶 土 師 器	A 20.6	体部一部欠損。無底式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面へう削り、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・雲母・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P 3032 90% P L 59 東部覆土下層
		B 21.6				
		C 4.9				
27	短頸瓶 須 恵 器	B (3.8)	肩部片。肩部は内彎する。	肩部内・外面クロクロナデ。	砂粒・長石 黄灰色 普通	P 3033 5% 体部外面自然焼 覆土中

図版番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	長さ (cm)	重量 (g)		
第 8 図 28	支 脚	7.2-7.4	(195)	(11200)	磁火床部	D P 3001 土製

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第 8 図 29	刻形模造品	3.9	0.5	0.1	4.18	P. 覆土中	Q 3001 滑 石
30	砥 石	13.3	3.1	-	670.0	磁東側覆土下層	Q 3002 雲母片岩

② 奈良・平安時代

第419号住居跡 (第9図)

位置 調査3区中央部, K11h区。

重複関係 北東コーナー部で第550号土坑を掘り込み, 東壁部が第29号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.38m, 短軸 [2.3]mの長方形と推定される。

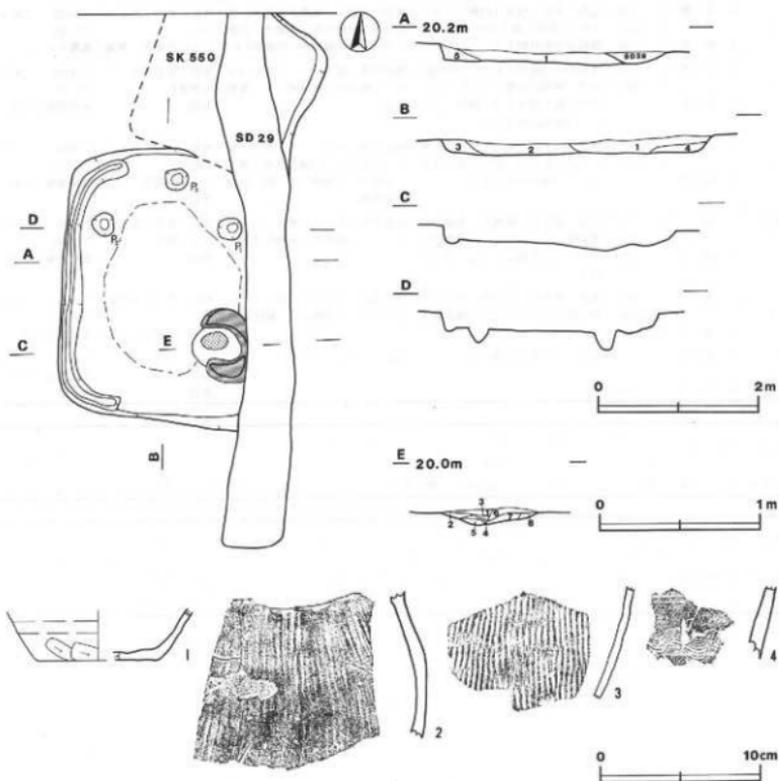
主軸方向 N-92°-E

壁 北壁から東壁は攪乱を受けているために, 確認できなかった。西壁の壁高は約24cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁際に確認できた。上幅15~23cm, 下幅5~8cm, 深さ4cmで, 断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦で, 中央部が特に踏み固められている。

竈 東壁中央やや南寄りに, 砂質粘土で構築されている。煙道部は第29号溝による攪乱を受けているため, 確認できなかった。規模は, 両袖部幅約90cmである。火床部は, 床面を約10cm掘りくぼめており, 赤変硬化し



第9図 第419号住居跡・出土遺物実測図

ている。袖部は遺存している。

覆土層解説

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子少量 | 5 灰褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 6 黒褐色 焼土小ブロック少量、焼土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子少量 | 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材少量、粘土粒子少量 |
| 4 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・粒子少量 | 8 暗褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 |

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は径約30cmの円形で、深さ12~18cmであり、規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。

覆土 5層からなる。各層からロームブロックが検出され、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子少量 | 4 褐色 ローム小ブロック・粒子中量 |
| 2 褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ローム小・中ブロック・粒子少量 |
| 3 褐色 ローム小ブロック・粒子中量 | |

遺物 土師器片66点、須恵器片13点、礫1点が出土している。第9図1の須恵器坏は、覆土下層から出土している。2から4は須恵器残片であり、いずれも覆土中から出土している。2は体部から口縁部にかけての破片であり、体部外面に縦位の平行叩きが施されている。3は体部の破片であり、縦位の平行叩きが施されている。4は口縁部の破片であり、外面に櫛指波状文と沈線区画文が施されている。

所見 本跡は覆土が薄く、攪乱を受けているために、出土遺物は細片が多い。時期は、出土遺物から判断して9世紀中葉から後葉と考えられる。重複している第550号土坑より新しく、第29号溝より古い。

第419号住居跡出土遺物観察表

図表番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第9図 1	坏 須恵器	B (31) C [78]	底面から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ヘタ削り。体部外面下縁手持ちヘタ削り。内・外面ロクロナデ。	砂粒・黄母・長石 灰色 普通	P 3001 10% 覆土下層

第420号住居跡 (第10図)

位置 調査3区南部, K11j区。

規模と平面形 長軸3.10m, 短軸2.12mの長方形である。南東コーナー部に攪乱を受けている。

主軸方向 N-6°-W

壁 南東コーナー部の壁の立ち上がりは確認できない。壁高は2~8cmである。

床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで98cm, 両袖部幅110cmである。火床部は、床面を約7cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第1・3・5層は山砂が検出されることから天井部の崩落土と考えられる。袖部は遺存している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量 | 5 暗褐色 砂粒中量、焼土小ブロック少量 |
| 2 黒褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量 | 6 黒褐色 ローム粒子・炭化材・砂粒少量 |
| 3 暗褐色 砂粒少量、焼土小ブロック・ローム粒子少量 | 7 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量、砂粒少量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量 | |

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は径約30cmの円形で、深さ41cmであり、P₂は径55cmの円形で、深さ42cmである。いずれも規模と配置から支柱穴と考えられる。P₃は径約25cmの円形で、深さ14cmであり、やや南壁側に傾斜しており、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

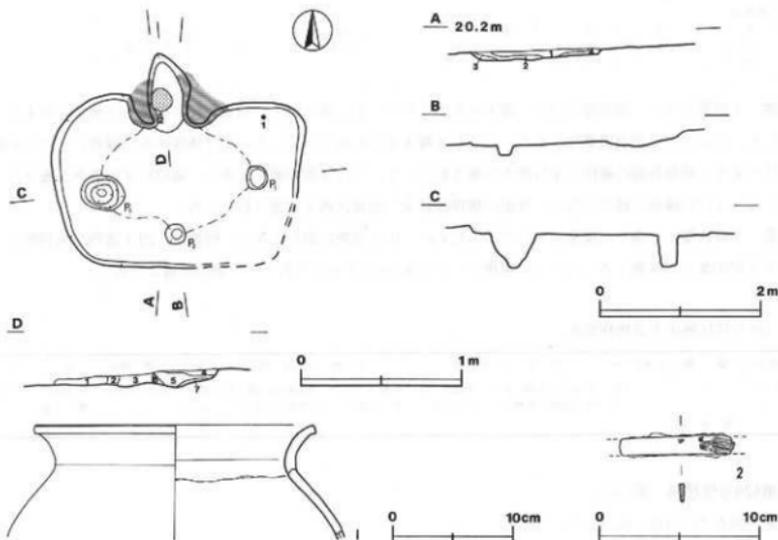
覆土 4層からなる。各層にロームブロックが含まれ、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 | 3 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子中量 |

遺物 土師器片96点, 須恵器片3点, 陶器片2点, 鉄製品1点(刀子)が出土している。第10図1の土師器甕は、北壁際床面から逆位で出土している。2の刀子は、竈内から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡では壁溝は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して8世紀前葉と考えられる。



第10図 第420号住居跡・出土遺物実測図

第420号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	土師器	A [22.4] B (9.4)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部上位内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪痕み痕。	砂粒・雲母・長石・礫に多い褐色普通	P 3002 10% 体部外面隆起着 北壁際床面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第10図2	刀子	(7.2)	1.2	0.3	(15.0)	竈内	M3001

第421号住居跡 (第11図)

位置 調査3区南東部, K11is区。

規模と平面形 長軸3.18m, 短軸2.68mの長方形である。

主軸方向 N-94°-E

壁 壁高は17~26cmで, 外傾して立ち上がる。

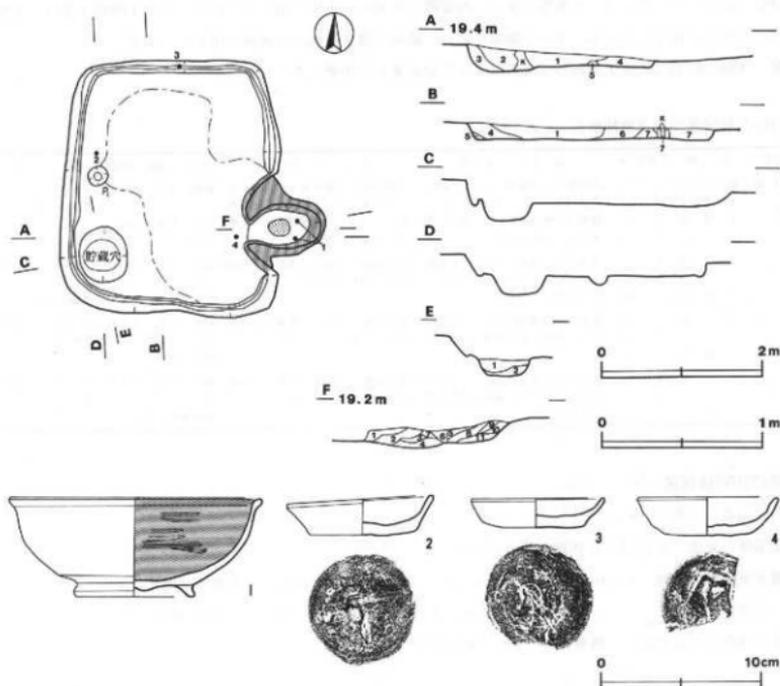
壁溝 全周している。規模は, 上幅21cm, 下幅6cm, 深さ8cmで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で, 特に中央部から南側にかけて, 踏み固められている。

竈 東壁中央やや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は, 焚口部から煙道部まで95cm, 両袖幅100cmである。火床部は, 床面をわずかに約4cm掘りくぼめており, 赤変硬化している。天井部は崩落しており, 第8・9層は天井部の崩落土と考えられる。4層は焼土が多量に検出され, 底面は火床面と考えられる。袖部は良好に遺存している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 珪 褐色 焼土小ブロック・灰粒子少量, 炭化材微量
- 2 珪 褐色 焼土小ブロック・灰粒子少量, 灰粒子・粘土中ブロック微量
- 3 灰 褐色 焼土中ブロック・粘土中ブロック中量, 焼土粒子・灰粒子少量
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子多量, 焼土中ブロック・粘土中ブロック中量, 灰粒子少量
- 5 灰 褐色 焼土小ブロック・灰粒子・粘土中ブロック少量, 焼土粒子微量



第11図 第421号住居跡・出土遺物実測図

- 6 にぶい赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・灰粒子・粘土中ブロック少量
 7 灰 褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・灰粒子・粘土中ブロック少量
 8 灰 褐色 焼土小ブロック・灰粒子・粘土中ブロック中量、焼土粒子少量
 9 暗赤褐色 焼土中ブロック・灰粒子・粘土中ブロック中量、焼土粒子少量
 10 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・灰粒子・粘土中ブロック少量
 11 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子・灰粒子・粘土中ブロック少量

ピット P₁は径約15cmの円形で、深さ12cmであり、西壁際中央に検出されている。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南西コーナー部から検出された。径約65cmの円形で、深さ21cmである。覆土中層から土師器片4点、須恵器片2点が出土している。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム中・小ブロック多量 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量

覆土 7層からなる。各層からロームブロックが検出され、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化材微量 5 暗褐色 ローム粒子中量
 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量 6 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
 3 黒褐色 ローム中ブロック・粒子中量 7 黒褐色 ローム粒子微量
 4 黒褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量

遺物 土師器片37点、須恵器片7点、礫16点が出土している。第11図1の土師器高台付坏は、竈覆土下層から逆位で出土している。2の土師器小皿は、西壁際の床面から正位で出土している。3の土師器小皿は、北壁溝から正位で出土している。4の土師器小皿は、竈前の覆土下層から逆位で出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して10世紀前葉から中葉と考えられる。

第421号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徵	手法の特徵	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	高台付坏	A [15.6] B 6.2 D 7.2	高台部から口縁部にかけての破片。 高台は短く「ハ」の字状に開く。 体部は内嚙気味に立ち上がり、口 縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部外 面口ロナデ、内面丁字なヘラ磨 き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい褐色(外面) 普通	P 3003 50% 竈覆土下層
	小皿	A 9.1 B 2.0 C 6.6	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は外傾して 立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部内・外面口ロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 褐色 普通	P 3004 90% P L 58 西壁跡床面
	土師器	A 8.2 B 1.9 C 6.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内嚙気味 に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部内・外面口ロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 褐色 普通	P 3005 90% 北壁溝
4	小皿	A [8.8] B 2.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。 平底。体部から口縁部は内嚙気味 に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部内・外面口ロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 明赤褐色 普通	P 3006 50% 竈前覆土下層
	土師器	C 5.6				

第422B号住居跡(第5・12図)

位置 調査3区南部, K11h区。

重複関係 東部で第422A号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸(4.8)m, 短軸(2.3)mである。攪乱が激しいために、平面形は推定できなかった。

竈 東壁に構築されていたと推定される。攪乱が激しく、北側袖部と火床部の一部が残存しているのみである。

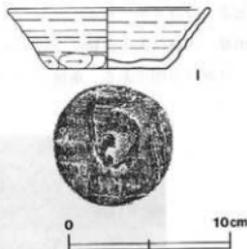
袖の残存から砂質粘土で構築されていたと推定される。

甕土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, 炭化材少量
- 2 暗褐色 粘土粒子・山砂中量
- 3 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 4 赤褐色 焼土小ブロック多量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・炭化材中量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, 炭化粒子少量
- 7 焼土ブロック

遺物 攪乱が激しいために、出土遺物は細片である。甕及び甕付近の覆土中から土師器片265点, 礫1点が出土している。第12図1の須恵器杯は、甕付近の覆土下層から出土している。甕覆土中から赤く焼けた雲母片岩が出土しており、支脚として使用したものと考えられる。

所見 本跡は攪乱が激しいために、壁の極一部と甕の一部しか確認できなかった。規模は、南壁と思われる掘り込みが、重複している第422A号住居跡の西壁上部にわずかに確認でき、同様に東壁と思われる掘り込みが第422A号住居跡の北壁上部にわずかに確認できたことから推定した。時期は出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。重複している第422A号住居跡より新しい。



第12図 第422B号住居跡出土遺物実測図

第422B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第12図1	杯	A 12.5 B 3.8 C 7.4	口縁部は一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部外面下縁手持ちヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロコナダ。	砂粒・長石・石英 灰色 普通	P 3034 90% P L 59 甕付近覆土下層

(2) 溝

第29号溝 (第13図, 付図1)

位置 調査3区中央部, K11h区~K11i区。

重複関係 第419号住居跡と第550号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅45~73cm, 下幅31~55cm, 深さ13cmで、全長(6.64)mで

あり、断面形は「—」状をしている。

方向 K11i区から北方向に、直線的に延びている。

覆土 単一層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック少量

所見 本跡は出土遺物がないため、時期や性格は不明である。重複している第419号住居跡と第550号土坑より新しい。

(3) 土坑

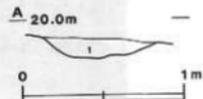
第550号土坑 (第9図)

位置 調査3区中央部, K11h区。

重複関係 南東部を第419号住居跡に、中央部を第29号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 一辺 [2.0]m, 深さ17cmの方形と推定される。

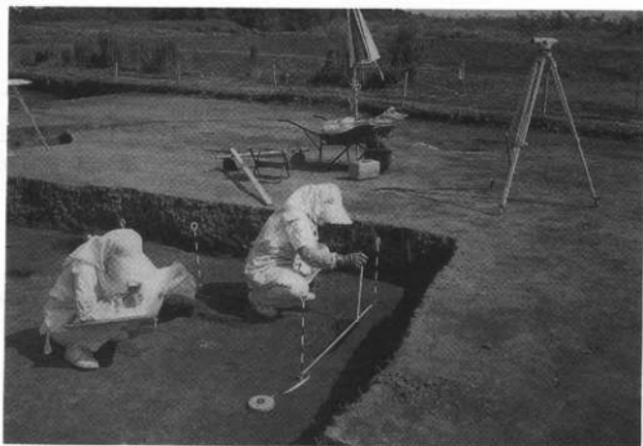
長軸方向 N-32°-E



第13図 第29号溝断面図

底面 ほぼ平坦である。

所見 本跡は出土物がないため、時期や性格は不明である。規模と平面形は床質から推定した。覆土の堆積状況は不明である。重複している第419号住居跡、第29号溝より古い。



第422A号住居跡調査風景（上・下）

2 5区の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

① 古墳時代

第354号住居跡 (第14・15図)

位置 調査5区中央部, J13ca区。中央部から東部は, 平成8年度に調査している。

重複関係 西部が第424号住居跡に掘り込まれているが, 床面までは達していない。

規模と平面形 長軸 [8.8]m, 短軸 [7.8]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-18°-W

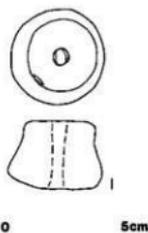
壁 全面にトレンチャーによる攪乱を受けているため, 西壁及び南壁は確認できず, 北壁だけが確認できた。北壁の壁高は38cmで, 外傾して立ち上がる。

床 攪乱を受けているが, 攪乱の間に踏み固められた面が検出された。ほぼ平坦である。

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は平成8年度調査区に位置し, 本跡の東部にある。P₂は径約25cmの円形で, 深さ27cmである。P₃は径約35cmの円形で, 深さ64cmである。いずれもコーナーに寄った位置で検出され, 規模と配置から主柱穴と考えられる。

遺物 土師器片298点, 須恵器片7点, 土製品1点 (紡錘車), 不明鉄製品1点, 礫4点が出土している。第14図1の土製紡錘車は, 北西コーナー部P₃付近の覆土下層から出土している。

所見 攪乱を受けているために, 覆土の堆積状況は不明である。壁溝は検出されなかった。規模と平面形は床質から推定した。竈は, 平成8年度の調査時に北壁中央部で検出されている。時期は, 出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第424号住居跡より古い。



第14図 第354号住居跡出土遺物実測図

第354号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (mm)	重量 (g)		
第14図1	紡錘車	39	28	0.6	430	北西コーナー部P ₃ 付近覆土下層	DP 5001 PL 102

第380号住居跡 (第16・17図)

位置 調査5区北西部, I12ia区。

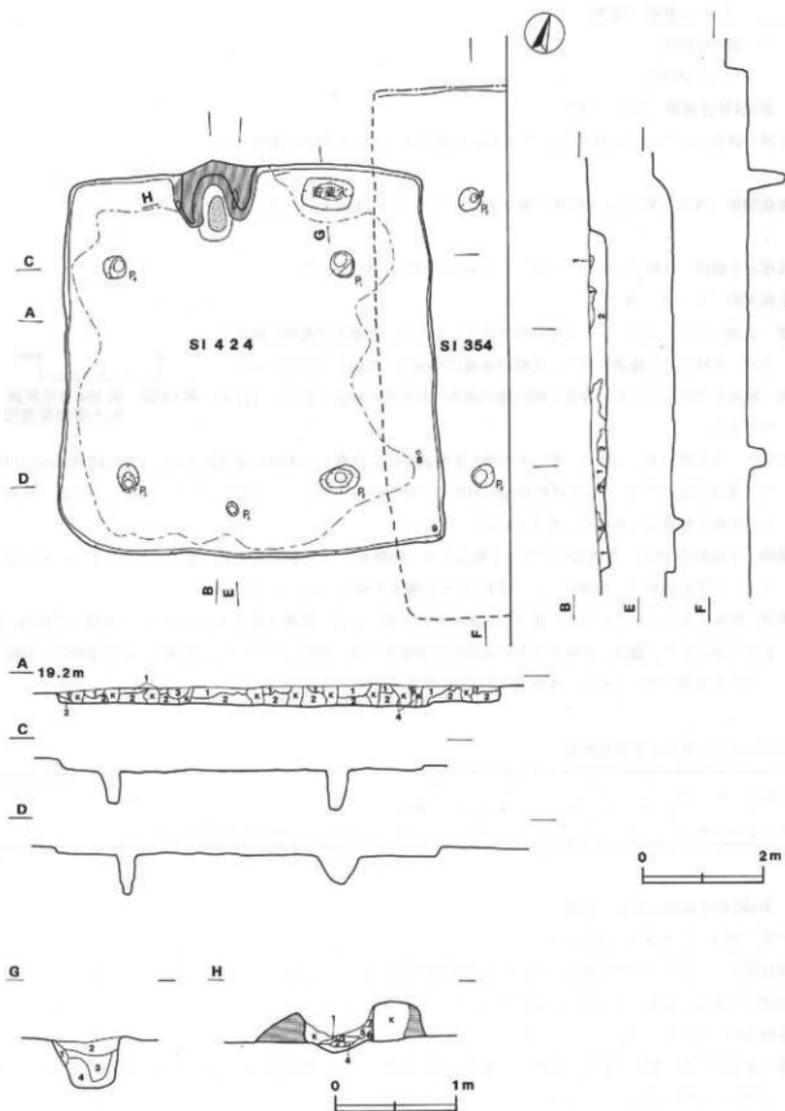
重複関係 北部を第17B号溝に, 南部を第381号住居跡に, いずれも床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [7.5]m, 短軸6.88mの長方形と推定される。

主軸方向 N-23°-W

壁 第17B号溝に掘り込まれた北壁と, 覆土が薄い南西コーナー部の壁の立ち上がりは, 確認できなかった。西壁及び東壁の壁高は2~10cmである。

床 東壁際を除けばほぼ平坦で, 中央部が特に踏み固められている。東壁に沿って, 長軸 (4.7)m, 短軸約1.2mの長方形で, 高さ約6cmのベッド状に高まった部分が発出された。地山を掘り残していると思われる。上面は, ほぼ平坦で硬化していない。



第15图 第354・424号住居跡実測图

炉 中央部からやや北寄りに検出された。規模は、長径92cm、短径60cmの楕円形で、床面を約6cm掘りくぼめた地床炉である。火床部は、赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗灰色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、焼土大・中ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子微量

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁~P₄は径約40cmの円形で、深さ13~45cmであり、各コーナーに寄った位置で検出された。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P₅は径30cmの円形で、深さ12cmであり、南壁に寄った位置で検出された。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆は径35cmの円形で、深さ28cmである。P₃に接して検出されており、P₃の補助柱穴の可能性がある。その他は性格不明である。

貯蔵穴 南東コーナー部で検出された。長軸116cm、短軸96cmの隅丸長方形で、深さ120cmである。覆土上層から土師器塔と土師器器台が、覆土下層から土師器塔片と土師器甕片が出土している。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・砂粒・礫少量、焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・粒子中量、砂粒少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

覆土 6層からなる。各層にロームブロックが含まれる堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

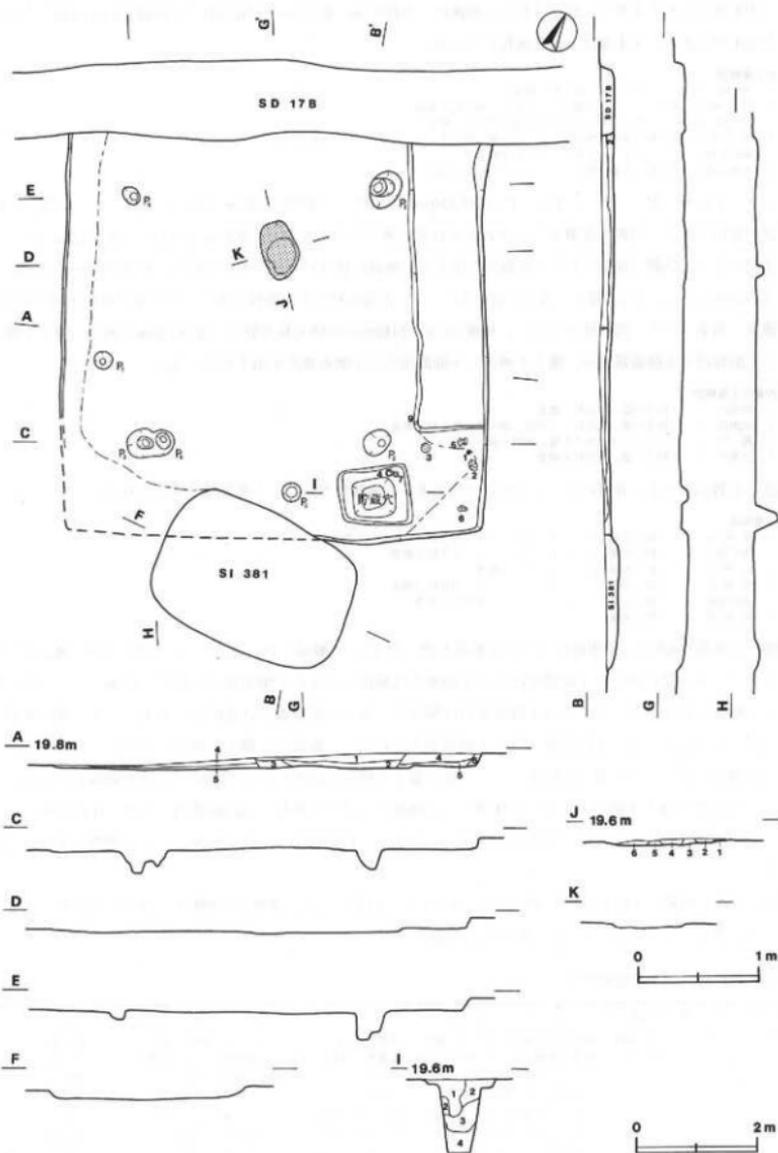
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大・中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量

遺物 土師器片426点、須恵器片2点、土製品1点(土玉)、石製品1点(管玉)、メノウ片1点、礫2点が出土している。第17図1の土師器塔と3の土師器塔は横位で、2の土師器塔は正位で、南東コーナー部の覆土下層から出土している。5の土師器器台は横位で、6の土師器器台は逆位で、南東コーナー部の床面から出土している。4の土師器塔と7の土師器器台は正位で、貯蔵穴の覆土上層から出土している。8の土玉は覆土中から、9の管玉は南東コーナー部の覆土下層から出土している。10・11は土師器甕片である。10は中央部の覆土下層から出土した体部から口縁部にかけての破片で、口縁部内・外面と体部外面にハケ目調整が施されている。11は中央部の床面から出土した口縁部片で、内・外面にハケ目調整が施されている。

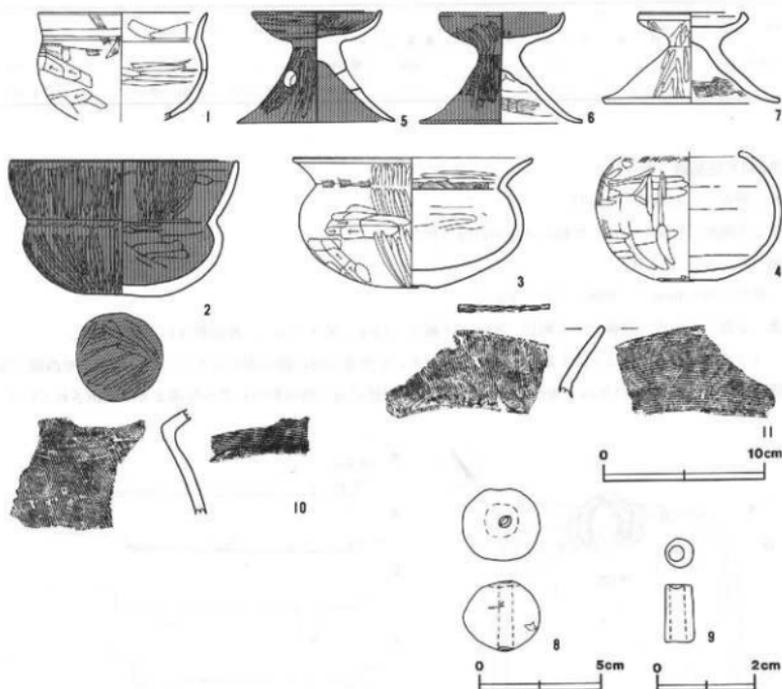
所見 本跡の規模と平面形は、一部床質から推定した。時期は、出土遺物から判断して古墳時代前期と考えられる。重複している第17B号溝と第381号住居跡より古い。

第380号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図1	土師器	A 10.4	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや外傾する。内面の体部と口縁部との境に稜をもつ。	体部外面下位へラ削り、上位ハケ目調整、内面へラナデ。口縁部外面横ナデ。内面ハケ目調整。輪積み痕。	砂粒・長石にふい赤褐色	P 5006 30% P L 59 南東コーナー部覆土下層
		B (6.7)			普通	
2	土師器	A 14.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内彎気味に外傾する。内面の体部と口縁部との境に稜をもつ。	底部から口縁部外面丁寧なへラ削り。体部内面へラナデ。口縁部内面丁寧なへラ削り。内・外面赤部。	砂粒・雲母・小石赤褐色	P 5007 60% P L 59 南東コーナー部覆土下層
		B 8.4				
		C 5.3				



第16图 第380号住居跡実測図



第17図 第380号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 3	埴 土師器	A 14.8	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。内面の体部と口縁部との境に稜をもつ。	底部ヘラ削り。体部外面下位ヘラ削り後ヘラ磨き。上位ハケ目調整後ヘラ磨き。内面ヘラナデ。口縁部内・外面ハケ目調整後丁寧ヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P 5012 70% P L 59 南東コーナー部履 上下層
		B 8.0				
		C 2.6				
4	埴 土師器	B (8.0)	口縁部欠損。平底。体部は球形状をしている。	底部ナデ。体部外面ヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・赤色粒子にふい橙色 普通	P 5008 60% P L 59 貯蔵穴履土上層
		C 3.5				
5	器 台 土師器	A 8.0	脚部はラッパ状に開き、上半に3孔あり。器受部は内彎気味に立ち上がる。	脚部外面丁寧ヘラ磨き、内面ヘラナデ。器受部内・外面丁寧ヘラ磨き。脚部外面、器受部内・外面赤影。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	P 5009 95% P L 59 南東コーナー部床 面
		B 6.8				
		D 9.8				
6	器 台 土師器	A 7.6	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がり、端部は上方に突出する。	脚部外面丁寧ヘラ磨き、内面ヘラナデ。器受部内・外面丁寧ヘラ磨き。脚部外面、器受部内・外面赤影。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P 5011 80% P L 59 南東コーナー部床 面
		B 6.8				
		D 10.0				
7	器 台 土師器	A 6.6	脚部・器受部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がり、端部は上方に突出する。	脚部外面丁寧ヘラ磨き、内面ヘラナデ後ハケ目調整。器受部内・外面丁寧ヘラ磨き。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	P 5010 90% P L 60 貯蔵穴履土上層
		B 5.6				
		D 10.8				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (mm)	重量 (g)			
第17図8	土玉	3.2	2.9	0.5	25.0	覆土中	D P 5013	P L 101
9	管玉	0.6	0.3	0.3	0.55	南東コーナー部覆土下層	Q 5001 滑石	P L 101

第383号住居跡 (第18図)

位置 調査5区北西部, I12a6区。

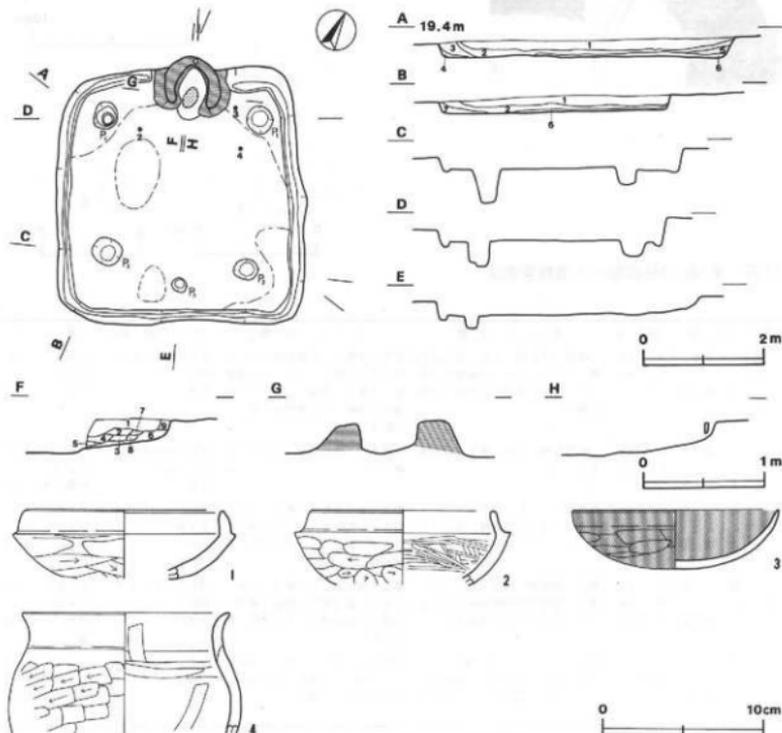
規模と平面形 長軸4.34m, 短軸4.08mのほぼ方形である。

主軸方向 N-23°-W

壁 壁高は20~40cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。規模は, 上幅15~30cm, 下幅4~12cm, 深さ5cmで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦である。ほぼ全面が踏み固められており, 中央部が特に踏み固められている。中央やや西側と南壁際で, それぞれ長径116cm・短径75cm, 長径60cm・短径45cmの楕円形のわずかな高まりが検出されている。



第18図 第383号住居跡・出土遺物実測図

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで104cmで、両袖部幅は約125cmである。第6層からは焼土が検出され、下面が火床面と考えられる。火床部は、床面を約3cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第1・2層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており、内側は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

焼土層解説

- | | | |
|---|-------|---------------------------|
| 1 | オリブ褐色 | 焼土粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子微量 |
| 2 | 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土粒子中量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 4 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 5 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・焼土粒子少量 |
| 6 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量 |
| 7 | 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック微量 |
| 8 | 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土粒子・焼土粒子微量 |
| 9 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・炭粒子少量、炭化粒子微量 |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は径約45cmの円形で、深さ24~55cmであり、各コーナーに寄った位置で検出されている。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P₅は径25cmの円形で、深さ20cmであり、南壁中央に寄った位置で検出されている。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなる。各層ともレンズ状の堆積をしていることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|------------------------|---|-----|---------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 | 5 | 褐色 | 焼土粒子・焼土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 | 褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 | 暗褐色 | 焼土粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子微量 | | | |

遺物 土師器片519点、須恵器片7点、礫1点が出土している。第18図1の土師器坏は、北東コーナー部の覆土中から、2の土師器坏は逆位で、北西コーナー部付近の覆土中層から出土している。3の土師器坏と4の土師器小形変は逆位で、北東コーナー部の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀後半から7世紀前半と考えられる。

第383号住居跡出土遺物観察表

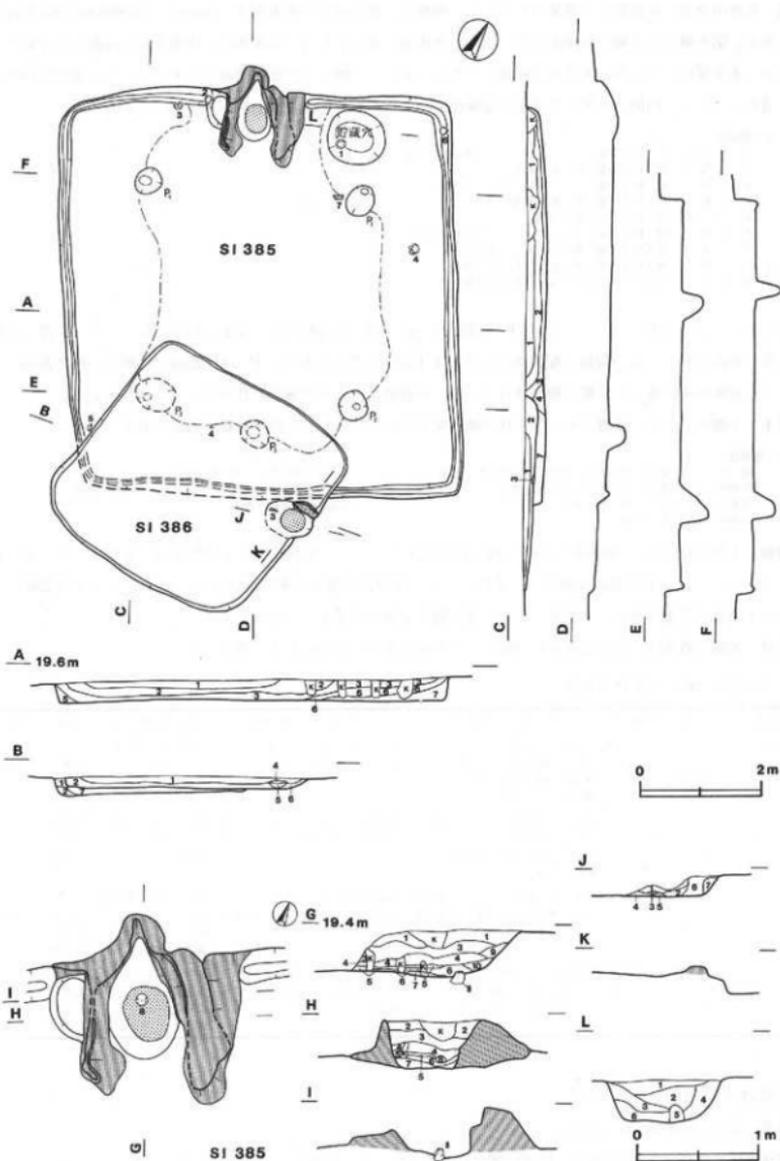
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	坏 土師器	A [122] B (43)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な境をもつ。口縁部はやや内彎する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にふい褐色 普通	P 5013 10% 北東コーナー部覆土中
2	坏 土師器	A [112] B (46)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な境をもつ。口縁部は内彎する。	体部外面へラ削り、内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にふい黄褐色 普通	P 5014 10% 北西コーナー部覆土中層
3	坏 土師器	A 128 B 37	体部から口縁部にかけて一部欠損丸底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 石英 褐色 普通	P 5015 85% P L60 二次焼成 北東コーナー部覆土中層
4	小形変 土師器	A [128] B (75)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面上位へラ削り、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 褐色 普通	P 5016 15% 北東コーナー部覆土中層

第385号住居跡 (第19・20図)

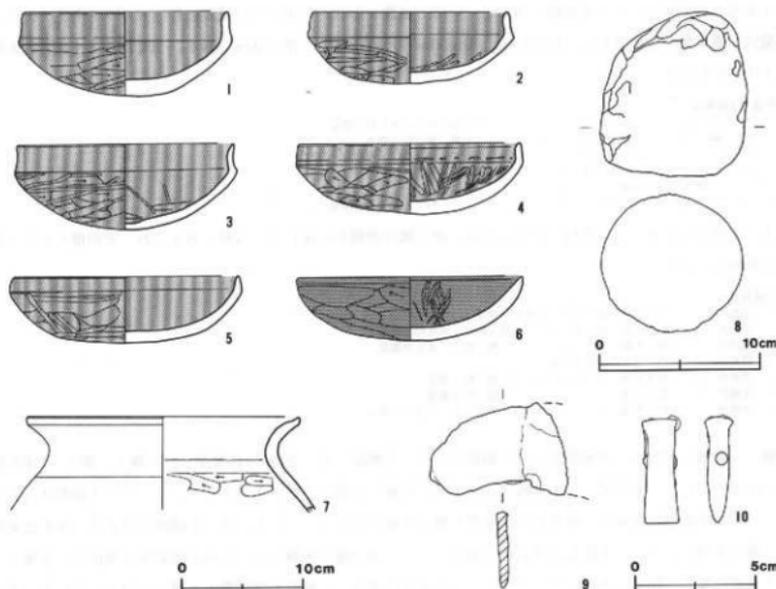
位置 調査5区北西部、J12b区。

重複関係 南西部が、第386号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸6.66m、短軸6.42mの方形である。



第19图 第385·386号住居跡実測图



第20図 第385号住居跡出土遺物実測図

主軸方向 N-28°-W

壁 壁高は24~38cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。規模は、上幅12~24cm、下幅4~10cm、深さ4cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで120cmで、両袖部幅は約155cmである。第7層の底面が火床部と考えられ、床面を約7cm掘りくぼめており、赤変硬化している。火床面から、土製支脚が、赤変し立位で出土している。使用されていたままの状態と考えられる。天井部は崩落しており、第2・3層が天井部の崩落土と考えられる。右袖部の一部にトレンチャーによる攪乱を受けているが、残存部分の内側は火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は、火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 灰白色粘土小ブロック・粘土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 灰褐色 灰白色粘土粒子多量
- 3 灰褐色 灰白色粘土小ブロック・粘土粒子多量、炭化材微量
- 4 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化材微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、灰粒子少量
- 6 赤黒色 焼土粒子・炭化物中量、灰粒子少量(灰層)
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・粒子多量
- 8 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化物・ローム粒子微量
- 9 黒褐色 粘土粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は径約55cmの円形で、深さ35~48cmあり、いずれもコーナーに寄った位置にあり、規模と配置から主柱穴であると考えられる。P₅は径45cmの円形で、深さ32cmであり、南壁

中央寄りに位置し、やや南壁側に傾斜している。位置や形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。
貯蔵穴 竈東側で検出された。長径95cm、短径90cmのはほぼ円形で、深さ36cmである。土師器環と土師器片が覆土中層から出土している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、粘土小ブロック・粒子微量
- 5 オリーブ褐色 粘土多量
- 6 黒褐色 粘土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量

覆土 7層からなり、自然堆積と考えられる。第5層は壁側から流れ込んだ層と考えられ、その他もレンズ状の堆積をしている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片1329点、須恵器片5点、磁器片3点、土製品1点(支脚)、鉄製品2点(鎌1、楔1)、炭化物が出土している。第20図1の土師器環は逆位で、貯蔵穴の覆土中層から出土している。2の土師器環は正位で、3の土師器環は逆位で竈西側の北壁際の覆土下層から出土している。4の土師器環は正位で中央部東側の覆土下層から、5の土師器環は斜位で南西コーナー部の覆土下層から、6の土師器環は逆位で、北東コーナー部の覆土下層から出土している。7の土師器環は逆位で、竈前東側の覆土下層から出土している。8の土製支脚は、竈火床面から出土している。9の鎌、10の楔は覆土中から出土している。なお、竈内の覆土と6層の灰から炭化米が少量検出されている。磁器片は撓乱により混入したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第386号住居跡より古い。

第385号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第20図 1	土師器 環	A 12.8	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 浅黄褐色	P 5019 100% P L 60 貯蔵穴覆土中層
		B 5.2				
2	土師器 環	A 12.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 5020 90% P L 60 竈西側北壁際覆土下層
		B 4.4				
3	土師器 環	A [13.6]	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 5021 60% 竈内側北壁際覆土下層
		B 5.3				
4	土師器 環	A 13.9	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に段をもつ。口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 5022 95% P L 60 中央部東側覆土下層
		B 4.4				
5	土師器 環	A [14.0]	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 5023 60% 南西コーナー部覆土下層
		B 3.6				
6	土師器 環	A [14.0]	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へラ削り後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤形。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5024 60% P L 60 北東コーナー部覆土下層
		B 3.9				

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第20図7	土 師 器	A [22.2] B (7.9)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内傾して立ち上がる。胴部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面上位ナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石炭にふい黄褐色普通	P 5025 10% 甕館東御覆土下層

図版番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)		
第20図8	支 脚	10.2	8.9	630.0	甕火床面	D P 5002 土製

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第20図9	盤	(4.5)	3.9	0.5	(21.0)	覆土中	M 5023
10	椀	4.3	1.5	1.2	21.0	覆土中	M 5024

第388号住居跡 (第21・22図)

位置 調査5区中央部, J12c区。

重複関係 中央部が第390号住居跡に, 南東コーナー部が第413号住居跡に, 竈左袖部が第221・227号土坑に, 西壁部が第217・219号土坑に, 南西コーナー部が第218号土坑に掘り込まれている。第390号住居跡と各土坑は床面を掘り込んでいるが, 第413号住居跡の掘り込みは床面まで達していない。

規模と平面形 長軸 [6.4]m, 短軸5.86mの長方形と推定される。

主軸方向 N-19°-W

壁 北西コーナー部と, 北壁中央部から東壁のみが確認できた。壁高は12~22cmで, 外傾して立ち上がる。

床 中央部が第390号住居跡に掘り込まれているために確認できないが, それ以外はほぼ平坦で, 中央部付近が踏み固められている。

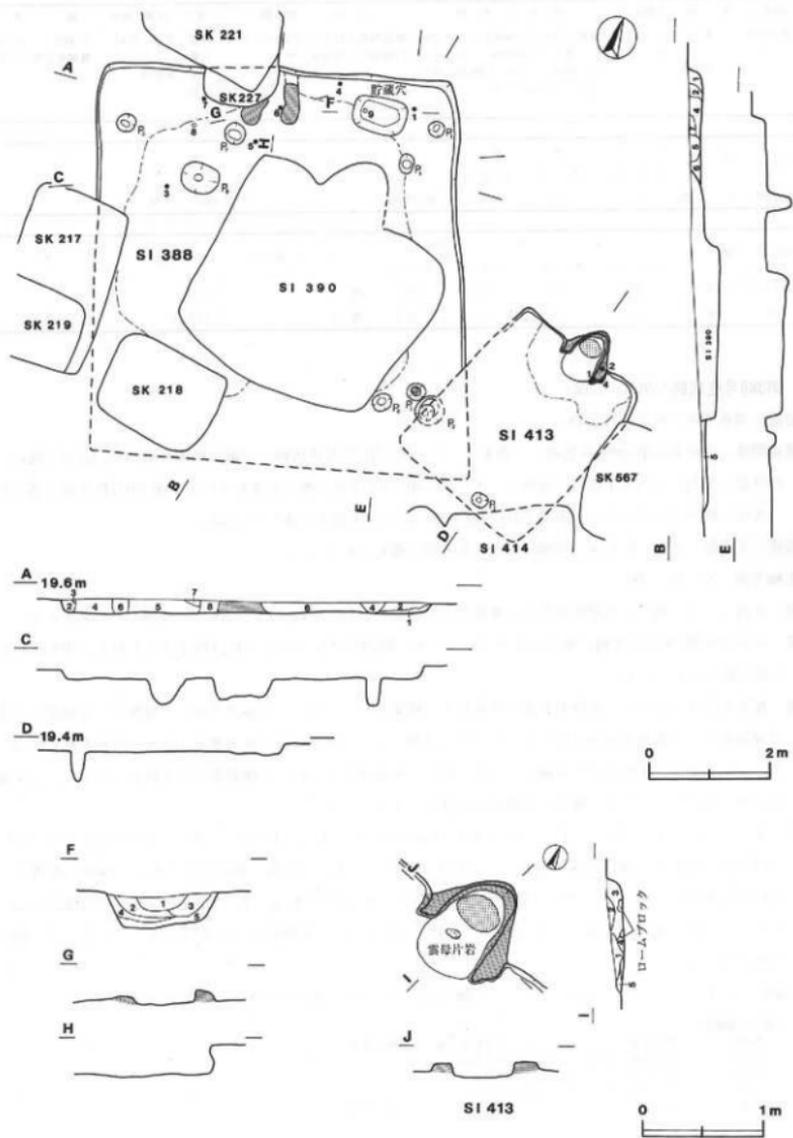
竈 攪乱を受けているが, 北壁中央部に砂質粘土で構築されていることが確認された。規模は, 東袖部から北壁煙道部までの遺存状況が良好であったので, 計測できた。焚口部から煙道部まで97cm, 両袖部幅約84cmである。火床部は, 床面を約4cm掘りくぼめており, 赤変硬化している。煙道部は急な傾斜で立ち上がる。攪乱を多く受けているため, 覆土の堆積状況は確認できなかった。

ピット 8か所 (P₁~P₈)。P₁・P₃は径約16cmの円形で, P₁は深さ36cm, P₃は深さ21cmであり, P₂は径48cmの円形で, 深さ23cmである。いずれもコーナーに寄った位置で検出されており, 規模と配置から支柱穴と考えられる。P₄~P₆は径約25cmの円形で, P₄は深さ45cm, P₅は深さ23cm, P₆は深さ16cmである。いずれも規模と配置からP₄はP₁の, P₅・P₆はP₂の補助柱穴の可能性が考えられる。その他は性格不明である。

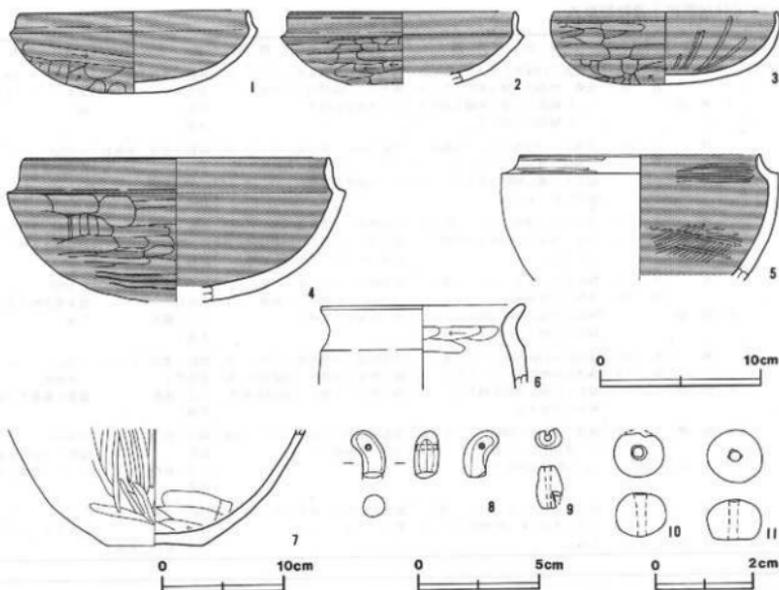
貯蔵穴 北東コーナー部から検出された。長軸86cm, 短軸55cmの隅丸長方形で, 深さ28cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック・焼土粒子少量, 砂質粘土微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム中・小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・砂質粘土微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量



第21图 第388・413号住居跡実測图



第22図 第388号住居跡出土遺物実測図

覆土 8層からなる。人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、砂質粘土微量 |
| 2 | にぶい褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子微量 |
| 4 | 褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子微量 |
| 5 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 | 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物 土師器片497点, 須恵器片8点, 土製品4点(勾玉1, 管玉1, 土玉2), 硬6点, 炭化種子が出土している。第22図1の土師器杯は正位で北東コーナー部の床面から, 2の土師器杯は貯蔵穴の覆土中から出土している。3の土師器杯は正位で西側の覆土下層から, 4の土師器杯は逆位で竈東側北壁際の覆土下層から出土している。5の土師器鉢は逆位で竈前西側の覆土下層から出土している。6の土師器小形変は竈覆土下層と北東コーナー部の覆土中から出土した破片とが接合したものである。7の土師器甕は土圧でつぶされた状態で, 竈西側の覆土下層から出土している。8の土製勾玉は, 竈西側の覆土下層から出土している。9の土製管玉は貯蔵穴内から, 10の土玉は覆土中から, 11の土玉はP₂の覆土中から出土している。炭化種子が覆土中から出土しているが, 種子の種類については不明である。

所見 本跡では壁溝は検出されなかった。規模と平面形は床質から推定した。時期は, 出土遺物から判断して6世紀後葉と考えられる。重複している第390・413号住居跡, 第217~219・221・227号土坑より古い。

第388号住居跡出土土物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	土師器 杯	A [14.2] B 5.0	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線をもち、口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 褐色 普通	P 5029 60% 北東コーナー部床面
2	土師器 杯	A [14.0] B (4.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線をもち、口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5030 15% 貯蔵穴覆土中
3	土師器 杯	A [14.0] B 4.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部から口縁部は内彎して立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面丁寧なヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 5031 50% 西側覆土下層
4	土師器 杯	A [19.0] B (8.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線をもち、口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5032 15% 東室東北壁際覆土下層
5	土師器 鉢	A [14.8] B (7.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な線をもち、口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面丁寧なヘラ磨き。口縁部内・外面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5033 20% 二次地成 竈前西側覆土下層
6	土師器 小形壺	A [12.4] B (5.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部上位内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P 5034 10% 竈覆土下層と北東コーナー部覆土中
7	土師器 壺	B (9.5) C 7.6	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部下位は内彎気味に立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部下位外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	P 5035 10% 竈西側覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (mm)	重量 (g)		
第22図8	勾玉	長さ (1.9)	幅 (1.4)	0.2	(2.1)	竈西側覆土下層	D P 5003 P L 101
9	管玉	1.0	1.7	0.2	(1.1)	貯蔵穴	D P 5004 P L 101
10	土玉	1.0	0.9	0.2	0.67	覆土中	D P 5005 P L 101
11	土玉	1.1	0.8	0.2	0.89	P ₁ 覆土中	D P 5006 P L 101

第391号住居跡 (第23・24図)

位置 調査5区北西部, J12d区。

重複関係 東部が第389号住居跡と第274号土坑に、南西コーナー部が第224号土坑に掘り込まれている。第389

号住居跡と第274号土坑の掘り込みは、床面まで達していないが、第224号土坑は床面まで掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.40m, 短軸4.30mの方形である。

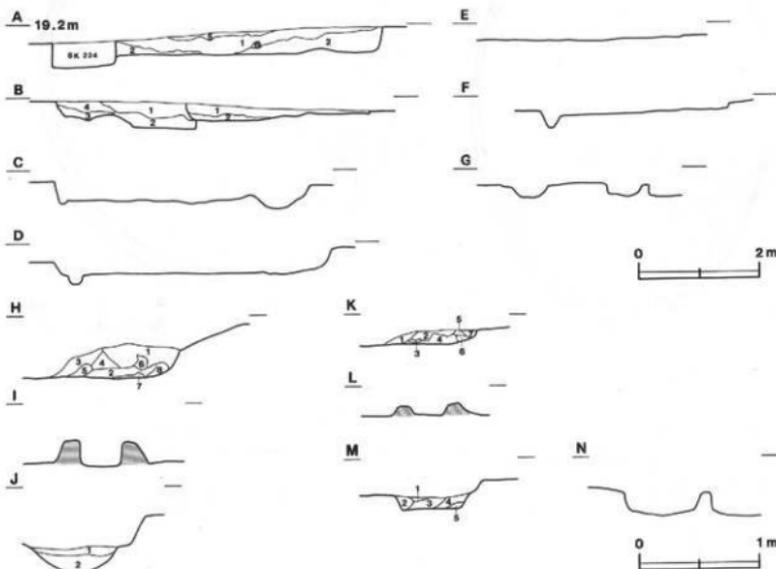
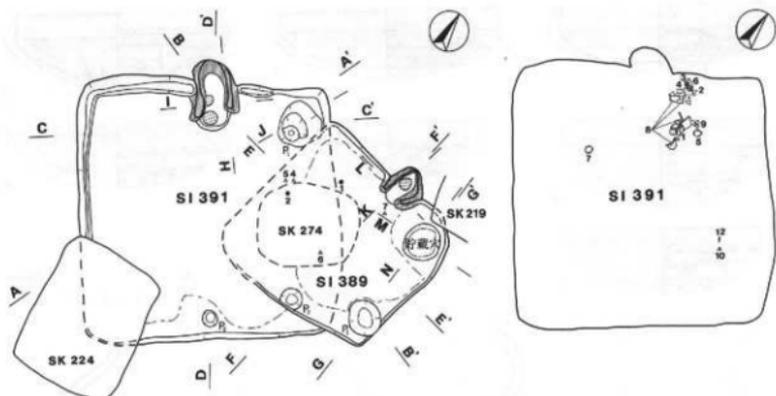
主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は22~30cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 竈東側に一部と竈西側から北西コーナー部の西壁際で検出された。規模は、上幅20~29cm, 下幅4~14cm, 深さ5cmで、断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

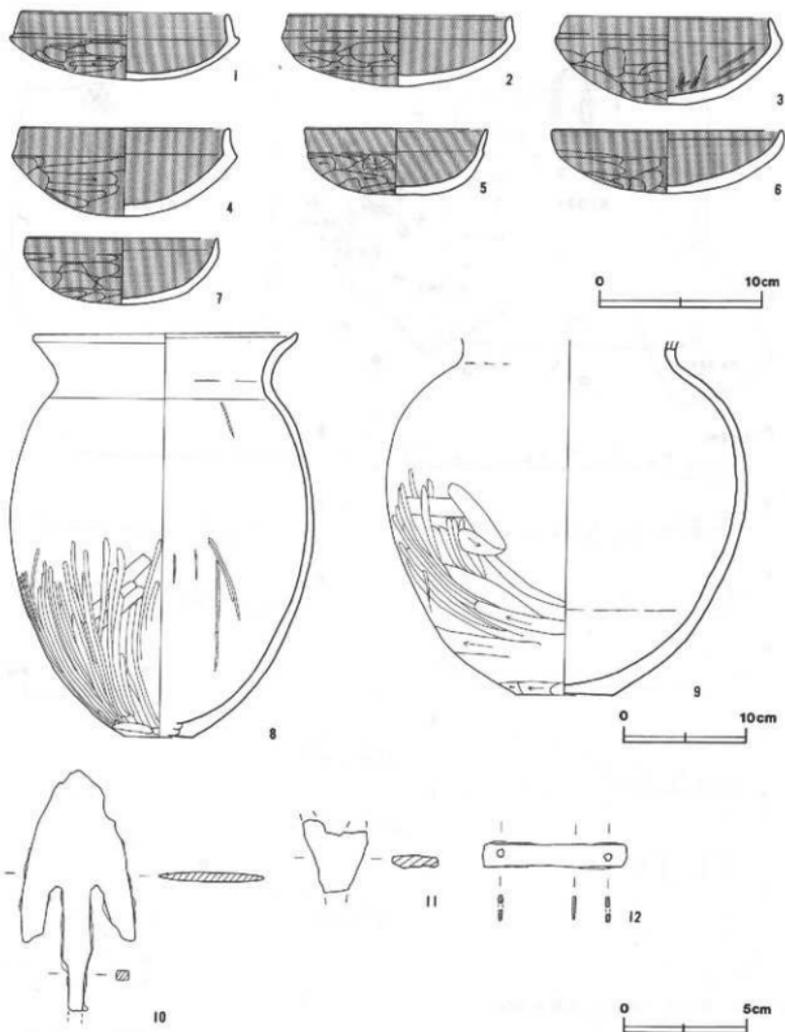
竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで115cm, 両袖部幅80cmである。火床部は、床面を約5cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており、西袖部の内側は赤変硬化している。煙道部は、火床面から緩やかに立ち上がる。



第23図 第389・391号住居跡実測図

竪土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量
- 4 極暗褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・粘土粒子中量
- 5 暗黒色 炭化粒子多量, 焼土粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土中ブロック微量
- 7 暗褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量



第24図 第391号住居跡出土遺物実測図

ピット 2か所 (P_1 ・ P_2)。 P_1 は径70cmの円形で、深さ24cmであり、北東コーナーに寄った位置にある。規模と位置から主柱穴と考えられる。 P_2 は径27cmの円形、深さ14cmで、南壁中央に寄った位置にある。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子少量
- 5 極暗褐色 焼土粒子多量、砂粒中量、ローム粒子少量
- 6 粘土中ブロック多量

遺物 土師器片496点、須恵器片3点、鉄製品3点（鉄鏝2、手鎌1）が出土している。第24図1の土師器杯は正位で、2～4・6の土師器杯は斜位で、甕東袖部上部の覆土上層から重なり合った状態で出土している。棚に重ねて置いてあったものが、ずり落ちたような出土状態である。5の土師器杯は正位で、甕東袖部前の床面から、7の土師器杯は正位で、中央部の覆土下層から出土している。8・9の土師器甕は、甕東袖部上部の覆土上層から出土した破片が接合したものである。10の鉄鏝と12の手鎌は、東側の覆土下層から出土している。11の鉄鏝は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第389号住居跡、第224・274号土坑より古い。

第391号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	土師器 杯	A 12.8	完形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 明褐色 普通	P 5043 100% P L 60 甕東袖部上部覆土上層
		B 4.1				
2	土師器 杯	A 13.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙褐色 普通	P 5044 95% P L 60 甕東袖部上部覆土上層
		B 4.3				
3	土師器 杯	A 12.6	完形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面へラ削り後ヘラナデ、内面横ナデ後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙褐色 普通	P 5045 100% P L 60 甕東袖部上部覆土上層
		B 5.4				
4	土師器 杯	A 12.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 橙褐色 普通	P 5046 95% P L 60 甕東袖部上部覆土上層
		B 5.4				
5	土師器 杯	A 11.2	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや外傾する。	体部外面へラ削り、上位に木重痕。内面・口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙褐色 普通	P 5047 95% P L 60 甕東袖部前床面
		B 4.1				
6	土師器 杯	A 14.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にぶい橙褐色 普通	P 5048 90% P L 61 甕東袖部上部覆土上層
		B 3.9				
7	土師器 杯	A 11.8	完形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り後ヘラナデ、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙褐色 普通	P 5049 100% P L 61 中央部覆土下層
		B 4.1				
8	土師器 甕	A 21.8	底部から体部にかけて一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。胴部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方つまみ上げる。	底部へラ削り。体部外面へラ磨き。内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 黄褐色 普通	P 5050 60% P L 61 甕東袖部上部覆土上層
		B 33.2				
		C [5.6]				
9	土師器 甕	B (29.0)	体部一部欠損。口縁部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径をもつ。	底部へラ削り。体部外面へラ磨き。内面へラナデ。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P 5051 50% P L 61 甕東袖部上部覆土上層
		C 8.0				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第24号10	鉄 鏝	(10.0)	4.8	0.4	(36.0)	東側覆土下層	M 5005	P L 61
11	鉄 鏝	(3.0)	2.7	0.5	(5.50)	覆土中	M 5025	
12	手 鏝	5.9	0.9	0.2	2.34	東側覆土下層	M 5006	P L 61

第394号住居跡 (第25図)

位置 調査5区南西部, J12d区。

重複関係 西部が第24号溝に, 床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 南北 [3.6]m, 東西 (3.4)mで方形と推定される。

主軸方向 N-13°-W

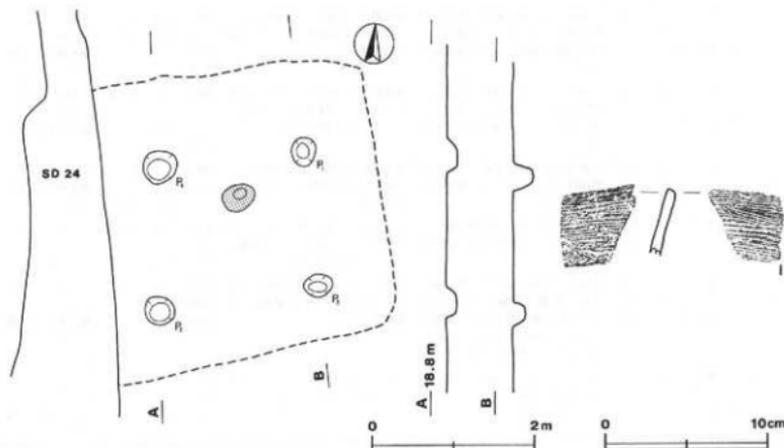
床 はほぼ平坦である。

炉 中央部やや北寄りで床面が熱をうけ赤変硬化している部分が発出され, これを炉と判断した。長径41cm, 短径30cmの地床炉で, 掘り込みは見られない。

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は径約30cmの円形で, 深さ12~24cmである。方形に配置されており, 規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。

遺物 土師器片11点, 須恵器片1点が発出している。第25図1は土師器甕の口縁部片である。南部の床面から出土しており, 内・外面にハケ目調整が施されている。その他, 図示しなかったが, ハケ目調整が施されている土師器片は, P₂の覆土中と床面から計3点出土している。須恵器片は混入したものと思われる。

所見 本跡は, 床面がほぼ露出した状態で検出されたため, 覆土の堆積状況は不明である。規模と平面形は床質から推定したが, 西側部分については第24号溝に掘り込まれていて, 復元ができなかった。時期は, 炉跡がある遺構形態と, 出土遺物にハケ目を施した土師器片が4点出土していることから判断して, 古墳時代前期と考えられる。重複している第24号溝より古い。



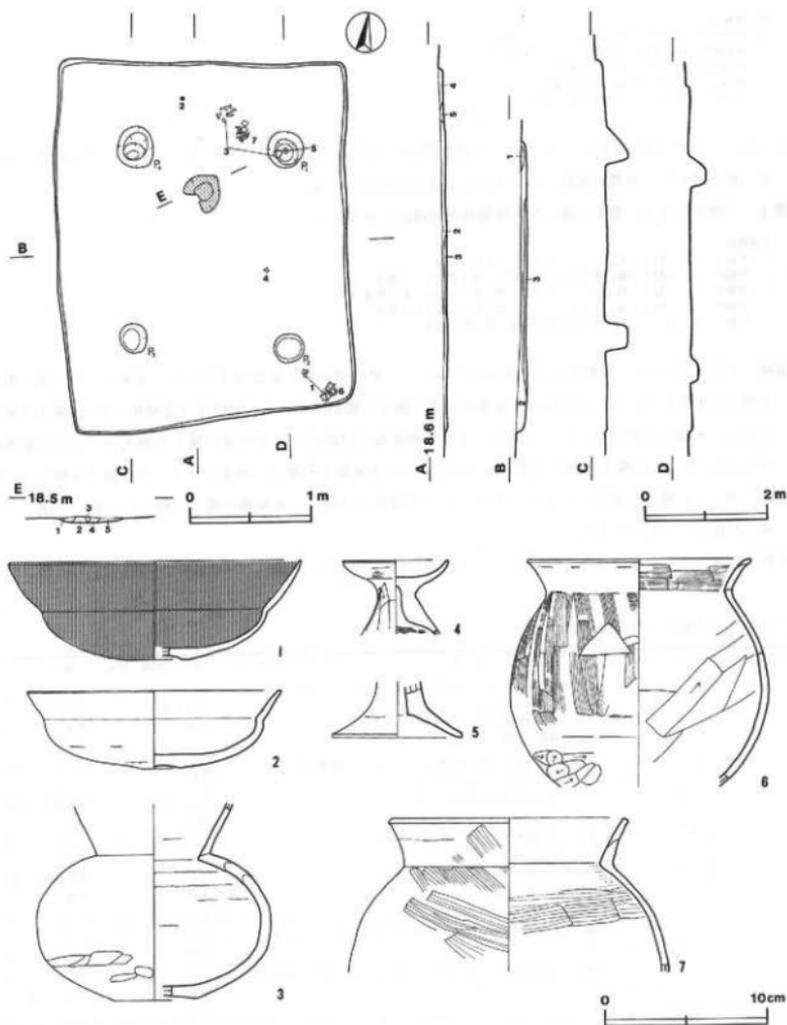
第25図 第394号住居跡・出土遺物実測図

第396号住居跡 (第26図)

位置 調査5区南西部, J12cd区。

規模と平面形 長軸5.84m, 短軸4.82mの長方形である。

主軸方向 N-10°-W



第26図 第396号住居跡・出土遺物実測図

壁 壁高は4~10cmである。ローム層の掘り込みが浅いために、壁の立ち上がり状況は確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。

炉 中央やや北寄りに付設されている。規模は、長径60cm、短径45cmの楕円形で、床面を約4cm掘りくぼめている地床炉である。第1・2層は焼土ブロックを含み、下面に赤変硬化部がみられるため、炉床部と考えられる。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量
- 2 暗褐色 粘土中量、焼土小ブロック・粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量、炭化物少量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子少量

ピット 4か所(P₁~P₄)。P₁~P₄は径約55cmの円形で、深さ18~50cmであり、各コーナーに寄った位置で検出された。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなる。覆土が薄いため堆積状況は確認できない。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・粘土小ブロック少量、炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・粘土中ブロック少量、焼土中ブロック・粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 粘土中ブロック少量、炭化粒子少量、焼土粒子少量

遺物 土師器片152点、須恵器片2点が出土している。第26図1の土師器埴は逆位で、南東コーナー部の覆土下層から出土している。2の埴は北壁側中央部の覆土下層から、3の土師器埴は北壁側とP₁の覆土下層から出土した破片が接合したものである。4の土師器器台は横位で、中央部の覆土下層から、5の土師器器台は正位で、P₁の覆土上層から出土している。6の土師器小形甕は、南東コーナー部の覆土下層から一括して出土した破片が接合したものである。7の土師器小形甕は、北壁側の覆土下層から一括して出土した破片が接合したものである。

所見 本跡では、壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して古墳時代前期と考えられる。

第396号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	埴 土師器	A [18.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。内面の体部と口縁部との境に稜をもつ。	全面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P 5063 30% P L 61 南東コーナー部覆土下層
		B 6.1				
		C [3.4]				
2	埴 土師器	A 15.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。内面の体部と口縁部との境に稜をもつ。	全面ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙褐色 普通	P 5187 80% P L 61 北壁側中央部覆土下層
		B 4.8				
		C 2.4				
3	埴 土師器	B (12.1)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。内面の体部と口縁部との境に稜をもつ。	全面ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・長石・石英 橙褐色 普通	P 5064 30% P L 61 北壁側とP ₁ 覆土下層
		C [5.0]				
4	器台 土師器	A 6.6	器部欠損。器部は「ハ」の字状に開く。器受部は内彎気味に立ち上がる。	器部外面ヘラナデ、内面ハケ目調整。器受部外面ハケ目調整、内面ナデ。	砂粒・雲母・長石 橙褐色 普通	P 5065 80% P L 61 中央部覆土下層
		B (4.6)				
5	器台 土師器	B (3.5)	器部片。器部はラッパ状に開く。	器部内・外面ナデ、輪襷み痕。	砂粒・長石・石英 浅黄橙褐色 普通	P 5066 50% P ₁ 覆土上層
		D 8.0				

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26西 6	小形素 土師器	A [13.8] B (14.1)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内脣して立ち上がり、中位 に最大径をもつ。頸部で「く」の字 状に屈曲し、口縁部は外反する。	体部外面下位へう削り、上位ハケ 目調整。内面へラナデ。口縁部外 面横ナゲ、内面ハケ目調整。輪轆 み疚。	砂粒・雲母・赤色粒 子 明赤褐色 普通	P 5067 40% P L 62 体部外面張付着 南東コーナー部覆 土下層
7	小形素 土師器	A [14.2] B (9.5)	体部上位から口縁部にかけての破 片。体部上位は内脣して立ち上 がる。頸部で「く」の字状に屈曲し、 口縁部は外反する。	体部上位内・外面ハケ目調整。口 縁部外面ハケ目調整、内面横ナ ゲ。輪轆み疚。	砂粒・雲母・長石 黒褐色 普通	P 5068 20% 体部外面張付着 北壁覆土下層

第402号住居跡 (第27~29図)

位置 調査5区中央部, J12f₆区。

重複関係 北東部で第414号住居跡を掘り込み、北西コーナー部が第284号土坑に掘り込まれている。第284号土坑の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸6.81m, 短軸6.25mのはば方形と推定される。

主軸方向 N-28°-W

壁 南壁の立ち上がりは、覆乱を受けているために確認できない。北壁と東西壁の壁高は5~12cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

壁溝 竈の東側から東壁中央部にかけて検出された。上幅17~25cm, 下幅5~10cm, 深さ4~6cmである。

床 はば平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで97cm, 両袖部幅約95cmである。火床部は、床面を約7cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2・6層が天井部の崩落土と思われる。袖部の遺存状態は悪い。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

甌土層解説

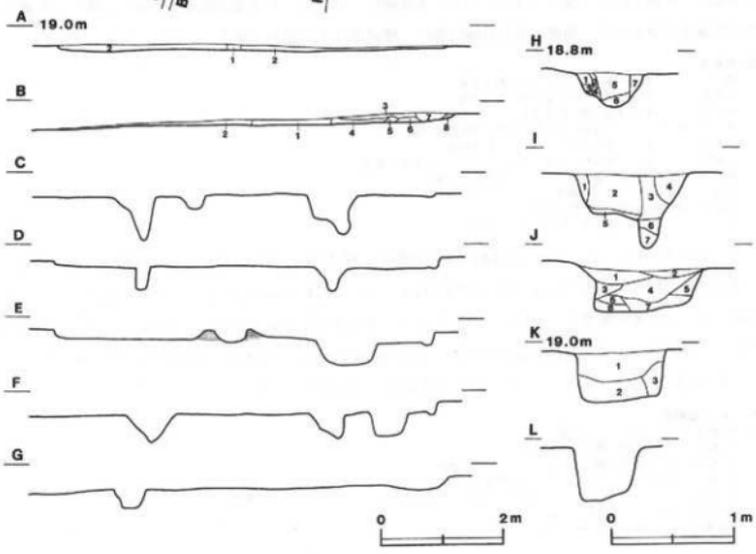
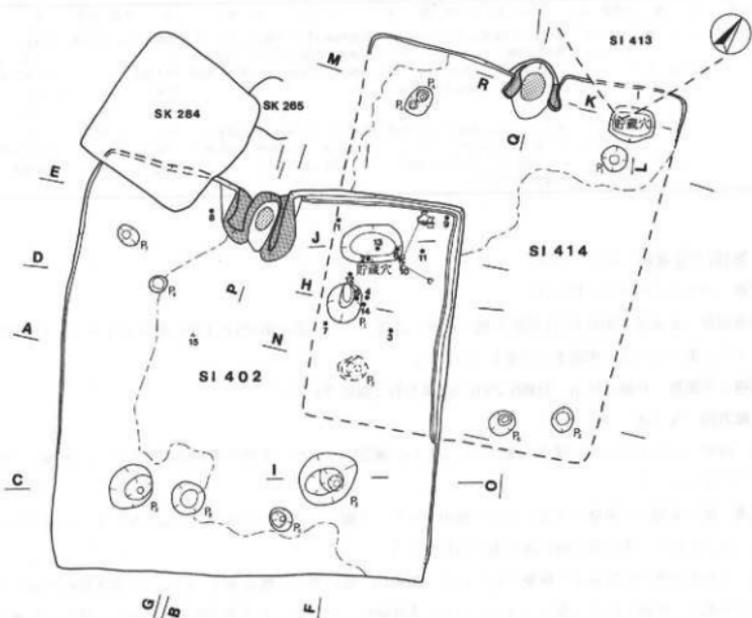
- 1 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 4 褐色 焼土大ブロック多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土大ブロック・粒子少量
- 6 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 粘土中ブロック・炭化粒子微量
- 7 褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 8 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 9 暗褐色 炭化粒子中量, 焼土粒子少量
- 10 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁は径約55cmの円形で、深さ58cm, P₂は径約82cmの円形で、深さ65cm, P₃は径約65cmの円形で、深さ76cm, P₄は径約26cmの円形で、深さ36cmである。いずれも各コーナーに寄った位置にあり、規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は径約40cmの円形で、深さ47cm, P₆は径約50cmの円形で、深さ31cm, P₇は径約32cmの円形で、深さ49cmである。いずれも主柱穴に寄った位置にあることから、P₅はP₂の、P₆はP₃の、P₇はP₄の補助柱穴の可能性がある。

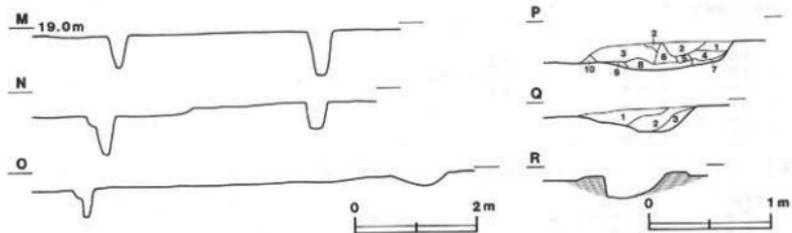
P₁・P₂土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土小ブロック・粒子少量
- 4 黒褐色 粘土粒子少量, 粘土小ブロック少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量, 粘土ブロック・粒子少量
- 6 暗褐色 粘土ブロック・粒子少量
- 7 極暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量

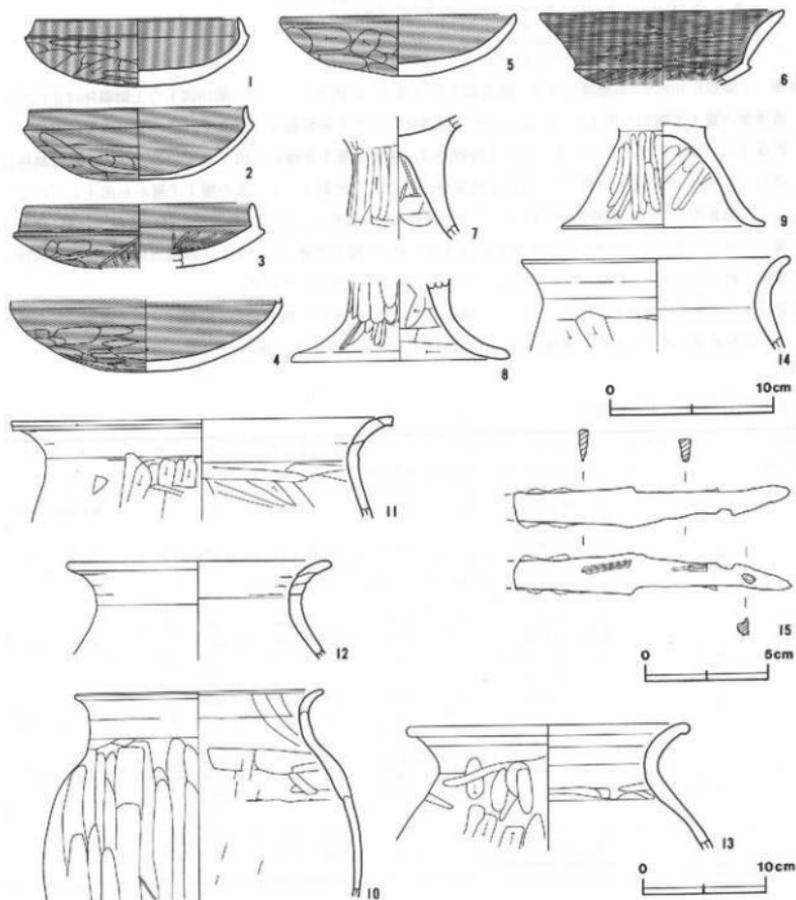
貯蔵穴 竈と東壁の中間から検出された。長径100cm, 短径62cmの楕円形で、深さ36cmである。



第27图 第402・414号住居跡実測图(1)



第28图 第402·414号住居跡实测图(2)



第29图 第402号住居跡出土遺物实测图

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
 2 褐色 ローム大ブロック多量
 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
 6 黒褐色 ローム粒子少量
 7 黒褐色 粘土ブロック少量
 8 暗褐色 ローム粒子微量

覆土 8層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量
 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量、粘土小ブロック微量
 5 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量、粘土小ブロック・炭化粒子微量
 6 暗褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量
 7 黒褐色 粘土中ブロック・粘土粒子中量、粘土小ブロック・粒子少量
 8 暗褐色 砂質粘土粒子中量、焼土粒子少量、粘土小ブロック微量

遺物 土師器片401点、須恵器片3点、鉄製品1点(刀子)が出土している。第29図1の土師器坏は正位で、竈東側の覆土下層から出土している。2の土師器坏と6の土師器高坏は正位で、13の土師器甕は逆位で、貯蔵穴の上面から出土している。3の土師器坏は、東側の覆土下層から出土している。9の土師器高坏は逆位で、10の土師器甕は横位で、11の土師器甕は正位で、北東コーナー部の覆土下層から出土している。4の土師器坏と12の土師器甕は正位で、7の土師器高坏は横位で、14の土師器小形甕は逆位で、P₁付近の覆土下層から出土している。5の土師器坏は正位でP₁の覆土中層から、8の土師器高坏は逆位で竈西側の覆土下層から出土している。15の刀子は、中央部の床面から出土している。

所見 本跡は南壁に攪乱を受けているため、規模と平面形は床質から推定した。時期は、出土遺物から判断して6世紀後葉と考えられる。重複している第414号住居跡より新しく、第284号土坑より古い。

第402号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	坏	A 12.6 B 4.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内 響気味に立ち上がり、口縁部との 境に明瞭な稜をもつ。口縁部は内 傾する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・雲母 石灰 にぶい橙色 普通	P 5085 95% P L 62 竈東側覆土下層
	土師器					
2	坏	A [13.4] B 4.4	体部から口縁部にかけて一部欠 損。丸底。体部は内響気味に立ち 上がり、口縁部との境に明瞭な稜 をもつ。口縁部は内傾する。	体部外面へラ削り後へラナデ、内 面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい橙色 普通	P 5086 60% 貯蔵穴上面
	土師器					
3	坏	A [14.0] B (3.9)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内響気味に立ち上がり、口 縁部との境に明瞭な稜をもつ。口 縁部は内傾する。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内 面丁寧なへラ磨き。口縁部内・外 面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい黄褐色 普通	P 5087 20% 東側覆土下層
	土師器					
4	坏	B (4.4)	体部から口縁部にかけての破片。 口縁部欠損。丸底。体部は内響気 味に立ち上がる。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P 5088 40% P ₁ 付近覆土下層
	土師器					
5	坏	A 14.4 B 3.7	体部から口縁部にかけて一部欠 損。丸底。体部は内響気味に立ち 上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。内・外面 黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	P 5089 60% P ₁ 、覆土中層
	土師器					
6	高 坏	A [14.8] B (4.5)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は外傾して立ち上がり、口縁 部との境に明瞭な稜をもつ。	体部から口縁部内・外面丁寧なへ ラ磨き、内・外面黒色処理。	砂粒・長石・赤色粒 子 にぶい黄褐色 普通	P 5090 30% P L 62 貯蔵穴上面
	土師器					

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色面・焼成	備 考
第29図 7	高 環	E (7.1)	脚部片。	脚部外面ヘラナデ後ヘラ磨き、内 面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 5091 20% P ₁ 付近覆土下層
	土 師 器					
8	高 環	D [13.4] E (5.0)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部内・外面ヘラナデ。裾部内・ 外面横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄褐色 普通	P 5092 20% 龍西製土下層
	土 師 器					
9	高 環	D [12.4] E (6.5)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部内・外面ヘラ磨き。裾部内・ 外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 にぶい棕色 普通	P 5093 10% 北東コーナー部覆 土下層
	土 師 器					
10	壺	A 19.8 B (17.1)	体部中位から口縁部にかけての破 片。体部は内彎して立ち上がる。 頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナ デ。口縁部内・外面横ナデ。輪襖 み痕。	砂粒・雲母・小石・ 赤色粒子 にぶい棕色 普通	P 5094 40% P L.63 北東コー ナー部覆土下層
	土 師 器					
11	壺	A [31.0] B (8.4)	体部上位から口縁部にかけての破 片。体部上位は内傾して立ち上 がる。頸部でくびれ、口縁部は外反 する。口唇部は上方につまみ上げ る。	体部上位外面ヘラ削り、内面ヘ ラナデ。口縁部内・外面横ナデ。 輪襖み痕。	砂粒・雲母・石英 にぶい棕色 普通	P 5095 5% 北東コーナー部 覆土下層
	土 師 器					
12	壺	A [21.4] B (8.0)	体部上位から口縁部にかけての破 片。体部上位は内傾して立ち上 がる。頸部でくびれ、口縁部は外反 する。	体部上位内・外面ヘラナデ。口 縁部内・外面横ナデ。輪襖み痕。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P 5096 5% P ₁ 付近覆土下層
	土 師 器					
13	壺	A [22.4] B (10.1)	体部上位から口縁部にかけての破 片。体部上位は内傾して立ち上 がる。頸部でくびれ、口縁部は外反 する。	体部上位外面ヘラ削り、内面ヘ ラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P 5097 10% 貯蔵穴上面。
	土 師 器					
14	小 形 壺	A [16.4] B (5.7)	体部上位から口縁部にかけての破 片。体部上位は内傾して立ち上 がり、口縁部は外反する。	体部上位外面ヘラ削り、内面ヘ ラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 5098 5% P ₁ 付近覆土下層
	土 師 器					

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第29図15	刀 子	(11.3)	1.8	0.5	(12.0)	中央部表面	M 5013

第414号住居跡 (第27・28図)

位置 調査5区中央部、J13d区。

重複関係 南西コーナー部を第402号住居跡に、東側が第413号住居跡に掘り込まれている。第402号住居跡は床面を掘り込んでいるが、第413号住居跡の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸 [6.2]m、短軸5.28mの長方形と推定される。

主軸方向 N-22°-W

壁 北西コーナー部から北東コーナー部にかけての北壁が検出され、壁高は4cmである。北壁以外の壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 南西部の床面は確認できなかったが、中央部から北壁にかけてが平坦であり、踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで101cm、両袖幅85cmである。火床部は、床面を約16cm掘りくぼめており、赤変硬化している。袖部の遺存状態は不良でわずかに粘土を残すのみである。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土小ブロック・粘土粒子中量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、粘土小ブロック・粘土粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、粘土中ブロック微量

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁は径42cmの円形で深さ73cm、P₂は径36cmの円形で深さ44cm、P₃は長径50

cm, 短径38cmの楕円形で深さ67cm, P₄は径17cmの円形で深さ53cm, P₅は径14cmの円形で深さ50cmである。P₄・P₅は一所所のピットに2本の柱が並立していたと思われる。いずれも各コーナーに寄った位置にあり, 規模と配置から主柱穴と考えられる。P₆は径38cmの円形で, 深さ49cmであり, 中央部から東に寄ってはいるが南壁際にあり, 位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部から検出された。長軸72cm, 短軸57cmの隅丸長方形で, 深さ47cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, ローム中ブロック少量, 焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量, 炭化粒子・粘土小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, 粘土中・小ブロック・ローム小ブロック・粘土粒子少量

遺物 土師器片21点, 磁器片1点, 礫1点が出土しているのみである。磁器片は混入したものである。

所見 本跡は竈と北壁部以外は, 床面がほぼ露出した状態で検出されたため, 覆土の堆積状況は確認できなかった。壁溝は検出されなかった。規模と平面形は, 南部については主柱穴の位置関係と床質から推定した。時期は, 出土遺物が細片で, 判断できなかったため不明であるが, 6世紀後葉の第402号住居跡と10世紀の第413号住居跡に掘り込まれていることと, 竈を有する遺構形態とから判断して, 古墳時代後期でも第402号住居跡より古い時期の住居跡と考えられる。

第423号住居跡 (第30・31図)

位置 調査5区中央部, J13c3区。

重複関係 西部が, 第435号住居跡に掘り込まれているが, 床面までは達していない。

規模と平面形 長軸 [5.1]m, 短軸 [4.4]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-2°-E

壁 東壁から南壁にかけて検出された。南壁の壁高は26cmであり, 外傾して立ち上がる。北壁と西壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 ほぼ平坦で, 竈前が踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は, 焚口部から煙道部まで82cm, 両袖部幅108cmである。

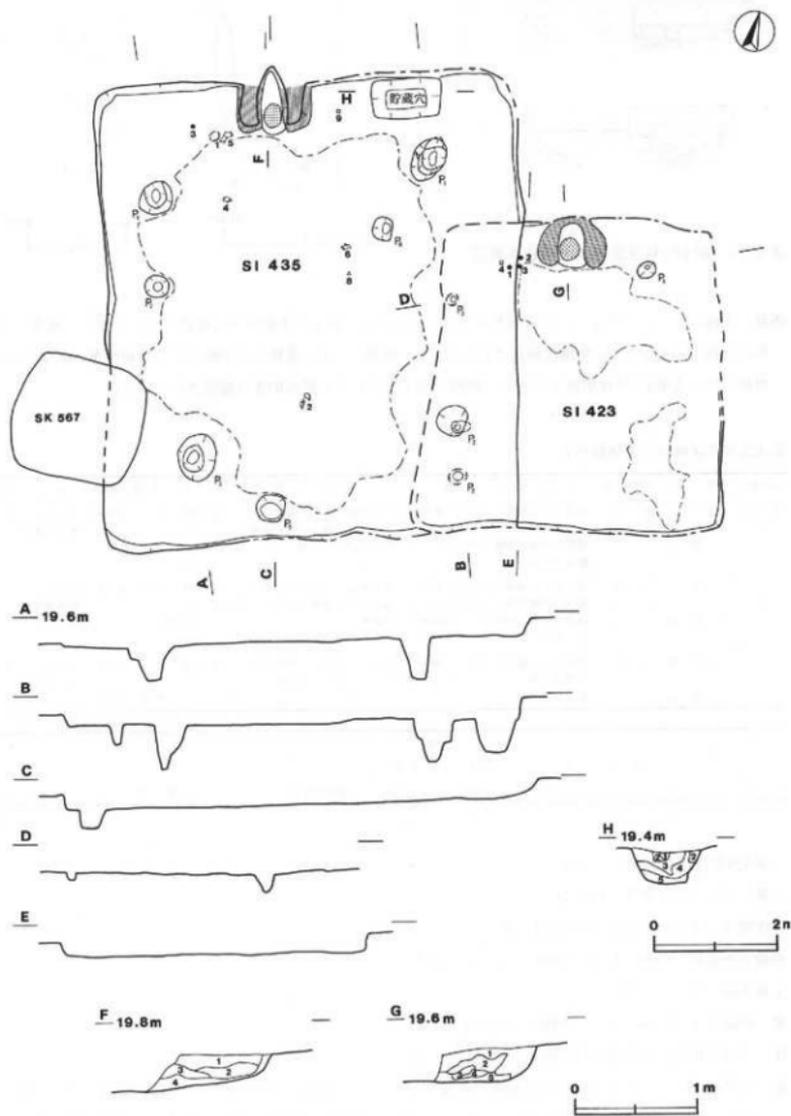
火床部は, 床面を約3cm掘りくぼめており, 赤変硬化している。天井部は崩落しており, 第1~3層が天井部の崩落土と考えられる。両袖部は上部にトレンチャーによる攪乱を受けており, 遺存状況は悪い。煙道部は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

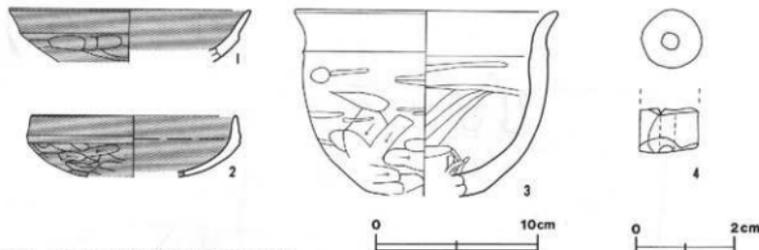
- 1 灰褐色 砂質粘土中量, ローム中・小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 粘土小ブロック・炭化粒子・砂質粘土少量, ローム粒子少量
- 3 暗褐色 粘土小ブロック・炭化粒子・砂質粘土少量, ローム粒子・焼土粒子少量
- 4 暗褐色 粘土粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック・粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子・炭化粒子少量

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁は径約25cmの円形で深さ33cm, P₂は径約25cmの円形で深さ34cm, P₃は径約18cmの円形で深さ12cmである。いずれもコーナーに寄った位置にあり, 規模と配置から主柱穴と考えられる。

遺物 土師器片329点, 須恵器片8点, 陶器片4点, 不明土製品1点, 鉄滓1点, 石製品1点(白玉), 礫1点が出土している。第31図1と2の土師器片は, 竈西側の床面から正位で出土している。3の土師器小形壺は, 竈西側の覆土下層から逆位で出土している。4の白玉は, 竈西側の床面から出土しており, 材質は滑石製である。陶器片は混入したものと考えられる。鉄滓は覆土中から出土している。



第30図 第423・435号住居跡実測図



第31図 第423号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、トレンチャーによる攪乱を受けているため、覆土の堆積状況は確認できなかった。規模と平面形は床質から推定した。壁層は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して6世紀後葉と考えられる。重複している第435号住居跡より古い。鉄滓が出土しているが鍛冶炉等は確認されていない。

第423号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	杯 土師器	A 14.8 B (3.2)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内燻気味に立ち上がり、口 縁部との境に明瞭な稜をもつ。口 縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内 面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。 内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい褐色 普通	P 5101 40% 甌西側床面
2	杯 土師器	A [12.6] B (3.8)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内燻気味に立ち上がり、口 縁部との境に稜をもつ。口縁部は 直立する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口 縁部内・外面横ナデ。内・外面黒 色処理。	砂粒・雲母・赤色粒 子 灰黄色 普通	P 5102 10% 甌西側床面
3	小形壺 土師器	A [16.2] B (11.4)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内燻して立ち上がり、口縁 部は外反する。	体部内・外面ヘラ削り後ヘラ磨 き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい褐色 普通	P 5103 40% 甌西側覆土下層

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	厚 寸 (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)		
第31図4	白 玉	1.2	(0.9)	0.35	(1.58)	甌西側床面	Q 5003 滑 石 P L 102

第424号住居跡 (第15・32図)

位置 調査5区中央部, J13c区。

重複関係 東部で、第354号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.37m, 短軸6.15mのはば方形である。

主軸方向 N-15°-W

壁 壁高は8~15cmであり、外傾して立ち上がる。

床 はば平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央からやや西寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで132cm, 両袖部幅130cmである。天井部は崩落しており、第5・7層が天井部の崩落土と考えられる。両袖部は南北方向の間隔のトレンチャーによる攪乱を受けているため、遺存状態は悪い。火床部は赤変硬化している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 暗褐色 炭土粒子少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 炭土小ブロック・粒子少量, ローム粒子微量
- 3 暗褐色 炭土小ブロック・粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 炭土粒子多量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 炭土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子・炭土小ブロック・砂粒少量
- 6 暗褐色 炭土粒子・炭化粒子・砂粒少量, 炭土小ブロック・粘土小ブロック微量
- 7 にぶい黄褐色 炭化粒子・砂粒少量, 炭土小ブロック・粒子微量

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は径45~65cmの円形で、深さ50~70cmであり、各コーナーに寄った位置で検出されている。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。P₅は径22cmの円形、深さ23cmで、南壁中央に位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 竈と東壁の間から検出された。長軸83cm、短軸53cmの長方形で、深さ43cmである。

貯蔵穴土層解説

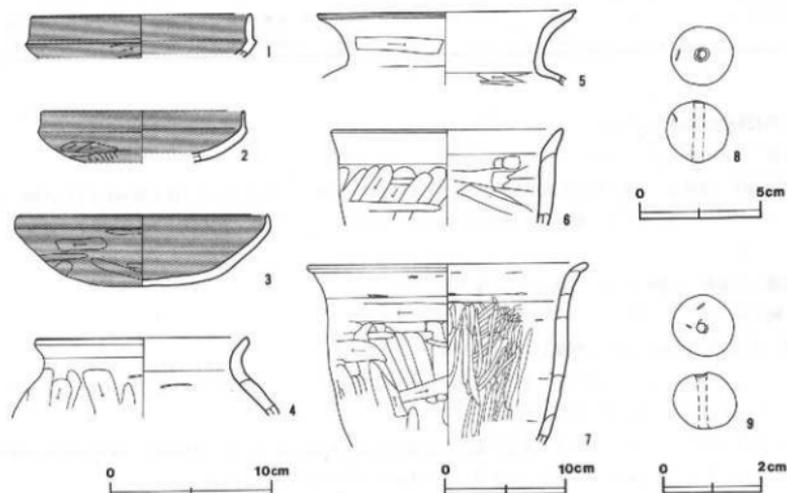
- 1 暗褐色 ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム大ブロック・炭土粒子微量
- 3 黒褐色 炭土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック微量

覆土 5層からなる。トレンチャーによる攪乱を受けているが、攪乱部以外はブロック状の堆積をしており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・炭土粒子・炭化粒子少量
- 3 にぶい褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック・炭土小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・粘土大ブロック微量
- 5 黒褐色 炭土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片426点, 須恵器片4点, 陶器2点, 土製品2点(土玉)が出土している。第32図1~3の土師器片, 4の土師器小形甕, 5の土師器甕, 6・7の土師器甕は覆土中から出土している。8・9の土玉は、南東コーナー部の覆土下層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。



第32図 第424号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡では、壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられるが、ほぼ同時期の第354号住居跡を掘り込んでいることから、7世紀前葉でもより新しいと考えられる。

第424号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第32図 1	坏	A [136] B (2.6)	体部上縁から口縁部にかけての破片。体部と口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部上縁外面へう割り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5104 覆土中
	土 師 器					
2	坏	A [126] B (3.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう割り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P 5106 覆土中
	土 師 器					
3	坏	A [154] B 4.4	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へう割り後へう磨き、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 褐色 普通	P 5106 覆土中
	土 師 器					
4	小形 甕	A [130] B (4.8)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内傾して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口縁部は上方につまみ上げる。	体部上位外面へう割り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 褐色 普通	P 5107 覆土中
	土 師 器					
5	甕	A 21.2 B (6.1)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 赤褐色 普通	P 5108 覆土中
	土 師 器					
6	瓶	A [188] B (7.9)	体部上位から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾する。	体部上位外面へう割り、内面へうナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 浅黄褐色 普通	P 5109 覆土中
	土 師 器					
7	瓶	A [228] B (15.1)	体部から口縁部にかけての破片。口縁部は外反する。	体部外面へう割り、内面丁寧なへう磨き。口縁部内・外面横ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5110 覆土中
	土 師 器					

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第32図8	土 玉	2.5	2.5	0.4	14.0	南東コーナー部覆土下層	D P 5008 P L 101
9	土 玉	1.3	1.2	0.2	1.56	南東コーナー部覆土下層	D P 5009 P L 101

第426号住居跡 (第33図)

位置 調査5区北部、J13a区。

重複関係 南壁部で第439号住居跡を掘り込み、北部が第17B号溝に、北西コーナー部が第564号土坑に掘り込まれている。第17B号溝の掘り込みは本跡の床面までは達していないが、第564号土坑は床面まで掘り込んでいる。

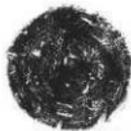
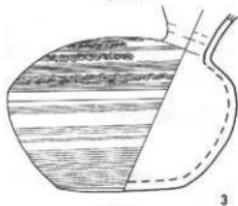
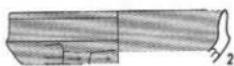
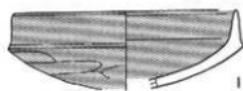
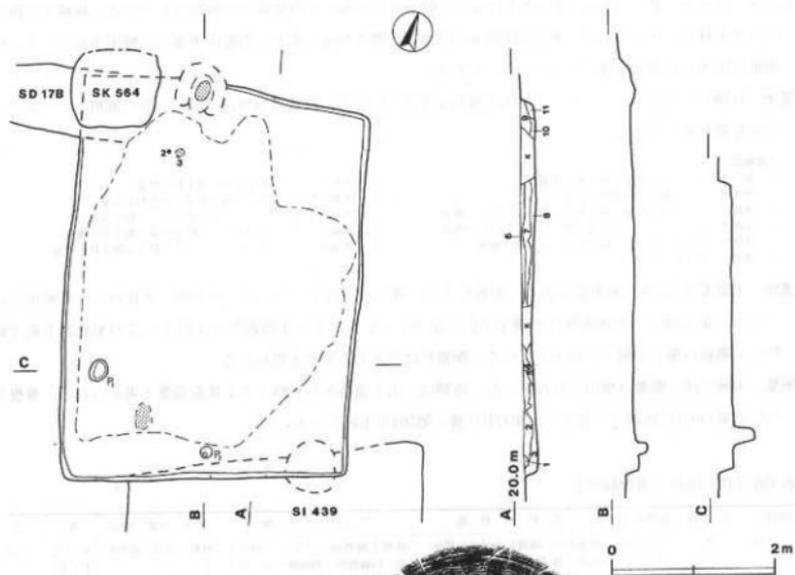
規模と平面形 長軸6.75m、短軸4.74mの長方形である。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁高は19~25cmであり、外傾して立ち上がる。

床 トレンチャーにより、ほとんど全面が床面まで攪乱を受けているが、攪乱以外の部分から推定して、ほぼ平坦であり、中央部が踏み固められている。

竈 攪乱を受けているが、火床部と袖部の痕跡が北壁中央部で検出されている。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。煙道部は、火床面から緩やかに立ち上がる。



第33图 第426号住居跡・出土遺物実測図

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は径31cmの円形、深さ36cmで、西壁寄りに検出されている。規模と位置からみて支柱穴と考えられる。P₂は径20cmの円形で、深さ18cmであり、南壁中央寄りに検出されている。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層からなる。トレンチャーによる攪乱を受けているが、攪乱部以外はブロック状の堆積をしており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|-----------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・粘土小ブロック微量 | 9 黒褐色 | ローム小ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子少量 | | |

遺物 土師器片529点、須恵器片28点、陶器片1点、礫5点が出土している。その他、炭化材が少量検出されている。第33図1の土師器坏は、覆土中から出土している。2の土師器坏は正位で、3の須恵器平瓶は斜位で、甕前の覆土下層から出土している。陶器片は混入したものと思われる。

所見 本跡では、壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第439号住居跡より新しく、第17B号溝、第564号土坑より古い。

第426号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	土師器 坏	A [13.6]	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は直立する。	体部上端外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 5111 50% P L 62 覆土中
		B (4.7)				
2	土師器 坏	A [13.2]	体部上端から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 5112 5% 甕前覆土下層
		B (3.2)				
3	平瓶 須恵器	B (11.4)	口縁部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、天井部はドーム状をしている。口縁部は頸部から外反する。	ロクロ成形。天井部に3単位位の比線区画による脚張波状文が施されている。	砂粒・長石 灰色 普通	P 5113 95% P L 62 甕前覆土下層
		C 7.8				

第427号住居跡 (第34図)

位置 調査5区南部、J13g区。

重複関係 北西コーナー部が第555号土坑に、南西コーナー部が第556号土坑に、甕の手前が第14号井戸に、南部が第565号土坑に掘り込まれている。各土坑及び第14号井戸ともに、本跡の床面まで掘り込んでいる。

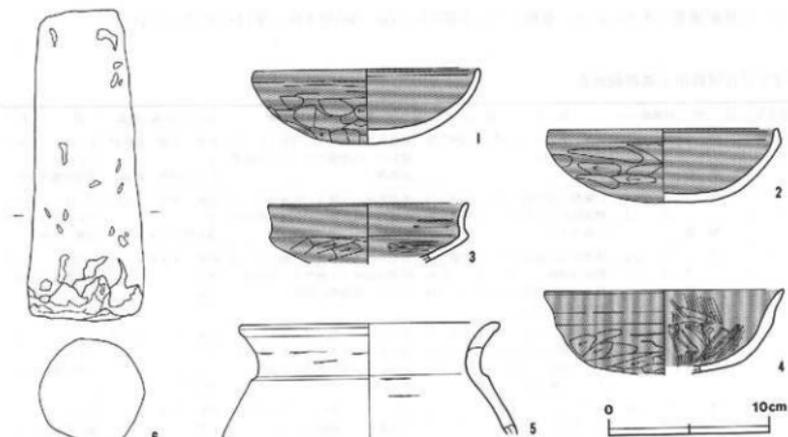
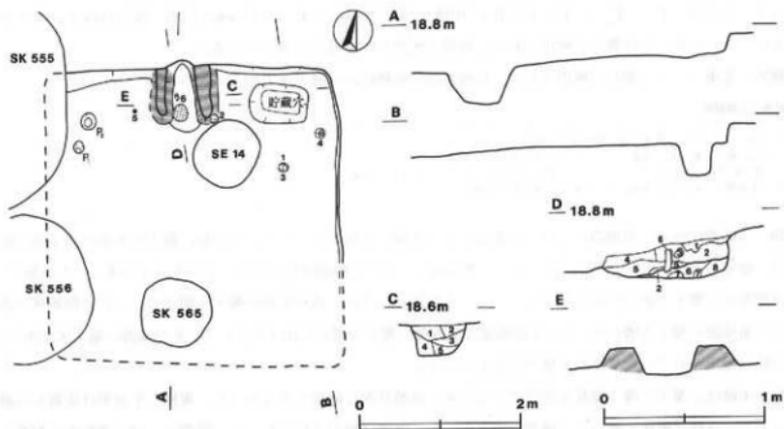
規模と平面形 一辺 [4.9]mの方形と推定される。

主軸方向 N-11°-W

壁 西壁と南壁は確認されなかったが、北壁から東壁にかけて検出されている。壁高は39cmで、外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦で、踏み固められている。

甕 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで117cm、両袖部幅113cmである。第6～8層は、焼土ブロックと粘土ブロックからなり、構築時に埋め戻して火床部としたと考えられる。第6層は粘土ブロックが火熱を受けて赤変しており、上面が火床面と考えられる。天井部は崩落しており、第2・5層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火熱を受けて赤変



第34図 第427号住居跡・出土遺物実測図

硬化している。火床面の西袖部寄りに、赤く焼けた土製支脚が出土していることから、二掛け口の可能性がある。煙道部は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐色 色 コーヒー粒子中量、粘土小ブロック少量
- 2 明褐色 色 粘土大ブロック多量、粘土が火熱を受けて、赤変している
- 3 暗褐色 色 粘土小ブロック多量
- 4 暗褐色 色 粘土小ブロック多量、焼土小ブロック中量
- 5 にぶい褐色 色 粘土小ブロックが火熱を受けて、赤変している
- 6 にぶい赤褐色 色 焼土粒子多量、粘土小ブロックが火熱を受けて、赤変している
- 7 にぶい褐色 色 焼土小ブロック・粘土小ブロック中量、粘性あり
- 8 灰白色 色 粘土小ブロック

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は径20cmの円形、深さ26cmで、P₂は径25cmの円形、深さ10cmで、いずれもコーナーに寄った位置から検出された。規模と配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部から検出された。長軸96cm、短軸62cmの隅丸長方形で、深さ58cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 明黄褐色 粘土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 5 浅黄褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片80点、須恵器片2点、土製品1点(支脚)が出土している。その他に竈内の灰層から小鳥の指骨・獣骨・ヤマトシジミが出土している。第34図1・3の土師器坏は正位で、1の上に3が重なった状態で、東壁寄りの覆土下層から出土している。2の土師器坏は正位で竈東袖前の覆土下層から、4の土師器坏は逆位で東壁際の覆土下層から、5の土師器甕は竈西側の覆土中層から出土している。6の支脚は竈火床部から、立位の使用されていたままの状態出土している。

所見 本跡は、覆土が薄く攪乱を受けているため、堆積状況は確認できなかった。規模と平面形は床質から推定した。西壁は重複が激しく、確認できなかった。壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して、6世紀後半と考えられる。重複している第555・556・565号土坑、第14号井戸より古い。

第427号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	土師器 坏	A 14.0	丸底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へら削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 子 にぶい褐色 普通	P 5114 100% P L 63 東壁際覆土下層
		B 4.1				
2	土師器 坏	A 14.4	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面へら削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 子 浅黄褐色 普通	P 5115 95% P L 63 竈東袖前覆土下層
		B 4.4				
3	土師器 坏	A [12.4] B (3.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へら削り、内面ナデ。口縁部内面横ナデ後磨き。外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 子 褐色 普通	P 5116 10% 東壁際覆土下層
		A 14.8 B (5.2)				
4	土師器 坏	A 14.8 B (5.2)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へら削り後へらナデ、内面丁寧なへら磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・赤色粒子 子 にぶい褐色 普通	P 5117 60% P L 63 東壁際覆土下層
		A [16.0] B (7.0)				
5	土師器 甕	A [16.0] B (7.0)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内傾して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部上位内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・長石・石英 褐色 普通	P 5118 5% 竈西側覆土中層

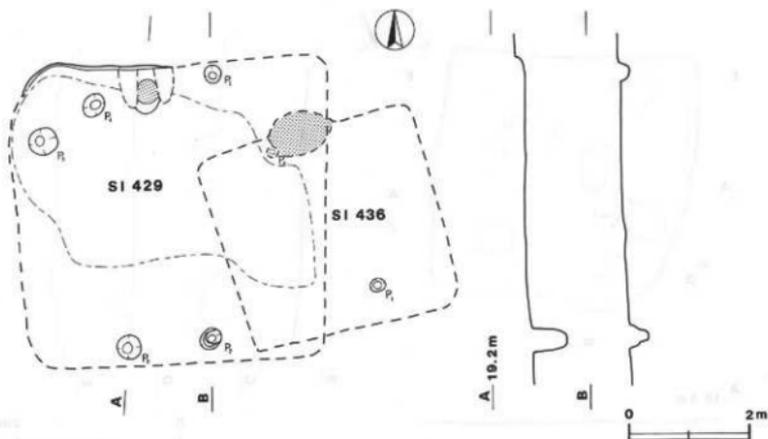
図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ(cm)	径(cm)	重量(g)		
第34図6	支脚	19.3	6.5	852.0	竈火床部	DP 5010 土製

第429号住居跡(第35図)

位置 調査5区中央部、J136区。

重複関係 東部で第436号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 [5.2]m、短軸 [5.1]mのほぼ方形と推定される。



第35図 第429・436号住居跡実測図

主軸方向 N-2°-W

壁 北西コーナー部のみが検出され、壁高は10cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 攪乱を受けており、北壁中央部から火床部の痕跡のみが検出された。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₃・P₄は径約40cmの円形で、深さ56・53cmであり、北西コーナーと南西コーナー寄りで検出されている。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P₂は径20cmの円形で、深さ32cmであり、中央から東に寄ってはいるが南壁際であり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

P₁・P₅は性格不明である。

遺物 土師器片69点、須恵器片4点が出土しているのみである。細片であるため図示はできなかったが、覆土下層及び覆土中から出土している。

所見 本跡は、トレンチャーによる攪乱が激しく、床面がほぼ露出した状態で確認されたために、覆土の堆積状況は確認できなかった。壁はわずかに北西コーナー部が確認できただけであり、壁溝は検出されなかった。規模と平面形は、床質から推定した。時期は、出土遺物から判断して古墳時代後期と考えられる。重複している第436号住居跡より新しい。

第432号住居跡 (第36図)

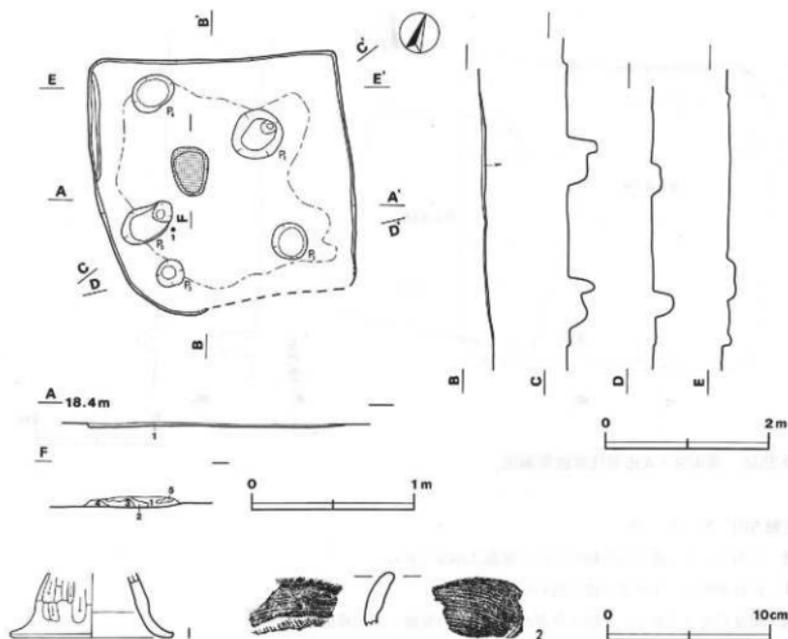
位置 調査5区南部, J13h区。

規模と平面形 一辺3.18mの方形である。

主軸方向 N-63°-E

壁 ローム層への掘り込みが浅く、南壁から南東コーナー部にかけては、床面まで攪乱を受けており、壁が検出できなかった。残存部分での壁高は4~10cmである。

壁溝 上幅14cm, 下幅7cm, 深さ4cmで、西壁際に一部検出されている。



第36図 第432号住居跡・出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、中央部に特に踏み固められている。

炉 中央部やや西寄りに付設されている。長径60cm、短径45cmの楕円形で、床面を約4cm掘りくぼめている地床炉である。

炉土層解説

- 1 暗褐色 炭土粒子中量、砂粒少量
- 2 黒褐色 炭土粒子・炭化粒子中量
- 3 暗赤褐色 炭土粒子多量、焼土小フロック・炭化粒子中量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 5 黒褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量

ピット 5か所 ($P_1 \sim P_5$)。 $P_1 \sim P_4$ は径40~60cmの円形、深さ11~37cmで、各コーナー寄りで見出されている。規模と配置からいずれも支柱穴と考えられる。 P_5 は径28cmの円形、深さ33cmで、中央やや南寄りではあるが西壁側にあり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 単一層である。

土層解説

- 1 暗褐色 コーム粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土器器片11点が出土しているのみである。第36図1の土器器高環は正位で、 P_5 東側の床面から出土している。2は土器器臺の複合口縁部である。口縁部内・外面にハケ目調整が施されている。

所見 本跡は、一部壁が確認できなかった部分があるが、床質から規模と平面形を推定した。時期は、炉をもつ遺構形態と出土遺物から判断して古墳時代前期と考えられる。

第432号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第36図 1	高 杯 土 師 器	D [9.6] E (4.0)	脚部片。	脚部外面縦位のヘラ削り、内面ナ デ。脚部外面横ナデ、内面ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 明赤褐色 普通	P 5018 5% P ₁ 東側床面

第433号住居跡 (第37図)

位置 調査5区南部, J13id区。

重複関係 竈部が第559号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.57m, 短軸3.45mのほぼ方形である。

主軸方向 N-10°-W

壁 壁高は25~42cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁際を除いて、巡っている。規模は、上幅17~30cm, 下幅5~9cm, 深さ7~11cmで、断面形はU字
形である。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に構築されているが、袖部の一部を残し、第559号土坑に掘り込まれている。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は径35~65cmの円形、深さ30~49cmで、各コーナー寄りに位置して
いる。規模と配置からいづれも主柱穴と考えられる。P₅は径23cmの円形、深さ58cmで、南壁中央寄りに位
置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。その他は性格不明である。

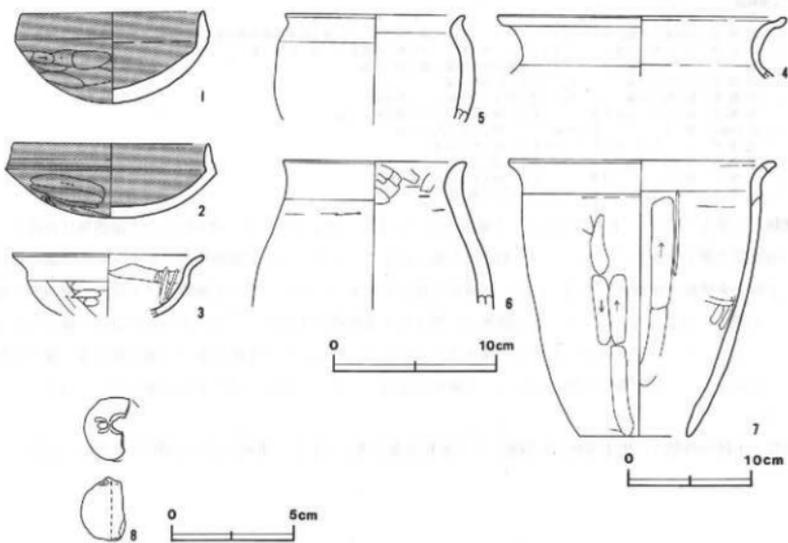
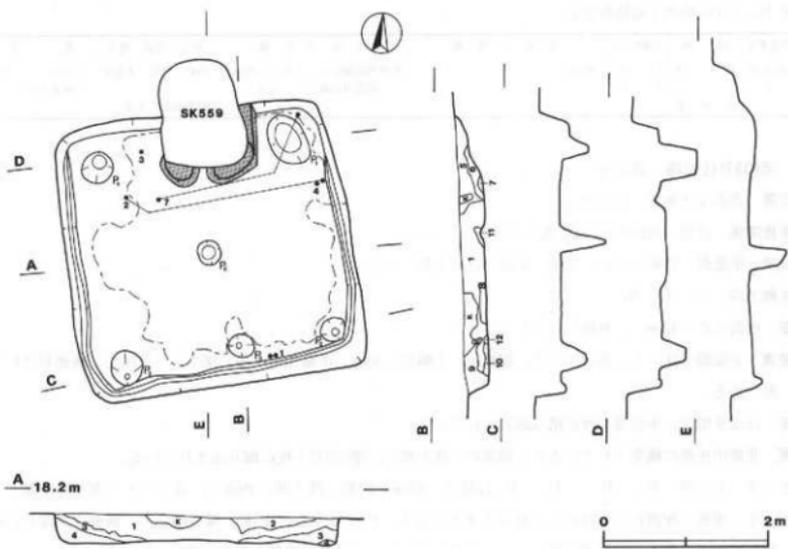
覆土 12層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・炭化粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子中量, 焼土粒子少量
- 5 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子・炭化物・砂粒少量
- 6 暗褐色 粘土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 7 黒褐色 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 8 暗赤褐色 焼土中ブロック・粒子中量, ローム粒子・炭化粒子少量
- 9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 10 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子・砂粒少量
- 11 黒褐色 粘土中ブロック多量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 12 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子中量, 炭化粒子少量

遺物 土師器片357点, 須恵器片2点, 土製品1点 (土玉) が出土している。第37図1の土師器杯は正位で、
南壁際の覆土下層から土圧で二つに割れた状態で出土している。2の土師器杯は、北西コーナー部の覆土
下層と東壁際の床面から一括で出土した破片が接合したものである。3の土師器杯は正位で、竈西側の覆
土中層から出土している。4の土師器甕は、覆土中と東壁際の床面から一括で出土した破片が接合したも
のである。5・6の土師器小形甕は、覆土中から出土している。7の土師器甕は、竈西袖部前の覆土下層
と北東コーナー部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。8の土玉は覆土中から出土してい
る。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第559号土坑より古い。



第37图 第433号住居跡・出土遺物実測図

第 433 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 37 図 1	土 師 器	A 11.2	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラナリ後ヘラナダ、内面横ナダ。口縁部内・外面横ナダ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にふい褐色 普通	P 5124 100% P L 63 南壁部覆土下層
		B 5.6				
2	土 師 器	A 12.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	体部外面へラナリ後ヘラナダ、内面横ナダ。口縁部内・外面横ナダ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 にふい黄褐色 普通	P 5125 70% P L 63 東壁部床面と北西コーナー部覆土下層
		B 4.6				
3	土 師 器	A [11.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は大きく外反する。	体部外面へラナダ、内面へラナダ。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 褐色 普通	P 5126 20% 東西側覆土中層
		B (3.8)				
4	土 師 器	A [23.6]	口縁部片。口縁部は外反する。口縁部は上方につきまみ上げる。	口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・長石・石英 にふい褐色 普通	P 5127 5% 東壁部床面と覆土中
		B (5.0)				
5	土 師 器	A [11.0]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面ナダ。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒 にふい赤褐色 普通	P 5128 10% 覆土中
		B (6.5)				
6	土 師 器	A [11.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内・外面ナダ。口縁部外面横ナダ、内面ヘラナダ。	砂粒・赤色粒子 褐色 普通	P 5129 10% 覆土中
		B (9.0)				
7	土 師 器	A [21.4]	体部から口縁部にかけて一部欠損。無底式。体部は外傾して立ち上がり、上位でやや内彎する。口縁部は外反する。	体部外面へラナリ、内面ヘラナダ後ヘラナダ。口縁部内・外面横ナダ。輪痕みあり。	砂粒・赤色粒子 にふい褐色 普通	P 5130 50% P L 63 東西側部床面下層と北東コーナー部覆土下層
		B 22.6				
		C 9.0				

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)		
第 37 図 8	上 玉	(2.1)	2.6	0.6	(9.3S)	覆土中	D P 5011 土銀 P L 101

第435号住居跡 (第30・38区)

位置 調査5区中央部, J13c区。

重複関係 東部で第423号住居跡を掘り込み、西部が第567号土坑に床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 長軸7.68m, 短軸6.83mの長方形である。

主軸方向 N-12°-W

壁 西壁の一部と南東コーナー部から東壁の一部は確認できない。壁高は4~28cmであり、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央やや西寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口から煙道部まで113cm, 両袖部幅120cmである。天井部は確認できなかった。両袖部の上面に南北方向のトレンチャーによる擾乱を受けているため、遺存状況は悪い。火床部は赤変硬化している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量, ローム小ブロック少量, 灰土小ブロック・炭化物微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量, ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック・炭化物微量
- 4 暗褐色 焼土中・小ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子少量, ローム小ブロック・炭化物微量

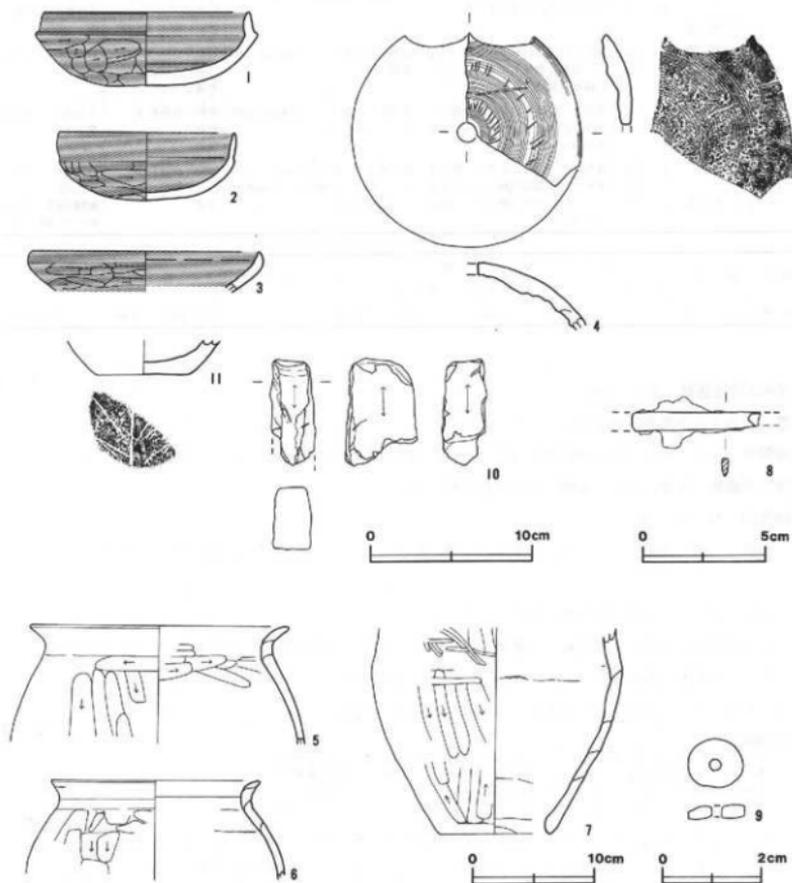
ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁は長径75cm, 短径54cmの楕円形で、深さ71cm, P₂は径約55cmの円形で、深さ73cm, P₃は長径80cm, 短径54cmの楕円形で、深さ61cm, P₄は径55cmの円形で、深さ70cmである。いずれも各コーナー寄りに検出されており、規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は径46cmの円形、深さ

30cmで、南壁中央やや西寄りに位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₆は径約40cmの円形、深さ57cm、P₇は径40cmの円形、深さ51cmであり、位置的に、P₆はP₁の、P₇はP₄のそれぞれ補助柱穴の可能性がある。

貯蔵穴 北東コーナー部から検出された。長軸112cm、短軸66cmの隅丸長方形で、深さ59cmである。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム大・中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム中ブロック・粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量



第38図 第435号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片553点, 須恵器片7点, 陶器片5点, 鉄製品1点(刀子), 石製品1点(白玉), 砥石1点, 礫3点が出土している。第38図1・3の土師器杯, 5の土師器甕は逆位で竈西側の床面から出土している。2の土師器杯は正位で, 6の土師器甕は逆位で中央部の床面から出土している。4の須恵器特殊扁蓋は, 竈西袖部前の覆土下層から, 7の土師器甕は遺構確認面から出土している。8の刀子は中央部の床面から出土している。9の白玉は竈東側の覆土下層から, 10の砥石は覆土中から出土している。11は土師器甕底部片であり, 木葉痕が認められる。

所見 本跡は, トレンチャーによる攪乱が激しいため, 覆土の堆積状況は確認できなかった。壁溝は検出されなかった。時期は, 出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第423号住居跡より新しく, 第567号土坑より古い。特殊扁蓋については, 全国での出土例が極めて少なく, 県内では初めての出土である。

第435号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図1	土師器杯	A 12.6	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラ磨き, 内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙褐色 普通	P 5131 95% P L 63 竈西側床面
		B 4.5				
2	土師器杯	A 10.9	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後, 内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5132 95% P L 63 中央部床面
		B 4.2				
3	土師器杯	A [14.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は外彎して立ち上がり, 口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り後へラ磨き, 内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙褐色 普通	P 5133 20% 竈西側床面
		B (2.5)				
4	特殊扁蓋 須恵器	B (9.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部中央に1孔が認められる。体部の上部をへらのようなもので切り取り, 口縁としている。	ロクロ成形。体部外面カキ目調整。	砂粒・長石 灰色 普通	P 5134 10% P L 63 竈西袖部前覆土下層
		A [21.0] B (9.6)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部外面へラ削り, 内面へラナデ。口縁部外面へラナデ, 内面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 5135 20% 竈西側床面
5	土師器甕	A [17.0] B (8.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部外面へラ削り, 内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・赤色粒子 橙褐色 普通	P 5136 10% 中央部床面
		A [17.0] B (8.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部外面へラ削り, 内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・長石 にぶい橙褐色 普通	P 5137 10% 遺構確認面
6	土師器甕	A [17.0] B (8.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部外面へラ削り, 内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P 5135 20% 竈西側床面
		A [17.0] B (8.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部外面へラ削り, 内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・赤色粒子 橙褐色 普通	P 5136 10% 中央部床面
7	土師器甕	B (16.9) C (9.0)	体部片。無底式。体部下位から中位までは外彎して立ち上がり, 中位から上位にかけて内彎する。	体部外面下位へラ削り, 中位へラ削り後へラ磨き。内面へラナデ。輪轆み痕。	砂粒・長石 にぶい橙褐色 普通	P 5137 10% 遺構確認面

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第38図8	刀子	(5.2)	0.8	0.3	(8.36)	中央部床面	M 5014

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第38図9	白玉	1.2	0.3	0.25	0.44	竈東側覆土下層	Q 5004 黒石 P L 102

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第38図10	砥石	(6.6)	4.4	2.8	(92.0)	覆土中	Q 5005 凝灰岩

第436号住居跡 (第35図)

位置 調査5区中央部, J136区。

重複関係 西部が第429号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸 [3.6]m, 短軸 [3.4]mのほぼ方形と推定される。

主軸方向 N-15°-W

床 ほぼ平坦である。

竈 袖部の痕跡のみが検出された。

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は径23cmの円形、深さ24cmで、中央部やや東寄りで見出されている。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₂は径18cmの円形で、深さ18cmである。性格は不明である。

遺物 土師器の細片6点が出土しているのみである。

所見 本跡は、覆土が薄く、トレンチャーによる攪乱が激しいため、覆土の堆積状況は確認できなかった。規模と平面形は床面から推定した。壁溝は検出されなかった。時期は、判断する遺物が出土していないため不明であるが、竈を有しており、古墳時代後期以降と考えられる。しかし、重複している古墳時代後期の第429号住居跡に掘り込まれていることから、それよりは古い。

第437号住居跡 (第39・40図)

位置 調査5区南東部, J136区。

規模と平面形 長軸3.83m, 短軸3.50mのほぼ方形である。

主軸方向 N-40°-W

壁 壁高は10~17cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 竈西壁下から南西コーナーを経て、南東コーナー部にかけて検出されている。規模は、上幅7~15cm、下幅約5cm、深さ8cmであり、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、周辺部を除き、ほぼ全面が踏み固められている。

竈 覆土が薄く、竈の遺存状態は悪いが、北壁中央部に砂質粘土で構築されているのが確認された。規模は、焚口部から煙道部まで84cm、両袖部幅108cmである。天井部は確認できなかった。火床部は赤変硬化している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

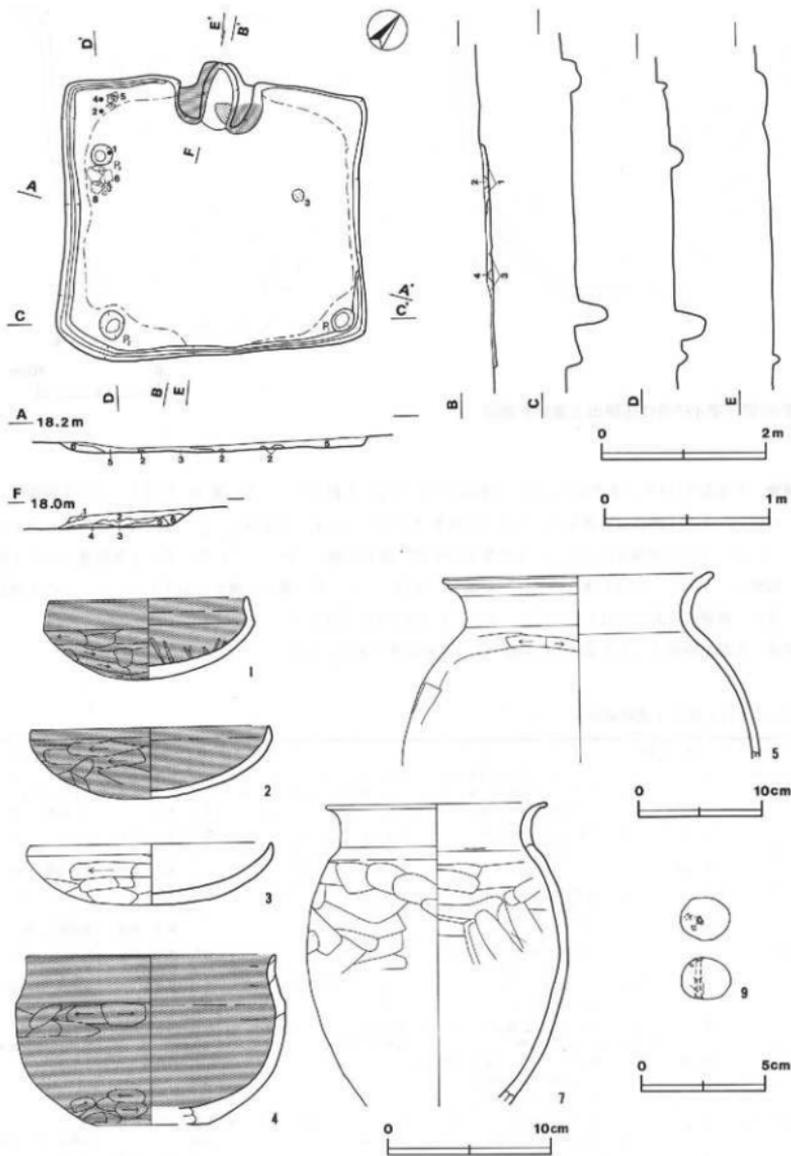
- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 砂質粘土中量、焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒少量
- 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は径25~35cmの円形で、深さ14~40cmであり、いずれもコーナー寄りの位置で見出されている。規模と配置から支柱穴と考えられる。

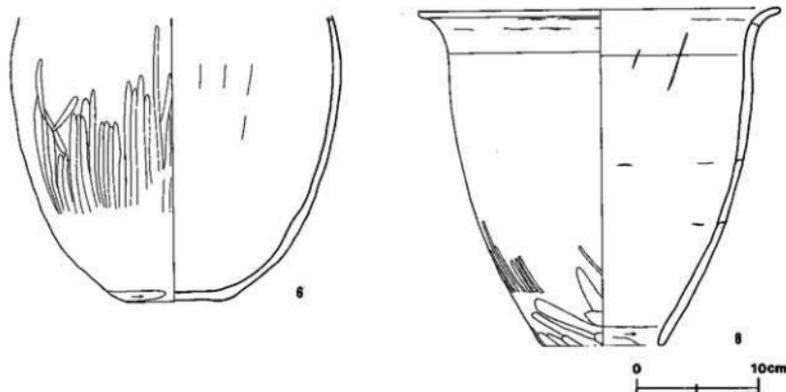
覆土 6層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子・砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 にぶい褐色 焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量
- 6 黒褐色 ローム粒子多量、褐色土中量、焼土粒子少量



第39图 第437号住居跡・出土遺物実測図(1)



第40図 第437号住居跡出土遺物実測図(2)

遺物 土師器片161点, 須恵器片2点, 土製品1点(土玉)が出土している。第39・40図1・2の土師器杯は正位で, 4の土師器鉢は破片で, 5の土師器甕は正位で, いずれも北西コーナー部の覆土下層から出土している。3の土師器杯は正位で, 中央部やや東側の覆土下層から出土している。6の土師器甕と8の土師器瓶は, 土圧でつぶされ重なり合った状態で, 北西コーナー部の覆土下層から出土している。7の土師器甕は, 遺構確認面から出土している。9の土玉は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から判断して7世紀前半と考えられる。

第437号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	杯 土師器	A 12.2	定形。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	体部外面へラ削り, 内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 褐色 普通	P 5138 100% P L 64 北西コーナー部覆土下層
		B 5.0				
2	杯 土師器	A 14.6	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り後へラナデ, 内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5139 100% P L 64 北西コーナー部覆土下層
		B 4.3				
3	杯 土師器	A 14.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり, 口縁部は短く直立する。	体部外面へラナデ, 内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5140 85% P L 64 東側覆土下層
		B 3.7				
4	鉢 土師器	A [15.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へラ削り, 内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪痕み痕。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5141 40% P L 64 北西コーナー部覆土下層
		B 10.4				
		C [6.8]				
5	甕 土師器	A [22.0]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ, 口縁部は外反する。口縁直下に沈線が通る。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面へラナデ, 内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5142 15% 北西コーナー部覆土下層
		B (15.3)				
第40図 6	甕 土師器	B (23.2)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり, 中位に最大径をもつ。	底部へラナデ。体部外面へラ磨き, 内面へラナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	P 5143 30% 北西コーナー部覆土下層
		C 8.8				

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第39回 7	甕 土師器	A [134]	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5144 30% P L 63 遺構確認面
		B (18.6)	体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。		
第40回 8	瓶 土師器	A [30.0]	体部から口縁部にかけての破片。	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	P 5145 30% P L 63 北西コーナ一部覆土下層
		B 27.4	無底式。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。		
		C [9.8]				

図版番号	種別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第39回9	土 玉	2.0	1.6	0.3	496	覆土中	P L 101

第438号住居跡 (第41・42回)

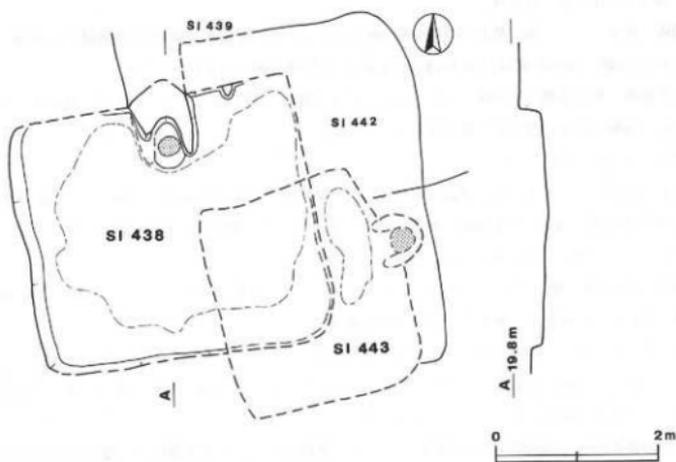
位置 調査5区中央部, J13a区。

重複関係 甕を含む北東コーナー部で第439号住居跡を、東部で第442号住居跡を掘り込み、第443号住居跡に南東コーナー部を掘り込まれている。第443号住居跡の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸3.70m, 短軸 [3.3]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-12°-W

壁 北東コーナー部と甕西側の北壁の一部は確認できなかった。南壁の壁高は15cmである。



第41回 第438・443号住居跡実測図



第42回 第438号住居跡出土遺物実測図

床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 トレンチャーによる攪乱を受けているために遺存状態は悪いが、竈のものと思われる砂質粘土が北壁中央部で検出されている。火床部は、赤変硬化している。

遺物 土師器片137点、須恵器片6点、磁器片3点、陶器片1点、礫1点が出土している。第42図1・2の土師器片は、覆土中から出土している。磁器片、陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡は覆土が薄く、全面にトレンチャーによる攪乱を受けているため、覆土の堆積状況は確認できなかった。壁溝、ピットは検出されなかった。壁の立ち上がりが確認できなかった部分の規模と平面形は、床質から推定した。時期は、出土遺物から判断して7世紀後半と考えられる。重複している第439・442号住居跡より新しく、第443号住居跡より古い。

第438号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	土師器	A [118]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 黄褐色 普通	P 5146 5% 覆土中
		B (3.1)				
2	土師器	A [114]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部外面丁寧なヘラ磨き、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 5152 5% 覆土中
		B (3.1)				

第439号住居跡 (第43・44図)

位置 調査5区中央部、I13j区。

重複関係 南東コーナー部で第441号住居跡を掘り込んでいる。北壁部が第426号住居跡に、南西コーナー部が第438号住居跡、南部が第442号住居跡及び第443号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 他の遺構との重複やトレンチャーによる攪乱が激しかったが、わずかに残存する壁から、長軸5.65m、短軸5.07mの長方形と推定される。

主軸方向 N-21°-W

壁 北壁と南西コーナー部の壁は確認できなかった。東壁及び西壁の壁高は15~18cmで、外傾して立ち上がる。

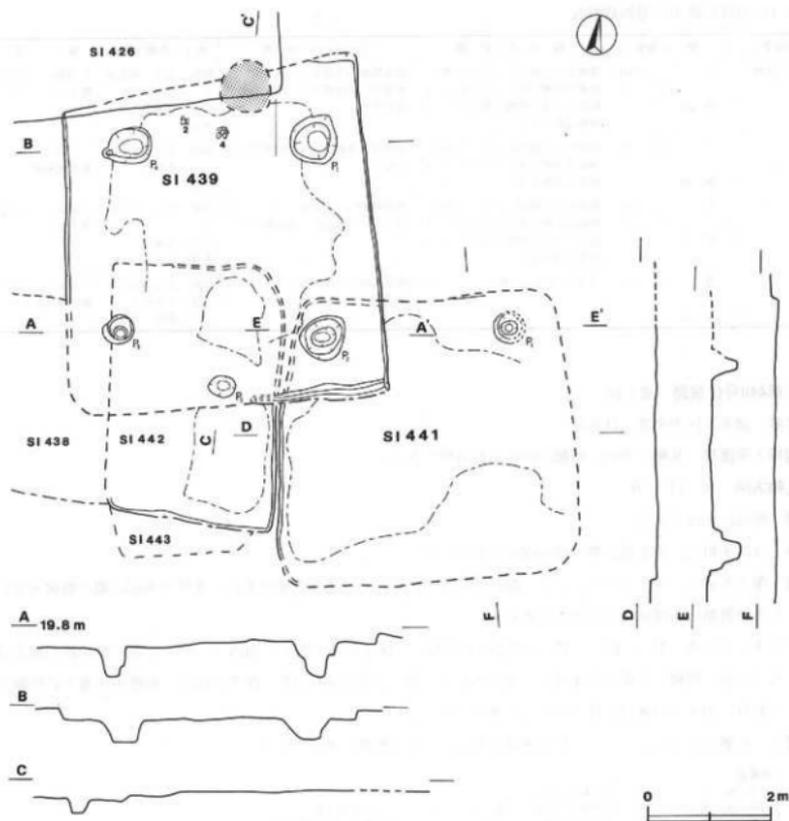
床 第438号住居跡と第442号住居跡に掘り込まれた南西コーナー部付近の床面は確認できないが、それ以外はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 第426号住居跡に掘り込まれ、さらにトレンチャーによる攪乱を受けているが、北壁の中央東寄りでの竈の痕跡と思われる砂質粘土と焼土ブロックが少量検出されている。

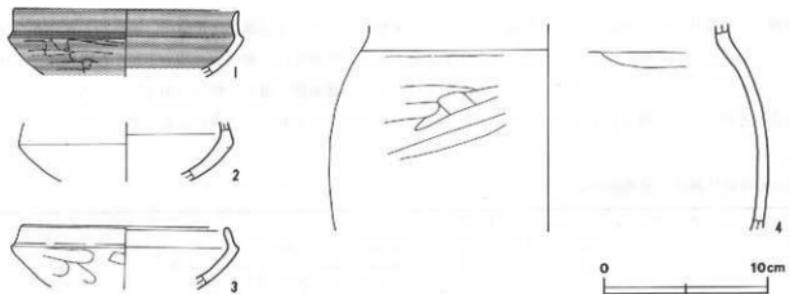
ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁~P₄は径25~75cmの円形で、深さ33~58cmである。いずれも各コーナー寄りに位置し、規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は径約30cmの円形、深さ29cmで、南壁中央寄りに位置し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片128点、磁器片1点が出土している。第44図1・3の土師器片は、覆土中から出土している。2の土師器片は、竈西側の床面から出土している。4の土師器片は、竈西袖部前の床面から破片の状態で出土している。磁器片は混入したと思われる。

所見 本跡では、壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して、6世紀後半と考えられる。重複している第426・438・442・443号住居跡より古く、第441号住居跡より新しい。



第43图 第439・441号住居跡実測図



第44图 第439号住居跡出土遺物実測図

第 439 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 44 図 1	坏 土 師 器	A [140] B (41)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内唇気味に立ち上がり、口 縁部との境に明確な稜をもつ。口 縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口 縁部内・外面横ナデ。内・外面黒 色処理。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい黄褐色 普通	P 5149 10% 覆土中
2	坏 土 師 器	B (3.6)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内唇気味に立ち上がり、口 縁部は内傾する。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外 面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 不良	P 5150 5% 甕西側床面
3	坏 土 師 器	A [126] B (3.8)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内唇気味に立ち上がり、口 縁部との境に明確な稜をもつ。口 縁部は内傾する。	体部外面へラ削り後へラナデ、内 面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 にぶい赤褐色 普通	P 5151 10% 覆土中
4	甕 土 師 器	B (12.8)	体部片。体部は内唇して立ち上 がる。	体部外面へラ削り後へラナデ、内 面ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5156 10% 甕西側部床面

第440号住居跡 (第45図)

位置 調査5区中央部, I13j区。

規模と平面形 長軸3.39m, 短軸3.00mの長方形である。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁高は10cmである。

床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 覆土が薄く、トレンチャーによる擾乱を受けているために遺存状態は悪い。北壁中央部に竈の痕跡と思わ
れる砂質粘土が確認できたのみである。

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は径25cmの円形で、深さ32cmであり、南西コーナーに寄った位置で検出さ
れている。規模と位置から支柱穴と考えられる。P₂は径22cmの円形、深さ41cmで、南壁中央寄りに位置し
ており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

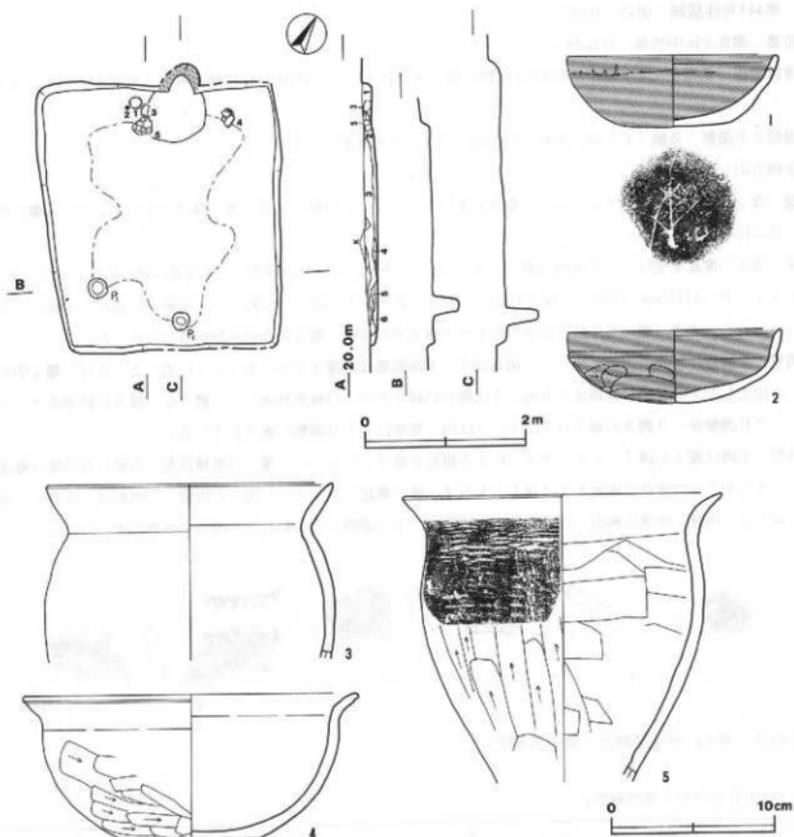
- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子中量, ローム小ブロック・炭化材少量
- 3 褐色 ローム粒子・炭化粒子中量, ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化物中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム小ブロック・粒子中量, 炭化物・粒子少量
- 6 にぶい褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量

遺物 土師器片70点, 須恵器片1点が出土している。第45図1・2の土師器坏は正位で、甕西側の床面から2
に1が重なった状態で出土している。3の土師器甕と5の土師器椀は、甕西側の覆土下層から横位で、土圧
でつぶされた状態で出土している。4の土師器鉢は正位で、甕東側の覆土下層から出土している。

所見 本跡では、壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。

第 440 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 45 図 1	坏 土 師 器	A 13.0 B 4.5 C 5.4	口縁部一部欠損。平底。体部から 底部は内傾して立ち上がる。	体部外面へラナデ、内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。内・外面 黒色処理。底部木葉痕。輪挽み 痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P 5157 98% P L 64 甕西側床面 口縁部摩滅



第45図 第440号住居跡・出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
第45図 2	土 師 器	A 13.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な絞をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にふい橙色 普通	P 5158 98% P L 64 壺西側床面 口縁部摩滅
		B 4.5				
3	土 師 器	A [17.6]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英・小礫 にふい赤褐色 普通	P 5159 15% P L 64 壺西側覆土下層
		B (10.9)				
4	土 師 器	A [20.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面へラ削り後へラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 にふい橙色 普通	P 5160 40% P L 64 壺東側覆土下層 体部外面煤付着
		B 8.9				
		C 8.4				
5	土 師 器	A 19.6	釜底式。体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面横位の平行叩き後へラ削り、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	P 5161 50% P L 64 壺西側覆土下層
		B (17.8)				

第441号住居跡 (第43・46図)

位置 調査5区中央部, J13a区。

重複関係 北西コーナー部が第439号住居跡に掘り込まれている。第439号住居跡の掘り込みは、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸 [4.9]m, 短軸 [4.6]mのほぼ方形と推定される。

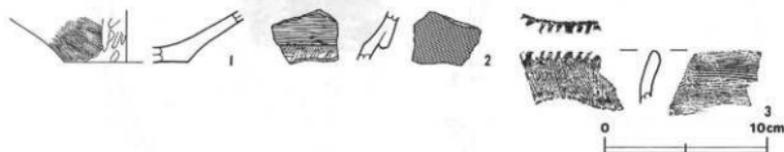
主軸方向 N-73°-E

壁 覆土が薄く、トレンチャーによる攪乱を受けているため、西壁の一部以外は確認できなかった。西壁の壁高は10cmである。

床 東部で攪乱を受けている床面は確認できなかった。それ以外はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。ピット P₁は径55cmの円形で、深さ44cmであり、北東コーナー寄りに位置する。規模と位置から支柱穴と考えられる。本来、他にも支柱穴があったものと推定されるが、攪乱のためか検出されなかった。

遺物 土師器片31点が出土している。第46図1の土師器甕は、覆土中から出土している。2・3は、覆土中から出土した土師器甕口縁部片である。2は複合口縁であり、口縁部外面にヘラ磨きが、複合口縁部直下にはハケ目調整後ヘラ磨きが施されている。3は内・外面にハケ目調整が施されている。

所見 本跡は覆土が薄く、トレンチャーによる攪乱を受けているため、覆土の堆積状況と西壁以外の壁は確認できなかった。攪乱は床面までは達しておらず、壁が確認できなかった部分の規模と平面形は、床面から推定した。炉跡、溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して古墳時代前期と考えられる。



第46図 第441号住居跡出土遺物実測図

第441号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	甕	B [3.2] C [7.6]	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部下位は外傾して立ち上がる。	底部へラ削り。体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き、内面ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 褐色 普通	P 5162 5% 覆土中

② 奈良・平安時代

第355号住居跡 (第47図)

位置 調査5区北部, I13g区。平成8年度調査区と平成9年度調査区にまたがって位置していた。そのため、竈を含む大半を平成8年度、南西コーナー部を平成9年度と、調査も両年度にわたった。

規模と平面形 長軸5.40m, 短軸5.39mの方形である。

主軸方向 N-2°-E

壁 壁高は18cmで、外傾して立ち上がる。

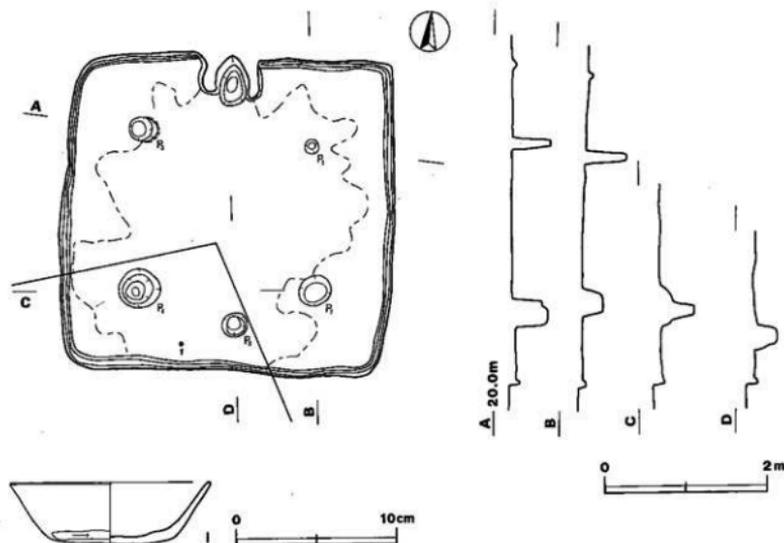
壁溝 全周している。規模は、上幅17~23cm, 下幅4~10cm, 深さ5~7cmで、断面形はU字形である。

床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₃は平成8年度調査区で検出されている。P₄は径約65cmの円形で、深さは58cmである。P₁~P₄はコーナー寄りに位置し、規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は径約40cmの円形、深さ39cmで、南壁中央寄りに位置し、南壁側に傾斜していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 平成9年度調査区からは、土師器片8点、須恵器片2点が出土しているのみである。第47図1の須恵器杯は正位で、南壁際の床面から出土している。

所見 本跡の南西コーナー部以外の部分は平成8年度に調査が終了しており、その部分については、『茨城県教育財団報告書第133集』を参照されたい。時期については、第133集では古墳時代後期の7世紀後半としているが、平成9年度調査で床面から出土した1の須恵器と第133集報告の須恵器とを考えあわせて、8世紀前葉と変更したい。



第47図 第355号住居跡・出土遺物実測図

第 355号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	環 須恵器	A 122 B 3.9 C 7.6	平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部から口縁部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰白色 普通	P 5001 100% P L 59 南壁側床面

第378号住居跡（第48図）

位置 調査5区北部，I12h区。

重複関係 南部が第17B号溝に，南東コーナー部が第553号土坑に，いずれも床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.78m，短軸（4.0）mで不整形長方形と推定される。

主軸方向 N-5°-W

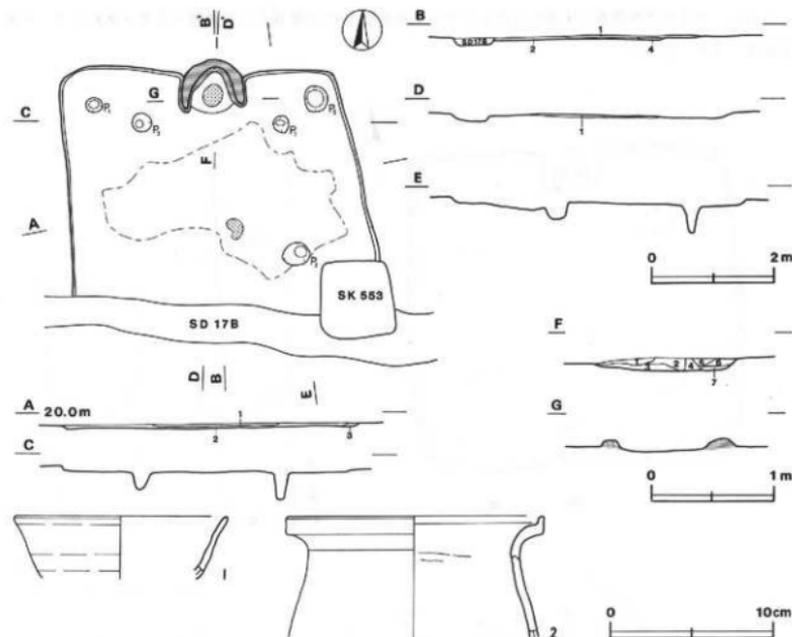
壁 南壁は，第17B号溝に掘り込まれているため確認できない。壁高は6～10cmである。

床 中央部に長径約3.2m，短径約2.3mの不整形で，高さ約4cmの高まりがあり，貼床と考えられる。貼床部は踏み固められており，上面はほぼ平坦である。

貼床土層解説 単一層である。

1 褐色 ローム粒子多量，ローム中・小ブロック・黄土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，硬くしまっている

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は，焚口部から煙道部まで95cm，両袖部幅112cmである。



第48図 第378号住居跡・出土遺物実測図

火床部は、床面を約4cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第6層が焼土ブロックでゴツゴツして赤変硬化していることから、天井部の崩落土と考えられる。両袖部の遺存状態は悪い。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 灰褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、焼土小ブロック微量
- 2 灰褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、焼土中ブロック・炭化物微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・粘土小ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック微量
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土中ブロック微量

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₃は径約30cmの円形で、深さ28~48cmであり、いずれもコーナー寄りに位置していることから主柱穴と考えられる。P₄は径約26cmの円形で、深さ21cmであり、P₅は径42cmの円形で、深さ12cmである。P₄はP₃付近の北西コーナー部、P₅はP₁付近の北東コーナー部に位置していることから、P₄はP₃の、P₅はP₁の補助柱穴の可能性はある。

覆土 4層からなる。覆土が薄いため堆積状況は、確認できない。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小・中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック微量

遺物 土師器片115点、須恵器片3点、陶器片1点が出土している。第48図1の須恵器杯は正位で、北東部の覆土中から、2の土師器甕は横位で、P₅の覆土中から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡では、壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀前葉と考えられる。重複している第17B号溝及び第553号土坑より古い。

第378号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	杯 須恵器	A [132]	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	体部から口縁部内・外断口ロナナ。	砂粒・雲母 灰色 普通	P 5002 5% 北東部覆土中
		B (39)				
2	甕 土師器	A [15.8]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内傾して立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部内・外面ナア。口縁部内・外面横ナア。輪襷み気。	砂粒・雲母・長石 にふい赤褐色 普通	P 5003 5% P ₁ 覆土中
		B (7.5)				

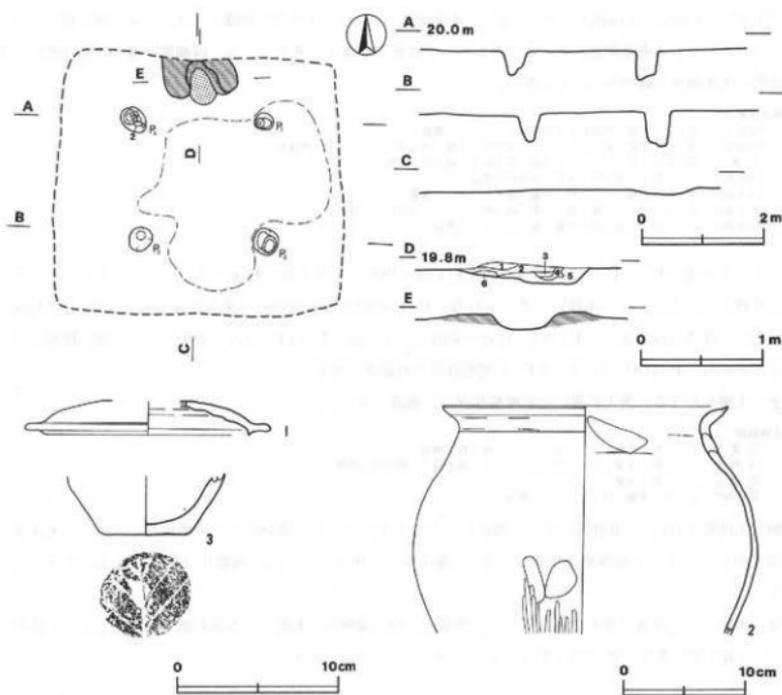
第379号住居跡 (第49図)

位置 調査5区の北部、I1216区。

規模と平面形 壁と壁溝が検出されなかったが、竈と床質から、長軸 [4.7]m、短軸 [4.2]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-0°

床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。竈東袖部前の床面から、焼土ブロックが検出されている。竈 北壁中央部に両袖部の一部と火床部が検出できた。規模は、両袖部幅約120cmであると推定される。火床部は、床面を約7cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第1層が天井部の崩落土と考えられる。袖部の遺存状態は悪い。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。



第49図 第379号住居跡・出土遺物実測図

覆土層解説

- 1 にぶい赤褐色 粘土粒子多量
- 2 黒 褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子中量, 粘土粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・粒子多量
- 4 暗 赤 褐色 焼土粒子・粘土中量, 焼土小ブロック少量
- 5 極 暗 赤 褐色 焼土粒子・粘土粒子中量, 炭化粒子少量
- 6 暗 赤 褐色 炭化粒子中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁~P₄は径約30cmの円形で、深さ40~58cmであり、方形に配置されている。規模と配置から主柱穴と考えられる。

遺物 土師器片147点, 須恵器片4点が出土している。第49図1の須恵器蓋は覆土中から、2の土師器甕はP₄の覆土中層から出土している。3は土師器甕底部で、北東コーナー部の覆土下層から横位で出土しており、木葉痕が認められる。

所見 本跡は床面がほぼ露出した状態で確認されたため、覆土の堆積状況は確認できなかった。壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。

第 379 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 49 図 1	蓋 須恵器	A [J52] B (2.1)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部はドーム状である。口縁部内面に短いかえりをもつ。	天井部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・小石 灰色 普通	P 5005 10% 覆土中
2	壺 土師器	A 23.3 B (18.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面へラナデ後へラ磨き、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・石英 赤褐色 普通	P 5004 30% P、覆土中層

第386号住居跡 (第19・50図)

位置 調査5区北西部, J12ca区。

重複関係 北部で第385号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 [3.7]m, 短軸3.66mのはば方形と推定される。

主軸方向 N-96°-E

壁 壁高は4~8cmである。

床 はば平坦である。

竈 東壁中央部で、北袖部の一部と火床部の一部が検出された。火床部は、焼土粒子と炭化物が検出され、赤変硬化している。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 3 濃い赤褐色 焼土小ブロック多量, ローム小ブロック中量
- 4 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量

覆土 6層からなる。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

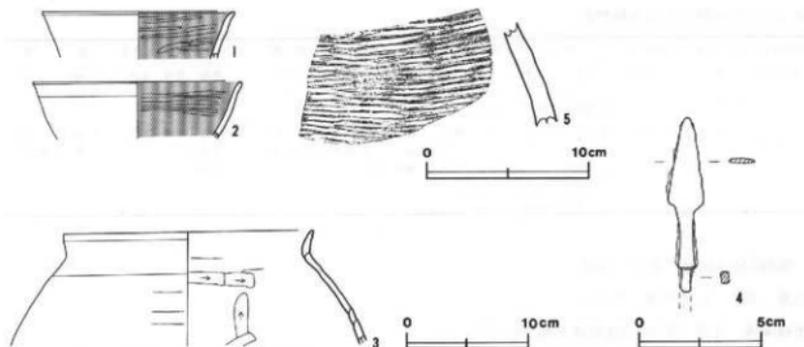
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・スロリア微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 濃い黄褐色 粘土塊
- 4 黒褐色 粘土粒子多量, 焼土粒子微量
- 5 黒褐色 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土中・小ブロック・炭化粒子微量

遺物 土師器片272点, 須恵器片5点, 鉄製品1点(鉄鏝), 鏝3点が出土している。第50図1・2の土師器片は, 南東コーナー部の覆土中から出土している。3の土師器壺は竈内から, 4の鉄鏝は北側の覆土下層から

第 386 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第 50 図 1	壺 土師器	A [12.0] B (2.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	体部から口縁部外面ロクロナデ。内面丁寧なへラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 (外面) 普通	P 5026 5% 南東コーナー部覆土中
2	壺 土師器	A [13.0] B (3.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外彎して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	体部から口縁部外面ロクロナデ。内面丁寧なへラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい褐色 (外面) 普通	P 5027 5% 南東コーナー部覆土中
3	壺 土師器	A [20.4] B (9.4)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内彎して立ち上る。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P 5028 5% 竈内



第50図 第386号住居跡出土遺物実測図

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第50図4	鉄 鉢	(72)	1.5	0.3	(8.85)	北側覆土下層	M 5001 P L 60

出土している。5は覆土中から出土した須恵器製の体部片で、外面には平行叩きが施されている。

所見 本跡では、壁溝とピットは検出されなかった。規模と平面形は床質から推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第385号住居跡より新しい。

第389号住居跡 (第23・51図)

位置 調査5区中央部, J12d4区。

重複関係 南西コーナー部で第391号住居跡と第274号土坑を掘り込んでおり、北東コーナー部の壁の一部が第219号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.00m, 短軸 [2.8]mのほぼ方形と推定される。

主軸方向 N-16°-E

壁 南西コーナー部から西壁については確認できなかった。東壁部分の壁高は4cmである。

床 はほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで72cm, 両袖部幅60cmである。天井部は崩落しており、第2・4層が天井部の崩落土と考えられる。両袖部の遺存状況は悪い。火床部は、赤変硬化している。煙道部は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土小ブロック少量, 砂粒微量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子中量, ローム粒子・粘土小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土小ブロック・粘土小ブロック微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は径約60cmの円形で、深さ19cmであり、南東コーナーに寄った位置で検出されている。規模と位置から主柱穴と考えられる。P₂は径35cmの円形、深さ19cmで、南壁際中央部に位置

し、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部で検出された。長径65cm、短径59cmの楕円形で、深さ21cmである。覆土中層から土師器片が1点出土している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量

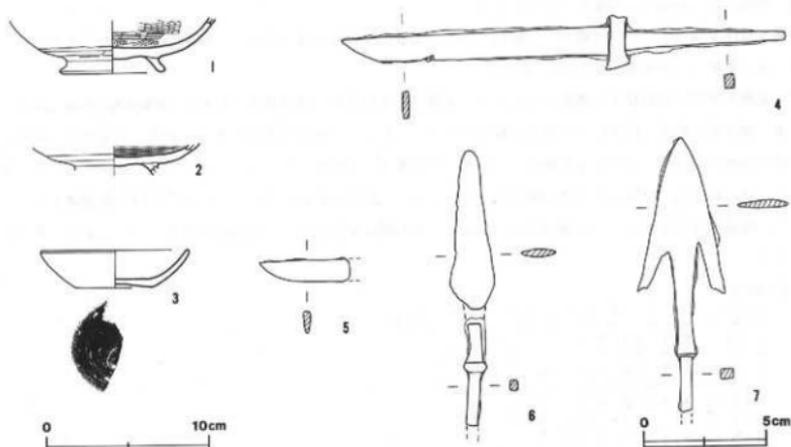
覆土 2層からなる。覆土が薄いため堆積状況は、確認できない。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 にぶい褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片213点、須恵器片8点、鉄製品4点(刀子2、鉄鎌2)、礫2点が出土している。第51図1の土師器高台付坏は竈前西側の覆土下層から斜位で、2の土師器高台付坏は西壁側の覆土下層から逆位で出土している。3の土師器小皿は、P₁の覆土中から出土している。4・5の刀子は西壁側の覆土下層から、6の鉄鎌は中央部の覆土下層から出土している。7の鉄鎌は竈前の覆土下層から出土している。

所見 本跡の南西部は、壁の確認ができなかったが、その部分に関わる規模と平面形は床質から推定した。壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀後葉と考えられる。重複している第391号住居跡・第274号土坑より新しく、第219号土坑より古い。



第51図 第389号住居跡出土遺物実測図

第389号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第51図 1	高台付坏 土師器	B (3.4) D 6.0 E 1.0	高台部から体部にかけての破片。平底。高台は短く「ハ」の字状に開く。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外面ナデ、内面丁寧なヘラ磨き。	胎土・色調・焼成 砂粒・雲母・長石・赤色粒子 面下褐色 普通	P 5036 40% 竈前西側覆土下層

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第51図 2	高台付坏 土 師 器	B (19)	高台部から底部にかけての破片。 平底。高台は短く「ハ」の字状に 開く。	底部回転へう削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部外面ナデ。内 面丁寧なへう磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5037 30% 西壁際覆土下層
3	小 皿 土 師 器	A [90] B 23 C [46]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部から口縁部は内彎気味 に立ち上がる。	底部回転糸切り。体部から口縁部 内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P 5038 30% P; 覆土中

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第51図4	刀 子	18.1	1.2	0.4	35.0	西壁際覆土下層	M 5002 P L 60
5	刀 子	(3.7)	1.0	0.3	(206)	西壁際覆土下層	M 5022
6	鉄 鏝	(11.0)	1.8	0.4	(1245)	中央部覆土下層	M 5003 P L 60
7	鉄 鏝	(11.3)	(3.4)	0.3	(21.0)	壺前覆土下層	M 5004 P L 60

第390号住居跡 (第52・53図)

位置 調査5区中央部, J12c区。

重複関係 第388号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.60m, 短軸3.20mの長方形である。

主軸方向 N-9°-E

壁 壁高は18~36cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 ほぼ全周している。規模は, 上幅15~29cm, 下幅5~12cm, 深さ7cmで, 断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。

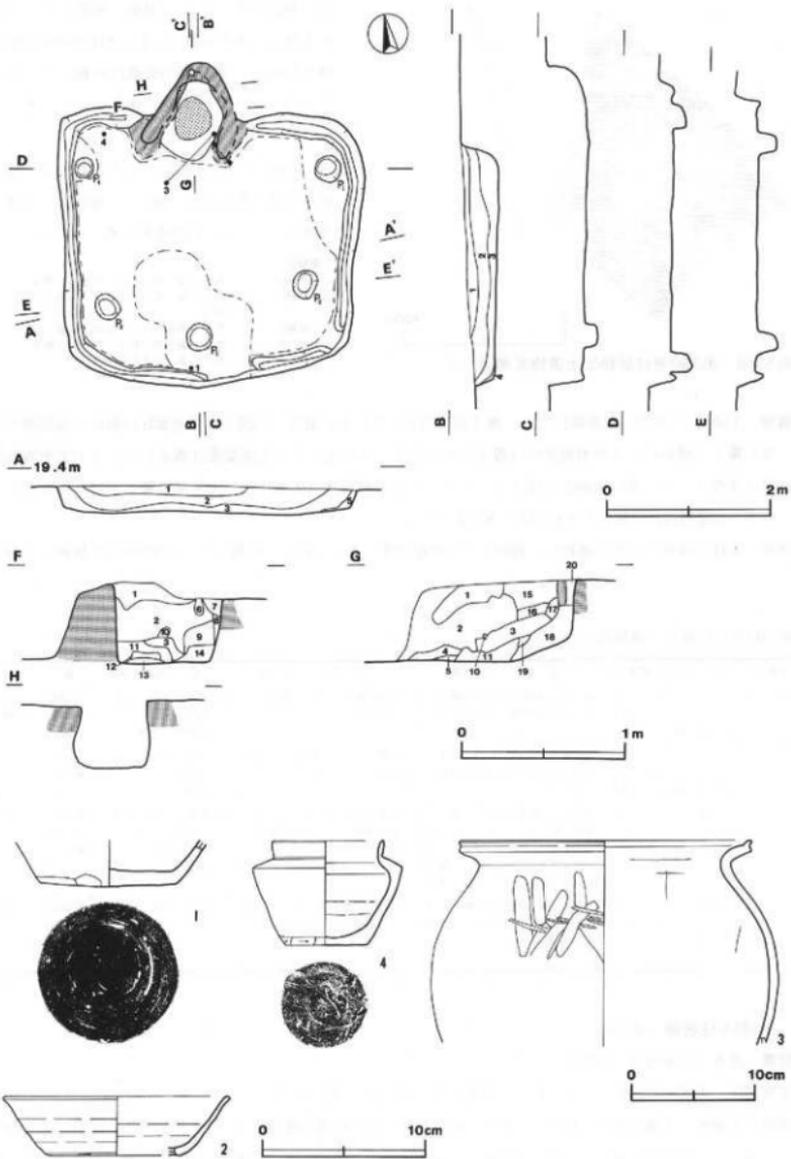
竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は, 焚口部から煙道部まで119cm, 両袖部幅128cmである。

第5層は焼土粒子・炭化粒子が多量に検出されることから, 下面が火床面と考えられる。火床部は, 床面を約3cm掘りくぼめており, 赤変硬化している。天井部は一部残存しているが, ほとんどは崩落しており, 第4・9・15・16・18層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており, 内側は赤変硬化している。煙道部は火床面から急な傾斜で立ち上がる。第20層は砂質粘土で, 煙道部を形成していたものと考えられる。

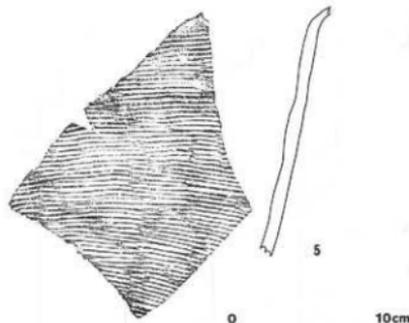
竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・粘土粒子中量
- 5 赤褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子中量
- 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土中ブロック微量
- 7 暗褐色 焼土粒子中量, 焼土粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 9 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化物少量
- 10 黒褐色 砂粒少量, 焼土粒少量
- 11 暗褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化物微量
- 12 暗赤褐色 焼土粒子多量, 粘土粒子微量
- 13 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子中量, 炭化物・粘土粒子少量
- 14 暗褐色 砂粒中量, ローム小ブロック・粘土少量, 焼土粒子微量
- 15 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量, ローム小ブロック微量
- 16 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
- 17 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 18 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子中量
- 19 焼土大ブロック多量
- 20 15層に同じ

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は径約25cmの円形で, 深さ20~28cmであり, 各コーナーに寄った位



第52图 第390号住居跡・出土遺物実測図(1)



第53図 第390号住居跡出土遺物実測図(2)

置で検出されている。規模と配置からいずれも主柱穴と考えられる。P₅は径25cmの円形、深さ19cmで、南壁際中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなる。第4・5層は壁側から流れ込んだ層と考えられ、第1～3層はレンズ状の堆積をしている。自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 コーム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 コーム粒子少量、焼土小ブロッコ・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 コーム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 褐色 コーム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 褐色 コーム粒子中量、炭化粒子少量

遺物 土師器片230点、須恵器片23点、礫3点が出土している。第52・53図1の須恵器環は斜位で南壁際中央部の覆土下層から、2の須恵器環は覆土中から出土している。3の土師器甕は竈前から、4の須恵器短頸壺は北西コーナー部の床面から出土している。5は須恵器鉢の体部片で、中央部の覆土中層から出土している。体部外面には横位の平行叩きが施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して8世紀中葉と考えられる。重複している第388号住居跡より新しい。

第390号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	環	B [29] C 8.4	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 浅黄色 普通	P 5039 10% 南壁際中央部覆土下層
	須恵器					
2	環	A [13.6] B 3.9	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 黄灰色	P 5040 5% 覆土中
	須恵器	C [8.0]				
3	甕	A [23.4] B (16.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口縁部直下に境が通る。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面ヘラナデ、一部ヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 にぶい橙黄色 普通	P 5041 20% P L 60 竈前
	土師器					
4	短頸壺	A 6.8	完形。平底。体部は外傾して立ち上がり、肩部で内傾する。口縁部は反く直立する。	底部ヘラ削り後ヘラナデ。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・小石 灰色 良好	P 5042 100% P L 60 北西コーナー部床面
	須恵器	B 6.5 C 5.0				

第392号住居跡 (第54図)

位置 調査5区南西部, J12a区。

重複関係 東部が第254・257号土坑に、西部が第253号土坑に掘り込まれている。

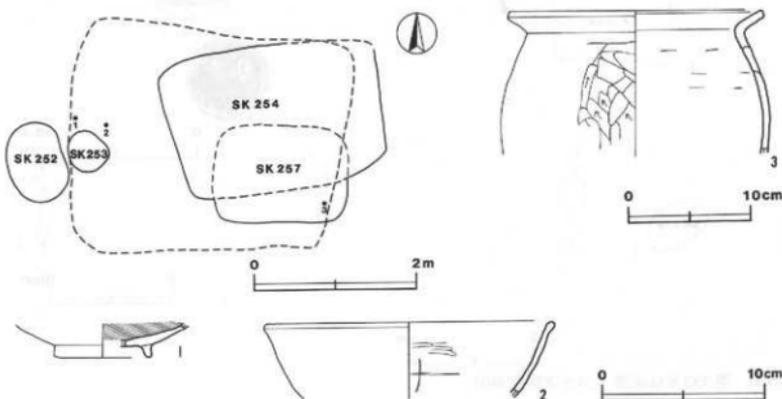
規模と平面形 本跡は床面が露出した状態で検出され、壁や壁溝が確認できなかった。また、土坑による攪乱が激しく、規模や平面形は正確には把握できなかったが、床質から、長軸 [3.5]m、短軸 [2.7]mの長方形と推定される。

主軸方向 [N-96°-E]

床 攪乱部以外の部分はほぼ平坦で、踏み固められた面が西部及び南東コーナー部に確認された。

遺物 土師器片6点が出土している。第54図1の土師器高台付杯と、2の土師器杯は西部の床面から出土している。3の土師器甕は、南東コーナー部の床面から出土している。

所見 本跡では、壁、壁溝、竈、ピットは検出できなかった。また、覆土の堆積状況も不明である。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第253・254・257号土坑より古い。



第54図 第392号住居跡・出土遺物実測図

第392号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	高台付杯 土師器	B (21) D (6.0) E 0.8	高台部から体部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。体部 は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部内・外面ナ デ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 橙色 (外面) 普通	P 5053 5% 西側床面
2	杯 土師器	A [17.6] B (4.7)	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上 がる。	体部から口縁部外面口クロナデ。 内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・赤色粒 子 明褐色 普通	P 5054 5% 西側床面
3	甕 土師器	A [20.6] B (11.8)	体部上位から口縁部にかけての破 片。体部は内彎して立ち上がる。 頸部でくびれ、口縁部は外反する。 口縁部は上方につまみ上げる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内 面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。 輪轆み砥。	砂粒・雲母・石英・ 赤色粒子 橙色 普通	P 5055 5% 南東コーナー部床 面

第393号住居跡 (第55図)

位置 調査5区南西部, K12a区。

重複関係 北壁の一部が第244号土坑に、中央部が第279号土坑に、床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 本跡は床面がほぼ露出した状態で検出され、壁や壁溝が確認できなかったが、床質と竈の痕跡から、長軸 [4.8]m、短軸 [3.4]mの長方形と推定される。

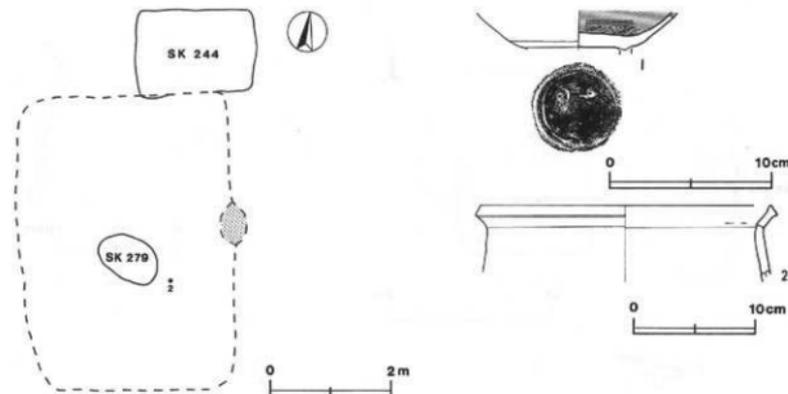
主軸方向 [N-76°-E]

床 ほぼ平坦である。

竈 東壁中央部から、火床部と思われる焼土ブロックが検出された。

遺物 土師器片15点、礫2点が出土している。第55図1の土師器高台付坏は竈内から出土している。2の土師器甕の口縁部片は、中央部の床面から出土している。

所見 本跡では、壁、壁溝、ピットは検出されなかった。覆土の堆積状況も不明である。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第244・279号土坑より古い。



第55図 第393号住居跡・出土遺物実測図

第393号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	高台付坏 土師器	B (2.3)	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内響気味に立ち上がる。	底部回転糸切り後ナデ。体部外面ロクロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石にふい褐色(外面)普通	P 3056 30% 竈内
2	甕 土師器	A [24.0] B (6.2)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部でくびれ、口縁部は外傾する。口縁部直下に稜が走る。口唇部は上方につきまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。輪積み裏。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 明赤褐色普通	P 5057 5% 中央部床面

第395号住居跡 (第56図)

位置 調査5区南西部, K12e区。

重複関係 北東コーナー部が、第251号土坑に床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 東壁がトレンチャーによる攪乱を受けているため確認できないが、長軸3.94m、短軸 [3.7]m のほぼ方形と推定される。

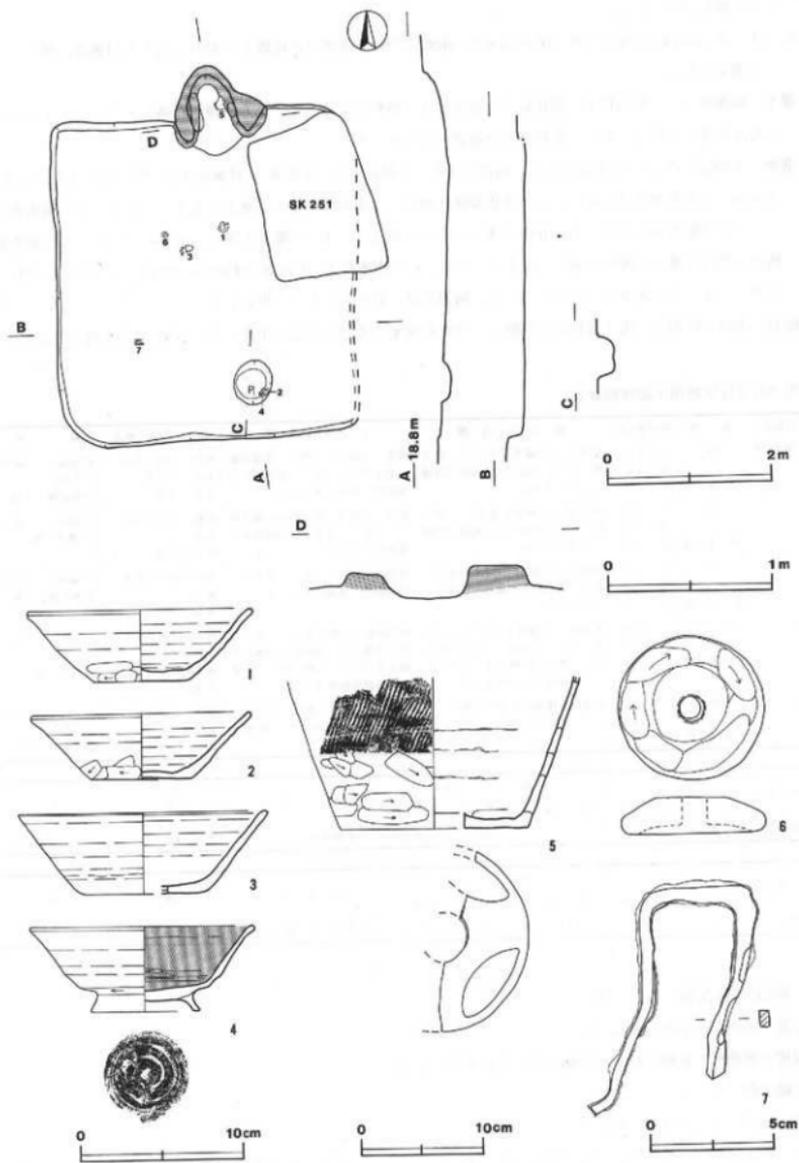
主軸方向 N-0°

壁 西壁及び南北壁の壁高は18cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで111cm、両袖部幅110cmである。

両袖部の遺存状態は悪いが、内側部分は火熱を受けて赤変硬化している。竈の覆土からは、粘土粒子、焼土



第56图 第395号住居跡・出土遺物実測図

粒子が検出されている。

ピット P₁は径約37cmの円形、深さ12cmで、南壁中央やや東寄りに位置しており、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 暗褐色土で、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒を少量含んでいる。覆土が薄く、トレンチャーによる攪乱を受けているために、堆積状況は確認できなかった。

遺物 土師器片193点、須恵器片68点、陶器片3点、土製品1点(紡錘車)、鉄製品1点(門)が出土している。第56図1の須恵器杯は正位で、3の須恵器杯は逆位で、中央部の覆土下層から出土している。2の須恵器杯は、4の土師器高台付杯の上に正位で重なり合った状態で、P₁の覆土中層から出土している。5の須恵器瓶は、竈内の覆土下層から逆位で出土している。6の紡錘車は、中央部の床面から出土している。7の門は、南西コーナー部の床面から出土している。陶器片は、混入したものと思われる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第251号土坑より古い。

第395号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図1	須恵器	A 13.5	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方のへう削り。体部外面下端手持ちへう削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 灰色 普通	P 5058 60% P L 61 中央部覆土下層
		B 4.4				
		C 5.8				
2	須恵器	A 13.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へう削り。体部外面下端手持ちへう削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰色 普通	P 5059 50% P. 覆土中層
		B 4.1				
		C 6.0				
3	須恵器	A [15.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部一方のへう削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P 5060 40% 中央部覆土下層
		C [7.5]				
4	高台付杯 土師器	A 13.8	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内響気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転へう削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部外面ロクロナデ、内面丁寧なへう磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 明赤褐色 普通	P 5061 70% P L 61 P ₁ 覆土中層
		B 5.2				
		D 6.6				
		E 1.3				
5	須恵器	B (12.3)	底部から体部にかけての破片。多孔式。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面下位へう削り、中位斜位の平行叩き。内面ナデ。輪痕み痕。	砂粒・雲母・長石 黄灰色 普通	P 5062 15% P L 61 竈内覆土下層
		C [15.4]				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第56図6	紡錘車	5.9	1.5	1.0	46.0	中央部床面	DP 5007 P L 101

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第56図7	門	9.3	6.4	0.7	45.0	南西コーナー部床面	M 5007 P L 61

第397号住居跡(第57・58図)

位置 調査5区南部、K13e区。

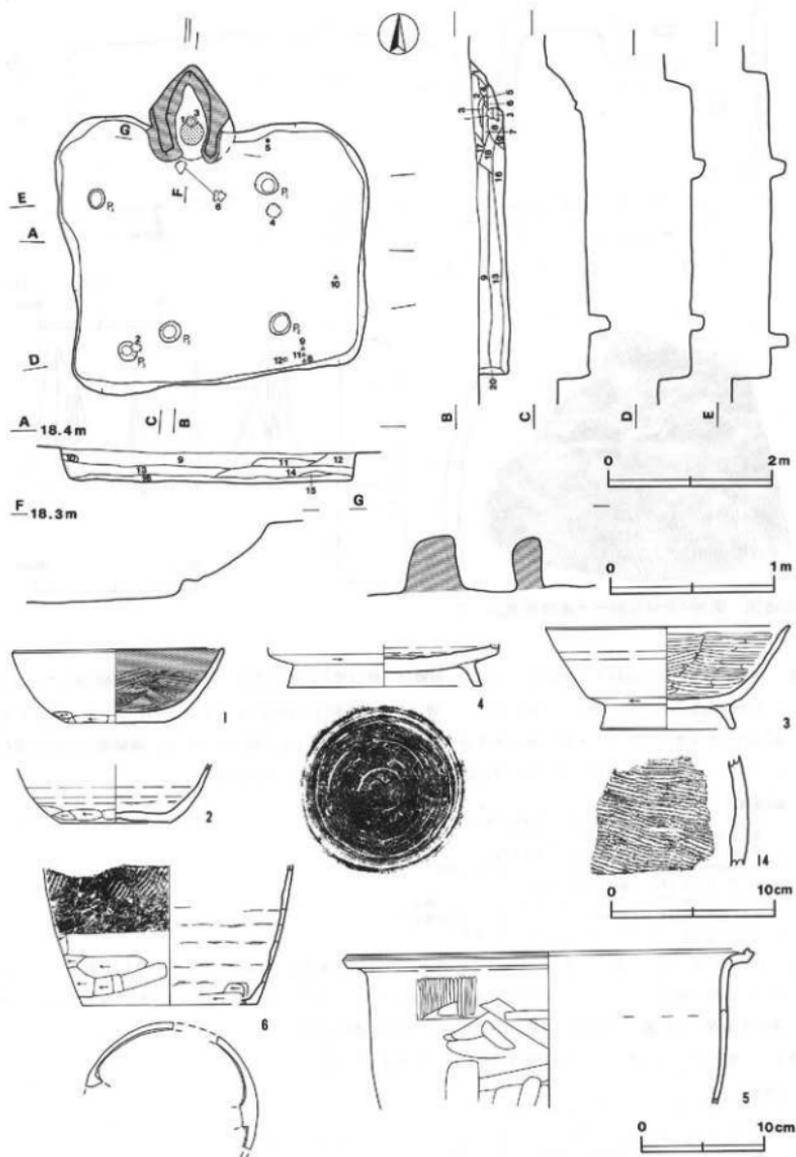
規模と平面形 長軸3.84m、短軸3.08mの長方形である。

主軸方向 N-0°

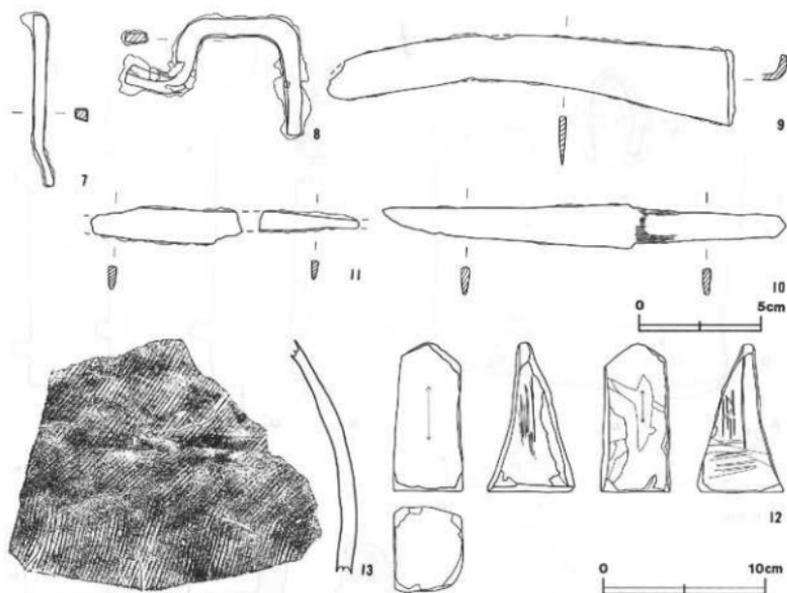
壁 壁高は28~38cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。地山の粘土層まで掘り込み、そのうえで焼土と灰を多量に混ぜた土で床を貼っている。

湿り気がある時は粘性が強く、乾くと硬く締まる。



第57图 第397号住居跡・出土遺物実測図(1)



第58図 第397号住居跡出土遺物実測図(2)

竈 北壁中央部に、砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで135cm、両袖幅100cmである。天井部は崩落しており、第1～3層、第5～7層からは粘土粒子が検出されることから、これらの層が天井部の崩落土と考えられる。8層下面が火床面と考えられ、火床部は赤変硬化している。両袖部は良好に遺存しており、内側は赤変硬化している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

- 1 赤 黒 色 粘土粒子少量、炭化粒子・炭化物少量
- 2 赭褐色 rome粒子・粘土粒子少量、焼土小ブロック・粘土小ブロック少量
- 3 黒 褐色 粘土粒子少量、炭化粒子・炭化物少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗 褐色 粘土粒子中量、焼土粒子少量
- 6 黒 褐色 粘土粒子・炭化粒子少量、粘土小・中ブロック少量
- 7 赭暗褐色 粘土粒子少量、焼土小ブロック・粒子・炭化物少量
- 8 黒 色 焼土中ブロック・粒子少量、粘土粒子少量

ピット 5か所(P₁～P₅)。P₁～P₄は径約25cmの円形で、深さ14～22cmである。いずれも各コーナーに寄った位置で検出されており、規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は径25cmの円形、深さ26cmで、南壁中央西寄りに位置し、出入口施設に伴うピットの可能性がある。

覆土 12層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 9 黒 色 焼土粒子少量、炭化物・粒子少量
- 10 暗 褐色 rome大アブロック多量
- 11 黒 褐色 粘土粒子中量、焼土小ブロック・粒子少量、rome粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 12 赭暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
- 13 赭暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・砂質粘土粒子少量、rome粒子・炭化粒子・粘土小ブロック少量
- 14 黒 褐色 砂質粘土ブロック中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量

- 15 黒褐色 焼土小ブロック・粒子多量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
 16 極暗褐色 砂質粘土粒子中量、ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
 17 黒褐色 砂質粘土粒子中量、焼土小ブロック・粒子微量
 18 極暗赤褐色 砂質粘土粒子・焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化物微量
 19 極暗赤褐色 焼土粒子中量、砂質粘土粒子少量、焼土小ブロック微量
 20 褐色 粘土大ブロック多量

遺物 土師器片482点、須恵器片67点、鉄製品5点(角釘1、鎌1、刀子2、不明鉄製品1)、砥石1点、礫2点が出土している。第57・58図1の土師器環、3の土師器高台付環は、竈火床部から出土している。いずれも逆位で、3に1が重なった状態で出土しており、支脚に転用した可能性がある。2の須恵器環は、南西コーナー部の覆土下層から逆位で出土している。4の須恵器盤は、中央部の覆土下層から正位で出土している。体部を意図的に打ち欠いており、底部は擦れて、一部に墨が付着していることから、硯に転用したと考えられる。5の土師器鉢は斜位で北東コーナー部の覆土下層から、6の須恵器甕は正位で竈前の覆土下層から出土している。7の角釘は、覆土中から出土している。8の不明鉄製品、9の鎌、11の刀子は、南東コーナー部の覆土下層から重なった状態で出土している。10の刀子は東壁側の覆土下層から、12の砥石は南東コーナー部の覆土下層から出土している。13・14は、須恵器甕の体部片である。13は、外面に斜位の平行叩きが施されており、南東コーナー部の覆土下層から斜位で出土している。14は外面に横位の平行叩きが施されており、北西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 本跡では、壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。

第397号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	環 土師器	A 12.9	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	底部へう崩り。体部から口縁部外面ロクロナダ、内面丁寧なへう磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 明赤褐色 普通	P 5070 95% P L 61 竈火床部
		B 4.1				
		C 6.0				
2	環 須恵器	B (3.6)	口縁部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方へう崩り。体部外面下縁手持ちへう崩り。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰青色 普通	P 5069 80% 南西コーナー部覆土下層
		C 6.8				
3	高台付環 土師器	A 15.0	口縁部一部欠損。平底。高台は「ハ」の字状に開く。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転へう崩り後ナダ。高台貼り付け後ナダ。体部から口縁部外面ロクロナダ、内面丁寧なへう磨き。	砂粒・雲母・長石・石英 明褐色 普通	P 5071 95% P L 61 竈火床部
		B 6.3				
		D 8.1				
		E 1.5				
4	盤 須恵器	B (2.6)	口縁部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は外傾する。	底部回転へう崩り。高台貼り付け後ナダ。体部から口縁部内・外面ロクロナダ。	砂粒・雲母・長石・石英 灰色 普通	P 5072 80% 転用硯 中央部覆土下層
		D 12.0				
		E 1.3				
5	鉢 土師器	A [32.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部はほぼ直立する。口縁部は外反する。	体部外面へう崩り後丁寧なへう磨き。内面ナダ。口縁部内・外面傾み破。	砂粒・雲母・長石・石英 ぶい黄褐色 普通	P 5073 10% 北東コーナー部覆土下層
		B (12.9)				
6	甕 須恵器	B (11.3)	底部から体部にかけての破片。多孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面下位へう崩り。中位斜位の平行叩き。内面ナダ。輪破み破。	砂粒・雲母・長石・石英 灰黄褐色 普通	P 5074 20% 竈前覆土下層
		C 14.4				

図版番号	種別	計 測 値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第58図7	角釘	7.0	0.6	0.4	7.6	覆土中	M 5008 P L 62
8	不明鉄製品	7.3	4.9	0.4	27.0	南東コーナー部覆土下層	M 5009
9	鎌	16.7	3.2	0.3	39.0	南東コーナー部覆土下層	M 5010 P L 62
10	刀子	16.7	1.8	0.4	28.0	東壁側覆土下層	M 5011 P L 62
11	刀子	(11.0)	1.4	0.3	(10.17)	南東コーナー部覆土下層	M 5012 P L 62

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第58頁12	砥石	9.2	4.3	5.4	215.0	南東コーナー一部覆土下層	Q5002 凝灰岩

第399号住居跡 (第59図)

位置 調査5区南部, J12b区。

規模と平面形 長軸3.48m, 短軸3.44mのほぼ方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁溝 ほぼ全周している。規模は, 上幅8~18cm, 下幅3~9cm, 深さ3cmである。

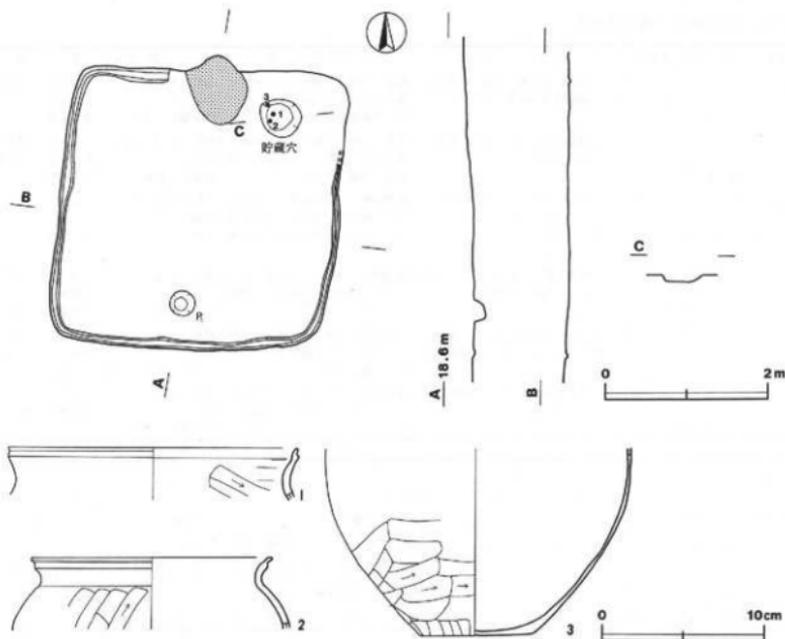
床 ほぼ平坦である。

竈 北壁中央部から, 火床部の一部と袖部の痕跡のみが検出された。

ピット P₁は径約31cmの円形, 深さ15cmで, 南壁中央寄りに位置し, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 竈東側から検出された。長径53cm, 短径46cmの楕円形で, 深さ8cmである。土師器小形甕3点が出土している。

遺物 土師器片67点, 須恵器片1点が出土している。第59図1~3の土師器甕は, 貯蔵穴の覆土下層から出土している。



第59図 第399号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡は、床面がほぼ露出した状態で検出されたため、覆土の堆積状況は不明である。時期は、出土遺物から判断して8世紀後葉と考えられる。

第399号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	甕 土師器	A [180] B (32)	口縁部片。口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石にふい赤褐色 普通	P 5075 5% 貯蔵穴覆土下層
2	甕 土師器	A [148] B (44)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口縁部直下に沈線が走る。	体部外面へう削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	P 5076 5% 貯蔵穴覆土下層
3	甕 土師器	B (116) C 6.9	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	底部へう削り。体部外面へう削り、内面ナデ。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P 5077 25% 貯蔵穴覆土下層

第400号住居跡 (第60図)

位置 調査5区西部, J12e区。

規模と平面形 長軸2.96m, 短軸2.90mのほぼ方形である。

主軸方向 N-93°-E

壁 壁高は4~20cmで、外傾して立ち上がる。竈南側の壁面には、厚さ3~12cmで砂質粘土が貼られている。

壁溝 ほぼ全周している。規模は、上幅12~21cm, 下幅4~11cm, 深さ9cmで、断面形はU字形である。

床 ほぼ平坦で、全面が硬化しており、北西コーナー部から西壁部にかけては、特に踏み固められている。南東コーナー部が、赤変硬化している。

竈 東壁中央の南寄りには砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで118cm, 両袖部幅56cmである。火床部は、床面を約3cm掘りくぼめており、赤変硬化している。袖部は良好に遺存しており、内側は赤変している。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量 3 黒褐色 炭化粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化物少量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量

貯蔵穴 南西コーナー部から検出された。径55cmの円形で、深さ23cmである。土師質土器の小皿1点が出土している。

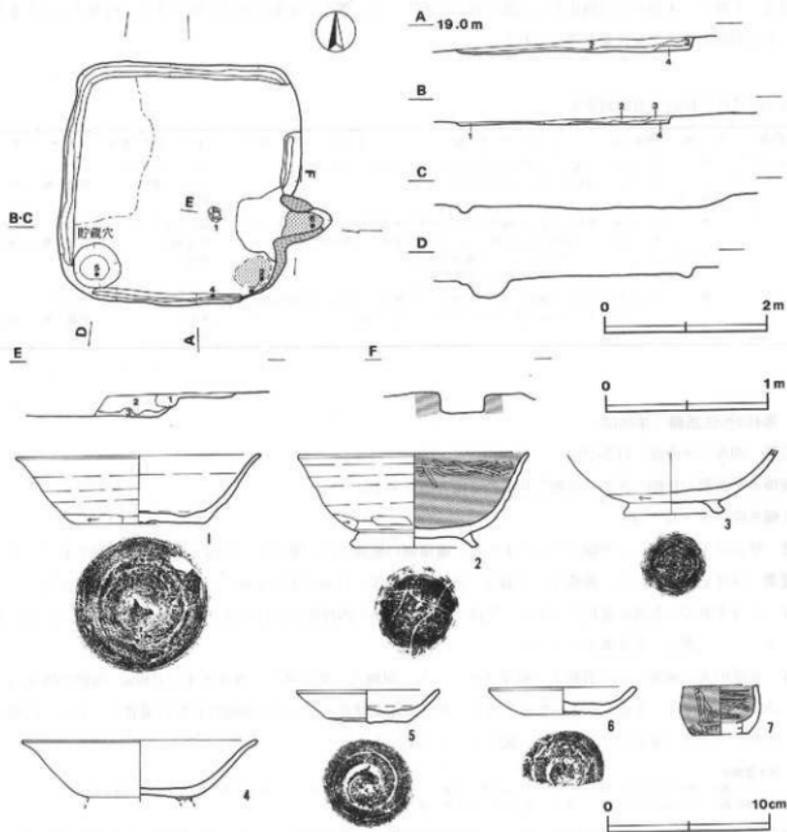
覆土 4層からなる。各層とも壁際から流れ込んだものと思われ、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片222点, 須恵器片4点, 礫3点が出土している。第60図1の土師器杯は、竈前の覆土下層から逆位で出土している。2の土師器高台付杯は、南東コーナー部の覆土下層から出土しており、底部外面に「大」と刻書されている。3の土師器高台付杯は竈内覆土中から、4の土師器高台付杯は南東コーナー部の覆土下層から出土している。5の土師器小皿は貯蔵穴内から逆位で、6の土師器小皿は竈火床面から逆位で出土している。北東部から出土している7のミニチュア土器は混入したものと思われる。

所見 本跡ではピットは検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。



第60図 第400号住居跡・出土遺物実測図

第400号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	土師器	A 15.1	口縁部一部欠損。平底。体部は内 壁して立ち上がり、口縁部はやや 外反する。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁 部ロクロナデ。	砂粒・雲母・小石 暗赤褐色 普通	P 5078 95% P L 62 壺内覆土下層
		B 4.2				
		C 8.0				
2	土師器	A 14.3	体部から口縁部にかけて一部欠 損。平底。高台は「ハ」の字状に 開く。体部は内壁気味に立ち上 がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部から口縁部外 面ロクロナデ、内面丁寧なヘラ磨 き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒 子 橙色(外面) 普通	P 5079 75% P L 62 底部外面 に刻目 南東コー ナー一部覆土下層
		B 5.9				
		D 7.4				
		E 0.9				
3	土師器	B (3.8)	高台部から体部にかけての破片。 平底。高台は「ハ」の字状に開く。 体部は内壁気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。体部内・外面ロク ロナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P 5080 20% 二次焼成 壺内覆土中
		D 5.9				
		E 0.8				

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 4	高台付 土師器	A [146] B (38)	高台部欠損。体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部は内響気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転ヘラ削り接ナデ。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・紫母・長石・赤色粒子にぶい黄褐色 普通	P 5081 40% P L 62 様付き 南東コーナー部覆土下層
5	小皿 土師器	A 9.0 B 2.0 C 5.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・赤色粒子にぶい橙色 普通	P 5082 55% P L 62 貯蔵穴内
6	小皿 土師器	A 9.0 B 2.0 C 5.2	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部から口縁部は内響気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・長石・赤色粒子 浅黄褐色 普通	P 5083 30% 燻火床面
7	ミニチャップ 土師器	A [46] B 3.0 C [34]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は内響気味に立ち上がる。	全面丁寧なヘラ削き。内・外面黒色発現。	砂粒・長石にぶい黄褐色 普通	P 5084 30% 北東部覆土中

第403号住居跡 (第61・62図)

位置 調査5区西部, J126区。

重複関係 南東コーナー部から竈にかけて、第404号住居跡に掘り込まれているが、床面までは違っていない。

規模と平面形 長軸3.40m, 短軸 [3.2]mのはほぼ方形と推定される。

主軸方向 N-105°-E

壁 明確に検出されたのは北西コーナー部から北東コーナー部にかけての北壁部のみで、北壁の壁高は4cmである。東西の壁は部分的に検出され、南部の壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 はほぼ平坦であり、全体的にはあまり踏み固められていない。

竈 東壁中央部からやや南寄りに、火床部の痕跡と掘り方の一部が検出された。火床部は赤変している。

覆土 3層からなる。覆土が薄いため堆積状況は、確認できない。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック少量、粘土粒子微量
- 3 褐色 ローム中ブロック中量、粘土粒子微量

遺物 土師器片108点, 須恵器片1点, 鉄滓1点が出土している。第62図1は須恵器製の体部片であり、覆土中から出土している。外面には格子目の叩き、内面には同心円状の当て具痕が認められる。鉄滓は覆土中から出土している。

所見 本跡は覆土が薄く、南部に攪乱を受けている。壁溝とピットは検出されなかった。規模と平面形は、北壁と東西壁の残存部及び床質から推定した。時期は、出土遺物が細片であり、時期を判断できる出土遺物がないため不明であるが、9世紀後葉の第404号住居跡に掘り込まれているため、それ以前のものと考えられる。覆土中から鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。

第404号住居跡 (第61・63図)

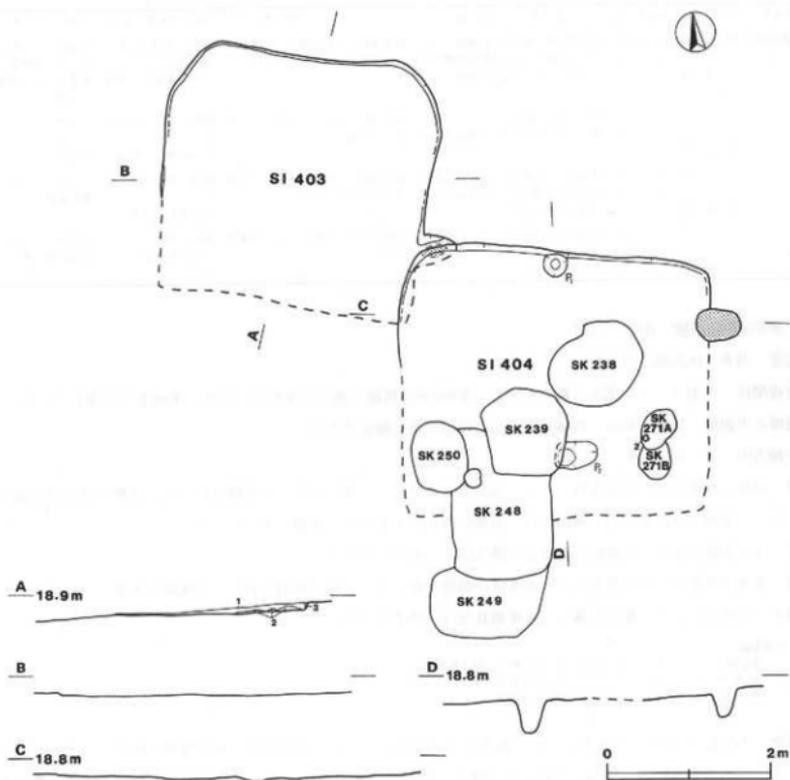
位置 調査5区西部, J126区。

重複関係 北西コーナー部で、第403号住居跡を掘り込んでおり、南部が、第271A・271B・238・239・248~250号土坑に、いずれも床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.74m, 短軸 [3.2]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-103°-E

壁 北壁は検出されたが、東西壁及び南壁は攪乱を受けているため、確認できなかった。



第61图 第403・404号住居跡実測図



第62图 第403号住居跡出土遺物実測図



第63图 第404号住居跡出土遺物実測図

床 確認できた北部は、ほぼ平坦である。

竈 東壁中央から北寄りに、火床部の痕跡が検出された。火床部は赤変硬化している。

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁は径28cmの円形で、深さ28cmである。P₂は長径57cm、短径35cmの楕円形で、深さ40cmである。いずれも性格は不明である。

遺物 土師器片33点が出土している。第63図1の土師器杯は覆土中から、2の土師器高台付杯は南東部の床面から出土している。

所見 本跡は床面がほぼ露出した状態で確認され、南部は攪乱を受けている。壁溝は検出されなかった。規模と平面形は、北壁と竈及び床質から推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。重複している第403号住居跡より新しく、第271A・271B・238・239・248～250号土坑より古い。

第404号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・構成	備考
第63図 1	杯	A [14.4] B (3.5)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内勢気味に立ち上がり、口 縁部はやや外反する。	体部から口縁部ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石 にふい黄褐色 普通	P 5009 10% 覆土中
	土師器					
2	高台付杯	B (1.1) D 5.0	高台部から底部にかけての破片。 平座。高台は短く「ハ」の字状に 開く。	底部回転へう削り後ナデ。高台貼 り付け後ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒 子 暗灰色 普通	P 5100 10% 南東部床面
	土師器	E 0.6				

第413号住居跡 (第21・64図)

位置 調査5区中央部、J12c区。

重複関係 南西コーナー部で第388号住居跡を、南東コーナー部で第414号住居跡を掘り込んでいる。東壁部が第567号土坑に床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 本跡は、竈を含む北部以外は床面が露出した状態で確認されたため、南部では壁が検出されず、残存部分と床質及び出入り口施設に伴うピットにより、長軸 [3.3]m、短軸2.47mの長方形と推定した。

主軸方向 N-23°-E

壁 北西コーナー部から北東コーナー部にかけての北壁部が検出され、壁高は4cmである。北壁以外の壁の立ち上がりは確認できなかった。

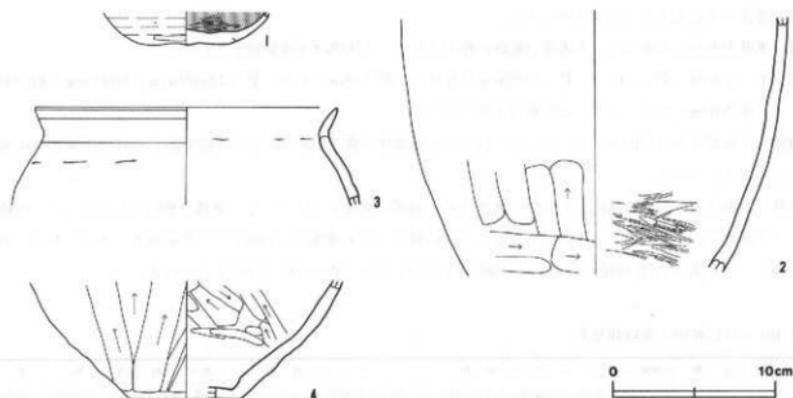
床 ほぼ平坦で、竈の前方が踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅65cmである。第4層は焼土粒子・焼土ブロックが検出されることから、下面が火床面と考えられる。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。火床面から赤く焼けた雲母片岩が出土していることから、支脚として使用したものと考えられる。天井部は崩落しており、第2・3層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存し、内側は赤変硬化している。煙道部は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、粘土粒子少量、焼土大ブロック微量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量、粘土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土大ブロック微量
- 5 黒色 炭化粒子多量、焼土粒子・炭化物少量

ピット P₁は径25cmの円形、深さ32cmで、やや南壁側に傾斜している。位置と形状から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第64図 第413号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片52点、石製支脚1点が出土している。第64図1の土師器坏は、竈の覆土下層から出土した破片が接合したものである。竈東袖の内側から斜位で出土した2の土師器甕は、二次的に火熱を受けており、竈東袖部の補強材に使用されたものと考えられる。3の土師器甕は竈の覆土中から、4の土師器甕は竈の覆土下層から逆位で出土している。

所見 本跡では、壁溝は検出されず、覆土の堆積状況は確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して10世紀と考えられる。重複している第388・414号住居跡より新しく、第567号土坑より古い。

第413号住居跡出土遺物観察表

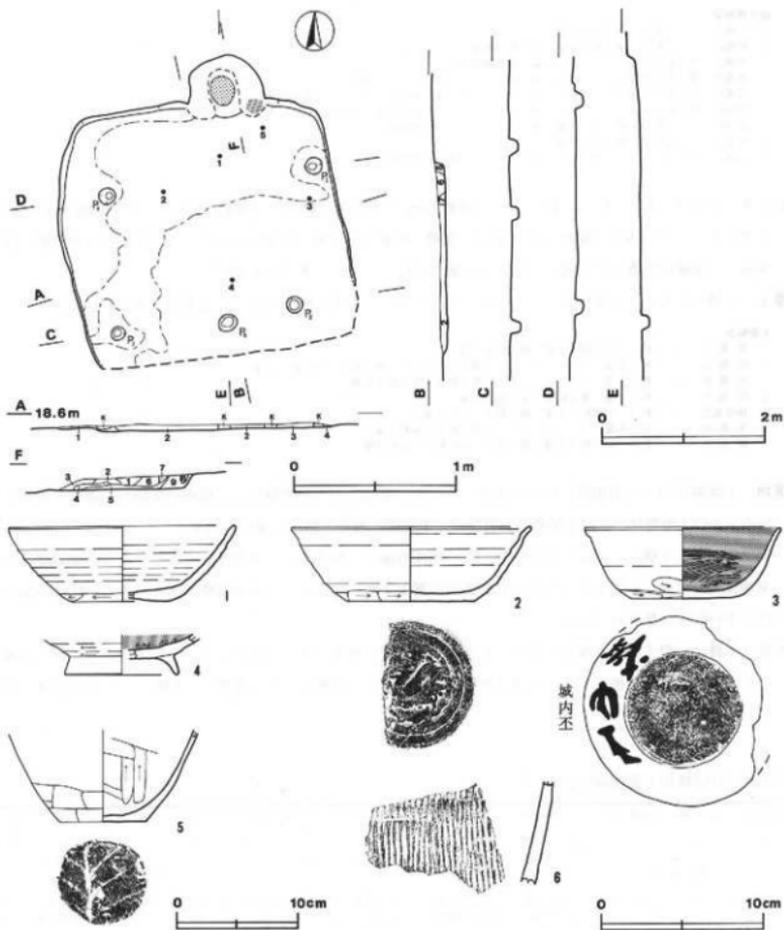
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	坏 土師器	B (2.1) C 5.0	底部から体部下端にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部外面ロケロナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色(外面) 普通	P 5188 40% 竈覆土下層
2	甕 土師器	B (15.8)	体部片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面丁寧なヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P 5189 20% 竈東袖部補強材
3	甕 土師器	A [18.6] B (6.0)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部上位は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ。口縁部は外傾する。	体部上位内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轆み痕。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 明赤褐色 普通	P 5190 5% 竈覆土中
4	甕 土師器	B (7.3) C [6.8]	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部下位は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 5191 10% 竈覆土下層

第428号住居跡 (第65図)

位置 調査5区南部, J13g区。

規模と平面形 長軸3.47m, 短軸 [3.1]mのほぼ方形と推定される。

主軸方向 N-11°-W



第65図 第428号住居跡・出土遺物実測図

壁 南壁から南東コーナー部にかけては、攪乱のため壁の立ち上がりが確認できなかった。壁高は3cmである。

床 ほぼ平坦で、西部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央やや東寄りに火床部と東袖部の一部が検出された。上部に攪乱を受け、下部しか残存していない。

袖の残存からは、砂質粘土で構築されていたものと推定される。規模は、両袖部幅90cmと推定される。

覆土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化物微量
- 4 暗褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土中ブロック・粘土ブロック微量
- 5 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック少量、焼土中ブロック・炭化物微量
- 6 黒褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量、焼土中ブロック微量
- 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化物微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 9 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・粘土ブロック少量、炭化物微量

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁~P₄は径約20cmの円形で、深さ10~13cmである。やや不規則ではあるが、いずれもコーナー寄りで検出されており、規模と配置から主柱穴と考えられる。P₅は径20cmの円形、深さ10cmで、南壁中央寄りに位置し、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなる。各層からロームブロック及びローム粒子が検出され、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量、焼土粒子・砂粒少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子・砂粒少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量

遺物 土師器片59点、須恵器片19点が出土している。第65図1の土師器杯は、竈前の床面から逆位で出土している。2の土師器杯、4の土師器高台付杯は、中央部の覆土下層から逆位で出土している。3の土師器杯は、東壁側の覆土下層から正位で出土している。体部外面に「城内丕」と墨書されている。5の土師器甕は、竈東袖部前の床面から出土している。6は竈前の覆土下層から出土した須恵器甕体部片である。体部外面に縦位の平行叩きが施されている。

所見 本跡は、覆土が薄く擾乱を受けており、一部、壁が検出できない部分があった。その部分にかかる規模と平面形は床質から推定した。壁溝は検出されなかった。時期は、出土遺物から判断して9世紀後葉と考えられる。

第428号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	杯	A [140]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部へう割り後ヘラナデ。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にふい橙褐色 普通	P 5119 30% 竈前床面
		B 4.6				
2	土師器 杯	A [146]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転へう割り。体部外面下端子持ちへう割り。体部から口縁部内・外面ロクロナデ。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P 5120 30% 中央部覆土下層
		B 4.6				
3	土師器 杯	A 12.0	体部から口縁部にかけての一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部一方のへう割り。体部外面下端子持ちへう割り。体部から口縁部外面ロクロナデ。内面丁寧なへう割り。内面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 橙褐色(外面) 普通	P 5121 70% P L 63 体部外面墨書「城内丕」 東壁側覆土下層
		B 4.4				
4	高台付杯 土師器 杯	B (2.5)	高台部から底部にかけての破片。平底。高台は「ハ」の字状に開く。	底部回転へう割り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 橙褐色(外面) 普通	P 5122 10% 中央部覆土下層
		D 1.8				
5	甕 土師器	B (7.5)	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部下位は外傾して立ち上がる。	底部木葉焼。体部外面横位のへう割り。内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子 にふい黄褐色 普通	P 5123 20% 竈東袖部前床面
		C 7.0				

第443号住居跡 (第41・66図)

位置 調査5区中央部, J13a区。

重複関係 北部で第438・439・442号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 本跡は、床面がほぼ露出した状態で検出され、壁溝とピットは確認できなかったが、床質及び残存している竈から、長軸 [2.8]m、短軸 [2.3]mのほぼ方形と推定される。

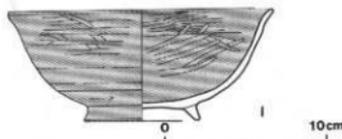
主軸方向 [N-70°-E]

床 ほぼ平坦で、竈の前に踏み固められた面の一部が検出されている。

竈 覆土が浅く、トレンチャーによる攪乱が激しいため、袖部と火床部の痕跡のみが検出されただけである。

遺物 土師器片2点、雲母片岩1点が出土しているのみである。第66図1の土師器高台付坏が、竈内から出土している。雲母片岩は、火床部から赤く焼けて出土しており、支脚として使用したものと考えられる。

所見 本跡では、壁溝及びピットは検出されなかった。覆土の堆積状況も確認できなかった。時期は、出土遺物がごく少なく、断定することは難しいが、東側に竈を持つ住居形態と出土遺物とから判断して10世紀中葉と考えられる。重複している第438・439・442号住居跡より新しい。



第66図 第443号住居跡出土遺物実測図

第443号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	高台付坏	A [164]	高台部から口縁部にかけての破片。平底。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底面回転ヘラ削り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部から口縁部内・外側丁字金ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 に白い濁色 普通	P 5163 40% 竈内
		B 68				
	土師器	D [70]				
		E 10				

③ 時期不明

第425号住居跡 (第67図)

位置 調査5区南東部, J13g区。

重複関係 竈部で第354号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 一辺 [3.2~3.5]m程度の方形と推定される。攪乱が激しく、壁や壁溝が検出できなかったため、規模と平面形は床質から推定した。

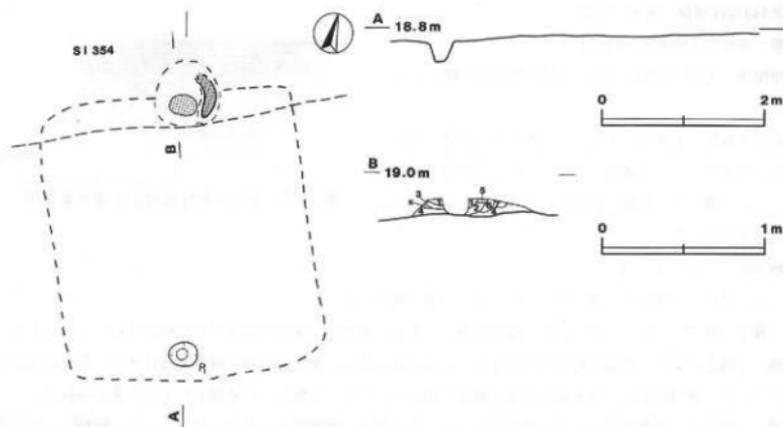
主軸方向 N-19°-W

床 攪乱は床面までは達しておらず、ほぼ平坦である。

竈 攪乱を受け、火床部と東袖部の一部が北壁中央部から検出されたのみである。火床部は赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 に白い濁色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 に白い赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 6 赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒中量、ローム粒子少量
- 7 赤褐色 焼土小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量



第67図 第425号住居跡実測図

ピット P₁は径32cmの円形で、深さ26cmであり、床面南端の中央部付近で検出されている。位置的に入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物 土師器片86点、須恵器片2点、礫1点が覆土中から出土しているが、いずれも細片である。

所見 木跡は攪乱が激しく、壁・壁溝が検出できず、覆土の堆積状況も確認できなかった。時期は、判断できる出土遺物がないために不明であるが、7世紀前葉の第354号住居跡を掘り込んでいることから、それ以降のものと考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

第15号掘立柱建物跡 (第68図)

位置 調査5区西部, J12d区。

重複関係 P₅の上部が第291号土坑に掘り込まれている。

規模 9か所の柱穴からなる、2間×2間の総柱建物跡で、梁行長約4.8m、桁行長約5.0mである。柱穴の掘り方は、平面形が径60～70cmの円形で、深さ40～74cmである。

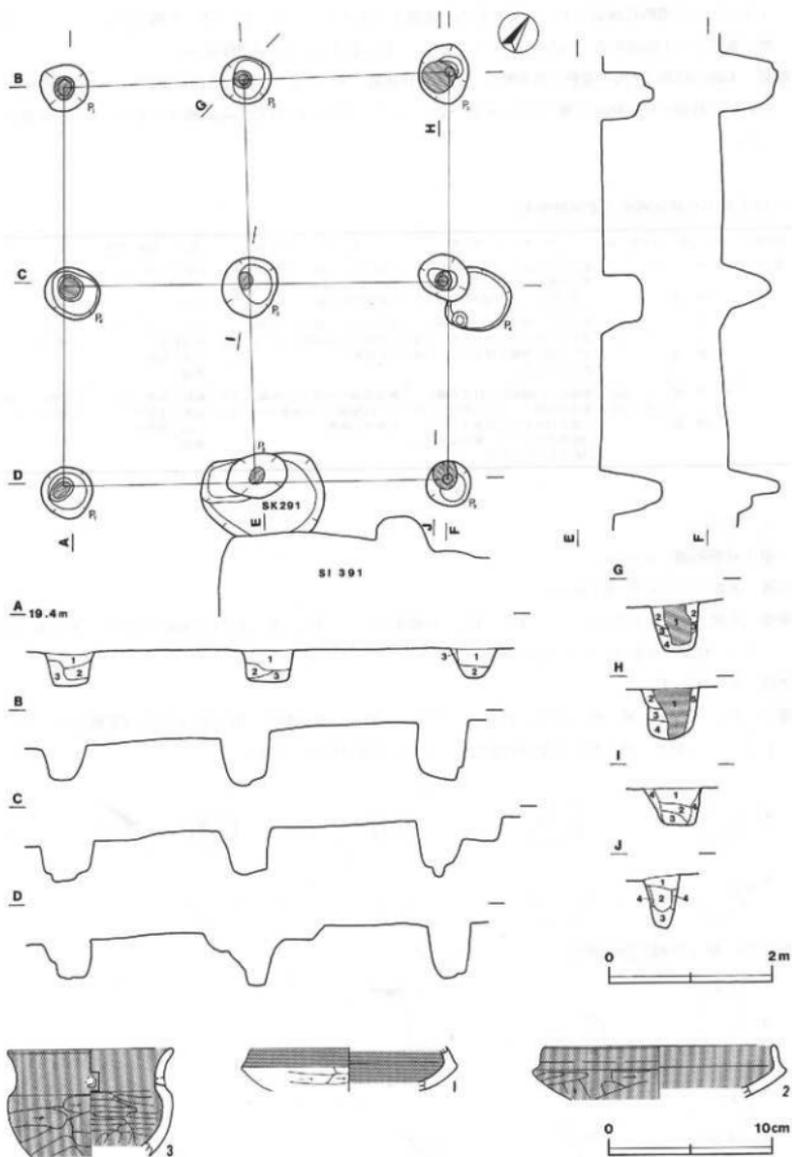
桁行方向 N-32°-W

柱穴覆土 P₂・P₃の覆土中に幅約25cmのやや軟らかい暗褐色土(第1層)があり、この部分が柱痕と考えられる。第2～5層は、ロームブロック・粒子を版築した埋土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量, やや軟らかい
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量

遺物 土師器片144点が出土している。第68図1の土師器杯はP₂の覆土中から出土しており、内・外面が赤彩されている。2の土師器杯と3の土師器小形壺は、P₅の覆土中から出土している。その他に各柱穴の覆



第68图 第15号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

土中から、古墳時代後期のものと見られる土師器片が出土している。P₂・P₉の覆土中からは、ハケ目調整が施された土師器片各1点が出土しているが、これは混入したものと思われる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して古墳時代後期と考えられる。桁行方向が第385・388号住居跡など、付近の同時期の住居跡の主軸方向とほぼ一致している。P₈が第291号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。

第15号獨立柱建物跡出土遺物観察表

頁版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	坏 土師器	B (2.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段をもつ。口縁部は内彎する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部内面・口縁部外面赤彩。	砂粒・雲母・長石にふい黄褐色普通	P 5164 5% P ₁ 覆土中
2	坏 土師器	A [140] B (3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子にふい黄色普通	P 5165 5% P ₁ 覆土中
3	小形 土師器	A [100] B (6.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部はくびれ、口縁部は外反する。頸部に一つの穿孔が穿たれている。	体部外面へラ削り、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子にふい黄褐色普通	P 5166 20% P ₁ 覆土中

(3) 櫛列跡

第1号櫛列跡(第69図)

位置 調査5区中央部, G13g区。

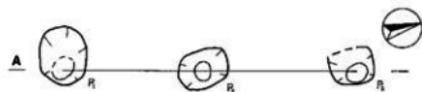
規模 直線上に、4か所のピット(P₁~P₄)が検出された。P₁~P₄は径約55cmの円形で、深さ20~43cmである。柱間の寸法は2.0~2.3mである。

方向 N-48°-E

覆土 P₁~P₄とも単一層である。P₁~P₃はローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量の黒褐色土であり、P₄はローム粒子・焼土粒子少量の暗褐色土である。柱痕は確認できなかった。



第69図 第1号櫛列跡実測図



第70図 第2号櫛列跡実測図



遺物 覆土中から土師器片14点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少なく細片であるため、不明である。

第2号構列跡(第70図)

位置 調査5区南西部, K12b区。

規模 直線上に、3か所のピット(P₁~P₃)が検出された。P₁~P₃は長径60~70cm, 短径45~55cmの楕円形で、深さ25~35cmである。柱間の寸法は1.8・1.9mで、南北方向に延びている。

方向 N-8°-E

覆土 5層からなる。P₁とP₃の覆土中に幅約20cmの、しまりの弱い黒褐色土(第1層)があり、柱痕と考えられる。第2~5層はロームや粘土を版築した埋土である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, 軟らかい
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量, ややしまりがある
- 3 黒褐色 粘土粒子少量, 粘土小ブロック微量, ややしまりがある
- 4 暗褐色 炭化粒子・粘土小ブロック少量, 粘土粒子微量, しまりがある
- 5 暗褐色 炭化粒子・粘土粒子少量, しまりがある

所見 本跡の時期は、出土遺物がないため不明である。

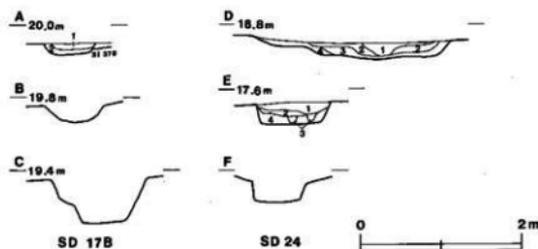
(4) 溝

第17B号溝(第71図, 付図2)

位置 調査5区中央部, I12区。

重複関係 第378・380・382・426号住居跡, 第6号地下式塙を掘り込んでおり, 第553・564号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 上幅65~140cm, 下幅45~60cm, 深さ20~55cm, 全長(19.5)mであり, 断面形はU字形である。第426号住居跡前で掘り込みが浅くなり確認できなくなるが, 5区の平成8年度調査区, 東部に第17号溝が確認されており, 位置的にみて接続する可能性がある。



第71図 第17B・24号溝断面図

主軸方向 I12j区から北東方向(N-60°-E)に、直線的に延びている。

覆土 堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, 粘土粒子微量

遺物 土師器片299点, 須恵器片10点, 碗状鉄滓1点, 礫1点が覆土中から出土しているが, 混入したものと考えられる。

所見 本跡の性格は不明である。時期は、出土遺物が細片で判断できず、不明である。重複している第378・

380・382・426号住居跡，第6号地下式竈より新しく，第553・564号土坑より古い。したがって上限は，第6号地下式竈の時期である中世であるが，下限は両土坑とも時期が不明であるため決定できない。枕状鉄滓は覆土中から出土しているが，鍛冶炉等は確認されていない。

第24号溝 (第71図，付図2)

位置 調査5区南部，K12区～J12区。

重複関係 第394号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅60～260cm，下幅50～90cm，深さ20～30cm，全長38.5mであり，断面形は逆台形状をしている。

主軸方向 K12c区から北東方向(N-80°-E)に，直線的に延びている。

覆土 堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片172点，須恵器片16点，陶器片3点，不明鉄製品1点，枕状鉄滓1点，砂岩1点が覆土中から出土している。いずれも本跡に伴うものではなく，混入したものと考えられる。

所見 本跡の性格は不明である。時期は，出土遺物が細片で，判断できる出土遺物がないため，不明である。古墳時代前期の第394号住居跡を掘り込んでいることから，それより新しい。したがって，上限は古墳時代前期と考えられる。枕状鉄滓が覆土中から出土しているが，鍛冶炉等は確認されていない。

(5) 井戸

第11号井戸〔SK-237〕(第72・73図)

位置 調査5区南西部，J12a区。

規模と形状 掘り方は漏斗状をしている。上部は平面形が長径2.18m，短径1.80mの楕円形で，確認面から約1.25mの深さまですばまっていき，下部は長径1.62m，短径1.33mの楕円筒形に掘り込まれている。本跡は，ローム層と常総粘土層を掘り込み，さらに砂質粘土層まで掘り込んでいる。水の滲出により，確認面下2.15mまでしか調査できなかったが，さらに下まで掘り込まれている。

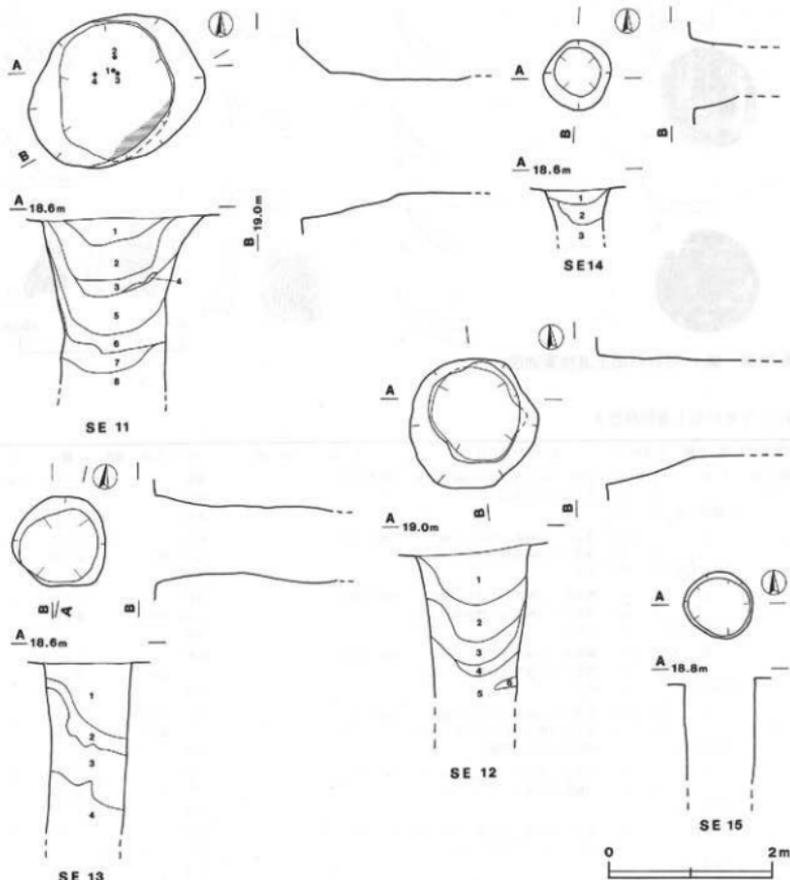
長径方向 N-58°-E

覆土 第1・2層は，廃棄後，埋没する段階での自然堆積と考えられる。第3～8層は，黒色土ブロック・粘土ブロックが含まれる堆積状況から，廃棄のため，人為的に埋め戻した覆土と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒色 黒色土ブロック・焼土粒子・炭化物・粒子少量，粘土小ブロック微量
- 3 黒褐色 炭化物多量，炭化粒子中量，焼土粒子・粘土小ブロック微量
- 4 黒色 黒色土ブロック
- 5 極暗褐色 黒色土ブロック・焼土粒子・砂粒少量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 砂粒中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・黒色土ブロック・粘土小ブロック少量
- 8 極暗褐色 焼土粒子・炭化物・粘土粒子微量

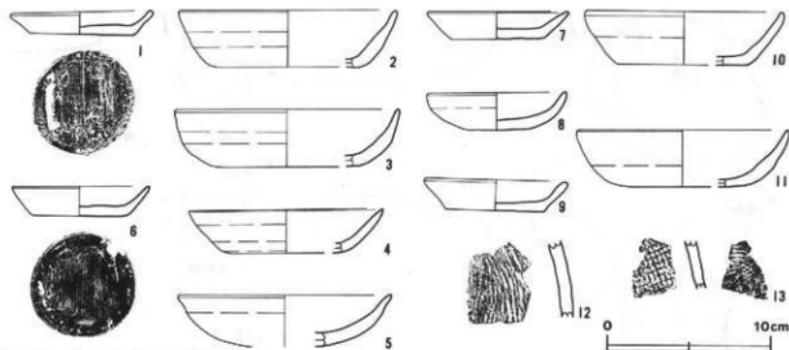
遺物 土師器片67点，土師質土器片260点，須恵器片12点，陶磁器片3点，礫2点が出土している。第73図1～11の土師質土器の皿は，第4層から出土している。土師質土器片は，いずれも皿の破片であり，そのほとんどが第4層及び第5層から出土している。いずれも一括投棄されたものと思われる。12・13は須恵器



第72図 第11・12・13・14・15号井戸実測図

甕の体部片である。12は第4層から出土しており、外面に縦位の平行叩きが施されている。13は覆土中から出土しており、外面に格子目叩きが施され、内面には同心円状の当て具痕が認められる。土師器片と須恵器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期を断定することは難しいが、形状や出土遺物から判断して鎌倉時代（13世紀以前）と考えられる。



第73図 第11号井戸出土遺物実測図

第11号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	甕 土師質土器	A 8.6	完形。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 橙色 良好	P 5169 100% P L 64 第4層
		B 1.6				
		C 6.4				
2	甕 土師質土器	A [13.4]	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 5170 10% 第4層
		B 3.5				
		C [9.2]				
3	甕 土師質土器	A [13.6]	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は内傾気味に立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 5171 10% 第4層
		B 3.6				
		C [9.2]				
4	甕 土師質土器	A [12.0]	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 5172 10% 第4層
		B 2.7				
		C [7.6]				
5	甕 土師質土器	A [13.0]	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	水挽き成形。	砂粒・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	P 5173 10% 第4層
		B (3.2)				
6	甕 土師質土器	A 8.3	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 5174 80% 第4層
		B 1.9				
		C 5.6				
7	甕 土師質土器	A 8.6	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 橙色 普通	P 5175 95% P L 64 第4層
		B 1.7				
		C 3.4				
8	甕 土師質土器	A 8.4	底部から口縁部一部欠損。丸底。体部から口縁部は内傾気味に立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒・赤色粒子・黒色粒子 にぶい橙色 普通	P 5176 70% P L 64 第4層
		B 2.3				
		C 3.8				
9	甕 土師質土器	A [8.6]	体部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 5177 60% 第4層
		B 1.9				
		C 6.0				
10	甕 土師質土器	A [12.0]	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 5178 30% 第4層
		B 3.8				
		C [8.0]				
11	甕 土師質土器	A [12.8]	体部から口縁部にかけての破片。 体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 5179 20% 第4層
		B 3.5				
		C [7.6]				

第12号井戸〔SK-283〕(第72図)

位置 調査5区西部, J12d区。

規模と形状 掘り方は漏斗状をしている。上部は平面形が径1.6mの円形で、確認面から約1.05mの深さまですばまっていき、下部は長径1.25m, 短径1.05mの楕円筒形に掘り込まれている。水の滲出により確認面下約2.0mまでしか調査できなかったが、本跡はローム層と常総粘土層を掘り抜き、さらに下まで掘り込んでいる。

長径方向 N-0°

覆土 調査できた範囲の覆土は、レンズ状に堆積しており、すべて自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 黒色粒子多量, 炭化物微量
- 2 黒色 黒色粒子多量, ローム粒子・砂粒微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 6 明暗褐色 粘土粒子多量

遺物 土師器の細片7点が覆土中から出土しているのみである。

所見 本跡の時期は、出土遺物が細片であるため不明である。

第13号井戸〔SK-378〕(第72図)

位置 調査5区南西部, J12h区。

規模と形状 掘り方はほぼ漏斗状をしている。上部は平面形が径約115cmの円形をしており、確認面から約95cmの深さまですばまっていき、下部は径96cmの円筒形に掘り込まれている。本跡は、ローム層と常総粘土層を掘り抜き、さらに下まで掘り込んでいる。確認面から2.0mの深さまで掘り下げた時点で水が滲出してきたため、それより下は調査できなかった。

覆土 調査できた範囲の覆土は、廃棄時に南側から埋め戻したブロック状の堆積をしており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒色 粘土粒子少量, 粘土小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 粘土粒子微量
- 3 黒色 粘土粒子微量
- 4 黒褐色 砂質粘土小ブロック少量

遺物 土師器片24点, 須恵器片3点, 礫1点が覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物が細片であるため不明である。

第14号井戸〔SK-557〕(第72図)

位置 調査5区南部, J13g区。

重複関係 第427号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘り方は漏斗状をしている。上部は平面形が径110~113cmの円形をしており、確認面から約75cmの深さまですばまっていき、下部は径75cmの円筒形に掘り込まれている。それより下部は、水の滲出により調査できなかったが、覆土の状況から、さらに掘り込まれていると推定できる。

覆土 調査できた範囲の覆土は、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子中量, ローム粒子少量, ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 炭化粒子中量, ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 土師器細片49点が覆土中から出土しているのみである。

所見 本跡の時期は、出土遺物が細片であるため不明であるが、6世紀後葉の第427号住居跡を掘り込んでいることから、それ以降と考えられる。

第15号井戸〔SK-558〕(第72図)

位置 調査5区南部, J13g4区。

規模と形状 掘り方はほぼ円筒形であり、上部は平面形が長径85cm, 短径74cmのほぼ円形, 確認面下1.35mから下は、径約75cmの円形をしている。水の滲出により確認面下約1.8mまでしか調査できなかったが、本跡はローム層と常総粘土層を掘り抜き、さらに下まで掘り込んでいる。

長径方向 N-0°

遺物 土師器細片14点が覆土中から出土しているのみである。

所見 本跡の時期は、出土遺物が細片であるため不明である。覆土は締まりが弱く、調査中に崩落してしまったので確認できなかった。

(6) 地下式墳

第5号地下式墳〔SK-216〕(第74図)

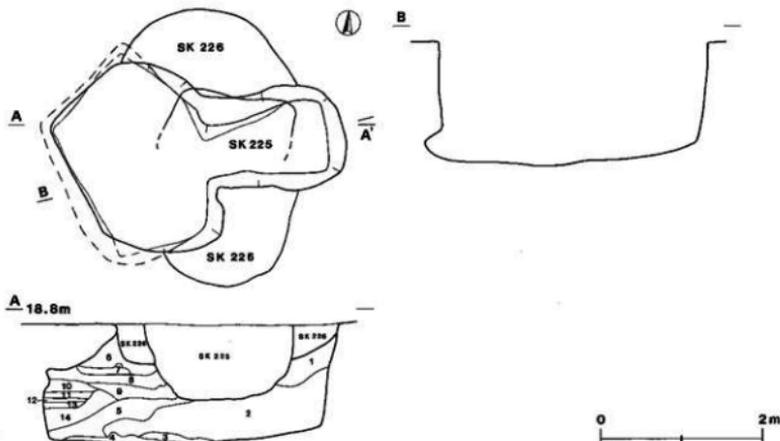
位置 調査5区西部, J12e4区。

重複関係 中央部を第225・226号土坑に掘り込まれている。

主軸方向 N-130°-W

竪坑 上面は長径1.75m, 短径1.31mの楕円形, 底面は長軸1.53m, 短軸0.84mの長方形で、深さ1.36mであり、平坦である。壁は外傾して立ち上がる。上面・底面とも長径・長軸は、主軸に対し斜交している。

主室 平面形は長軸2.28m, 短軸1.64mの長方形で、長軸は主軸に直交している。底面はほぼ平坦である。確



第74図 第5号地下式墳実測図

認面から底面までの深さは、1.50mである。主室底面は堅坑底面から、緩やかなスロープ状に下っている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側の天井部は一部遺存しており、底面から天井部までの高さは90cmで、天井部はおそらくドーム状を呈していたものと考えられる。

覆土 14層からなる。第1～4層は堅坑から傾斜した層であり、埋め戻した層と考えられる。その他の層からは、ローム・粘土ブロックが検出され、天井部の崩落土と考えられる。

土層解説

1	褐色	ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	褐色	ローム小ブロック・粘土小ブロック少量、炭化粒子微量
3	褐色	粘土小ブロック少量、ローム粒子微量
4	黒褐色	粘土小ブロック多量
5	黒褐色	粘土小ブロック微量
6	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7	褐色	粘土多量、ローム粒子・砂粒・灰微量
8	暗褐色	粘土中ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土小ブロック・灰微量
9	褐色	粘土小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
10	橙褐色	砂粒多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
11	暗褐色	砂粒中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
12	灰褐色	粘土中量
13	灰褐色	粘土・砂粒中量、ローム粒子微量
14	にがい褐色	粘土・砂粒中量、ローム小ブロック少量

所見 本跡は、出土遺物がないために、時期を断定することは難しいが、地下式墳という遺構の形態から判断して中世と考えられる。重複している第225・226号土坑より古い。地下式墳の性格については諸説あるところであるが、付近にはほぼ同時期と思われる中世の火葬墓が確認されており、墓域との関連性を考える必要があろう。

第6号地下式墳〔SK-235〕(第75図)

位置 調査5区西部、J12a区。

重複関係 主室の北部を第7号地下式墳に、堅坑から主室南部の上部を第17B号溝に掘り込まれている。

主軸方向 [N-58°-W]

堅坑 平面形は、上面は長軸1.50m、短軸1.11mの隅丸長方形、底面は長径1.35m、短径0.75mの楕円形である。長軸・長径をそれぞれ主軸に直交させている。深さは1.28mであり、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

主室 北部を第7号地下式墳に掘り込まれており、さらに、西部は調査区域外に位置しているために、全体は確認できなかった。底面はほぼ平坦である。確認面から底面までの深さは1.15mである。堅坑底面から主室底面までは、緩やかなスロープ状に下っている。

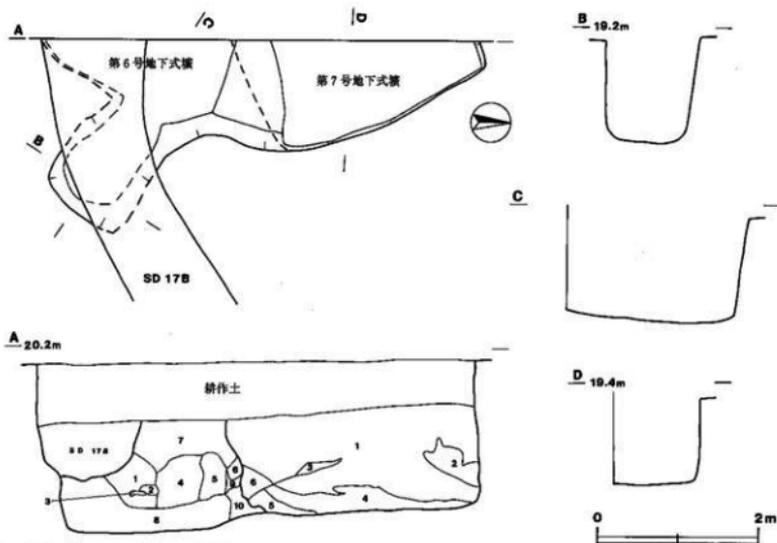
覆土 10層からなる。第10層はソフトロームの純層であり、天井部の崩落土の可能性はある。第1～9層はブロック状に堆積しており、天井部が崩落してから埋め戻したと考えられる。

土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量
2	黒褐色	粘土小ブロック中量、粘土中ブロック微量
3	黒褐色	ローム小ブロック・粘土小ブロック微量
4	黒褐色	ローム中・小ブロック・焼土粒子微量
5	黒褐色	ローム小ブロック少量、ローム大ブロック・粘土中ブロック微量
6	黒色	ローム粒子微量
7	黒褐色	ローム粒子・炭化物・粘土小ブロック微量
8	褐色	ローム粒子多量、ローム大ブロック・粘土大ブロック少量
9	黒色土	
10	ソフトローム	

遺物 土師器片61点、須恵器片2点が覆土中から出土している。いずれも混入したもので、本跡に伴うものではない。

所見 本跡の時期は、伴出遺物がなく、断定することは難しいが、地下式墳という遺構の形態から判断して中世と考えられる。重複している第7号地下式墳、第17B号溝より古い。性格については、付近に中世の火葬墓が確認されており、墓域との関連性を考える必要があろう。



第75図 第6・7号地下式墳実測図

第7号地下式墳〔SK-236〕(第75図)

位置 調査5区西部, J12区。

重複関係 南部で第6号地下式墳を掘り込んでいる。なお、西部は調査区域外に延びている。

主室 本跡の西部は調査区域外に延びており、堅杭部分が確認できなかったが、調査できた範囲での形態的類似から地下式墳と推定される。主室の底面はほぼ平坦であり、確認面から底面までの深さは1.15mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。天井部は確認できなかった。

覆土 6層からなる。ブロック状に堆積していることから、廃棄時に埋め戻したと考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土小ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック微量
- 5 黒褐色 粘土大ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム大ブロック微量

遺物 土器器片78点、須恵器片2点が覆土中から出土している。いずれとも混入したもので、本跡に伴うものではない。

所見 本跡の時期は、伴出遺物がなく、断定することは難しいが、地下式墳という遺構の形態から判断して中

世と考えられる。重複している第6号地下式墳より新しい。

(7) 土坑

ここでは、特に時期や性格の分かるものについて解説を加え、その他の土坑については一覧表に記載する。また、出土遺物については特徴的なもののみ掲載する。

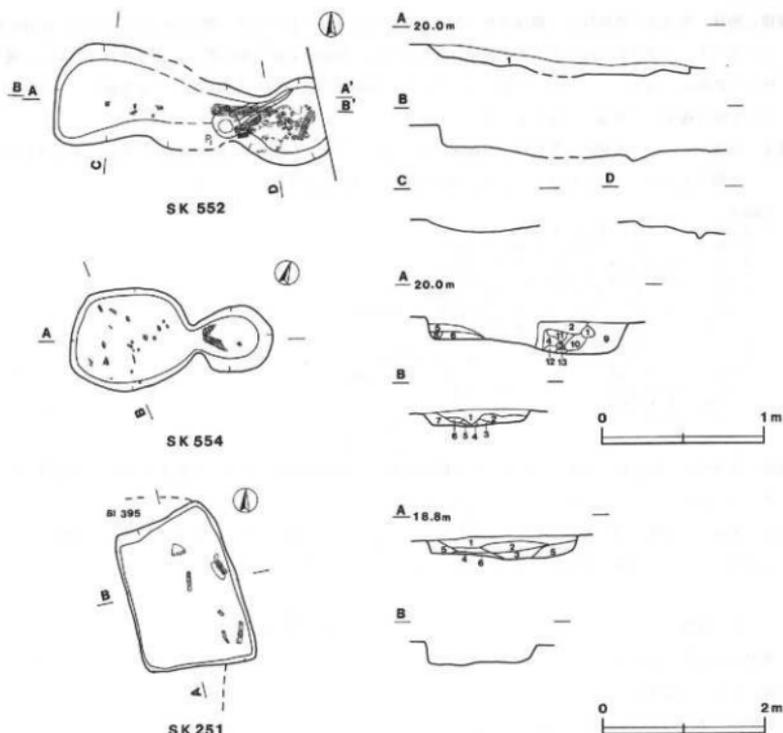
① 火葬施設

第552号土坑 (第76図)

位置 調査5区中央部, I13h区。

主軸方向 N-100°-E

規模と形状 吸気坑と燃焼坑から構成されており、それらが連結されている。吸気坑は長径1.15m, 短径0.53mの楕円形で、深さ約22cmである。燃焼坑は長径0.60m, 短径0.52mの楕円形で、深さ約18cmである。吸気坑から燃焼坑に向かって、緩やかなスロープ状になっている。燃焼坑の底面は、火熱を受けて赤変硬化して



第76図 第552・554・251号土坑実測図

いる。いずれも壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

ピット 吸気坑と燃焼坑との間にP₁が検出された。平面形は径約18cmの円形で、深さ約25cmである。性格は不明である。

覆土 単一層である。

土層解説

1 暗褐色 焼土ブロック・炭化材多量、炭化粒子中量、ローム粒子・灰・骨片・骨粉少量

遺物 燃焼坑から炭化材・焼土ブロックが多量、人骨片・人骨粉・灰が少量検出されている。土師器片3点も出土しているが、混入したものと考えられる。

所見 本跡は、遺構の形状と出土遺物から判断して、火葬のための施設と考えられる。時期は、判断できる出土遺物がないが、遺構の形態から中世と思われる。

第554号土坑（第76図）

位置 調査5区中央部、I13₁区。

主軸方向 N-68°-E

規模と形状 吸気坑と燃焼坑から構成されており、それらが連結されている。吸気坑は長径0.75m、短径0.63mの楕円形で、深さ約15cmである。燃焼坑は長径0.50m、短径0.40mの楕円形で、深さ約18cmである。吸気坑から燃焼坑に向かって、スロープ状になっている。燃焼坑の底面は、火熱を受けて赤硬化している。いずれも壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

覆土 13層からなる。各層から炭化粒子が検出されており、第11～13層からは焼土粒子が多量に検出されている。各層ともブロック状に堆積しており、埋め戻したと考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・灰微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・灰・骨片・骨粉少量、焼土粒子微量
- 7 にぶい褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 10 黒褐色 炭化粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量
- 11 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 12 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 13 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、炭化物少量、ローム粒子微量

遺物 燃焼坑から炭化材が多量、人骨片・人骨粉及び灰が少量検出されている。土師器片18点、須恵器片1点、鏃1点も出土しているが、混入したものと考えられる。

所見 本跡は、遺構の形状と出土遺物から判断して、火葬のための施設と考えられる。時期は、判断できる出土遺物がないが、遺構の形態から中世と思われる。

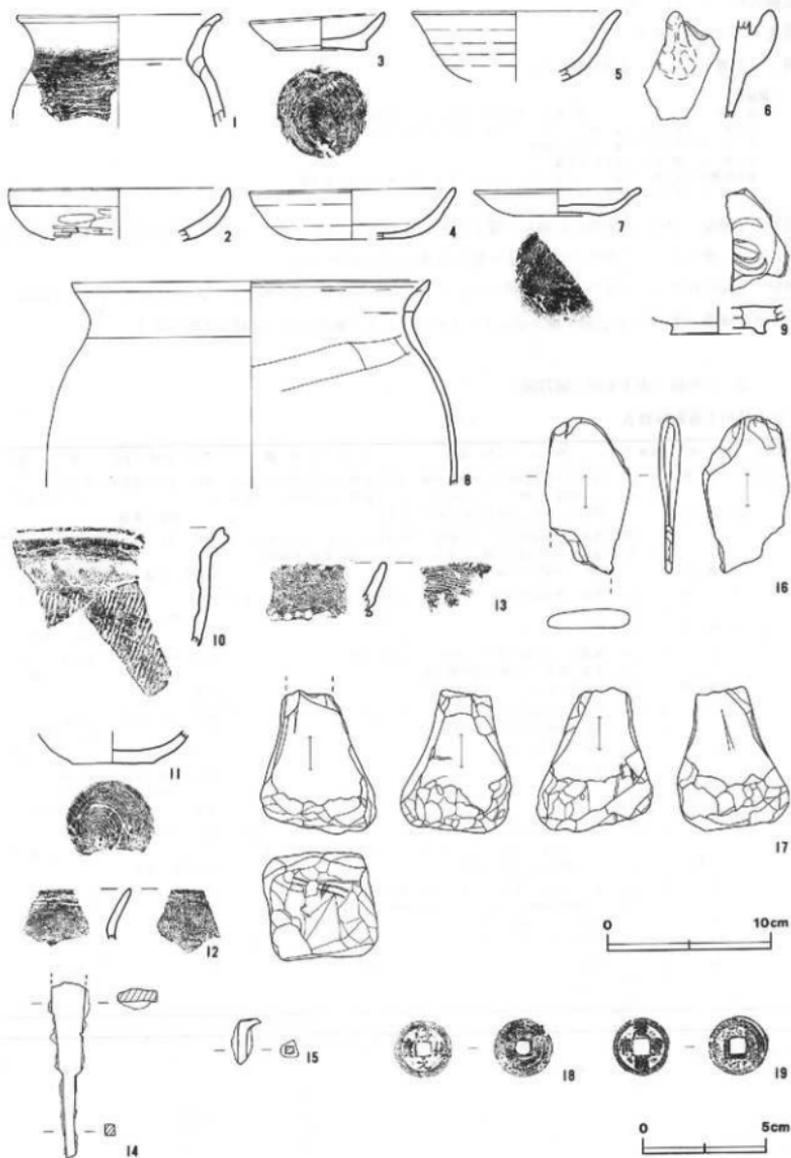
② 基壇

第251号土坑（第76図）

位置 調査5区西南部、K12_e区。

重複関係 第395号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸1.89m、短軸1.36mの長方形で、深さ30cmである。



第77图 5区土坑出土遗物实测图

長軸方向 N-14°-W

底面 はほぼ平坦である。

覆土 6層からなり、人為堆積である。

土層解説

- 1 灰暗褐色 流土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量、流土小ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 極赤褐色 炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 6 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、炭化物微量

遺物 土師器片52点、須恵器片17点が、覆土中から出土しているが、混入したものと思われる。他に、馬と思われ、歯の付いた下顎などの骨4点が覆土中層から出土している。

所見 本跡の性格は、土坑の形状と馬骨が出土していることから、馬を埋葬した土坑と考えられる。時期は、9世紀後葉の第395号住居跡を掘り込んでいるのでそれより新しいが、詳細は不明である。

③ その他(表4参照・第77図)

5区土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	小形 土師器	A [124]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面横位の平行印き、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪襷み肌。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P 5167 5% S K-217 覆土中
		B (6.9)				
2	土師器	A [13.6]	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に微もつ。	体部外面ヘラナゲ後ヘラ磨き、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・赤色粒子 黄褐色 普通	P 5168 5% S K-222 覆土中
		B (3.2)				
3	土師器	A 8.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部内・外面口ロナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 5180 100% P L 64 S K-238 覆土中
		B 2.3				
		C 5.6				
4	土師質土師	A [12.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	水洗き成形。	砂粒・黒色粒子 にぶい褐色 普通	P 5181 10% S K-239 覆土中
		B 3.1				
		C [7.0]				
5	土師器	A [12.8]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	体部外面口ロナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	P 5182 5% S K-239 覆土中
		B (3.8)				
6	土師器	B (6.6)	把手部片。	ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P 5184 5% P L 64 S K-241 覆土中
7	土師器	A [10.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	底部回転糸切り。体部内・外面口ロナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 浅黄褐色 普通	P 5185 50% S K-253 覆土中
		B 1.6				
		C 5.2				
8	土師器	A [22.0]	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外彎する。口唇部は上方につまみ上げられている。	体部内面ヘラナゲ。口縁部内・外面横ナデ。輪襷み肌。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P 5186 10% P L 64 S K-257 覆土中
		B (12.8)				
9	骨	B (1.7)	底唇片。	高台部削り出し。	砂粒 灰オリーブ色	P 5208 20% P L 64 S K-555 覆土中
		D [5.8]				
		E 0.7				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第77図14	鉄 鍔	7.3	1.4	0.5	(12.0)	S K-254 覆土中	M 5016
15	鉄 釘	1.9	0.3	0.3	2.24	S K-555 覆土中	M 5018
16	紙 石	(9.6)	5.2	1.2	(65.0)	S K-265 覆土中	Q 5006 ホルンフェルス
17	紙 石	(8.8)	7.1	6.8	(437.0)	S K-555 覆土中	Q 5007 砂 岩

図版番号	鉢名	初編年(西暦)	製造地名	出土地点	備考
第77図	漆化元寶	990	北宋	SK-223 覆土中	M5015 P L 64
19	元豊通寶	1078	北宋	SK-284 覆土中	M5017 P L 64

第77図10は、第251号土坑の覆土中から出土した須恵器鉢の体部から口縁部にかけての破片であり、体部外面に縦位の平行叩きが施されている。11は第270号土坑の覆土中から出土した土師器杯の底部であり、底部は回転糸切りである。12は第555号土坑の覆土中から出土した土師器塔の口縁部片であり、内・外面ハケ目調整が施されている。13は第555号土坑の覆土中から出土した土師器甕の口縁部片であり、内・外面ハケ目調整が施され、頸部に連続刺突文が認められる。

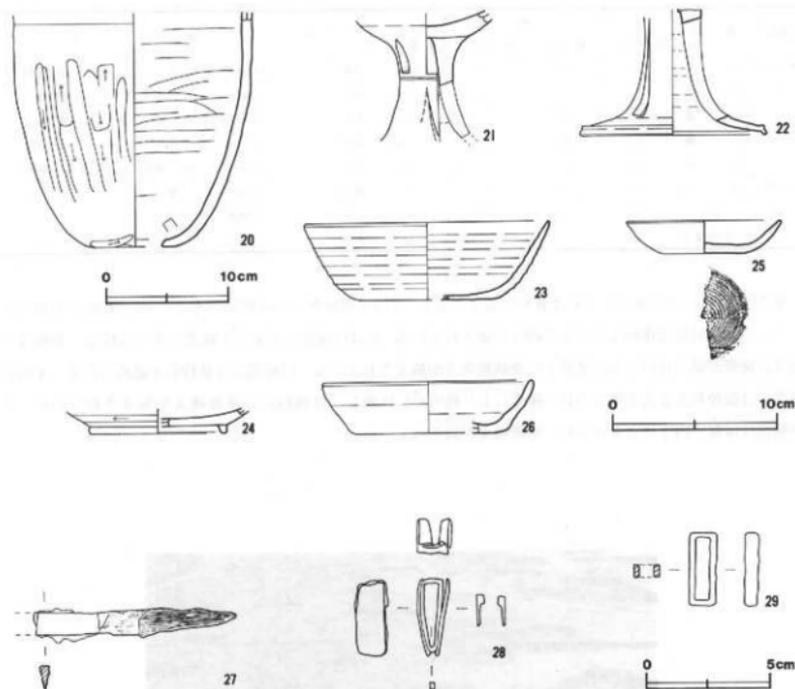
(8) 遺構外出土遺物(第78・79図)

5区遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第78図 10	増 土師器	B (11.0) C 1.7	体部、口縁部一部欠損。平底。体部は「球状」を呈し、中位に最大径をもつ。口縁部は外傾する。	底部ヘラ削り。体部外面、口縁部内・外面丁寧なヘラ磨き。体部外面ヘラナデ。体部外面、口縁部内・外面赤彩。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 5301 80% P L 99 SI-384 付近表探 古墳時代前期
11	小形増 土師器	A [8.2] B (8.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は「球状」を呈し、中位に最大径をもつ。口縁部はやや外傾する。	体部外面下位ヘラナデ。上位ヘラ磨き。内面ナデ。口縁部内・外面丁寧なヘラ磨き。体部外面、口縁部内・外面赤彩。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	P 5017 20% P L 99 表探 古墳時代前期
12	器台 土師器	B (3.0)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。器受部中心に一つの円孔が穿たれている。	脚部外面、器受部丁寧なヘラ磨き。脚部外面、器受部赤彩。輪轆み痕。	砂粒・雲母・長石 赤褐色 普通	P 5203 30% 表探 古墳時代前期
13	器台 土師器	B (5.0) C [9.4]	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英・黒色粒子 にぶい橙色 普通	P 5302 30% P L 99 表探 二次焼成 古墳時代前期
14	杯 土師器	A [10.6] B 3.6	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。輪轆み痕。	砂粒・雲母・長石・ 白色粒子 明赤褐色 普通	P 5196 40% SI-380 付近表探 古墳時代後期
15	杯 土師器	A 11.2 B 4.1	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 橙色 普通	P 5197 75% P L 99 SI-432 付近表探 古墳時代後期
16	杯 土師器	A 11.4 B 4.3	底部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 5192 85% P L 99 表探 古墳時代後期
17	杯 土師器	A [14.4] B (4.3)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい黄褐色 普通	P 5193 30% SI-439 付近表探 古墳時代後期
18	杯 土師器	A [13.6] B 4.0	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 にぶい橙色 普通	P 5194 40% SI-401 付近表探 古墳時代後期
19	杯 土師器	A [13.6] B 3.4	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 5195 40% 表探 古墳時代後期
第79図 20	甕 土師器	B (19.1) C [7.0]	底部から体部中位にかけての破片。単孔式。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P 5306 30% 表探 古墳時代後期 体部外面僅付着



第78图 5区遗物出土物实测图(1)



第79図 5区遺構外出土遺物実測図(2)

図取番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 21	高 坏 須恵器	B (8.0)	脚部から坏部にかけての破片。脚部は円柱状を呈し、上下二段三方に三角形透かしをもつ。坏部はやや外傾して立ち上がる。	脚部内・外面、坏部内・外面クロコナデ。	砂粒・長石・赤色粒子・小礫 灰色 良好	P 5200 20% SI-381 付近表採 古墳時代後期 (6世紀後半)
22	高 盤 須恵器	B (7.7) C 11.4	脚部片。脚部は円柱状を呈し、三方に三角形透かしをもつ。脚部は強く開く。	脚部内・外面クロコナデ。	砂粒・白色粒子 褐色 普通	P 5199 20% P L 99 SI-424 付近表採 奈良時代 (8世紀後半)
23	坏 須恵器	A [15.0] B 4.8 C [8.0]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P 5198 20% SI-440 付近表採 奈良時代(8世紀後半)
24	椀 灰釉陶器	B (1.6) D [8.4] E 0.5	高台部から底部にかけての破片。平底。短い高台が付く。	底部は回転ヘラ削り後ナデ。高台部貼り付け後ナデ。	砂粒・長石 胎土 にふい橙色 種 灰白色 普通	P 5207 5% SI-425 付近表採 平安時代(皇紀中継) 奈良時代(8世紀後半) 奈良遺跡館 11号器式
25	小 皿 土師器	A [9.4] B 2.0 C 5.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	底部回転糸切り。体部内・外面クロコナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 浅黄褐色 普通	P 5205 25% 表採 平安時代 (10世紀後半)
26	皿 土師質土器	A [12.8] B 3.2 C [9.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は外傾して立ち上がる。	水洗き成形。	砂粒・雲母・赤色粒子 にふい褐色 普通	P 5204 40% 表採 中世

図版番号	種別	計 画 値				出土地点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第78頁1	測片	5.9	5.6	2.2	58.0	表採	Q 5008 安山岩 旧石器時代
6	石 鏃	2.5	1.7	0.4	1.06	表採	Q 5009 PL102 チャート 縄文時代
7	石 鏃	(2.7)	1.6	0.4	(1.22)	表採	Q 5010 PL102 頁 岩 縄文時代
8	石 鏃	(2.4)	1.9	0.4	(1.36)	表採	Q 5011 チャート 縄文時代
9	石 棒	21.2	4.8	2.3	235.0	表採	Q 5012 PL100 緑泥片岩 砥石転用 縄文時代
第79頁27	刀 子	(8.1)	0.9	0.3	(9.35)	表採	M 5019 鉄 製
28	距	3.1	1.3	0.2	8.1	表採	M 5020
29	不明金属製品	3.0	1.1	0.5	4.22	表採	M 5021

第78図2から5は縄文土器の深鉢形土器片である。2は早期後葉の口縁部片と考えられ、条痕文が施文されている。口唇部は棒状工具による押圧が施されている。3は口縁部片で茅山下層式と考えられる。条痕文を地文に隆帯が貼り付けられ、隆帯上に連続刺突文が施文されている。口縁部には補修孔が認められる。4の口縁部片は加曾利EⅢ式と考えられ、隆帯により楕円形に区画し、区画内には単節縄文が施文されている。5の胴部片は堀ノ内I式と考えられ、単節縄文が施されている。



7区完掘状況

3 7区の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

① 古墳時代

第529号住居跡(第80・81図)

位置 調査7区中央部, M11f区。

規模と平面形 長軸4.90m, 短軸4.75mの方形である。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は35~40cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅20cm, 下幅10cm, 深さ6cmで、断面形はU字形をしており、全周している。

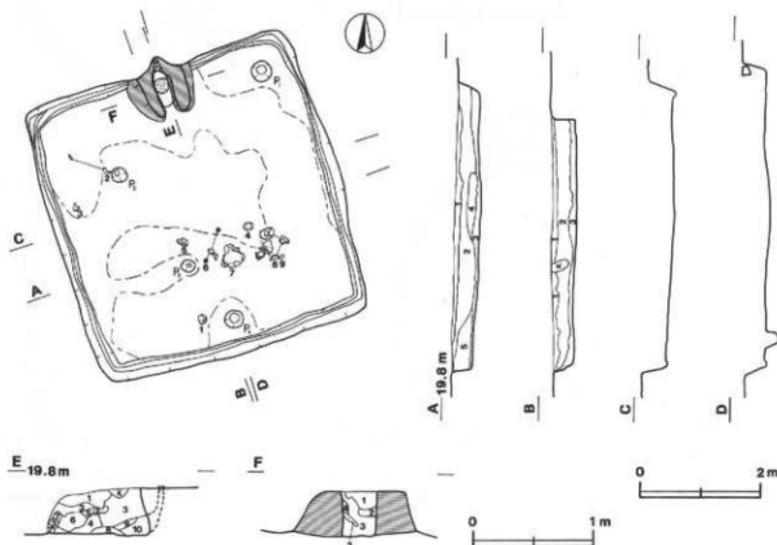
床 はほぼ平坦で、全体的によく踏み固められている。特に、東側が硬化している。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで80cm, 両袖幅100cmである。天井部は崩落しており、第3層と第4層が崩落土と考えられる。火床部は赤変硬化している。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化しゴツゴツしている。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

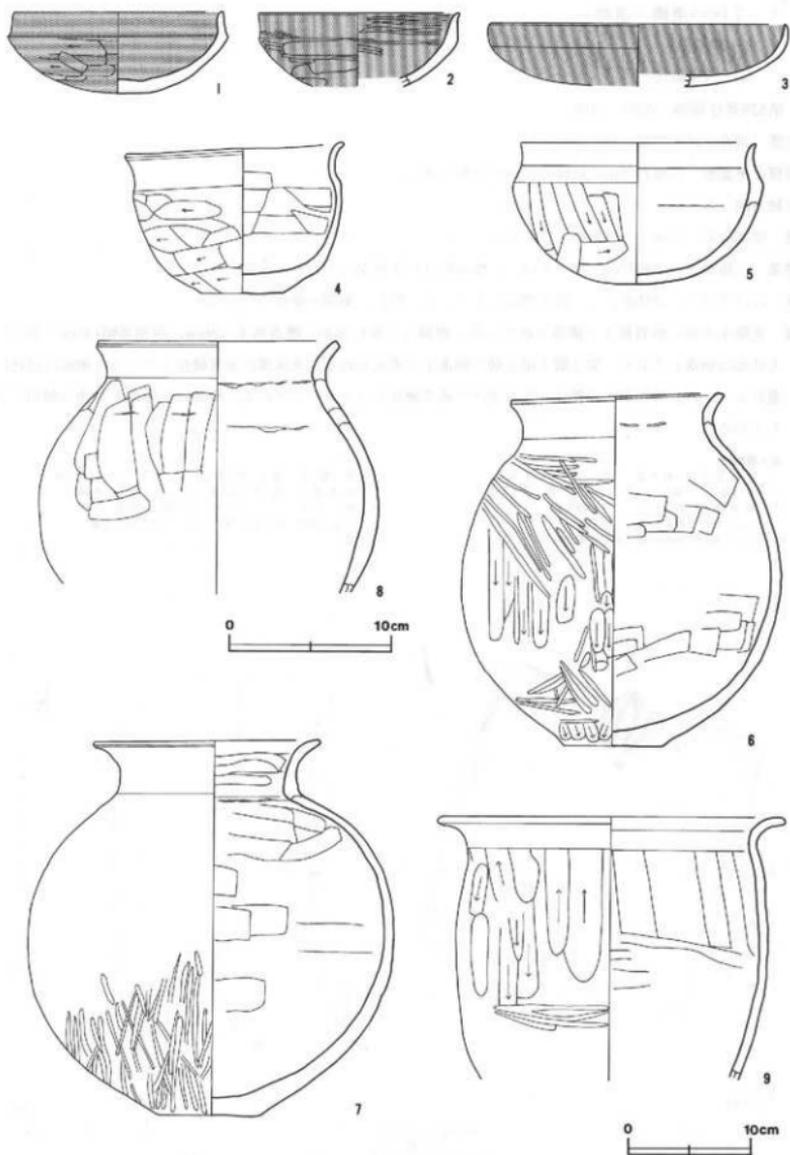
竈土層解説

- 1 明褐色 砂粒多量
- 2 暗褐色 褐色土中量
- 3 明黄褐色 粘土ブロック・砂粒多量
- 4 にぶい褐色 粘土粒子・砂粒多量
- 5 にぶい褐色 砂粒多量, 焼土粒子中量

- 6 黒褐色 焼土・炭化粒子中量, 焼土小ブロック少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック微量
- 8 褐色 ローム小ブロック中量, 炭微量
- 9 にぶい褐色 粘土粒子多量, 焼土・炭化粒子中量
- 10 粘土



第80図 第529号住居跡実測図



第81图 第529号住居跡出土遺物実測図

ピット 4か所 (P₁~P₄)。北東コーナーにあるP₁は径30cmの円形で、深さ25cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP₄は径40cmの円形で、深さ18cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₂とP₃は、性格不明である。

覆土 5層からなり、各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。第3層と第4層から土師器片が多量に出土している。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中・小ブロック微量、軟らかい
- 3 褐色 ローム小ブロック・粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、軟らかい
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片500点、須恵器片14点、炭化物が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第81図1の坏は南壁際の床面から逆位で出土している。2と3の坏は北西コーナー部の覆土下層から出土している。4の碗は正位で、5の碗は逆位で中央部の床面から出土している。6と7の壺は中央から南側の覆土中層から土圧で押しつぶされた状態で出土している。8と9の壺は中央部からやや南東側の覆土中層から出土している。竈火床部からは炭化した種子が出土している。種子の種類は不明である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀後葉と考えられる。

第529号住居跡出土遺物観察表

図号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	坏 土師器	A 13.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P7008 80% P L 65 南壁際床面
		B 5.0				
2	坏 土師器	A 12.4	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へラ削り後、へラ磨き。内面へラ磨き。口縁部内・外面丁寧なへラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・小石・赤色粒子 にぶい褐色	P7009 70% P L 65 北西コーナー部覆土下層
		B (4.5)				
3	坏 土師器	A [18.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部はほぼ直立する。	体・口縁部外面へラナデ後、丁寧なへラ磨き。内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 良好	P7010 20% 北西コーナー覆土下層
		B (3.8)				
4	碗 土師器	A 13.4	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は外反する。	底・体部外面へラ削り、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・小石・長石 にぶい赤褐色 普通	P7011 95% P L 65 中央部床面
		B 9.4				
		C 5.0				
5	碗 土師器	A [14.4]	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へラ削り、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轍み痕。	砂粒・雲母・小石・赤色粒子 明黄褐色 普通	P7012 60% 中央部床面
		B 8.8				
6	壺 土師器	A 17.0	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	底部へラ削り後丁寧なへラ磨き。体部外面縦位のへラ削り後へラ磨き。内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轍み痕。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P7013 70% P L 65 南側覆土中層
		B 23.8				
		C 8.2				
7	壺 土師器	A 18.5	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	底部へラ削り。体部外面下位へラ磨き。内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轍み痕。	砂粒・雲母・小石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7014 70% P L 65 南側覆土中層
		B 30.6				
		C 8.0				
8	壺 土師器	A 14.8	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は外反する。	体部上位外面へラ削り、中位へラナデ。内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪轍み痕。	砂粒・長石・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P7015 50% P L 65 南側覆土中層
		B (15.5)				
9	瓶 土師器	A 27.5	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。口縁部は大きく外反する。	体部外面縦位のへラ削り、一部へラ磨き。内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P7016 60% P L 65 南側覆土中層
		B (21.5)				

第533号住居跡 (第82~84図)

位置 調査7区西部, M11e区。

重複関係 南東部が第534号住居跡に掘り込まれているが, 床面までは達していない。

規模と平面形 長軸3.42m, 短軸3.35mの方形である。

主軸方向 N-34°-W

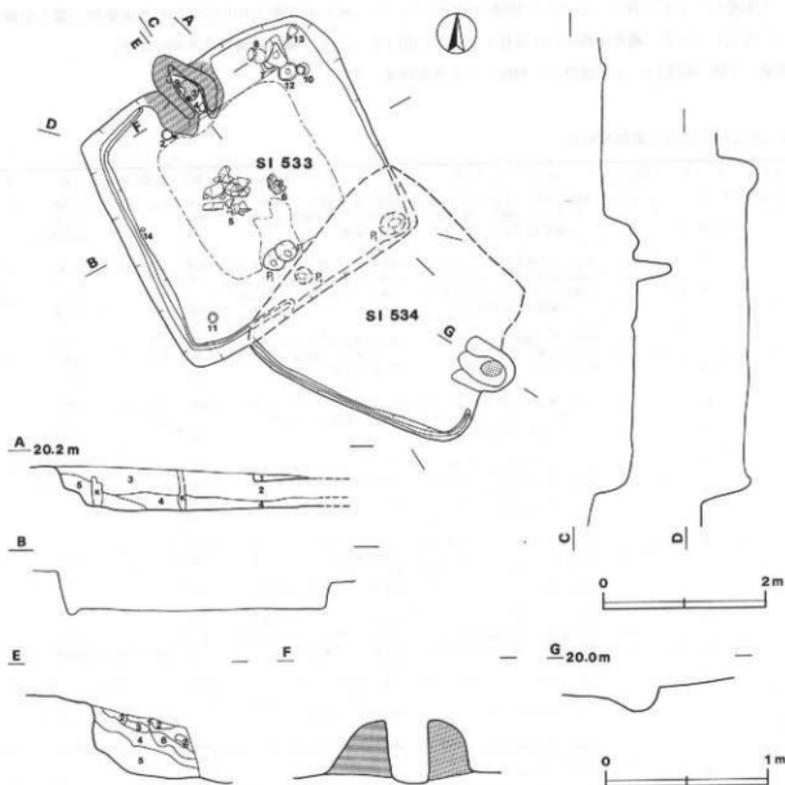
壁 壁高は30~55cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下から南壁下にかけて確認された。上幅20~30cm, 下幅7~10cm, 深さ約8cmで, 断面形はU字形をしている。

床 はほぼ平坦で, 中央部が特に踏み固められている。

竈 北西壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は, 焚口部から煙道部まで90cm, 両袖部幅80cmである。

火床部は, 床面を約8cm掘りくぼめており, 赤変硬化している。天井部は崩落しており, 第5層が崩落土と



第82図 第533・534号住居跡実測図

考えられる。袖部は良好に遺存している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土師器片が出土している。

覆土層解説

- 1 褐色 焼土粒子少量
2 褐色 焼土粒子中量
3 褐色 焼土粒子多量

- 4 褐色 砂粒多量、焼土粒子中量
5 暗褐色 砂粒中量、焼土粒子少量
6 赤褐色 焼土粒子・砂粒中量

ピット 4か所 (P₁~P₄)。南東コーナーにあるP₁は径30cmの円形で、深さ12cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南東壁際にあるP₄は径20cmの円形で、深さ11cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₂とP₃は、性格不明である。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。第1層は第534号住居跡の覆土である。

土層解説

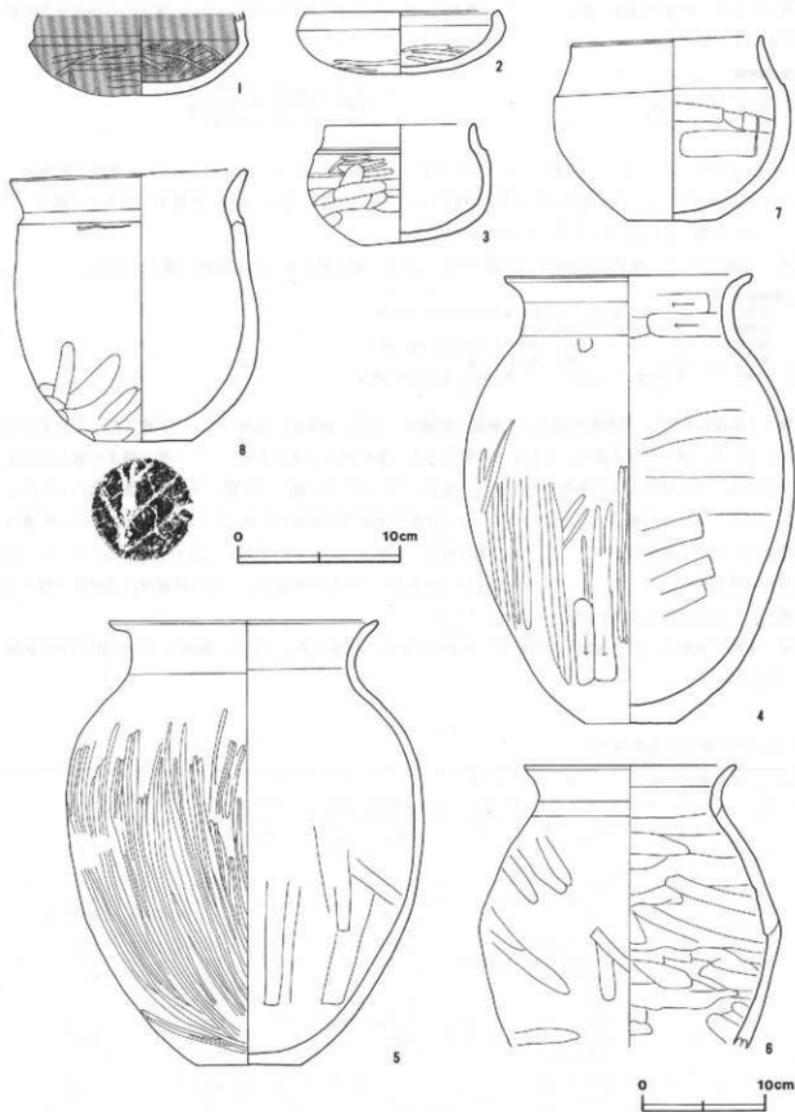
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 (第534号住居跡の覆土)
2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量、軟らかい
4 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
5 明褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片429点、須恵器片23点、土製品(紡錘車)1点、銅製品(耳飾り)1点、礫1点、炭化米が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第83図1の坏は南西コーナー部の覆土中層から出土している。2の坏は正位で竈西側の床面から出土している。3の椀と4の甕、9の小形甕は竈内から出土している。5と6の甕は土圧で押しつぶされた状態で中央部の床面から出土している。7と8の小形甕は横位で、10の小形甕は正位で、12と13の甕は逆位で北東コーナー部の床面から出土している。7と8の西側から炭化米が出土している。11の鉢は逆位で南西コーナー部の床面から、14の紡錘車は西壁際の覆土下層から、15の耳飾りは覆土中層から出土している。

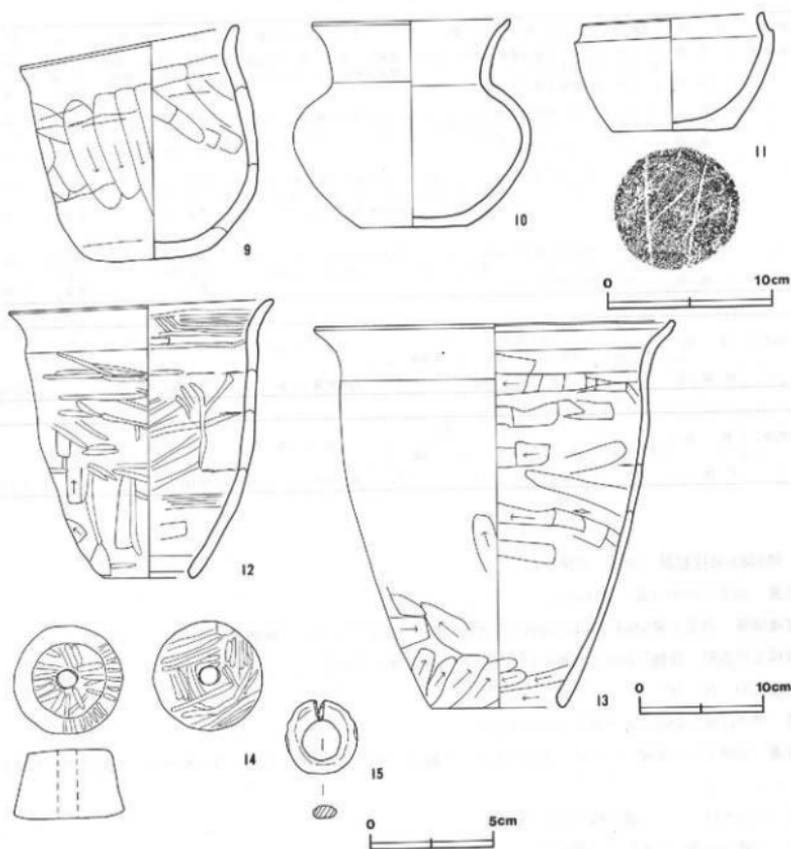
所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀中葉から後葉と考えられる。重複している第534号住居跡より古い。

第533号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	坏 土師器	B (5.0)	口唇部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	体部外面へう削り後へう磨き。内面丁寧なへう磨き。口縁部外面横ナデ。内面丁寧なへう磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子 赤褐色 普通	P7022 60% P.L.66 南西コーナー覆土 中層
2	坏 土師器	A 12.0 B 3.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面ヘラナゲ後へう磨き、内面ナゲ後へう磨き。口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・雲母・石英・ 赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7023 100% P.L.66 竈西側床面
3	椀 土師器	A 9.1 B 7.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面へう削り後へう磨き、内面ナゲ。口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通	P7024 95% P.L.66 竈内
4	甕 土師器	A 20.4 B 36.6 C 7.4	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、最大径を中位にもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	底部へう削り。体部外面へう磨き、内面ヘラナゲ。口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P7025 80% P.L.66 竈内
5	甕 土師器	A 22.1 B 36.3 C 8.5	体部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、最大径を中位にもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	底部へう削り。体部外面へう磨き、内面ヘラナゲ。口縁部内・外面横ナゲ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P7026 80% P.L.66 中央部床面



第83图 第533号住居跡出土遺物実測図(1)



第84図 第533号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第83図 6	壺 土 師 器	A [17.2] B (23.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は樽形をしており、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。 口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	P7027 50% P L 66 中央部床面
7	小形壺 土 師 器	A 11.5 B 11.4 C 5.4	平底。体部は球体状で、中位に最大径をもつ。口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	底部外面ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・小石・赤色 粒子 におい褐色 普通	P7028 100% P L 66 東コーナー 床面 外面煤付着
8	小形壺 土 師 器	A 14.4 B 16.8 C 6.0	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は外反する。	底部木炭痕。体部外面下位ヘラ削り、中位から上位ヘラナデ。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・石英・赤色 粒子 におい褐色 普通	P7029 100% 北東コーナー床面 外面煤付着
第84図 9	小形壺 土 師 器	A 13.6 B 14.0 C 6.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外反する。	底部ヘラ削り。体部外面縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	雲母・長石・小石・ 赤色粒子 褐色 普通	P7030 100% P L 66 壺内

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第84図 10	小形 土師器	A 122	平底。体部は横長の球形で、中に最大径をもつ。胴部でくびれ、口縁部は外反する。	底部へう割り。体・口縁部外面摩滅が甚だしい。内面ナデ。	長石・小石・赤色粒子にふい褐色普通	P7031 90% P L66 北東コーナー床面
		B 127				
		C 6.6				
11	鉢 土師器	A 11.1	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に段を有する。口縁部は内傾する。	底部木葉痕。体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・小石・赤色粒子 明赤褐色 普通	P7032 80% P L66 南西コーナー床面
		B 7.1				
		C 7.4				
12	瓶 土師器	A 21.4	無底式。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面へう割り後へう磨き。内面へうナデ後へう磨き。口縁部外面横ナデ。内面丁家なへう磨き。	砂粒・赤色粒子にふい褐色普通	P7033 100% P L66 北東コーナー床面
		B 22.7				
		C 7.0				
13	瓶 土師器	A 33.2	無底式。体部は外傾して立ち上がり、上位でやや内彎する。口縁部は外傾する。	体部外面下位へう割り。内面へうナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	P7034 80% P L67 北東コーナー床面
		B 31.3				
		C 10.8				

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
14	紡錘車	4.4	2.8	0.8	61.0	西壁障壁土下層	D P7001 P L102

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
15	耳飾り	3.0	2.9	0.5	6.45	覆土中層	M7001 P L66

第538A号住居跡 (第85~87図)

位置 調査7区中央部, M11e区。

重複関係 西部が第536A・536B・538B号住居跡に掘り込まれているが、床面までは違っていない。

規模と平面形 長軸5.40m, 短軸 [4.9]mの長方形と推定される。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は30~38cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北壁下から東壁下にかけて確認された。上幅20~30cm, 下幅6~10cm, 深さ約8cmで、断面形はU字形をしている。

床 はほぼ平坦で、よく踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm, 両袖部幅100cmである。

天井部は崩落しており、第2層から第4層が崩落土と考えられる。火床部は赤変硬化している。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化しゴツゴツしている。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

覆土層解説

- 1 板障 褐色 焼土粒子多量、砂粒少量
- 2 壁 色 山砂が焼けている
- 3 砂 層
- 4 にふい褐色 砂粒多量
- 5 壁 色 砂粒多量、焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 6 にふい褐色 焼土粒子中量
- 7 赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁からP₃は径約20cmの円形で、深さ20~30cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP₄は径50cmの円形で、深さ36cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 9層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

土層解説

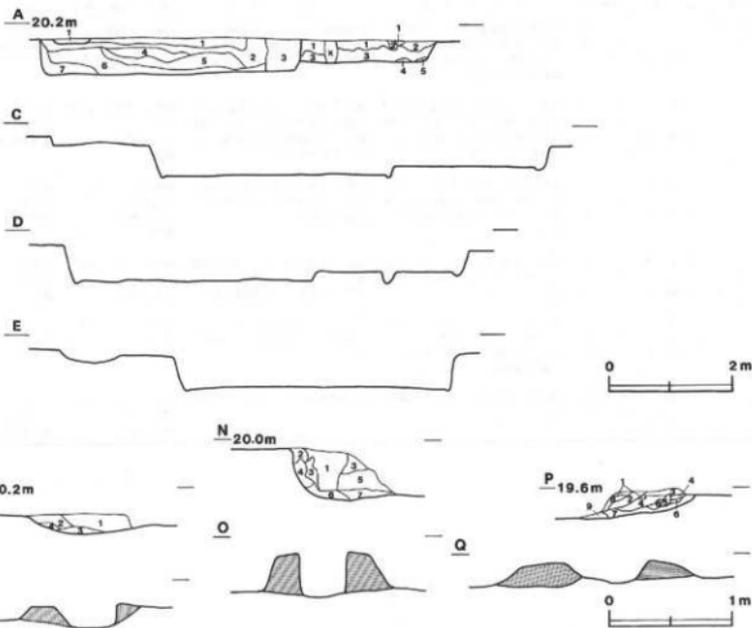
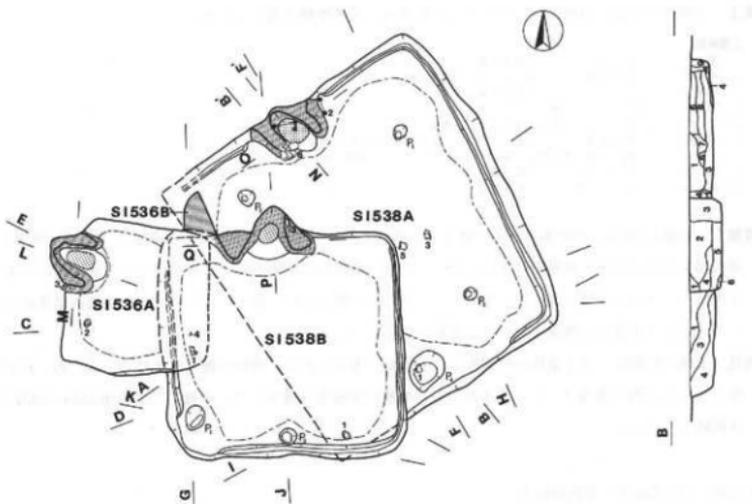
- 1 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量
- 2 明褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック微量、散らかい
- 3 明褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 明褐色 ローム小ブロック少量
- 5 黒色 ローム中ブロック・粒子少量、炭化粒子微量
- 6 黄褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 7 黄褐色 ローム粒子多量、粘土粒子少量、ローム中・小ブロック微量、散らかい
- 8 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 9 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 土師器片283点、須恵器片26点、礫1点、骨片が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第87図1の坏は正位で南壁際の床面から、2の椀は竈東側の床面から、3の小鉢と5の櫃は逆位で中央部の床面から、4の小形甕は竈内から出土している。6の櫃は土圧で押しつぶされた状態で竈西袖部前から出土している。火床部から獣骨と思われる骨片が出土している。

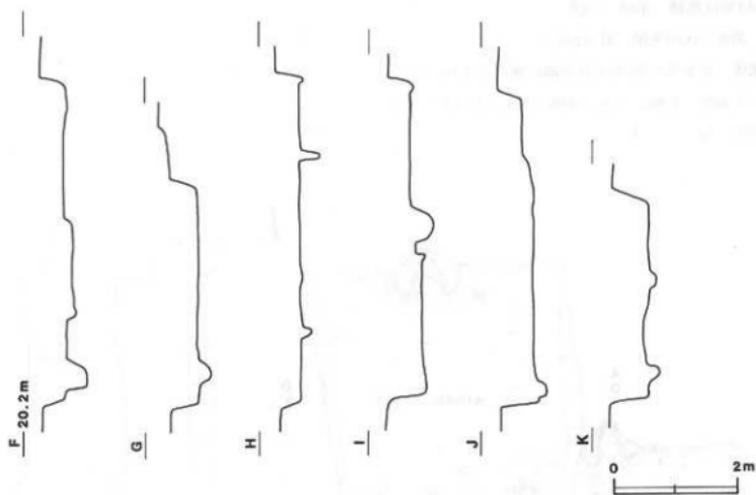
所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀と考えられる。西部が掘り込まれているため、わずかに残存していた北西と南西コーナーを手がかりに規模と平面形を推定した。重複している第536A・536B・538B号住居跡より古い。

第538A号住居跡出土遺物観察表

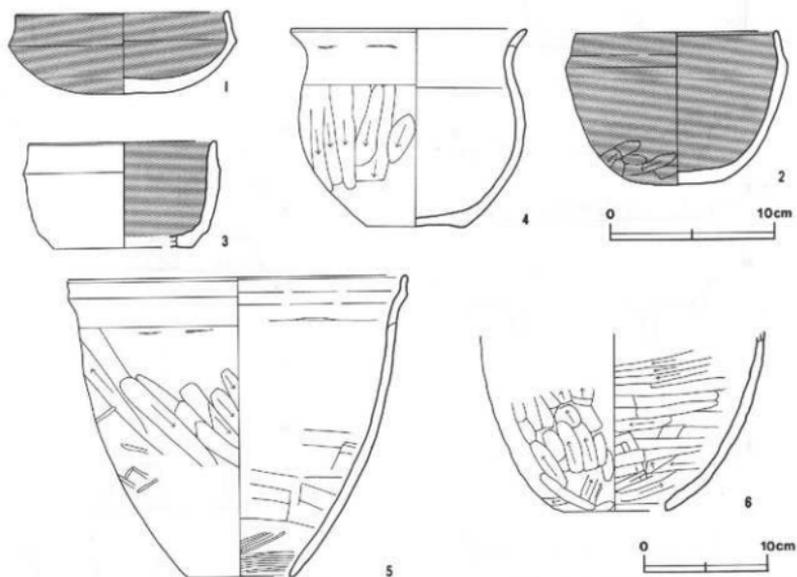
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 1	坏 土師器	A [130] B 5.0	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラナダ、内面横ナダ。口縁部内・外面横ナダ。内・外面黒色処理。	砂粒・赤色粒子にぶい橙褐色 普通	P7050 40% 南壁際床面
2	椀 土師器	A [122] B 9.4 C 6.0	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	底部ヘラ削り。体部外面下位ヘラ削り。体部外面ヘラナダ、内面横ナダ。口縁部内・外面横ナダ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・白色粒子にぶい橙褐色 普通	P7051 50% P L.67 竈東側床面
3	小形体 土師器	A 11.5 B 6.5 C [8.4]	底部から口縁部にかけて一部欠損。平底。体部・口縁部はほぼ直立し、体部と口縁部の境に稜をもつ。	底部ヘラ削り。体部内・外面ヘラナダ。口縁部内・外面横ナダ。内面黒色処理。	砂粒・長石・石英・赤色粒子にぶい橙褐色 普通	P7052 50% P L.67 中央部床面
4	小形甕 土師器	A 14.4 B 12.2 C 6.0	平底。体部は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	底部ヘラ削り後ナダ。体部外面縦位のヘラ削り、内面ナダ。口縁部内・外面横ナダ。輪襷み痕。	砂粒・小石・赤色粒子にぶい橙褐色 普通	P7053 60% P L.67 竈内
5	瓶 土師器	A [27.6] B 24.5 C [8.4]	無底式。体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	体部内・外面丁寧なヘラナダ。口縁部内・外面横ナダ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・石英・橙褐色 普通	P7054 45% P L.67 中央部床面
6	瓶 土師器	B (14.5) C 8.4	無底式。体部片。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り、内面横位のヘラナダ。	砂粒・長石・石英・赤色粒子にぶい橙褐色 普通	P7055 50% P L.68 竈西袖部前



第85图 第536A·536B·538A·538B号住居跡实测图(1)



第86图 第536A・536B・538A・538B号住居跡实测图(2)



第87图 第538A号住居跡出土遺物实测图

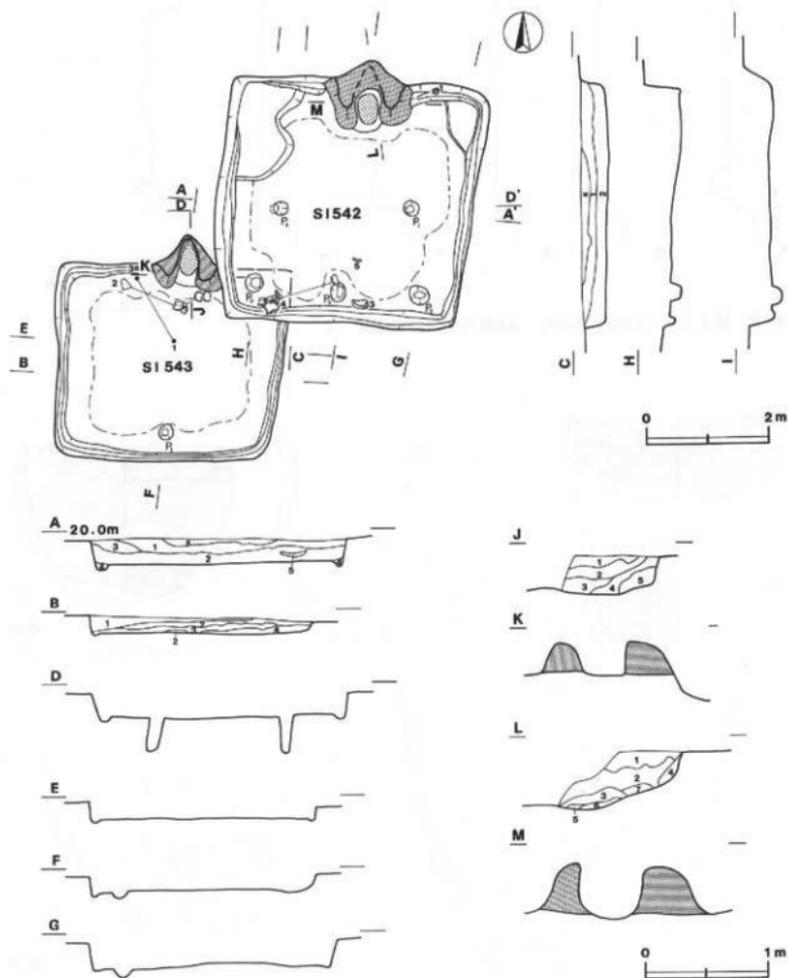
第543号住居跡 (第88・89図)

位置 調査7区中央部, M11g区。

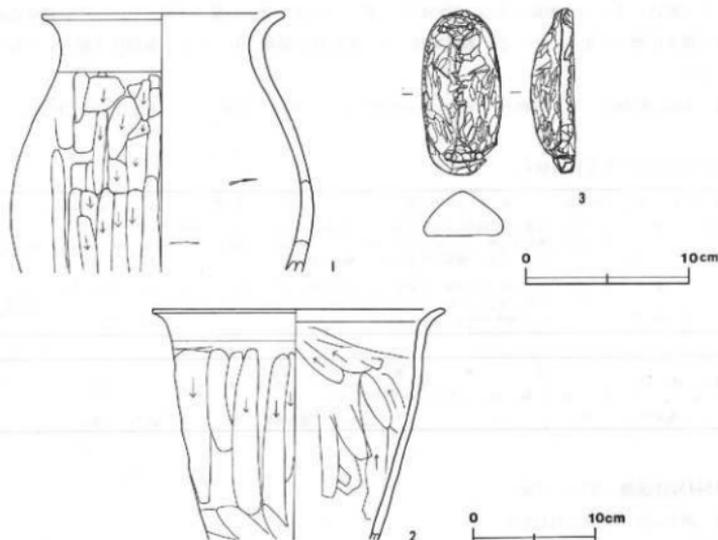
重複関係 北東部が第542号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.80m, 短軸3.25mの長方形である。

主軸方向 $N-3^{\circ}-E$



第88図 第542・543号住居跡実測図



第89図 第543号住居跡出土遺物実測図

壁 壁高は22~32cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第542号住居跡と重複している部分は確認できなかったが、全周していたと推定される。上幅15~20cm、下幅4~10cm、深さ約5cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、よく踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。東袖部外側の一部は、第542号住居跡に掘り込まれている。規模は、焚口部から煙道部まで80cm、両袖部幅100cmと推定される。火床部は、床面を約6cmほど掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層と第4層が崩落土と考えられる。西袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化してしている。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。竈構築材として炭化材が使用されている。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子多量、炭化粒子・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、粘土ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・粘土ブロック多量、炭化粒子中量 | 5 暗赤褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量 | | |

ピット 南壁際にあるP₁は径20cmの円形で、深さ13cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------|----------------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量、軟らかい |
| 4 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子中量 |

遺物 土師器片163点、須恵器片28点、石製模造品1点、礫1点、陶器片1点、炭化材が出土している。図示

した土器はいずれも土師器である。第89図1の甕と2の甔は甕前の覆土下層から、3の石製模造品は甕西側の覆土中層から出土している。甕構築材として炭化材が使用されている。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀と考えられる。重複している第542号住居跡より古い。

第543号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	甕 土師器	A [15.0] B (16.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内傾して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面縦位のヘラ削り、内面横ナダ。口縁部内・外面横ナダ。輪轆み痕。	砂粒 にぶい棕色 普通	P7078 10% 甕前覆土下層
2	甔 土師器	A [23.8] B (19.1)	体部下位欠損。体部・口縁部一部欠損。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。口縁部内・外面横ナダ。	砂粒・雲母・赤色 紋子 棕色 普通	P7079 60% 甕前覆土下層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
3	石製模造品	10.2	4.9	2.7	1800	甕西側覆土中層	Q7001 滑石 P.L69

第544号住居跡 (第90・91図)

位置 調査7区中央部, M11h区。

重複関係 第13号獨立柱建物跡の柱穴に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.45m, 短軸3.28mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は10~30cmで、外傾して立ち上がる。

床 南壁際の一部が攪乱を受けている。ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

甕 北壁中央からやや東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで60cm, 両袖部幅80cmである。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。第5層がこれに相当する。天井部は崩落しており、第2層が崩落土と考えられる。東袖部は地山を土台にして砂質粘土を貼り、さらに外側に補強材として土師器甕片が使用されている。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。覆土から多量の土師器片が出土している。

甕土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|-----------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量 | 5 赤褐色 | 焼土ブロック |
| 2 褐色 | 砂粒少量, 焼土粒子中量 | 6 赤褐色 | 焼土粒子・砂粒中量 |
| 3 赤褐色 | 砂粒・焼土粒子多量 | 7 橙褐色 | 焼土粒子多量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子中量 | | |

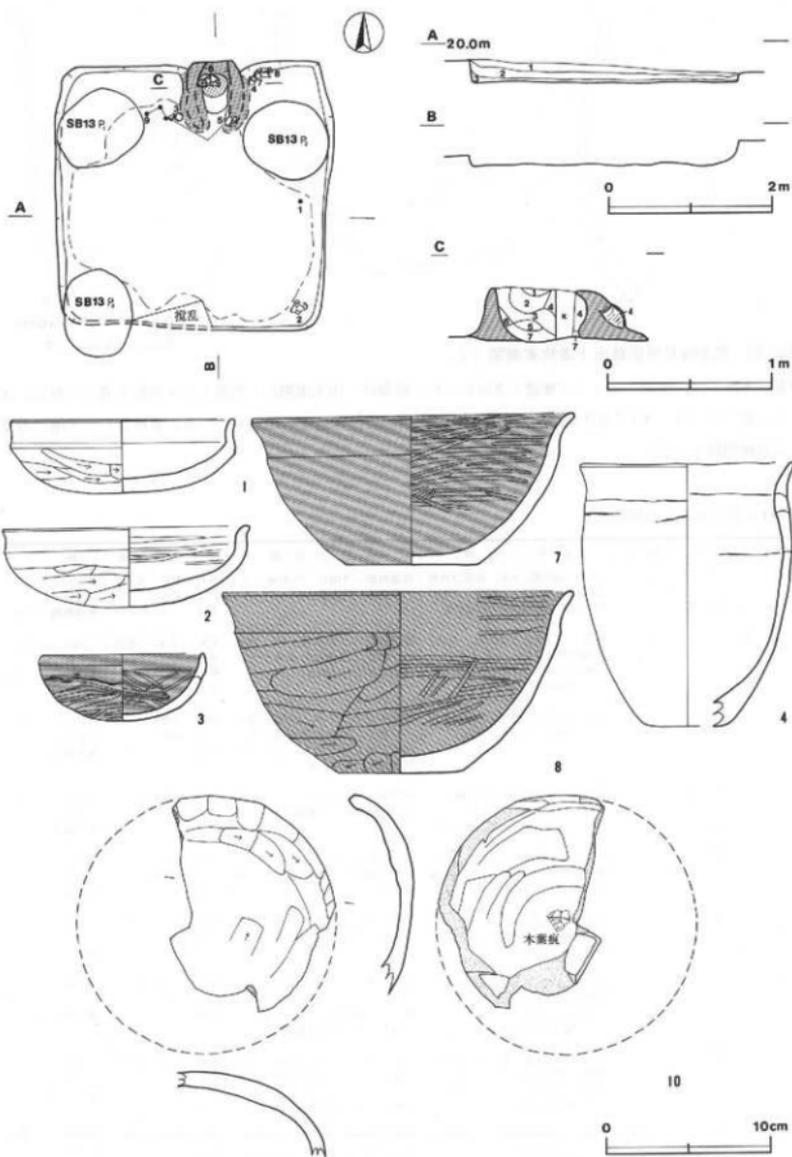
覆土 3層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

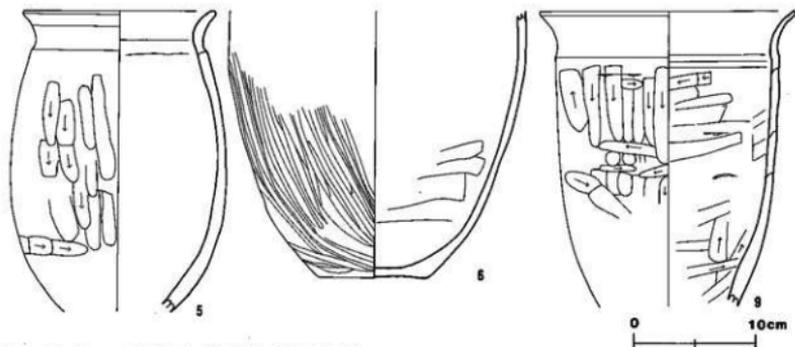
- | | | | |
|-------|-------------------|------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量 | 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 軟らかい |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物 土師器片336点, 須恵器片18点, 陶器片1点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。

第90・91図1の甔は正位で東壁際の覆土下層から、2の甔は逆位で南東コーナー部の床面から、3の甔は逆位で甕西側の床面から出土している。4の小形甕は甕東袖部の補強材として使用されたと考えられる。5の甕は東袖部から、9の甔は甕西側の床面から、6の甕が甕の火床部から、7と8の鉢は横位で甕東側の床面から出土している。10は器種不明である。陶器片は混入したものと考えられる。



第90图 第544号住居跡・出土遺物実測図(1)



第91図 第544号住居跡出土遺物実測図(2)

所見 本跡では、壁溝とピットは確認できなかった。時期は、出土遺物から判断して6世紀と考えられる。10の土器の作りは、第435号住居跡から出土している須恵器特殊扁壺に類似している。重複している第13号獨立柱建物跡より古い。

第544号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	首径(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	土師器 坏	A 13.7	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石にふい橙褐色普通	P 7080 95% P L 69 東屋際覆土下層
		B 4.6				
2	土師器 坏	A [15.2]	体部から口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや外反する。	体部外面へラ削り後ナデ、内面へラ磨き。口縁部外面横ナデ、内面丁寧なへラ磨き。	砂粒・小石・赤色粒子にふい橙褐色普通	P 7081 60% P L 69 南東コーナー床面
		B 4.9				
3	土師器 坏	A 10.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面へラナデ、内面丁寧なへラ磨き。口縁部外面横ナデ、内面丁寧なへラ磨き。内・外面黒色処理。輪積み痕。	砂粒・雲母にふい橙褐色普通	P 7082 100% P L 69 甕西側床面
		B 4.0				
4	土師器 小形壺	A 13.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ。口縁部は外反する。	体部内・外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・赤色粒子にふい褐色普通	P 7083 50% P L 69 甕東袖部内
		B 16.2				
		C [4.6]				
第91図 5	土師器 壺	A [15.8]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、頸部でくびれ。口縁部は外反する。	体部外面へラ削り、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・石英にふい黄褐色普通	P 7084 40% P L 69 甕東袖部
		B (24.5)				
6	土師器 壺	B (21.8)	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	底部丁寧なへラ磨き。体部外面丁寧なへラ磨き、内面へラナデ。	砂粒・雲母・長石にふい橙褐色普通	P 7085 50% P L 69 甕火床部
		C 8.9				
第90図 7	土師器 鉢	A [19.7]	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は外反する。	底部へラナデ。体部外面へラ削り後へラナデ、内面丁寧なへラ磨き。口縁部内・外面丁寧なへラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・赤色粒子にふい橙褐色普通	P 7086 60% P L 69 甕東側床面
		B 9.2				
		C 8.0				
8	土師器 鉢	A [21.3]	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は外反する。	底部へラナデ。体部外面へラ削り後へラナデ、内面丁寧なへラ磨き。口縁部内・外面丁寧なへラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・小石・赤色粒子にふい橙褐色普通	P 7087 50% P L 69 甕東側床面
		B 11.2				
		C 7.6				
第91図 9	土師器 瓶	A [21.0]	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面縦位と横位のへラ削り、内面下位へラ削り、中位から上位横位のへラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・長石・石英にふい橙褐色普通	P 7088 20% 甕西側床面
		B (24.1)				

第550号住居跡（第92図）

位置 調査7区西部，N10a区。

規模と平面形 長軸5.70m，短軸5.45mの方形である。

主軸方向 N-24°-W

壁 壁高は45～65cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅20～30cm，下幅9～15cm，深さ約10cmで，断面形はU字形をしており，全周している。

床 ほぼ平坦で，中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は，焚口部から煙道部まで120cm，両袖部幅100cmである。

火床部は，床面を約7cm掘りくぼめており，赤変硬化している。天井部は崩落しており，第2層が崩落土と考えられる。袖部はトレンチャーによる攪乱を受けているため，遺存状態が悪い。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- 1 にぶい褐色 焼土粒子・砂粒少量
- 2 にぶい褐色 砂粒・粘土ブロック多量，焼土中ブロック中量
- 3 赤褐色 焼土粒子・砂粒中量，ザクザクしている

ピット 6か所（P₁～P₆）。P₁からP₄は径60cmの円形で，深さ60cmであり，規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP₅とP₆は径約40cmの円形で，深さ約25cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 14層からなり，堆積状況から人為堆積と考えられる。第14層は焼土ブロックと粘土ブロックが混じり合った覆土であり，竈袖部の一部が流れ込んだものと考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量，軟らかい
- 4 褐色 黒色土多量，ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 6 明褐色 褐色土多量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量，焼土中ブロック・焼土粒子微量
- 8 褐色 ローム小ブロック多量
- 9 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 10 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
- 11 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子多量
- 12 褐色 黒色土多量，ローム粒子・焼土粒子少量
- 13 褐色 焼土粒子少量，炭化粒子中量
- 14 褐色 焼土中ブロック・粘土ブロック・砂粒多量，焼土粒子・炭化粒子中量

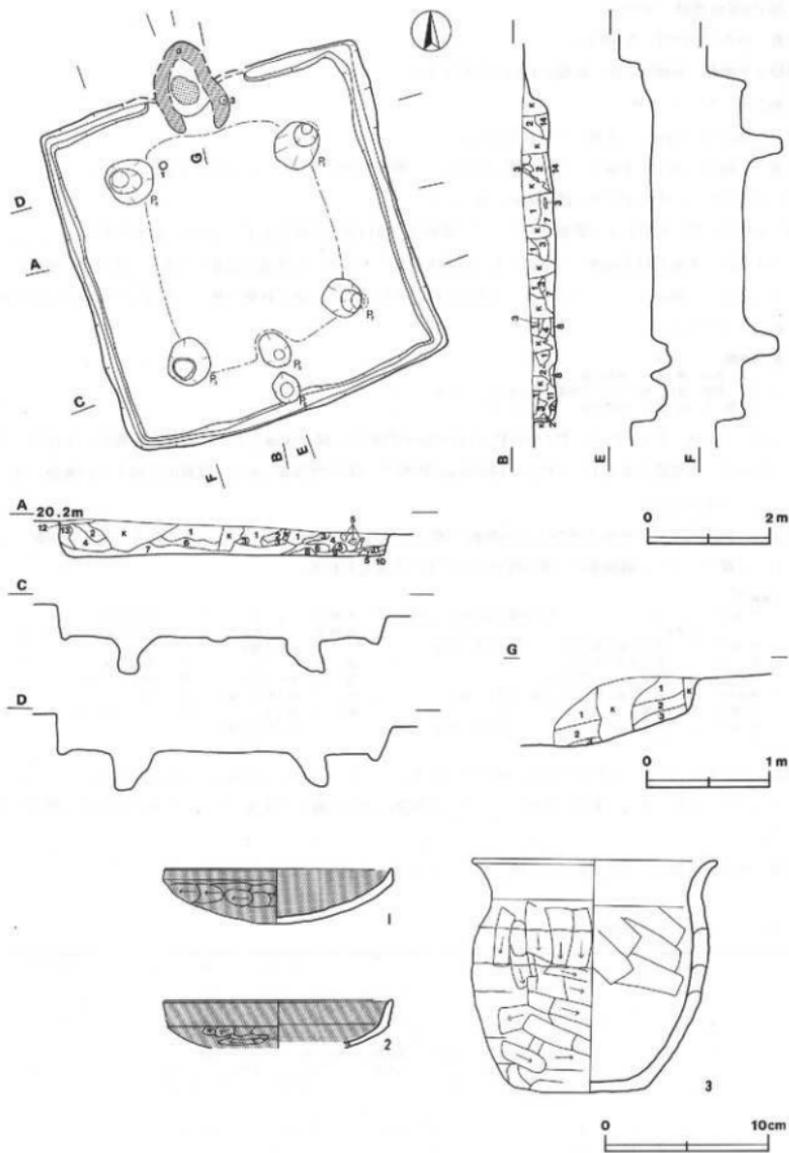
遺物 土師器片582点，須恵器片35点，礫14点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第92

図1の坏は正位でP₄の東側の床面から，3の小形甕は逆位で竈前の床面から，2の坏は南西側の覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は，出土物から判断して7世紀前葉と考えられる。

第550号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・産成	備考
第92図 1	坏	A 14.1 B 3.4	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立する。	体部外面ヘラ削り，内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 褐色 普通	P7105 100% P.L70 P.東側床面
	土師器					
2	坏	A [14.0] B (29)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラ削り後，ヘラナデ。内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒 にぶい褐色 普通	P7106 5% 南西側覆土中層
	土師器					
3	小形甕	A 14.4 B 14.3 C 7.6	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり，最大径を中位にもつ。頸部でくびれ，口縁部は外反する。	底部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。稜のみ赤。	砂粒・雲母・小石・ 赤色粒子 褐色 普通	P7107 95% P.L70 竈前床面
	土師器					



第92図 第550号住居跡・出土遺物実測図

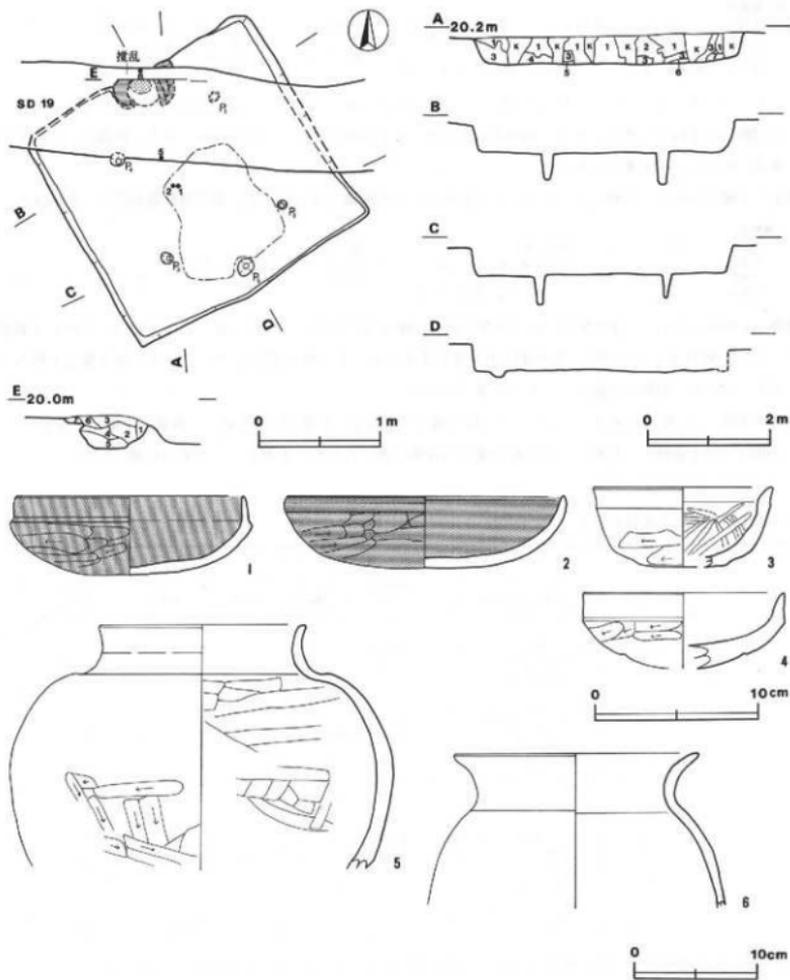
第553号住居跡 (第93図)

位置 調査7区西部, M10h区。

重複関係 北部を第19号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 [4.3]m, 短軸 [4.1]mの方形と推定される。

主軸方向 N-29°-W



第93図 第553号住居跡・出土遺物実測図

壁 壁高は43~53cmで、外傾して立ち上がる。第19号溝と重複している部分は確認できなかった。

床 はほぼ平坦である。中央から南側にかけて、特に踏み固められた硬化面が残存している。

竈 北西壁中央部に砂質粘土で構築されている。トレンチャーによる攪乱を受けているため、遺存状況は悪い。規模は、焚口部から煙道部まで95cm、両袖部幅95cmと推定される。第5層の下部が焼土ブロックでゴツゴツしているため、火床部と考えられる。火床部は亦変硬化している。天井部は崩落しており、第2層と第4層が崩落土と考えられる。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土中ブロック多量、焼土粒子少量 | 5 黒褐色 | 焼土ブロック・焼土粒子多量、粘土中量 |
| 2 暗褐色 | 砂粒多量・焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量 | 6 褐色 | ローム粒子・焼土粒子多量 |
| 3 褐色 | 焼土粒子・炭化粒子多量 | 7 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子中量 |
| 4 褐色 | 砂粒多量、焼土中ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量 | | |

ピット 5か所(P₁~P₅)。P₁からP₄はいずれも径約18cmの円形で、深さ約50cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP₅は径25cmの円形で、深さ14cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層からなる。各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。第7層は竈袖部の一部である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|-------|---------------------------|
| 1 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | 5 褐色 | ロームブロック |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量 | 6 褐色 | ローム小ブロック多量 |
| 3 明褐色 | ローム小ブロック多量 | 7 明褐色 | ローム大・中ブロック・ローム粒子・粘土ブロック中量 |
| 4 明褐色 | ローム大・中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量 | | |

遺物 土器器片402点、須恵器片17点、陶器片18点、礫31点が出土している。図示した土器はいずれも土器器である。第93図1と2の坏、5の甕は中央部の床面から、6の甕は竈内から、3と4の坏は覆土中層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡では、壁溝は確認できなかった。壁が確認できなかった部分は、床質から規模と平面形を推定した。時期は、出土遺物から判断して6世紀中葉から後葉と考えられる。重複している第19号溝より古い。

第553号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第93図1	坏	A 140 B 49	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P7116 95% P L 70 中央部床面
	土器器					
2	坏	A [170] B 44	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は垂直に立ち上がる。	体部外面へラ削り後へラ磨き、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P7117 30% 中央部床面
	土器器					
3	坏	A [110] B 49 C [54]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部へラ削り。体部外面へラ削り、内面了草なへラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P7118 50% P L 70 覆土中層
	土器器					
4	坏	A [122] B 47	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P7119 30% 覆土中層
	土器器					
5	甕	A [124] B (15.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、上位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面へラ削り後へラナデ、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 粒子 褐色 普通	P7120 30% P L 70 中央部床面
	土器器					
6	甕	A [98] B (12.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部内・外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい黄褐色 普通	P7121 10% 竈内
	土器器					

第559号住居跡 (第94~96図)

位置 調査7区西部, N11c区。

重複関係 南西コーナー部が第571号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.62m, 短軸5.10mの長方形である。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は18~48cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅8~20cm, 下幅4~10cm, 深さ約6cmで, 断面形はU字形をしている。

床 はほぼ平坦で, 全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は, 焚口部から煙道部まで100cm, 両袖部幅95cmである。天井部は崩落しており, 第2層が崩落土と考えられる。第6層の下部がゴツゴツしているため, 火床部と考えられる。火床部は, 赤変硬化している。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は, 火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

- 1 褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 2 灰い黄褐色 粘土・焼土ブロック多量
- 3 褐色 焼土中ブロック・焼土粒子多量, ゴツゴツしている
- 4 焼土ブロック
- 5 灰い黄褐色 焼土ブロック中量
- 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ゴツゴツしている
- 7 褐色 焼土粒子・砂粒中量

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁からP₄は径約20cmの円形で, 深さ約55cmであり, 規模と配置から支柱穴と考えられる。南壁際にあるP₅は径24cmの円形で, 深さ28cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり, 堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

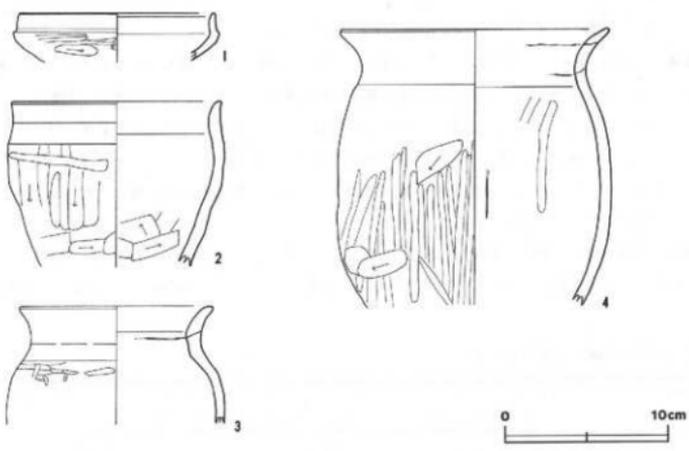
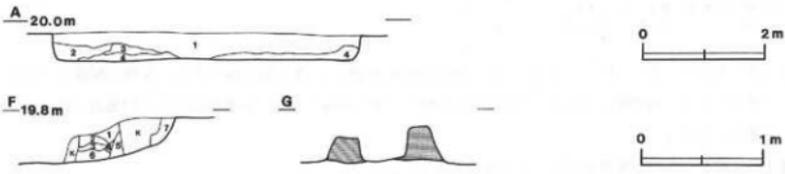
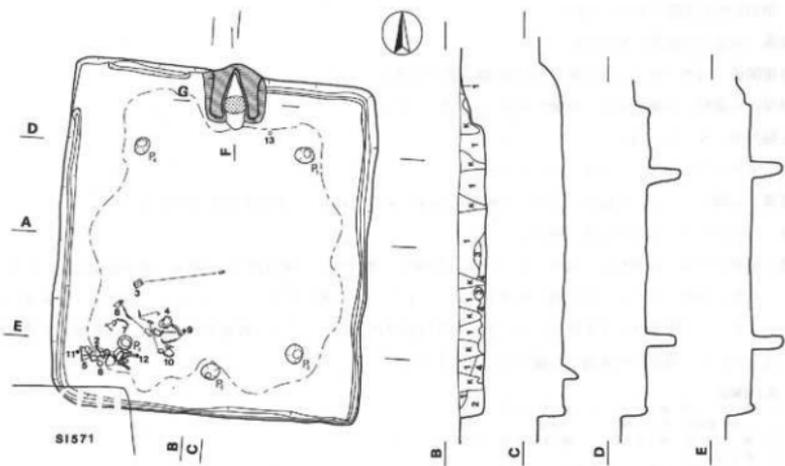
- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 硬い
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 褐色 焼土小ブロック多量
- 4 褐色 暗褐色土多量, ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量

遺物 土師器片801点, 須恵器片38点, 土製品(管玉, 支脚)2点, 鉄滓4点, 陶器片3点, 礫8点が出土している。出土遺物のほとんどが南西部の覆土上層に集中しており, 出土状況から判断して, 投棄されたものと考えられる。図示した土器はいずれも土師器である。第94~96図2の小形甕, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11の甕, 12の甕, 3の小形甕; 鉄滓は集中して出土したものの一部である。1の坏は南東側の覆土下層から, 13の管玉は南東側の覆土下層から, 14の支脚は南西側の覆土下層から出土している。陶器片は混入したものと考えられる。

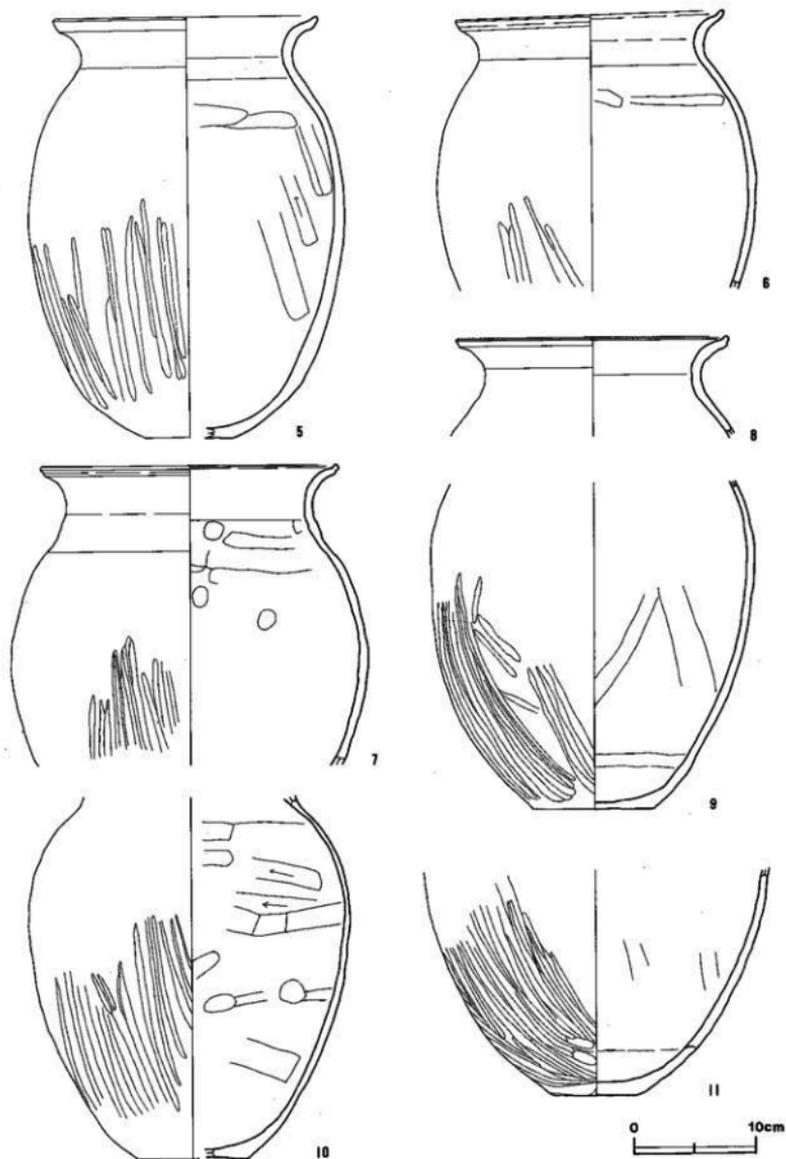
所見 本跡の覆土上層から鉄滓が出土しているが, 出土状況から判断して, 本跡に伴う遺物とは考えられない。時期は, 出土遺物から判断して7世紀中葉から後葉と考えられる。重複している第571号住居跡より古い。

第559号住居跡出土遺物観察表

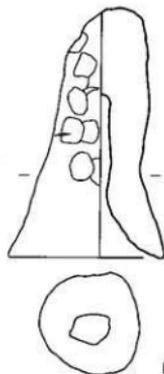
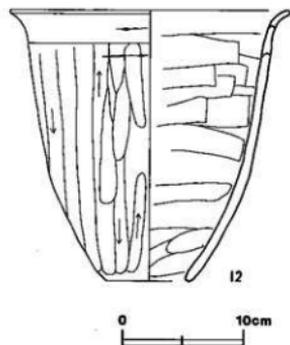
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	坏 土師器	A [120] B (3.0)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎して立ち上がり, 口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り技へツ磨き, 内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 明赤褐色 普通	P7146 10% 南東側覆土下層



第94图 第559号住居跡・出土遺物実測図(1)



第95图 第559号住居跡出土遺物実測図(2)



第96図 第559号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	部 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第94図 2	小形 土師器	A 12.8 B (10.2)	底部から体部下平欠根。体部は外脣して立ち上がり、最大径を上位にもつ。口縁部は垂直に立ち上がる。	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・小石・赤色粒子に多い褐色普通	F7147 30% 南西コーナ一覆土中層
3	小形 土師器	A 11.4 B (7.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ後、ヘラ磨き。内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪痕み痕。	砂粒・雲母に多い褐色普通	F7148 30% P L72 南西部覆土中層
4	壺 土師器	A 16.4 B (17.0)	底部欠根。体部は内脣して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ後、ヘラ磨き。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪痕み痕。	砂粒・石英・小石明赤褐色普通	F7149 70% P L72 南西コーナ一覆土上層
第95図 5	壺 土師器	A [21.6] B 34.2 C [7.2]	底部から口縁部にかけて一部欠根。平底。体部は内脣して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	底部ヘラ削り。体部外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英に多い褐色普通	F7150 40% P L72 南西コーナ一覆土中層
6	壺 土師器	A 22.0 B (22.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面ヘラ磨き、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石に多い黄褐色普通	F7151 25% P L72 南西コーナ一覆土中層
7	壺 土師器	A 24.3 B (24.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。指頭押圧。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英褐色普通	F7152 25% 南西コーナ一覆土上層
8	壺 土師器	A 22.2 B (8.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。頸部でくびれ、口縁部は外反する。口唇部は上方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英・小石・赤色粒子に多い赤褐色普通	F7153 30% 南西部覆土中層
9	壺 土師器	B (26.6) C 9.8	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内脣して立ち上がる。	体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石明赤褐色普通	F7154 60% P L72 南西コーナ一覆土上層
10	壺 土師器	B (29.4) C 9.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内脣して立ち上がる。	底部ヘラ磨き。体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。指頭押圧。	砂粒・雲母に多い褐色普通	F7155 30% P L72 南西コーナ一覆土中層

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・産成	備 考
第95図 11	甕 土 師 器	B (1A3) C 6.8	底部から体部にかけての破片。 平底。体部は内彎気味に立ち上 がる。	底部へラ削り後、ヘラナデ。体部 外面へラナデ後、丁寧なヘラ磨 き。内面ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・炭石・ 石英 にぶい褐色 普通	P7156 40% P L72 南西コー ナー覆土上層
第96図 12	甕 土 師 器	A [23.0] B 21.8 C 6.8	体部から口縁部にかけて一部欠 損。無底式。体部は内彎気味に 立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面縦位のヘラ削り、内面 横位のヘラナデ。口縁部内・外 面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P7157 60% P L72 南西コー ナー覆土中層

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
13	管 玉	0.8	1.7	0.15	1.34	甕南東側覆土F層	DP7002 PL101

図版番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)		
14	支 脚	15.3	6.2	538.0	南西部覆土下層	D P 7003 土製

第566号住居跡 (第97・98図)

位置 調査7区西部, N10c区。

重複関係 南西部が第567号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 北西コーナー部分が調査区域外のため、確認できなかったが、長軸6.58m、短軸6.53mの方形と推定される。

主軸方向 N-24°-W

壁 北西側壁は確認できなかった。壁高は10~18cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北西側壁下は確認できなかった。上幅約40cm、下幅10~15cm、深さ約18cmで、断面形はU字形をしている。

床 北西部は確認できなかったが、それ以外はほぼ平坦で踏み固められている。甕東袖部の右側に長径160cm、短径80cmの楕円形で、深さ20cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土しているため、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

竈 北壁に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで150cm、両袖部幅110cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第3層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。

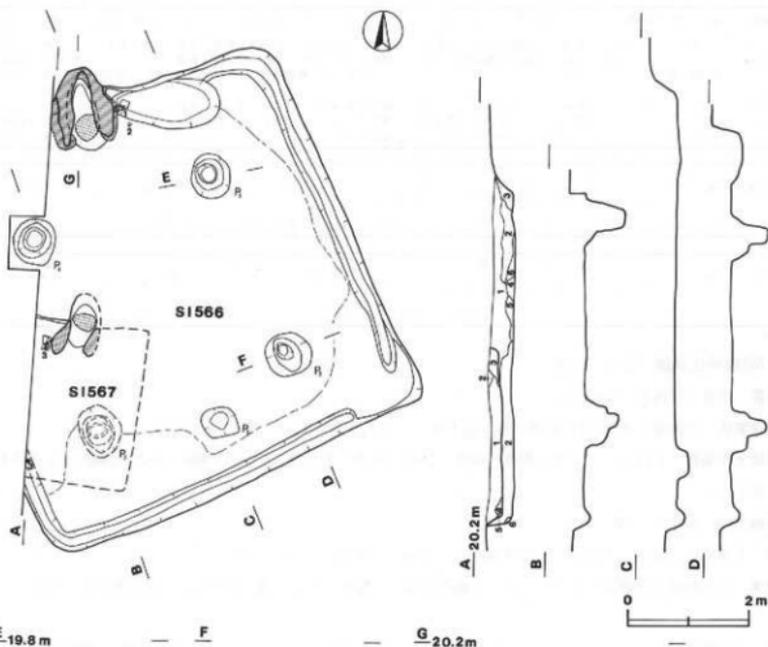
甕土層解説

- 1 暗赤褐色 粘土ブロック・焼土粒子少量
- 2 暗赤褐色 粘土ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 粘土大ブロック多量
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子多量

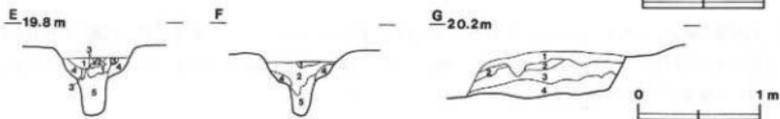
ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁からP₄は径約80cmの円形で、深さ約60cmであり、規模と配置から主柱穴と考えられる。南壁際にあるP₅は径50cmの円形で、深さ21cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₁とP₂の土層断面中央に柱の痕跡が見られる。柱根部分は黒褐色土で軟らかく、柱の抜き取りが行われたと考えられる。また、堆積状況から判断しても柱抜き取り後の堆積と考えられる。

P₁・P₂土層解説

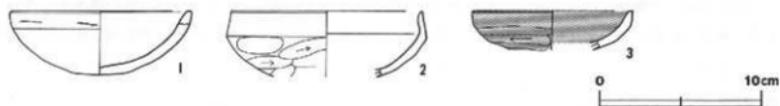
- 1 暗褐色 rome 粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色 rome 粒子中量、炭化粒子少量
- 3 褐色 rome 粒子多量
- 4 明褐色 rome 小ブロック・焼土粒子多量
- 5 黒褐色 黒褐色土多量、焼土粒子少量、軟らかい



第97図 第566・567号住居跡実測図



第98図 第566号住居跡出土遺物実測図



覆土 6層からなり、各層にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。第2層の上面が第567号住居跡の床面に当たる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子・炭化粒子・炭化材多量
- 3 明褐色 ローム中・小ブロック多量、炭化粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化材少量
- 5 褐色 ローム大ブロック多量
- 6 褐色 ローム中ブロック多量、焼土粒子・炭化材少量

遺物 土師器片243点、須恵器片1点、土製品（支脚）1点、陶器片1点、磁器片1点、礫1点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第98図1と2の杯は葦束側の覆土下層から、3の杯は南西側

の覆土中層から、支脚の細片が甍前の覆土上層から出土している。陶器片と磁器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀後葉と考えられる。重複している第567号住居跡より古い。

第566号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	土師器 土師器	A [110] B 39	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部から口縁部は内響気味に立ち上がる。	体部から口縁部内・外面縁部が甚だしい。輪痕み疾。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	P7194 50% 東家側覆土下層
2	土師器 土師器	A [118] B (4.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内響気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	体部外面へう割り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 赤褐色 普通	P7195 15% 東家側覆土下層
3	土師器 土師器	A [98] B (2.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内響気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう割り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 (外面) 普通	P7196 25% 西南部覆土中層

第590号住居跡 (第99図)

位置 調査7区南部, O11e区。

重複関係 中央部から西部にかけて、第20号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 中央部から南側が調査区域外のため、平面形は確認できなかった。東西4.80m、北西(3.1)mである。

主軸方向 [N-20°-W]

壁 壁高は3~9cmである。

壁溝 上幅約30cm、下幅10~20cm、深さ約10cmで、断面形はU字形をしている。

床 第20号溝に掘り込まれている部分は確認できなかったが、硬化面の範囲から判断して、ほぼ平坦で全体的に踏み固められていたと推定される。北東コーナー部に長径150cm、短径80cmの不整形で、深さ16cmの掘り込みが確認できた。覆土から多量の灰が出土していることから判断して、灰を貯めて置いた施設あるいは土坑と考えられる。

竈 北壁中央部に構築されている。西袖部は第20号溝に掘り込まれているため、確認できなかった。さらに、覆土が薄いため、東袖部の痕跡と火床部しか確認できなかった。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。

覆土層解説

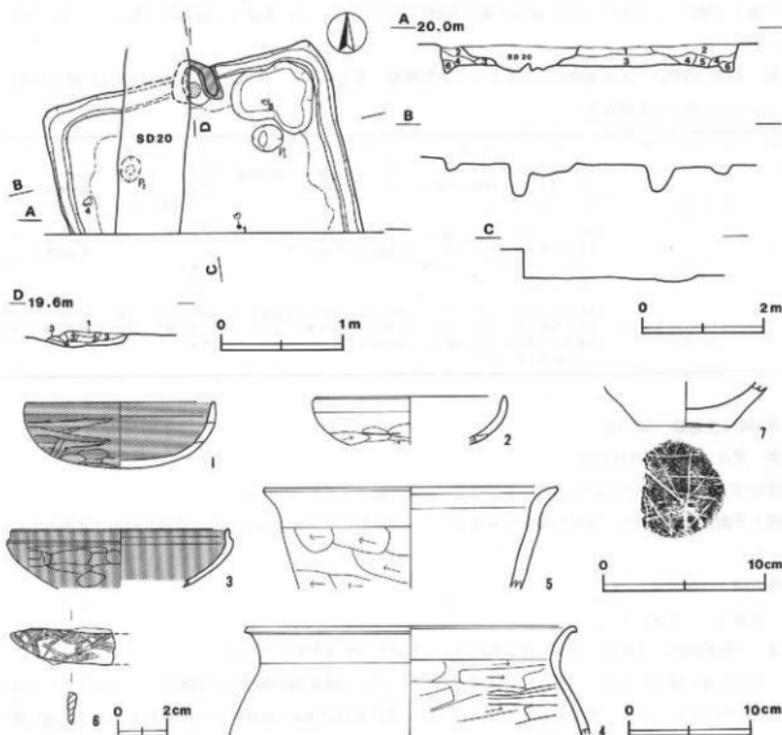
- 1 暗褐色 黄土粒子少量、粘土粒子微量
- 2 灰褐色 黄土粒子・粘土粒子微量
- 3 暗赤褐色 黄土粒子多量、粘土粒子中量
- 4 暗赤褐色 黄土粒子多量、ローム粒子少量

ピット 2か所(P₁・P₂)。P₁とP₂は径約30cmの円形で、深さ約50cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。

覆土 6層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。第6層は壁溝の覆土である。

土層解説

- 1 褐色 黄土中ブロック中量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量
- 3 褐色 黄土粒子少量
- 4 褐色 ローム大ブロック多量
- 5 黒褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 6 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量



第99図 第590号住居跡・出土遺物実測図

遺物 土師器片275点，須恵器片18点，鉄製品（刀子）1点，礫5点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第99図1の坏は南部の覆土下層から，4の甕は西壁際の床面から，5の甕は東側の覆土下層から，2の坏，6の刀子は北東部の覆土中から，3の坏は南東部の覆土中から出土している。7は甕底部片で，底部に木葉痕が認められる。

所見 本跡の時期は，出土遺物から判断して7世紀と考えられる。重複している第20号溝より古い。

第590号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	坏 土師器	A 11.6 B 4.1	口縁部一部欠損。丸底。底部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラ磨き，内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理，輪積み肌。	砂粒・雲母 橙色 普通	P7249 60% P L74 南部覆土下層
2	坏 土師器	A [11.6] B (3.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後，ナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 にぶい橙色 普通	P7250 10% 北東部覆土中

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第99図 3	坏 土 師 器	A [134] B (3.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部との境に明確な段をもつ。口縁部はほぼ直立する。	体部外面へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	P7251 5% 南東部覆土中
4	甕 土 師 器	A [264] B (9.2)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。胴部でくびれ、口縁部は外反する。	体部上位外面ナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 粒子 明赤褐色 普通	P7252 10% 西側部床面
5	瓶 土 師 器	A [180] B (6.3)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面上位へラ削り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・赤色 粒子 にぶい赤褐色 普通	P7253 5% 南東部覆土下層

図版番号	種 別	計 面 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
6	刀 子	(4.3)	1.5	0.4	(412)	北東部覆土中	M7013

第623号住居跡 (第100図)

位置 調査7区東部, N13b区。

重複関係 西部が第624号住居跡に、南部が第625号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

中央部が第462号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.90m, 短軸6.40mの方形である。

主軸方向 N-6°-W

壁 西壁と南壁の一部は確認できなかった。壁高は31~47cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 南西コーナー壁下では確認されなかった。上幅17~20cm, 下幅6~9cm, 深さ約6cmで、断面形はU字形をしている。

床 はほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで約130cm, 両袖部幅約140cmである。火床部は、床面を約4cm掘りくぼめており、赤変硬化しゴツゴツしている。天井部は崩落しており、第2層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

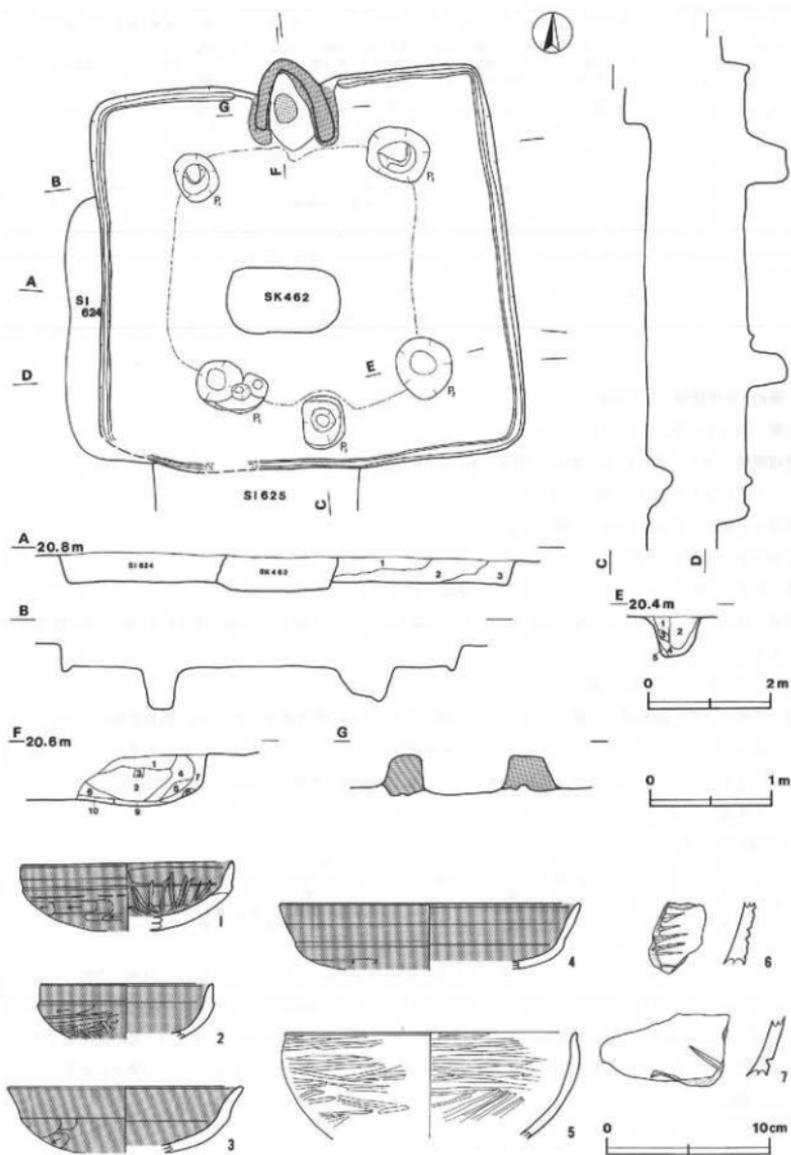
竈土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子中量 | 6 赤褐色 | 焼土粒子・焼土中ブロック多量、炭化粒子中量 |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子中量 | 7 にぶい橙色 | 焼土粒子・炭化粒子多量、灰少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土中ブロック・焼土粒子多量 | 8 にぶい橙褐色 | 焼土粒子多量 |
| 4 黒褐色 | 粘土ブロック多量、炭化粒子中量 | 9 にぶい赤褐色 | 灰多量、焼土中ブロック・焼土粒子中量 |
| 5 黒褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 10 赤黒色 | 焼土粒子多量、炭化粒子中量 |

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁からP₄の上端は径80~100cmの円形、下端は径20~30cmの円形で、深さ55~70cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。南壁際にあるP₅は長径80cm, 短径60cmの楕円形で、深さ40cmである。位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。P₂の土層断面の第2層は柱の痕跡と考えられる。柱痕部分は暗褐色土で軟らかく、柱の抜き取りが行われたことが考えられる。

P₂土層解説

- 1 黒褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 (柱痕)
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量



第100图 第623号住居跡・出土遺物実測図

覆土 3層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量、黄土粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片346点、須恵器片5点、骨片が出土している。第100図1から4の土師器坏、5の土師器碗は覆土中から出土している。6と7の土師器片には、外面に砥石に使用したと思われる痕跡がある。竈火床部から骨片が出土している。種類は不明である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀と考えられる。重複している第624・625号住居跡、第462号土坑より古い。

第623号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 1	坏 土師器	A [130] B (41)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう削り、内面へう磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。稜積み肌。	砂粒・長石・石英・赤色粒子にふい橙褐色普通	P7417 覆土中 30%
2	坏 土師器	A [106] B (34)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう削り後、へう磨き。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子にふい黄褐色普通	P7418 覆土中 10%
3	坏 土師器	A [144] B (40)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は外反する。	体部外面へうナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母にふい橙褐色普通	P7419 覆土中 10%
4	坏 土師器	A [184] B (41)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は外傾する。	体部外面へうナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子にふい赤褐色普通	P7420 覆土中 5%
5	碗 土師器	A [180] B (58)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部から口縁部内・外面丁寧なへう磨き。	砂粒・雲母明赤褐色普通	P7421 覆土中 25%

第632号住居跡(第101図)

位置 調査7区東部、N13区。

規模と平面形 長軸4.60m、短軸4.35mの方形である。

主軸方向 N-4°-W

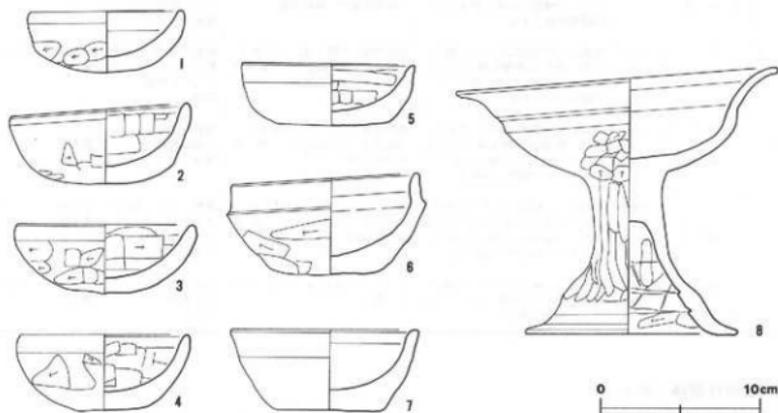
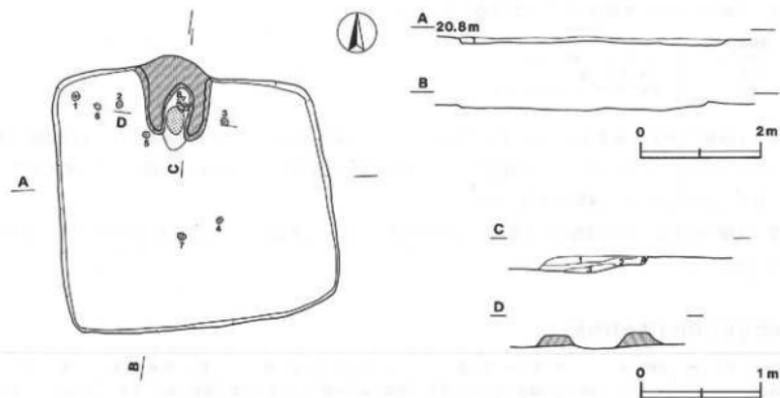
壁 壁高は約15cmで、外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦で、全体的に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は焚口部から煙道部まで110cm、両袖部幅100cmである。火床部は赤変硬化している。第101図8の高杯の脚部を支脚に転用している。覆土が薄いため、天井部は確認できなかった。袖部は遺存している。

覆土層解説

- 1 暗赤褐色 黄土中ブロック・黄土粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・黄土粒子中量
- 3 赤褐色 黄土中ブロック多量、ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色 黄土中ブロック・黄土粒子・炭化粒子少量



第101図 第632号住居跡・出土遺物実測図

覆土 単一層である。覆土が薄いため、堆積状況は不明である。

土層解説

1 褐色 □—△粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 土器器片48点、須恵器片3点が出土している。図示した土器はいずれも土器器である。第101図1と2の坏，6の碗は正位で北西部の床面から，3の坏は正位で竈東側の床面から，4の坏と7の碗は正位で中央部の床面から，5の坏は正位で竈西袖部前の床面から出土している。8の高坏は，竈火床部と覆土中から出土した破片を接合したものである。8は，火床部から正位で，支脚として使用された状態で，火熱を受け赤く焼けて出土している。

所見 本跡のピットと壁溝は確認できなかった。時期は，出土遺物から判断して7世紀と考えられる。

第 632 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 101 図 1	坏	A 9.4 B 3.8	丸底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へう割り、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P7470 100% P L 80 北西側床面
	土師器					
2	坏	A 11.4 B 5.1	丸底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へう割り、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・赤色 にぶい黄褐色 普通	P7471 100% P L 80 北西側床面
	土師器					
3	坏	A 10.9 B 4.3	丸底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へう割り、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・赤色 にぶい黄褐色 普通	P7472 100% P L 80 北西側床面
	土師器					
4	坏	A 10.4 B 4.7	丸底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面へう割り、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P7473 100% P L 80 中央部床面
	土師器					
5	坏	A 10.7 B 4.0 C 7.0	平底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	底部へう割り。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 粒子 褐色 普通	P7474 90% P L 80 北西側床面
	土師器					
6	坏	A 11.5 B 6.2 C 5.9	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	底部へう割り。体部外面ヘラナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 にぶい黄褐色 普通	P7475 80% P L 80 北西側床面
	土師器					
7	坏	A 11.4 B 5.1 C 6.6	口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	底部へう割り。体部外面ナデ、内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 にぶい褐色 普通	P7476 80% P L 80 中央部床面
	土師器					
8	高 坏	A 20.0 B 16.6 D 13.2 E 10.2	坏部一部欠損。胴部はラッパ状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は大きく反折する。	胴部内・外面横ナデ。脚部から坏部外面へう割り。坏部内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P7477 70% P L 81 竈火床部と覆土中
	土師器					

第634号住居跡(第102・103図)

位置 調査7区東部、O13a区。

重複関係 西部が第636・637号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸5.50m、短軸5.32mの方形である。

主軸方向 N-30°-W

壁 西壁の一部は立ち上がりは確認できなかった。壁高は約65cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

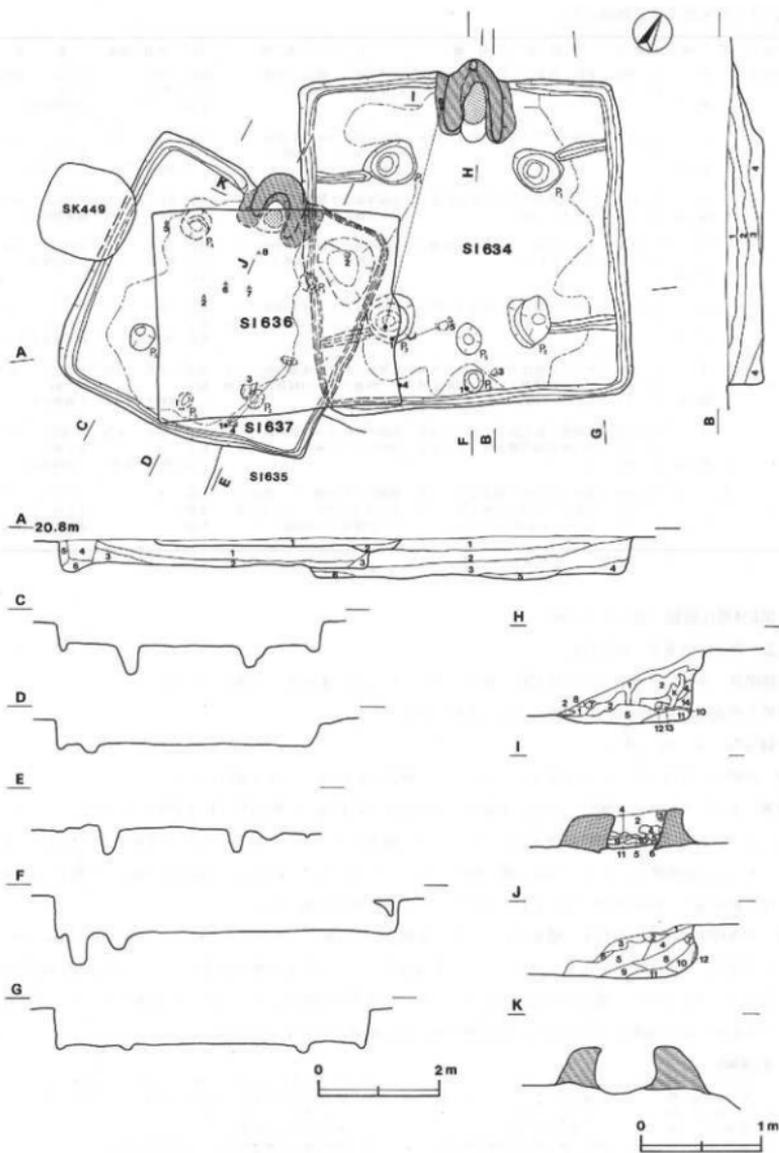
壁溝 全周している。上幅12~20cm、下幅4~10cm、深さ約15cmで、断面形はU字形をしている。

床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。精査したところ、P₁・P₂から南東壁下にかけて、P₃・P₄から南西壁下にかけての間に溝が検出できた。いずれも長さ約80cm、上幅18~20cm、下幅6~10cm、深さ約10cmで、断面形はいずれもU字形をしている。性格は不明である。

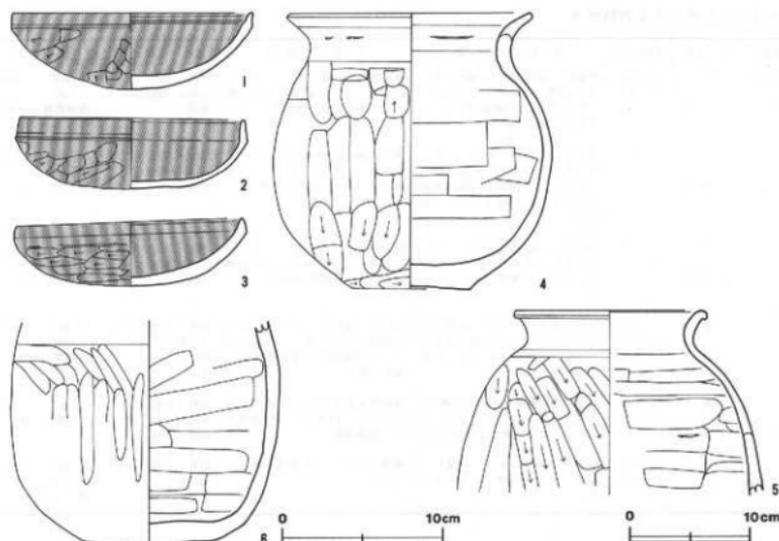
竈 北西壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで130cm、両袖部幅120cmである。火床部は、床面を約8cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2層と第5層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床面からはほぼ垂直に立ち上がる。第11層の灰の中に獣骨や魚骨片が含まれていた。

覆土層解説

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 | 8 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量 |
| 2 褐色 粘土ブロック多量、焼土中ブロック・焼土粒子中量 | 9 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子中量 | 10 にぶい褐色 粘土粒子少量 |
| 4 暗褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量 | 11 明褐色 灰多量 |
| 5 暗褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 12 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子中量 |
| 6 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量 | 13 暗赤褐色 焼土粒子中量 |
| 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子中量 | 14 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 |



第102图 第634·636·637号住居跡実測图



第103図 第634号住居跡出土物実測図

ピット 6か所 ($P_1 \sim P_6$)。 P_1 から P_4 の上端は径70~80cmの円形、下端は径約20cmの円形で、深さ40~50cmであり、規模と配置から判断して支柱穴と考えられる。南東壁際にある P_5 と P_6 については、 P_5 が径40cmの円形で、深さ30cm、 P_6 が径30cmの円形で、深さ52cmであり、いずれも位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

遺物 土師器片553点、須恵器片25点、土製品(支脚)1点、礫5点、骨片が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第103図1の坏は、南壁際の覆土中層と覆土中から出土した破片を接合したものである。2の坏は覆土中から、3の坏は南部の覆土下層から斜位で出土している。4の甕は、南部の覆土中層と覆土中から出土した破片を接合したものである。5の甕は南部の覆土下層から出土している。6の甕は竈西側の覆土下層と南西部の覆土下層から出土した破片を接合したものである。竈西側の覆土下層から支脚の破片が出土している。竈火床部から鮒・鯉・鮓・雀などの骨片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第636・637号住居跡より古い。

第 634 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	土師器 坏	A 15.0 B 4.7	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立し、口縁部直下内面に沈線が施される。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・小石にふい・褐色普通	P7478 50% P.L.81 南都麗土中層
2	土師器 坏	A [14.0] B 4.4	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に明確な稜をもつ。口縁部はやや内傾する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母にふい・褐色普通	P7479 50% P.L.81 麗土中
3	土師器 坏	A 14.1 B 4.2	体部から口縁部にかけて一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・石英にふい・褐色普通	P7480 80% P.L.81 南都麗土下層
4	土師器 壺	A 15.4 B 17.1 C 7.3	体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、最大径を中位にもつ。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	底部ヘラ削り後ヘラナデ。体部外面底位のヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子・褐色普通	P7481 80% P.L.81 南都麗土中層
5	土師器 壺	A 15.8 B (15.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は外反する。	体部外面斜位のヘラ削り。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子・褐色普通	P7482 15% 南都麗土下層
6	土師器 壺	B (13.8) C 8.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がる。	底部ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石・褐色普通	P7483 50% P.L.81 麗土下層

第641号住居跡 (第104・105図)

位置 調査7区南東部, O12b区。

重複関係 全体的に第639号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸4.20m, 短軸3.80mの長方形である。

主軸方向 N-18°-W

壁 南西コーナー部から南壁西部にかけて確認できた。壁高は約60cmで、外傾して立ち上がる。

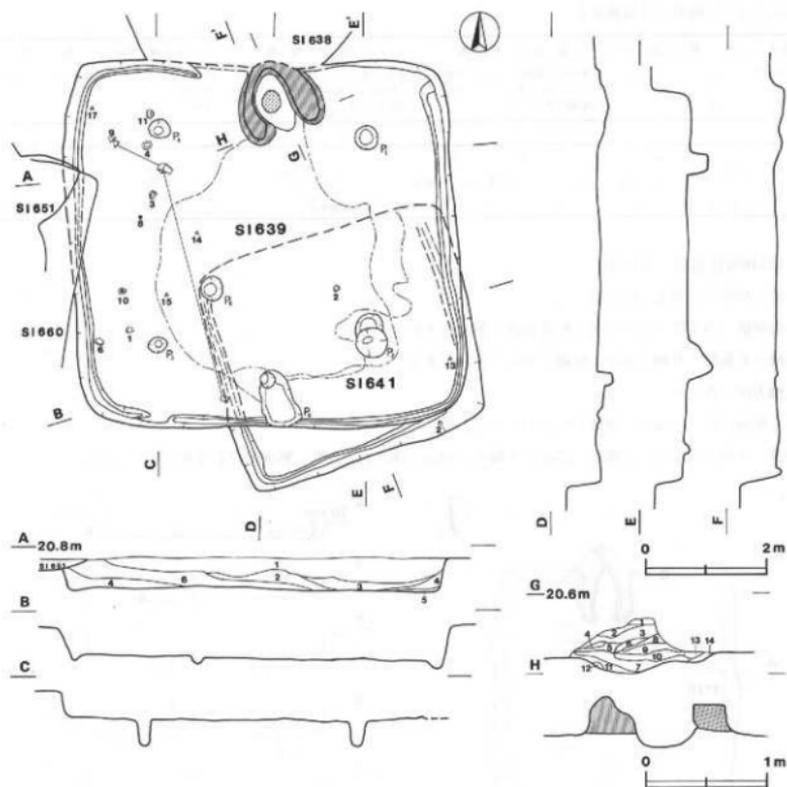
壁溝 西壁下から南壁下にかけてと東壁下において確認できた。上幅約20cm, 下幅5~10cm, 深さ約12cmで、断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦で、中央部から北側にかけて特に踏み固められている。

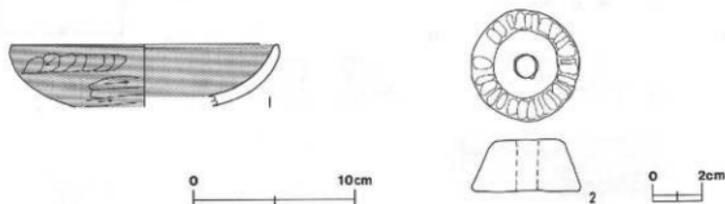
竈 北壁中央部に構築されていたと推定される。第639号住居跡に掘り込まれているが、床面北部に火床部と思われるゴツゴツした赤変硬化面が検出された。

遺物 土師器片41点, 石製品(紡錘車)1点が出土している。第105図1の土師器坏は麗土中から、2の紡錘車は南壁際の床面から出土している。

所見 本跡は全体的に第639号住居跡に掘り込まれているため、覆土の堆積状況は確認できなかった。ピットは確認されなかった。時期は、判断する出土遺物がないため不明である。しかし、8世紀前葉の第639号住居跡に掘り込まれているため、8世紀前葉以前と考えられる。



第104图 第639·641号住居跡実測図



第105图 第641号住居跡出土遺物実測図

第 641 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎 土 ・ 色 調 ・ 焼 成	備 考
第105図 1	坏 土 加 器	A [16.4] B (3.8)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がり、 口縁部は直立する。	体部外面ヘラナデ、内面ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。内・外 面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 明未褐色 普通	P7511 5% 腹土中

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
2	紡 錫 草	4.5	2.1	0.9	50.0	南壁際床面	Q7012 滑石 P.L.102

第648号住居跡 (第106図)

位置 調査7区南部, O12d区。

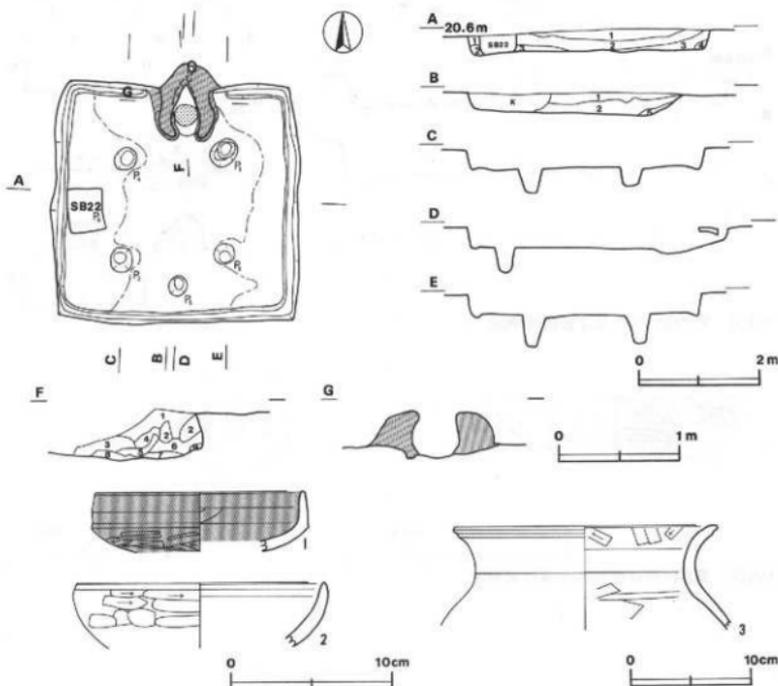
重複関係 西壁際が第22号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.00m, 短軸3.92mの方形である。

主軸方向 N-0°

壁 壁高は25~33cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅20~25cm, 下幅6~12cm, 深さ約8cmで, 断面形はU字形をしている。



第106図 第648号住居跡・出土遺物実測図

床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで150cm、両袖部幅100cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化しゴツゴツしている。天井部は崩落しており、第2層から第4層が崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。両袖部の内側は、火を受けて赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに立ち上がる。第7層に灰が多量に含まれている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|----------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 | 6 黒褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 にぶい赤褐色 | 灰多量、焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量 | 8 極暗赤褐色 | 焼土中ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 粘土ブロック・焼土小ブロック多量 | 9 暗赤褐色 | 焼土中ブロック多量、焼土粒子少量 |
| 5 極暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子多量 | | |

ピット 5か所 (P₁～P₅)。P₁からP₄は、径30～40cmの円形で、深さ30～50cmであり、規模と配置から判断して主柱穴と考えられる。P₅は径30cmの円形、深さ45cmであり、位置的に出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 5層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量 |

遺物 土師器片163点、須恵器片12点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第106図1と2の坏は覆土中から、3の甕は竈内から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀中葉と考えられる。重複している第22号掘立柱建物跡より古い。

第648号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手丈の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第106図 1	坏 土師器	A [128] B (37)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がり、 口縁部との境に明瞭な稜をもつ。 口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラ磨き、 内面ナデ。口縁部内・外面横ナ デ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P7547 20% 覆土中
2	坏 土師器	A [154] B (40)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内彎気味に立ち上がる。 口縁部は短く直立する。	体部外面へラ削り後へラナデ、 内面横ナデ。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 黒褐色 普通	P7548 10% 内面漆付着 覆土中
3	甕 土師器	A [218] B (84)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部でくびれ、口縁部は外反す る。口唇部は上方つまみ上げる。	口縁部外面横ナデ、内面へラナ デ。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P7549 10% 甕内

第653号住居跡 (第107・108図)

位置 調査7区南東部、O13d区。

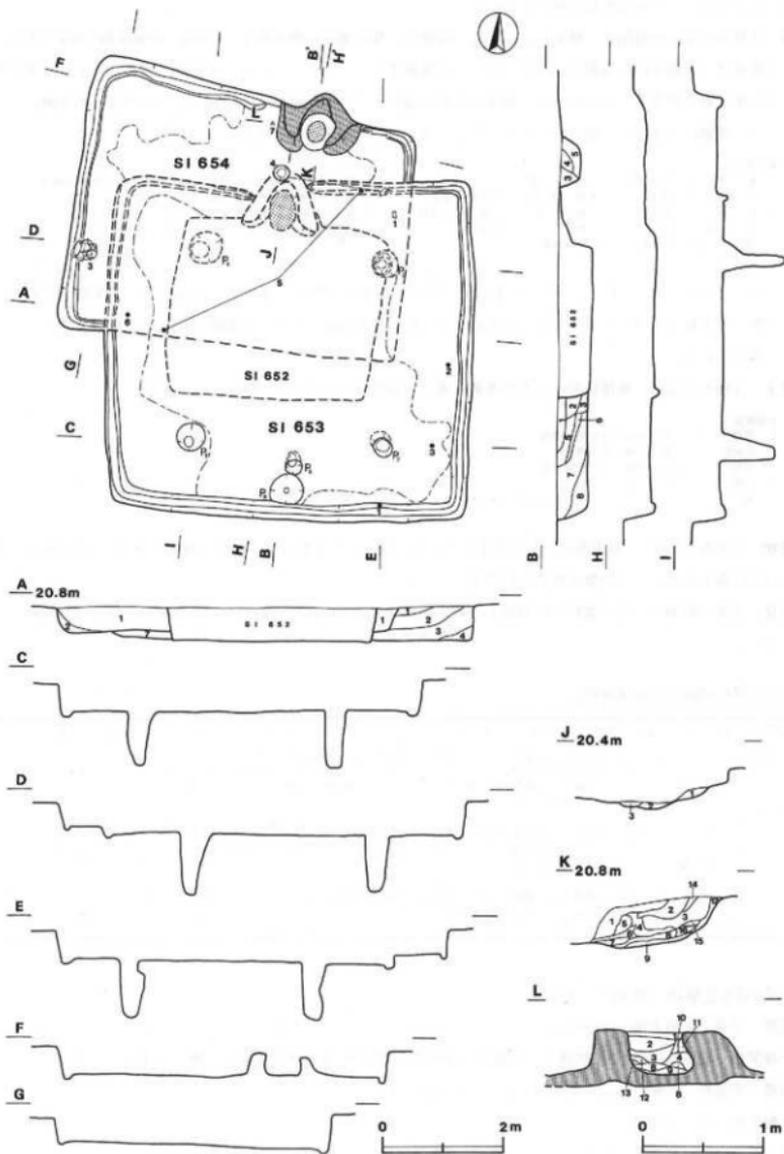
重複関係 北部が第654号住居跡に、北部から中央部が第652号住居跡に床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.00m、短軸5.60mのほぼ方形である。

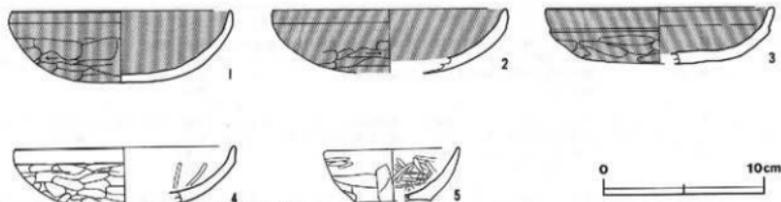
主軸方向 N-5°-E

壁 壁高は45～50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。規模は、上幅18～31cm、下幅6～15cm、深さ11cmで、断面形は逆台形状である。



第107图 第653·654号住居跡実測图



第108図 第653号住居跡出土遺物実測図

床 第652号住居跡に掘り込まれている中央部以外は、ほぼ平坦で、踏み固められている。

竈 竈の痕跡と思われる粘土と焼土粒子・炭化粒子・灰が北壁中央部で検出された。火床部は、床面を約12cm掘りくぼめている。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム中・小ブロック少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・灰少量、炭化粒子微量

ピット 6か所（ $P_1 \sim P_6$ ）。 $P_1 \sim P_4$ は径35～50cmの円形、深さ90～103cmで、いずれも各コーナーに寄った位置で検出されており、規模と配置から主柱穴と考えられる。 P_5 は径24cmの円形、深さ35cmで、 P_6 は径53cmの円形、深さ33cmである。 $P_5 \cdot P_6$ とも南壁中央部で南北方向に並んで検出され、 P_5 は南壁側に傾斜している。位置と形状から、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、焼土小ブロック・砂粒少量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 6 黒褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 暗褐色 炭化粒子中量、ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子微量

遺物 土師器片136点、須恵器片2点が出土している。第108図1の土師器杯は正位で、3の土師器杯は逆位で南東コーナー部の覆土下層から出土している。2の土師器杯は東壁際中央部の覆土下層から正位で出土している。4の土師器杯、5の土師器ミニチュア土器は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第652・654号住居跡より古い。

第653号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・成成	備考
第108図 1	杯	A [136] B 4.4	丸底。体部は内増して立ち上がり、口縁部は内傾する。	体部外面へう割り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙褐色 普通	P7567 40% 南東コーナー覆土下層
	土師器					
2	杯	A [144] B (39)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へう割り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・白色粒子・赤色粒子 灰褐色 普通	P7568 15% 東壁際中央部覆土下層
	土師器					

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第108図 3	坏 土師器	A [14.0] B (3.4)	底部から口縁部にかけての破片。 体部は内凹して立ち上がり、口縁部との境に明確な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ。 口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子に ぶい褐色 普通	P7569 10% 南東コーナー覆土 下期
4	坏 土師器	A [13.6] B (3.5)	体部から口縁部にかけての破片。 体部は内凹気味に立ち上がり、口縁部との境にわずかに稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へラ削り、内面横ナデ 後、放射状にへラ磨き。口縁部 内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 粒子 灰褐色 普通	P7570 20% 覆土中
5	土師器	A [8.4] B 3.2 C [4.6]	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内凹気味に立ち上がる。	底部外面へラ削り後、丁寧なへラ磨き、体部外面へラナデ。内面丁寧なへラ磨き。口縁部外面へラ磨き、内面ナデ。	砂粒・赤色粒子 にぶい 褐色 普通	P7571 30% 覆土中

第656号住居跡 (第109・110図)

位置 調査7区南東部, O12f区。

重複関係 北東コーナー部で、第657号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 南部が調査区域外に位置しているため、平面形は不明である。東西9.25m, 南北(6.0)mである。

主軸方向 N-60°-E

壁 壁高は約50cmで、外傾して立ち上がる。

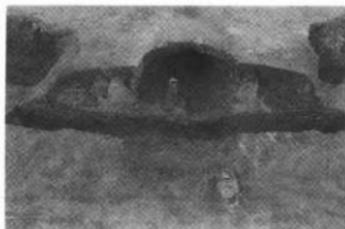
壁溝 調査区域外の南部は確認できなかったが、それ以外は巡っている。規模は、上幅11~31cm, 下幅3~14cm, 深さ11cmで、断面形はU字形である。

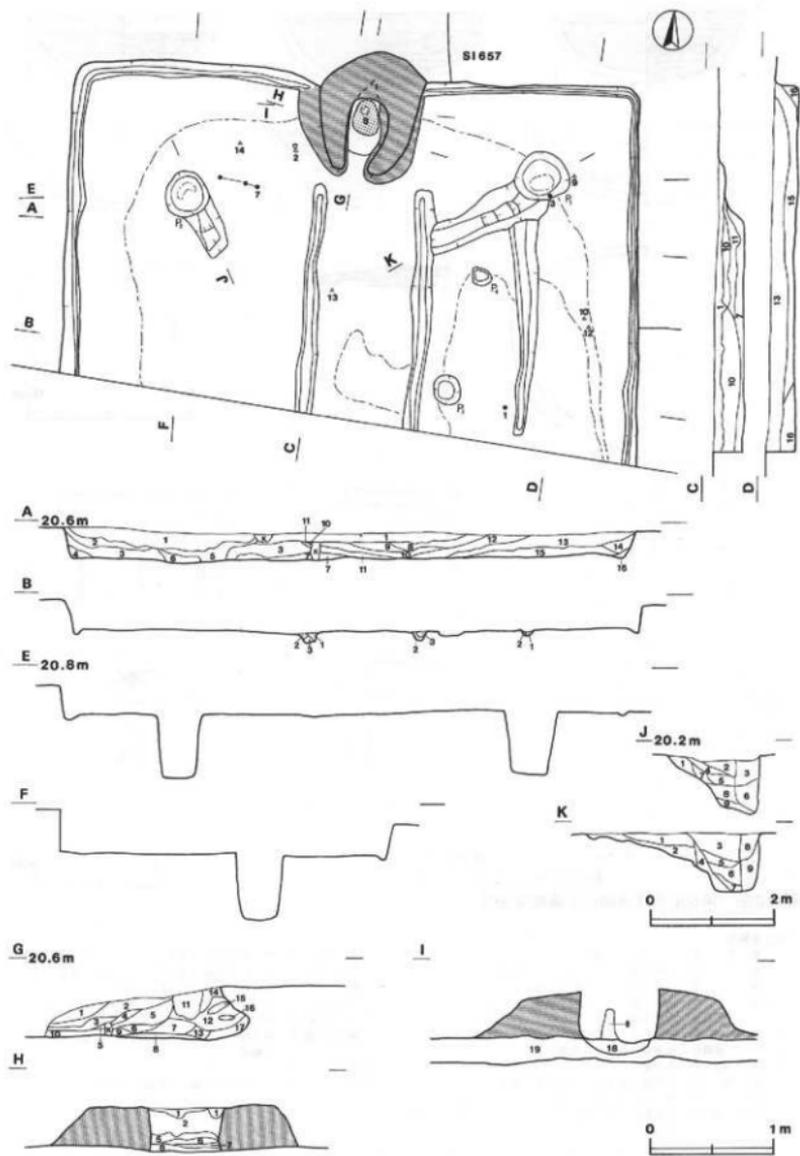
床 はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。中央部から東側にかけて南北方向に伸びる溝3条が検出された。各溝は約1.5mの等間隔に位置し、上幅20~40cm, 下幅7~16cm, 深さ10~17cmで、断面形はほぼU字形である。性格は不明である。東壁と溝、溝と溝の間の床面はあまり踏み固められていない。竈東側から焼土・灰・粘土が検出された。

出土層解説

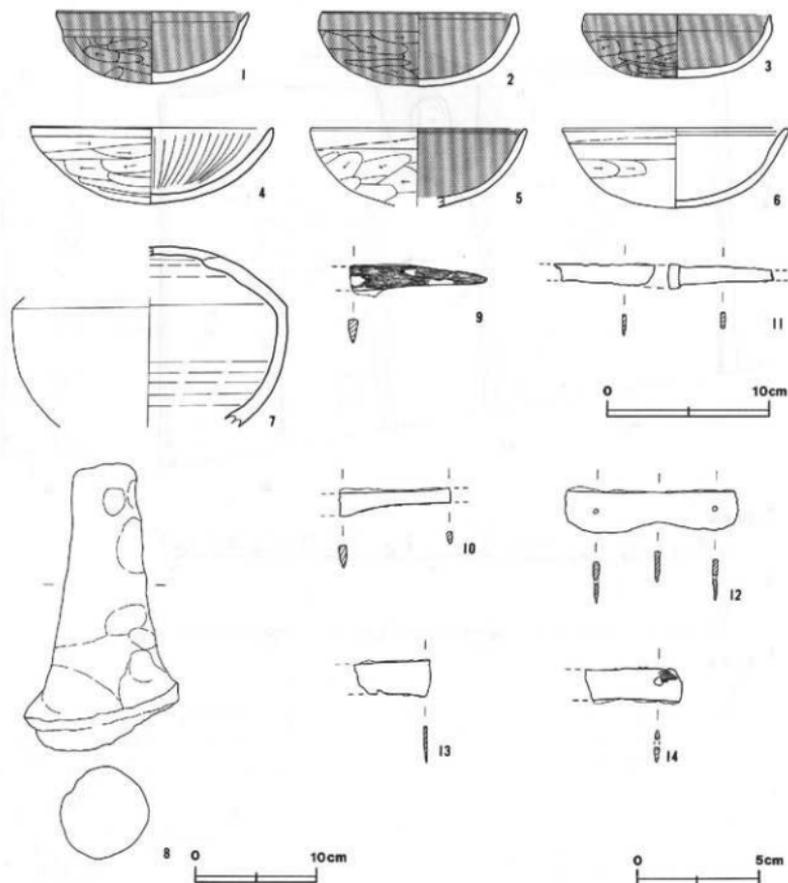
- 1 赤褐色 コーム粒子中量, コーム小ブロック・焼土粒子数量
- 2 暗褐色 コーム粒子中量
- 3 黒褐色 コーム粒子中量

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚き口から煙道部まで170cm, 両袖部幅約197cmである。火床部は、床面を約6cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第2~6・11・13・14・17層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており、内側は火熱を受けて、粘土・山砂が赤変硬化してゴツゴツしている。第8層は灰の層であることから、下面が火床面と考えられ、第18層は火熱を受けて赤変硬化している。火床面から赤く焼けた土製支脚が立位の状態出土している。煙道部は火床面から外傾して立ち上がる。第19層は竈構築時に埋め戻した層と考えられる。





第109图 第656号住居跡実測图



第110図 第656号住居跡出土遺物実測図

甌土層解説

- | | | | | | |
|----|--------|----------------------------|----|------------------|----------------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量 | 12 | 暗褐色 | 焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 褐色 | 山砂中量、ローム小ブロック微量 | 13 | 暗赤褐色 | 焼土粒子多量、焼土大・小ブロック微量 |
| 3 | 褐色 | 山砂中量、ローム粒子少量 | 14 | 褐色 | 砂質粘土中量、焼土粒子少量 |
| 4 | 褐色 | 山砂中量、ローム粒子微量 | 15 | 灰褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・砂質粘土少量 |
| 5 | にぶい黄褐色 | 山砂多量 | 16 | 暗赤褐色 | 焼土粒子多量 |
| 6 | 暗赤褐色 | 焼土粒子・灰中量、山砂大ブロック微量 | 17 | 極暗赤褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量、焼土小ブロック微量 |
| 7 | にぶい黄褐色 | 灰多量、焼土粒子微量 | 18 | 焼土ブロックで、ゴツゴツしている | |
| 8 | 赤褐色 | 灰多量 | 19 | 褐色 | ローム粒子多量、やや締まりがある |
| 9 | 暗褐色 | 灰中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | | |
| 10 | 褐色 | 灰中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 | | | |
| 11 | 極暗褐色 | 砂質粘土少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | | | |

ピット 4か所 (P₁~P₄)。P₁・P₂は径約80cmの円形で、深さ108cmであり、いずれも規模と配置から主柱穴と考えられる。底面には硬化面が確認された。P₁土層断面の柱痕部は、暗褐色土で軟らかく抜き取ら

れたと考えられる。P₂土層断面の柱真部から、柱の直径は約40cmと考えられる。掘り方の調査をしたところ、底面から住居の中央部に向かって、片口状の溝がのびているのが確認された。溝の規模は、P₁側が上幅45~70cm、下幅20~30cm、長さ1.75mで、断面形は緩やかなU字形である。P₂側は上幅40~53cm、下幅15~28cm、長さ0.75mで、断面形は緩やかなU字形である。スロープ状の底面はやや硬化している。なお、溝の上の底面は踏み固められていた。P₃・P₄の性格は不明である。

P₁・P₂土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
- 9 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量

覆土 16層からなる。ロームブロックが含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量 | 11 黒褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・粒子中量 | 12 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量 |
| 5 褐色 | ローム小ブロック多量、ローム粒子中量 | 13 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子少量 | 14 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子少量 | 15 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 | 16 褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック少量 |

遺物 土師器片1038点、須恵器片2点、土製支脚1点、鉄製品6点(刀子3、手鎌3)、礫1点が出土している。第110図1の土師器坏は中央部やや東側の床面から斜位で、2の土師器坏は竈西袖部前の床面から正位で、3の土師器坏はP₁の覆土上層からそれぞれ出土している。4・5・6の土師器坏は覆土中から出土している。7の須恵器平瓶は竈西袖部前の覆土下層から出土している。8の支脚は竈火床面から立位で出土しており、使用されたままの状態と考えられる。9の刀子は北東コーナー部の床面から、10の刀子、12の手鎌は中央部東側の覆土下層から出土している。13の手鎌は中央部の覆土下層から、14の手鎌は竈西袖部前の覆土下層から出土している。11の刀子は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第657号住居跡より新しい。

第656号住居跡出土遺物観察表

図面番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色面・焼成	備考
第110図 1	土師器	A 11.8	底部から口縁部にかけての破片。丸底。底部は内彎して立ち上がり、口縁部との間に明瞭な線をもち、口縁部は緩やかに外反する。	体部外面へう削り後へうナダ。体部内面、口縁部内・外面横ナダ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 灰青色 普通	P7584 70% 中央部やや東側床面
		B 4.3				
2	土師器	A 12.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へう削り後へう磨き。体部内面、口縁部内・外面横ナダ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 赤褐色 普通	P7585 100% P.L.84 竈西袖部前床面
		B 4.4				
3	土師器	A 11.4	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へう削り後へう磨き。体部内面、口縁部内・外面横ナダ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 赤褐色 普通	P7586 50% P.L.84 P.L.84 覆土上層
		B 3.9				
4	土師器	A 15.0	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へう削り。体部内面横ナダ後、放射状にへう磨き。口縁部内面・外面横ナダ。	砂粒・雲母・赤色粒子 黒色粒子 褐色 普通	P7587 80% P.L.84 覆土中
		B 4.7				
5	土師器	A 13.4	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部は内彎して立ち上がる。	体部外面へう削り。体部内面横ナダ。口縁部内・外面横ナダ。内面黒色処理。輪積み気。	砂粒・雲母・長石・赤色粒子 褐色 普通	P7588 50% P.L.84 覆土中
		B 4.8				

図版番号	器 種	計測値 (cm)	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第110図 6	坏 土 師 器	A [138]	底部から口縁部にかけての破片。 丸底。体部は内湾して立ち上がり、 口縁部は短く外反する。	体部外面へう割り。体部内面、 口縁部内・外湾側ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子・石英 明赤褐色 普通	P7589 30% 覆土中
		B 49				
7	平 飯 俵 蓋 器	B (112)	体部片。底部、胴部欠損。体部 はわずかに内湾しながら立ち上 がり、肩部で縁をもち内湾する。	体部内・外周口クロナゲ。開口 縁貼り付け後ナデ。	砂粒・長石・石英・ 白色粒子 灰色 良好	P7590 40% FL84 龍西地区覆土 下層体部外周自然部

図版番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
8	支 脚	53-128	23.5	14900	龍火床面	D P7011 土製

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
9	刀 子	(5.6)	1.3	0.4	(7.10)	北東コーナー部床面	M7057
10	刀 子	(4.6)	0.9	0.3	(3.54)	東壁側中央部覆土下層	M7058
11	刀 子	(12.7)	1.5	0.2	(13.15)	覆土中	M7019 P L 83
12	手 鏝	(7.1)	1.9	0.2	(5.95)	東壁側中央部覆土下層	M7059
13	手 鏝	(3.1)	1.5	0.2	(2.10)	中央部覆土下層	M7060
14	手 鏝	(4.0)	1.4	0.2	(2.76)	龍西袖前覆土下層	M7061

第657号住居跡 (第111・112図)

位置 調査7区南東部, O13f区。

重複関係 南西コーナー部が、第656号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.39m, 短軸5.29mの方形である。

主軸方向 N-4°-W

壁 壁高は35~45cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。規模は、上幅11~22cm, 下幅4~10cm, 深さ8cmで、断面形はU字形である。

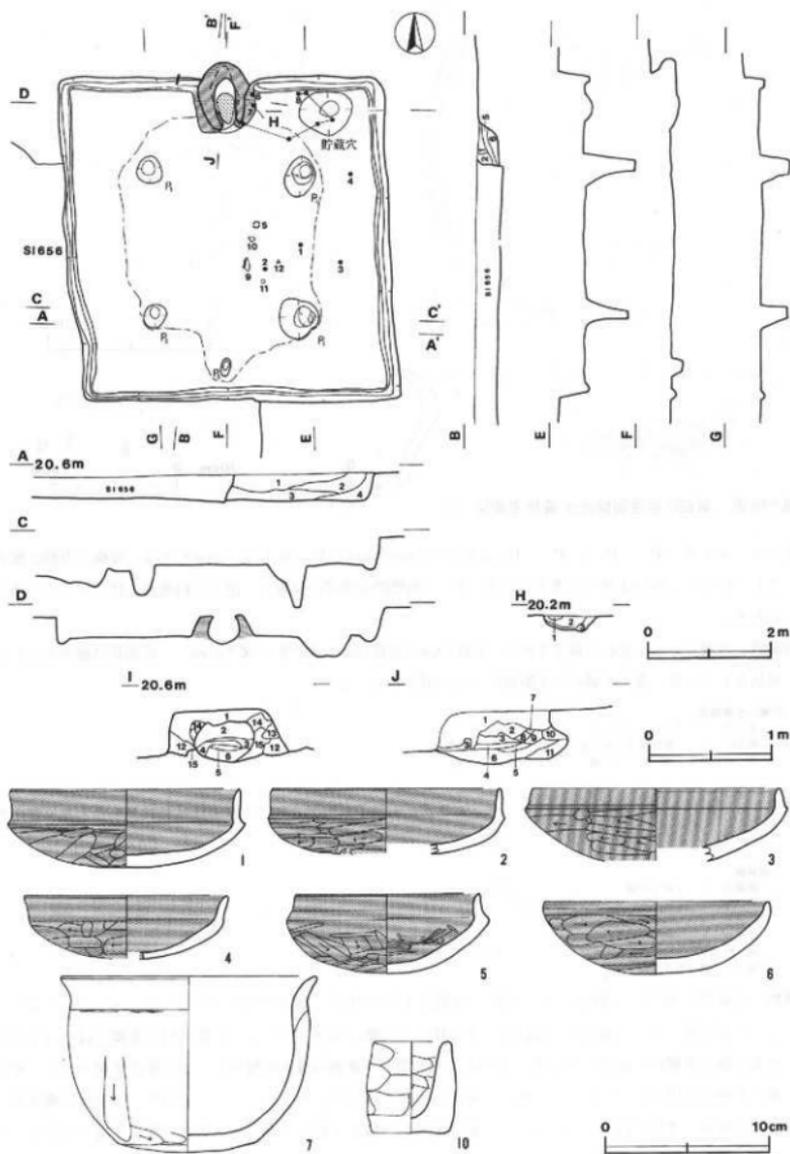
床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで117cm, 両袖部幅約100cmである。

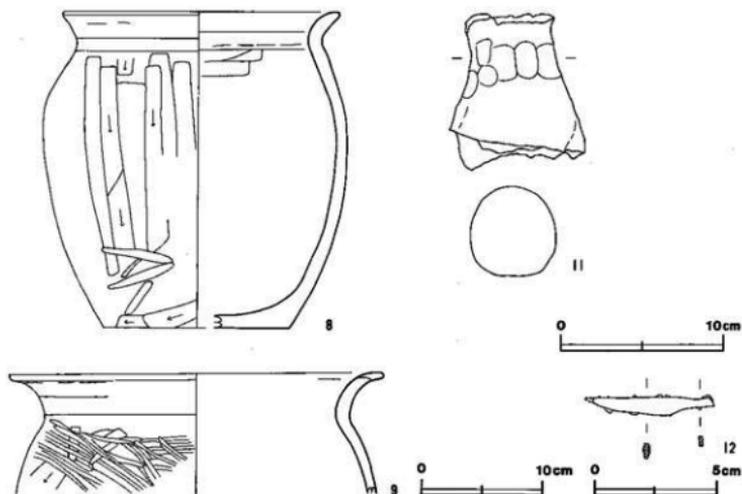
火床部は、床面を約13cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は一部崩落しているが、袖部ともに遺存状態は良好である。袖部の内側は火熱を受けて粘土・山砂が、赤変硬化してゴツゴツしている。煙道部は火床面から外傾して立ち上がる。竈の構築は土層断面からみると、一部掘り残したハードローム層の地山を基礎にし、袖部を構築したと考えられる。竈内の焼土から炭化材が少量検出されている。

覆土層解説

- 1 褐 色 砂質粘土多量, ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 褐 色 焼土粒子中量, 砂質粘土少量
- 3 褐 色 焼土粒子中量, 砂質粘土少量
- 4 赤 褐 色 焼土大ブロック多量, 灰少量
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子少量, 灰中量, 軟らかい
- 6 暗 赤 褐色 焼土中ブロック・焼けた山砂少量, ローム大ブロック・炭化粒子微量, 軟らかい
- 7 褐 色 山砂多量
- 8 暗 褐 色 焼土粒子・焼けた山砂中量, 焼土中ブロック微量
- 9 暗 赤 褐色 焼土ブロック
- 10 褐 色 焼土粒子中量, ローム粒子少量
- 11 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・山砂少量
- 12 橙 色 山砂多量, 焼土小ブロック中量, ローム粒子・粘土粒子少量
- 13 褐 色 山砂多量, ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 14 橙 色 砂較多量, 粘土ブロック少量
- 15 赤 褐 色 焼けた砂のブロック



第111图 第657号住居跡・出土遺物实测图(1)



第112図 第657号住居跡出土遺物実測図(2)

ピット 5か所($P_1 \sim P_5$)。 $P_1 \sim P_4$ は径35~55cmのほぼ円形、深さ50~75cmであり、規模と方形に配置されていることから支柱穴と考えられる。 P_5 は南壁際中央部に位置し、出入口口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部から検出された。長径89cm、短径72cmの楕円形、深さ35cmで、断面形は緩やかなU字形状をしている。覆土下層から土師器片2点が出土している。

貯蔵穴土層解説

- 1 褐色 ヘッドロームブロック
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・山砂微量
- 3 褐色 ローム大ブロック中量

覆土 6層からなる。各層からロームブロックやローム粒子が検出され、不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 2 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 褐色 焼土粒子中量

遺物 土師器片186点、土製品1点(支脚)、鉄製品1点(刀子)、礫1点が出土している。図示した土器は、すべて土師器である。第111・112図1・2の坏、9の甕、10のミニチュア土器、11の支脚、12の刀子は中央部の覆土下層から出土している。3の坏は中央部やや東側の覆土中層から、4の坏は北東コーナー部の覆土中層から出土している。5の坏は中央部の床面から正位で出土している。6の坏、7の鉢は東側の覆土下層から逆位で出土している。8の甕は中央部の覆土下層と北東コーナー部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀後葉と考えられる。重複している第656号住居跡より古い。

第 657 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 型	計測値 (cm)	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・装成	備 考
第111図 1	環 土 師 器	A 140 B 4.8	体部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう割り後へう磨き。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・石英 灰褐色 普通	P7591 70% P L 84 中央部覆土下層
2	環 土 師 器	A [140] B (4.0)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう割り後へう磨き。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい黄褐色 普通	P7592 20% P L 84 中央部覆土下層
3	環 土 師 器	A [150] B (4.4)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	体部外面へう割り。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子・石英 にぶい黄褐色 普通	P7593 15% P L 84 中央部やや東寄り 覆土中層
4	環 土 師 器	A [124] B (3.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	体部外面へう割り。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P7594 30% P L 84 北東コーナー部 覆土中層
5	環 土 師 器	A [114] B (4.9)	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう割り後へう磨き。体部内面横ナデ後へう磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P7595 90% P L 84 中央部床面
6	環 土 師 器	A 138 B 4.5	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く内傾する。	体部外面へう割り。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P7596 90% P L 84 東東側覆土下層
7	鉢 土 師 器	A [156] B 108 C 8.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	体部外面下位横方向のへう割り。中位から下位にかけて縦方向のへう割り。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7599 40% P L 84 東東側覆土下層 二次焼成
第112図 8	甕 土 師 器	A 168 B 197 C [117]	底部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部下位横方向のへう割り後へう磨き。体部外面上位から下位にかけて縦方向のへう割り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	P7598 60% P L 84 中央部覆 土下層と北東コー ナー部覆土下層
9	甕 土 師 器	A [304] B (100)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	体部外面へう割り後へう磨き。口縁部内・外面横ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・長石・石英 褐色 普通	P7597 5% 中央部覆土下層
第111図 10	ミナツアヲ 土 師 器	A [44] B 58 C (4.4)	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部から口縁部は直立して立ち上がる。	体部内・外面へう割り。	砂粒・雲母・赤色 粒子 灰色 普通	P7600 30% 中央部覆土下層

図版番号	種 別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第112図11	支 脚	5.4~8.2	(9.7)	(3920)	中央部覆土下層	D P 7012 土製

図版番号	種 別	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
12	刀 子	(4.9)	0.8	0.2	(206)	中央部覆土下層	M7062

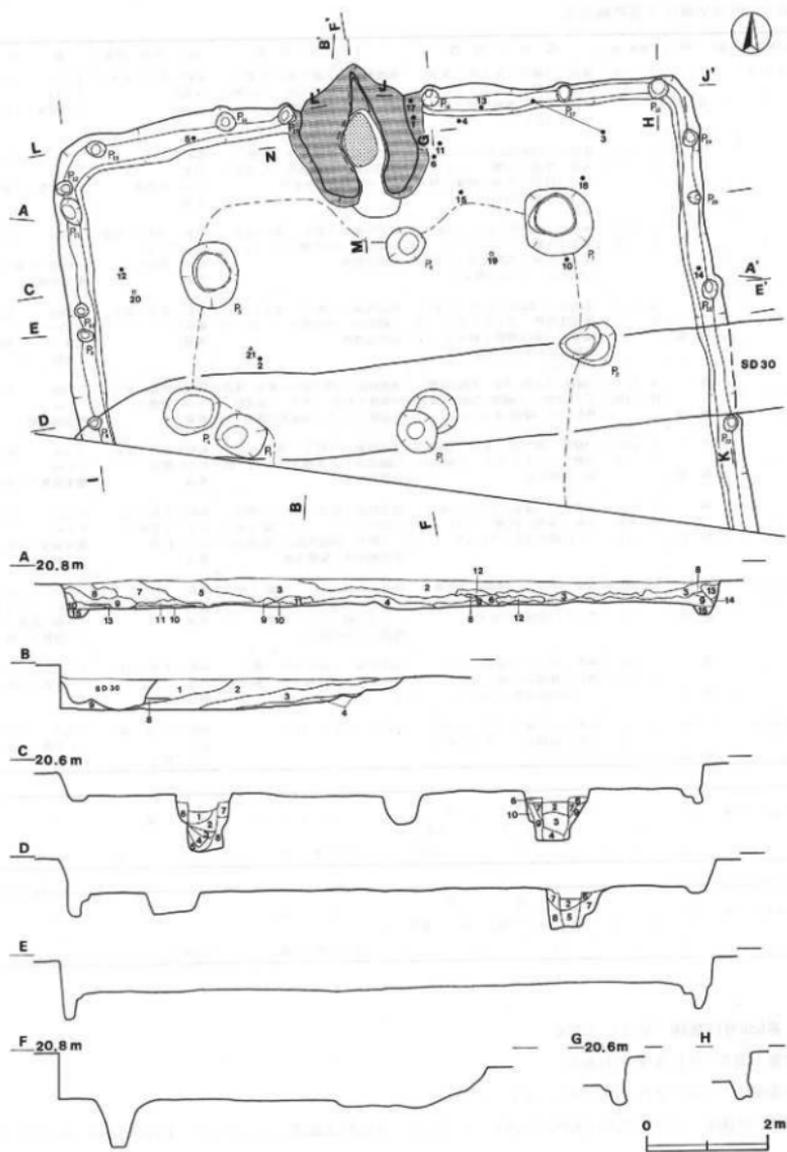
第658号住居跡 (第113~115図)

位置 調査7区南東部, O13f区。

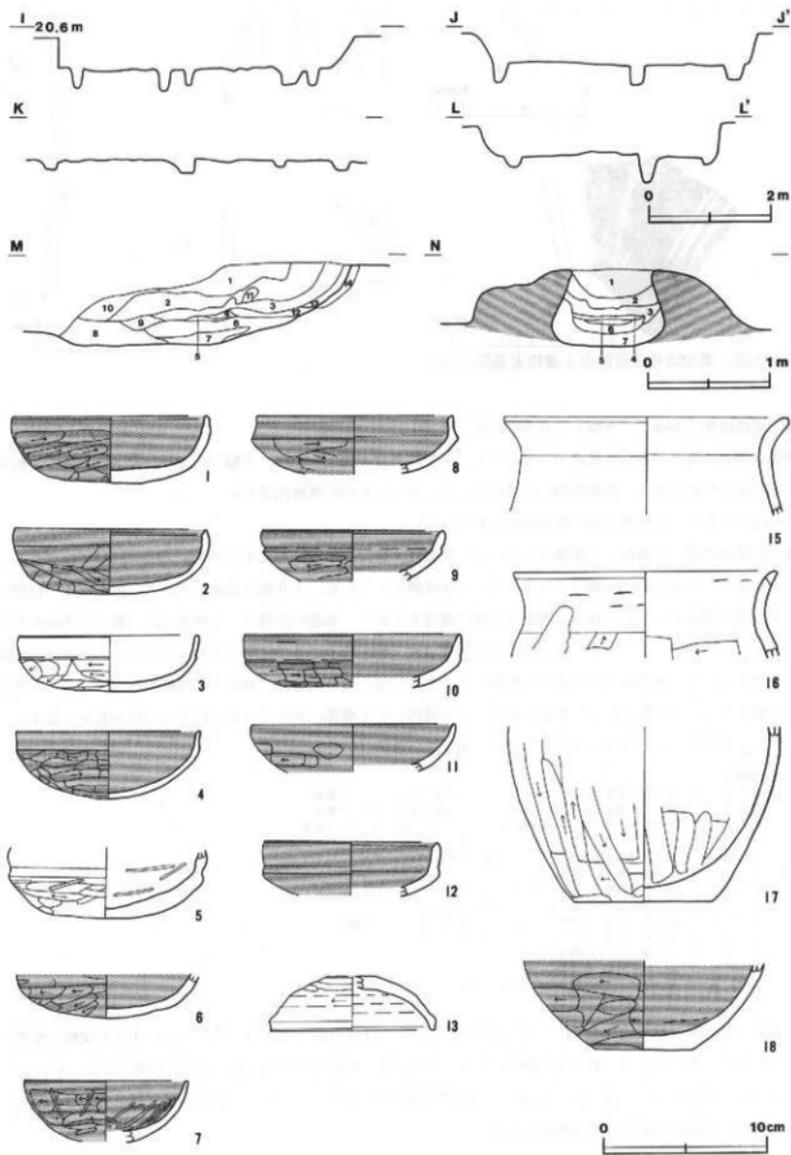
重複関係 南部が第30号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 南部が調査区域外に位置しているため、平面形は確認できなかった。東西10.69m, 南北(7.2)mである。

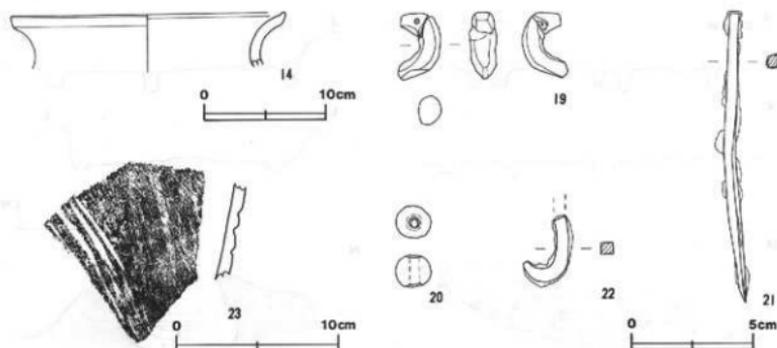
主軸方向 N-11°-W



第113图 第658号住居跡实测图(1)



第114图 第658号住居跡・出土遺物実測図(2)



第115図 第658号住居跡出土遺物実測図(3)

壁 壁高は40~50cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 調査区域外の南部は確認できなかった。それ以外は上幅35~65cm、下幅15~30cm、深さ約12cmで、断面形は逆台形状である。壁溝底面から壁に沿って、ビットが15か所検出された。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで255cm、両袖部幅215cmである。火床部は、床面を約15cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第1~4・10層が天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており、袖部の内側は、火熱を受け、粘土・山砂が赤変硬化してゴツゴツしている。第7層は焼土ブロック・焼土粒子が多量に検出されることから、下面は火床面と考えられる。煙道部は火床面から外傾して立ち上がる。竈の構築は、袖部の土層断面からみると、下層部は粘土ブロックと粘土粒子を多量に使用し、中層部から上層部にかけては粘土粒子と山砂を混ぜて使用しており、上層部から天井部では山砂の割合が増している。

竈土層解説

- 1 灰 褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・粘土ブロック少量、焼土小ブロック微量
- 2 灰 褐色 粘土粒子多量、焼土粒子・粘土ブロック中量、焼土小ブロック微量
- 3 灰 赤褐色 焼土粒子・粘土粒子中量、焼土中ブロック少量、焼土小ブロック微量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、炭微量
- 6 赤 灰色 灰多量、焼土粒子少量、炭少
- 7 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、焼土中ブロック少量、炭微量
- 8 赤 灰色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭少量
- 9 暗赤灰色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量
- 10 灰 褐色 粘土粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 11 黒 褐色 灰中量、焼土粒子微量
- 12 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭少量
- 13 暗赤褐色 焼土中ブロック・灰中量、焼土粒子少量
- 14 粘土

ビット 22か所(P₁~P₂₂)。P₁~P₅は径80~110cmのほぼ円形、深さ70~95cmで、いずれも規模と配置から主柱穴と考えられる。P₇は位置的にP₄の補助柱穴の可能性ある。P₉は性格不明である。P₈~P₂₂は径15~35cmの円形、深さ15~35cmで、ほぼ等間隔に検出された。いずれも壁からやや中央よりに傾斜しており、位置的に壁柱穴の可能性ある。

P₁・P₂・P₃土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量、ローム中ブロック微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大・中ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム大・中ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子中量、ローム大・中ブロック微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック・焼土粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 ロームブロック層
- 9 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 15層からなる。第15層は盛溝の覆土であり、単一層であることから自然堆積と考えられる。第1～14層には、ロームブロックが多量に検出されていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量、焼土粒子・炭化材・炭化粒子・粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土小ブロック・炭化材・粘土粒子・砂粒少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量、焼土小ブロック・炭化材・粘土ブロック・砂粒中量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、焼土大・小ブロック・焼土粒子・炭化材・粘土ブロック・砂粒中量、炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム中ブロック・粒子多量、ローム大ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 褐色 ローム小ブロック・粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材・粘土粒子少量
- 7 褐色 ローム大・中ブロック・粒子多量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子・焼土粒子・粘土大ブロック多量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 10 暗褐色 ローム中・小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 11 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・粘土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
- 12 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 13 明褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック・焼土粒子少量
- 14 褐色 ローム粒子多量
- 15 暗褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片1542点、須恵器片48点、陶器片1点、土製品1点(勾玉)、石製品1点(丸玉)、鉄製品2点(鉚釘)、礫5点が出土している。その他、竈の灰から魚・獣・小鳥と思われる骨片が少量、P₁から炭化種子が1点検出されている。骨片及び種子の種類については不明である。第114・115図1の土師器杯、17の土師器甕は、竈東袖部の上面からいずれも正位で出土している。2の土師器杯は、中央部やや北西側の覆土下層から正位で出土している。3・4・6・11の土師器杯は、竈東側の覆土下層から出土している。5の土師器杯は、竈西側の北壁寄りの覆土中層から出土している。7・8の土師器杯は、覆土中から出土している。9の土師器杯は、竈内から出土している。10の土師器杯は中央部やや北東部の覆土下層から、12の土師器杯は北西部西壁側の覆土下層から出土している。13の須恵器蓋は正位で竈東側の覆土下層から、14の土師器甕は東壁際の中央部やや北側の覆土下層から出土している。15の土師器甕は竈東側の床面から、16の土師器甕は覆土中から出土している。18の土師器甕は、北東部の覆土上層から出土している。19の勾玉は竈前の覆土中層から、20の丸玉は北西部西壁側の床面から出土している。21の錐は、中央部やや西側の覆土中層から出土している。22の釘は覆土中から出土している。23は土師器甕の体部片であり、外面に刃を研いだ痕跡が縦方向に三筋認められる。陶器片は混入したものと考えられる。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して7世紀前葉と考えられる。重複している第30号溝より古い。

第658号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	杯	A 11.9 B 4.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内摩して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へう翳り後ナデ、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にふい褐色 普通	P7601 98% P L 54 竈東袖部上面
	土師器					
2	杯	A 11.8 B 4.0	体部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内摩して立ち上がり、口縁部はわずかに内積する。口縁部内側に沈線が通る。	体部外面へう翳り後へうナデ、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色粒子 にふい褐色 普通	P7602 70% P L 54 中央部やや北西側覆土下層
	土師器					

図取番号	器 種	寸法 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第114図 3	坏 土 師 器	A 11.0 B 3.5	体部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部はわずかに内傾する。	体部外面へう削り。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P7603 80% 龍東側覆土下層 二次焼成
4	坏 土 師 器	A 11.4 B 4.2	体部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に強い稜をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	体部外面へう削り。体部内面、口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・白色 粒子 にぶい橙色 良好	P7604 80% P.L.84 龍東側覆土下層
5	坏 土 師 器	B (4.3)	口縁部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	体部外面へう削り後へう磨き、内面横ナデ後へう磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・赤色 粒子 にぶい黄褐色 やや不良	P7605 60% P.L.84 龍西側北壁寄り覆 土中層 二次焼成
6	坏 土 師 器	B (2.7)	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面へう削り、内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 灰青褐色 普通	P7606 50% 龍東側覆土下層
7	坏 土 師 器	A [10.0] B (3.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部は内彎して立ち上がる。	体部外面へう削り後へうナデ、内面へう磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P7607 40% 覆土中
8	坏 土 師 器	A [12.0] B (3.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	体部へう削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子 にぶい橙色 普通	P7608 8% 覆土中
9	坏 土 師 器	A [11.0] B (3.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部はわずかに外傾する。	体部外面へう削り、内面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・赤色粒子 明赤褐色 普通	P7609 5% 龍内
10	坏 土 師 器	A [13.2] B (3.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう削り。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。輪襷み痕。	砂粒・雲母・白色 粒子 にぶい橙色 普通	P7610 10% 中央部やや北東側 覆土下層
11	坏 土 師 器	A [12.4] B (2.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部から口縁部は内彎して立ち上がる。	体部外面へう削り。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P7611 5% 龍東側覆土下層
12	坏 土 師 器	A [10.6] B (3.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部は直立する。	体部外面へう削り。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P7612 5% 北西側四階側覆土 下層
13	甗 須 恵 器	A [10.0] B (3.3)	天井部から口縁部にかけての破片。天井部から口縁部にかけてドーム状をしている。	内・外面クロコナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P7613 15% 龍東側覆土下層 口縁部自然輪付着
第115図 14	甗 土 師 器	A [22.4] B (4.3)	口縁部片。口縁部は外反し、口唇部は上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい赤褐色 普通	P7614 10% 東壁部中央やや北 側覆土下層
第114図 15	甗 土 師 器	A [17.4] B (6.0)	口縁部片。口縁部は外反し、口唇部はわずかにつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石・ 赤色粒子 明赤褐色 普通	P7615 5% 龍東側床面
16	甗 土 師 器	A [16.0] B (5.4)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。輪襷み痕。	砂粒・雲母・赤色 粒子 橙色 普通	P7616 10% 覆土中
17	甗 土 師 器	B (10.8) C 8.4	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横方向のへう削り。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 にぶい橙色 不良	P7617 30% P.L.85 龍東上部
18	甗 土 師 器	B (5.4) C 5.8	底部から体部下位にかけての破片。平底。体部は内彎気味に外傾する。	体部外面横方向のへう削り。輪襷み痕。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 灰色 普通	P7618 20% 北東側覆土上層

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)		
第115図9	勾玉	2.7	1.7	1.1	0.2	3.36	畿南覆土中層 D P 7013 P L 101
図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
第115図10	丸玉	1.4	1.3	0.4	3.18	北西部やや西側壁床面	Q7030 P L 102
図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第115図11	鏃	11.9	0.4	1.5	14.0	中央部やや西側覆土中層	M7063
22	釘	(3.0)	0.5	0.5	(3.02)	覆土中	M7115

第694号住居跡(第116・117図)

位置 調査7区東部, N13d区。

重複関係 北部が第693号住居跡, 第479号土坑に, 東部が第692号住居跡に, 南西コーナー部が第688号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 南北(3.9)m, 東西(1.3)mである。攪乱がはなはだしいため平面形は不明である。

床 現存する面はほぼ平坦で, 西部が特に踏み固められている。

覆土 2層からなる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 土師器片139点, 須恵器片15点, 灰釉陶器片1点, 陶器片3点, 不明鉄製品1点が出土している。第117図1の土師器片は中央部西側の覆土下層から, 2の土師器器台は中央部北側の覆土下層から, 3の土師器壺は西壁側やや南寄りの覆土下層から出土している。4の不明鉄製品は覆土中から出土している。

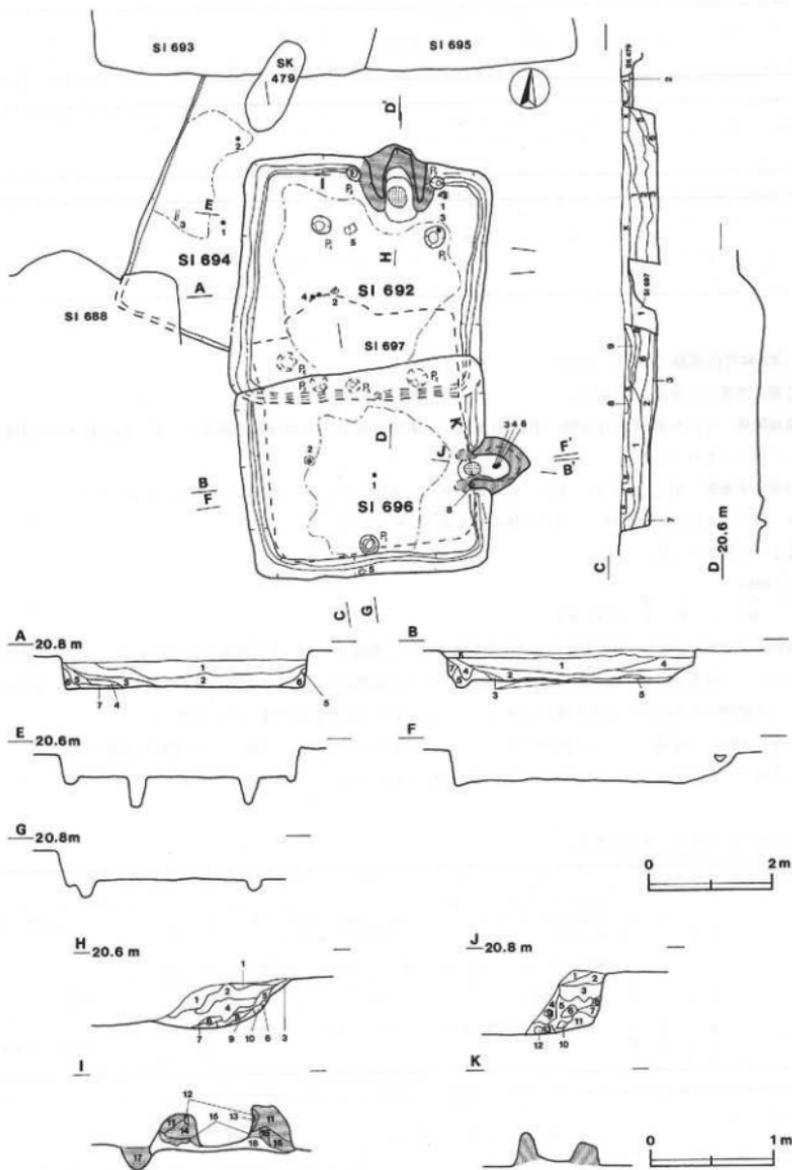
所見 本跡では壁溝・ピットは検出されなかった。時期は, 出土遺物から判断して古墳時代前期と考えられる。

重複している第688・692・693号住居跡, 第479号土坑より古い。

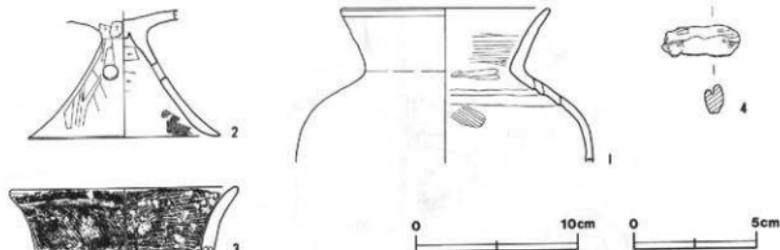
第694号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図1	土師器	A [13.0]	体形から口縁部にかけての破片。体形は内巻して立ち上がり, 口縁部は外反する。	体部外面ヘラナデ, 内面ハケ目調整。口縁部内・外面ヘラ磨き。口唇部横ナデ。輪杓み痕。	砂粒・石英・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7724 10% 中央部西側覆土下層
		B (9.5)				
2	土師器	B (7.2)	脚部片。脚部はラッパ状に開き, 中位に3孔を有する。器受部はわずかに外傾する。	脚部内・外面ハケ目調整後ヘラ磨り。器受部内面ナデ, 外面ハケ目調整後ヘラ磨り。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P7725 10% P L 89 中央部北側覆土下層
		D [12.0]				
		E 6.3				
3	土師器	A [13.8]	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後ナデ。	砂粒・雲母・長石・石英 橙色 普通	P7726 5% 西壁側やや南側覆土下層
		B (4.1)				

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
4	不明鉄製品	3.2	1.2	0.7	3.02	覆土中	M7113



第116图 第692·694·696号住居跡实测图



第117図 第694号住居跡出土遺物実測図

第701号住居跡 (第118図)

位置 調査7区東部, N13c区。

重複関係 南部が第700号住居跡に, 東部が第707号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 東部は調査区域外に位置している。南北 [4.4]m, 東西 (1.9)mである。第700・707号住居跡に掘り込まれているために, 北西コーナー部のみ遺存している。

壁 壁高は23cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12~18cm, 下幅約5cm, 深さ8cmで, 断面形はU字形をしている。

床 ほぼ平坦である。

ピット 2か所 (P₁・P₂)。P₁・P₂は径25cmの円形, 深さ60cm・42cmである。規模と配置から主柱穴と考えられる。

覆土 6層からなる。各層からロームブロックが検出され, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

遺物 土師器片90点が出土しているが, 細片である。ハケ目調整を施した土師器甕の口縁部片2点が出土している。

所見 本跡の時期は, 出土遺物から判断して古墳時代前期と考えられる。重複している第700・707号住居跡より古い。

第710号住居跡 (第119・120図)

位置 調査7区中央部, M11c区。

重複関係 南壁上部が第528B号住居跡に掘り込まれている。

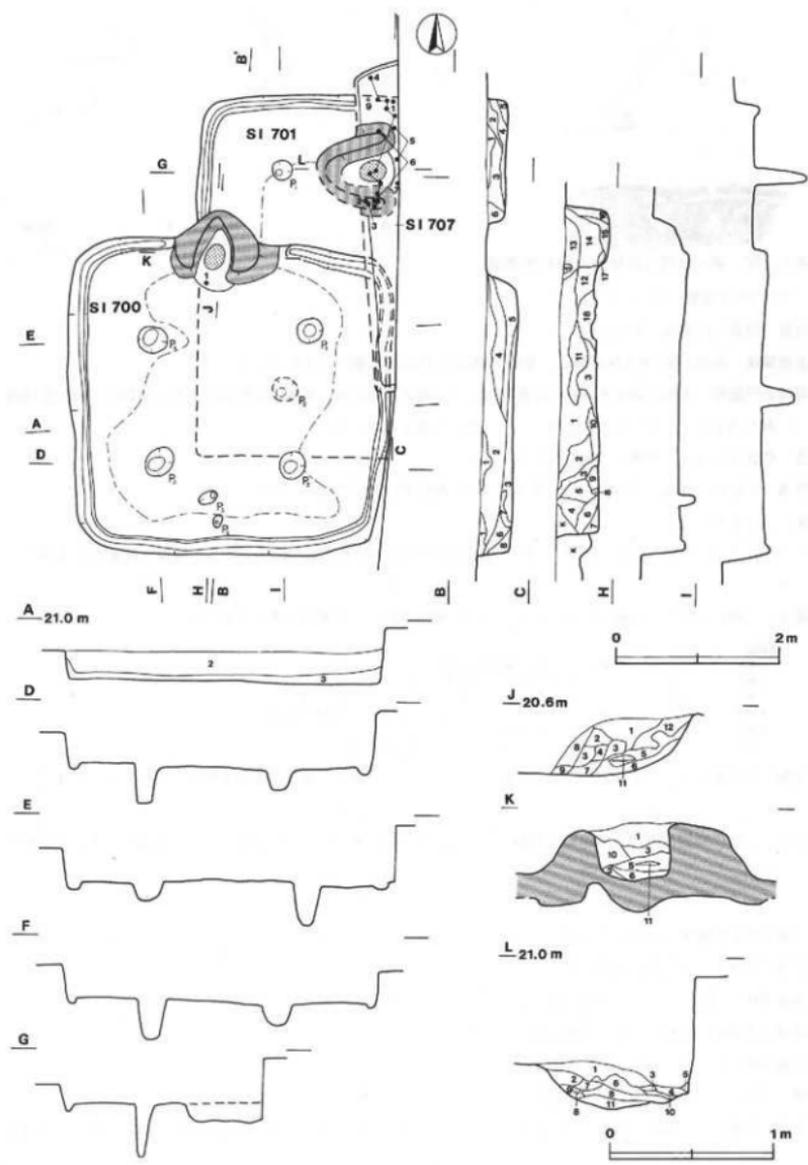
規模と平面形 長軸3.78m, 短軸2.98mの長方形である。

主軸方向 N-12°-E

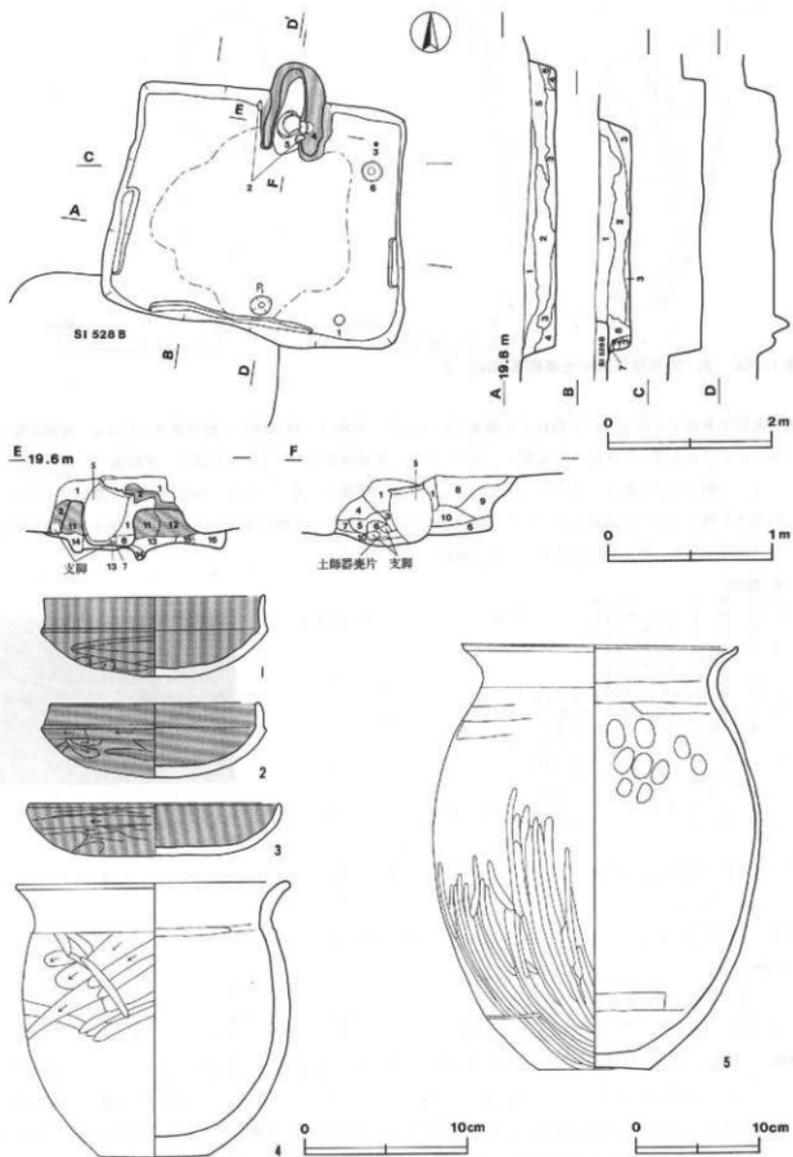
壁 壁高は27~40cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅14~32cm, 下幅4~12cm, 深さ4cmで, 断面形はU字形であり, 東西壁下の一部と南壁下から確認されている。

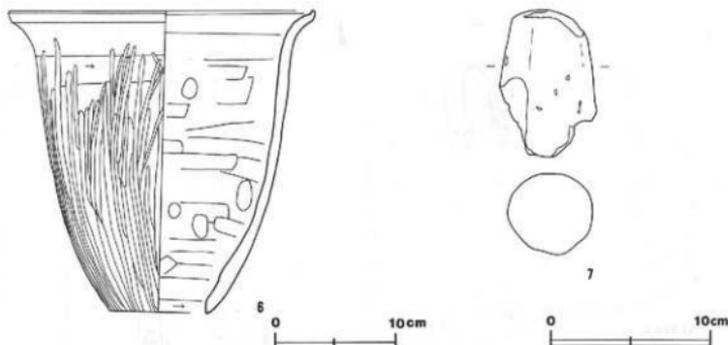
床 ほぼ平坦で, 中央部が特に踏み固められている。



第118图 第700·701·707号住居跡実測图



第119图 第710号住居跡・出土遺物実測図(1)

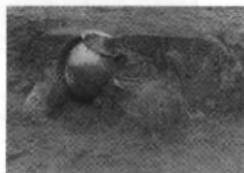


第120図 第710号住居跡出土遺物実測図(2)

竈 北壁中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで114cm、両袖部幅90cmである。火床部は、床面を5cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は一部崩落しており、第2・4・8層は山砂と粘土の層であることから、天井部の崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存しており、内側は火熱を受けて赤変硬化している。西袖部内から赤く焼けた支脚が出土しており、補強材として使用した可能性がある。煙道部は火床面から急な傾斜で立ち上がる。

竈土層解説

- | | |
|------------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 山砂・粘土多量、ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子微量 |
| 5 にぶい、黄褐色 | 焼土粒子少量 |
| 6 赤褐色 | 山砂多量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 8 黒褐色 | 砂質粘土少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック微量 |
| 9 黒暗褐色 | 炭化粒子・砂質粘土微量 |
| 10 にぶい、黄褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子少量 |
| 11 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 12 にぶい、黄褐色 | 山砂・粘土多量、焼土粒子少量 |
| 13 黒暗褐色 | ローム小ブロック・黒褐色土小ブロック中量 |
| 14 黒褐色 | 黒褐色土小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 |
| 15 暗褐色 | ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 |
| 16 褐色 | ローム中・小ブロック中量、黒褐色土小ブロック少量 |



ピット P₁は径25cmの円形で、深さ21cmであり、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 8層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量 | 7 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 黒褐色 | 黒色土小ブロック少量、ローム小ブロック微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・粘土小ブロック中量 |

遺物 土師器片87点、須恵器片2点、土製品2点(支脚)、碗状鉄滓2点、礫1点が出土している。第119・120図1の土師器坏は南東コーナー部の覆土下層から正位で出土している。2の土師器坏は竈内と竈西側の覆土下層から出土した破片が接合したものである。3の土師器坏は北東コーナー部の覆土下層から出土している。4の土師器小形甕は東袖部の上面から正位で、5の土師器甕は竈に据えられた様に正位の状態出土している。6の土師器甕は竈東側の床面から逆位で出土している。7の支脚は竈火床面から斜位で、

5の下部を支えるような状態で出土している。碗状鉄滓は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀後葉と考えられる。重複している第528B号住居跡より古い。

碗状鉄滓が出土しているが、鍛冶炉等は確認されていない。

第710号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	坏 土師器	A 13.6 B 4.9	口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部は直立する。	底部、体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子 にぶい褐色 普通	P7783 95% P.L.91 南東コー ナー部覆土下層
2	坏 土師器	A 12.8 B 4.6	底部、体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な段をもつ。口縁部はほぼ直立する。	底部、体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子 にぶい赤褐色 普通	P7784 90% P.L.91 壁内と礎 石間覆土下層 二次焼成
3	坏 土師器	A [15.4] B 3.2	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部から口縁部は内彎して立ち上がる。	底部、体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。口縁部外面ヘラナデ。内面横ナデ。内・外面黒色処理。輪轆み風。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P7785 40% 北東コーナ一部覆 土下層
4	小形 土師器	A 16.8 B 16.9 C [6.5]	底部から体部下位一部割断。平底。底部から体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄褐色 普通	P7786 95% P.L.91 礎石間上部 体部外面露付着
5	葉 土師器	A 22.5 B 34.6 C 9.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、中位に横大唇をもつ。胴部はくびれ、口縁部は外反する。口唇部はわずかに上方につまみ上げられている。	底部一方内へのヘラナデ。体部外面中位から下位に横方向へのヘラ磨き。内面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部内面に指痕。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 にぶい黄褐色 良好	P7787 98% P.L.91 礎石付口 体部外面露付着
第120図 6	瓶 土師器	A 25.3 B 24.9 C 8.2	口縁部一部欠損。無底式。体部は強弾型を呈する。口縁部は外反し、口唇部は上方につまみ上げられている。	底部内面ヘラ削り。体部外面縦方向へのヘラ磨き。内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部内面に指痕。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 褐色 良好	P7788 98% P.L.91 礎石間床面 体部外面露付着

図版番号	種別	計 測 値			出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)		
7	支 脚	(19.2)	5.0～6.1	1520	竈火床面	D P7021 土製

第718号住居跡 (第121～123図)

位置 調査7区北部、L11e区。

重複関係 南西コーナ一部が、第717号住居跡に床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.66m、短軸5.53mの方形である。

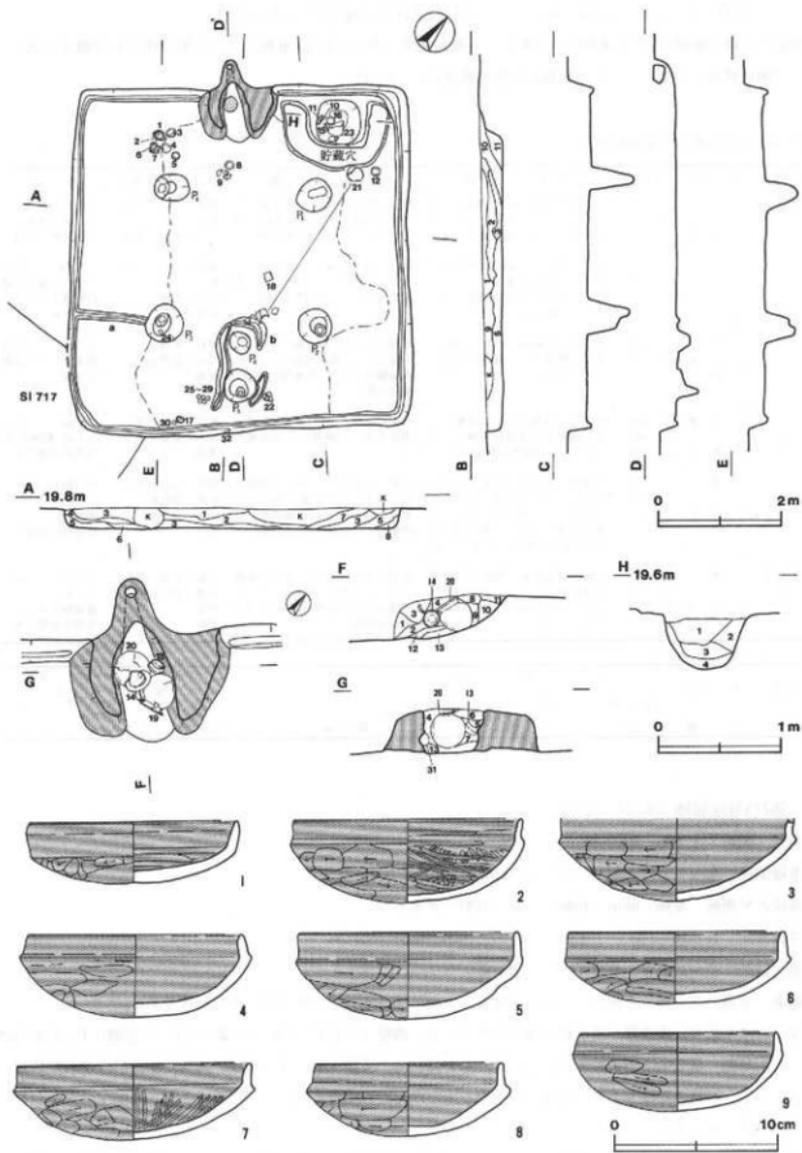
主軸方向 N-39°-W

壁 壁高は25～36cmで、外傾して立ち上がる。

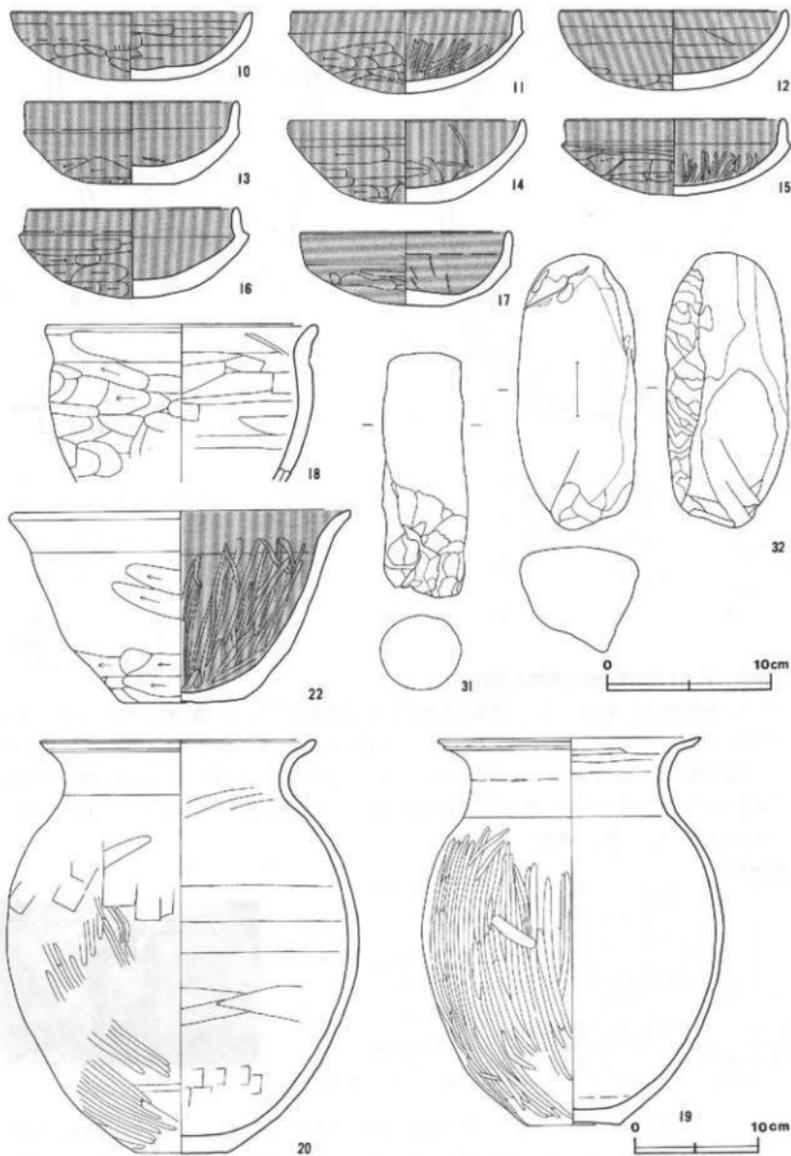
壁溝 全周している。上幅13～25cm、下幅4～8cm、深さ6cmで、断面形は逆台形状である。

床 ほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。西壁下からP₃に延びる溝aとP₆の北側にP₆を半周回んだ状態の溝bの2条が確認され、いずれも上幅15cm、下幅5cm、深さ5cmであり、断面形は逆台形状をしている。性格は不明である。貯蔵穴の南側を土手状に固め硬化した高まりが確認され、幅35cmで床面からの高さは5cmである。

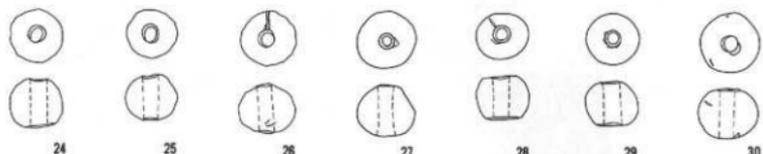
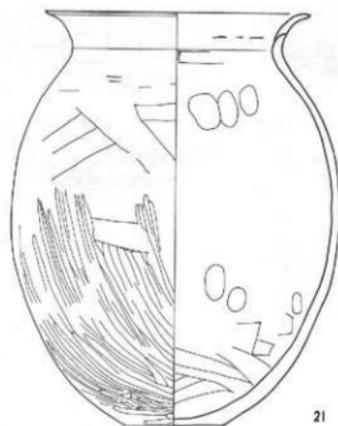
竈 北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで135cm、両袖幅140cmである。天井部は一部崩落しており、第1～3、6層は山砂が多量に出土していることから、天井部の崩落土と考え



第121图 第718号住居跡・出土遺物実測図(1)



第122图 第718号住居跡出土遺物実測図(2)



第123図 第718号住居跡出土遺物実測図(3)

られる。袖部は良好に遺存しており、内側は火熱を受けて赤変硬化している。第12層は焼土ブロック・粒子が多量に含まれ、下面がゴツゴツしていることから、下面が火床面と考えられる。火床部は赤変硬化しており、土師器甕が2点並んで据えられた状態で出土しており、掛け口が二つと考えられる。煙道部は火床面から緩やかに立ち上がる。袖部は、地山を土手状に掘り残し、その上面に粘土と砂粒及びローム粒子をそれぞれ多量に混ぜたものを積んで構築している。

甕土層解説

- 1 褐色 山砂中量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 にぶい褐色 山砂多量
- 3 にぶい褐色 山砂多量、焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 4 褐色 山砂中量、ローム粒子・粘土粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、軟らかい
- 6 褐色 ローム粒子・山砂多量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 7 明赤褐色 炭化粒子多量、焼土粒子・山砂中量、ローム粒子・焼土小ブロック少量
- 8 褐色 ローム粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 10 褐色 砂粒・粘土粒子多量、焼土粒子少量
- 11 褐色 ローム粒子・砂粒多量、ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 12 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒多量、ゴツゴツしている
- 13 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・黒色土中量、ローム粒子少量、軟らかい



ビット 6か所 ($P_1 \sim P_6$)。 $P_1 \sim P_4$ は径約55cmの円形で、深さ51~74cmであり、いずれも規模と配置から主柱穴と考えられる。 $P_5 \cdot P_6$ は径55cmと35cmの円形で、深さは38cmと23cmである。いずれも南壁際に位置し、南北方向に並んでいる。位置的に出入り口施設に伴うビットと考えられる。

貯蔵穴 北東コーナー部で確認された。長軸75cm、短軸70cmの隅丸方形で、深さ53cmであり、断面形は逆台形状をしている。覆土は暗褐色であり、ローム粒子が多量、ローム小ブロックが微量含まれていた。覆土下層から土師器杯2点と土師器瓶が1点出土している。

貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

覆土 11層からなる。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|--------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、黒色土ブロック少量 | 7 黒色 | ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、黒色土ブロック少量 | 8 黒褐色 | ローム小ブロック・粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・黒色土ブロック少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量、黒色土ブロック少量 | 10 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・黒色土ブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量 | 11 暗褐色 | ローム粒子多量、砂粒中量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物 土師器片94点、土製品8点(土玉7、支脚1)、砥石1点が出土している。図示した土器はすべて土師器である。第121~123図1~3、5~7の杯は正位で、4の杯は逆位で甕西側の床面から出土している。

1は2の上に重なった状態で出土している。8の杯は逆位で、9の杯は破片で甕前の床面から、8が9の上に重なった状態で出土している。10・11の杯は貯蔵穴の覆土上層から、ともに横位で重なった状態で出土している。12の杯は北東コーナー部の床面から正位で出土している。13・14の杯、19・20の甕は甕内から、13は20の上部に斜位で、14は19・20の下部に横位で、19・20はともに斜位で出土している。15の杯は横位で、16の杯は逆位で、23の甕は横位で、貯蔵穴の覆土下層から出土している。17の杯、30の土玉は南壁際西側の覆土下層から出土している。18の鉢は中央部、21の甕は北東コーナー部と中央部の床面から出土している。22の鉢は南壁側中央部の覆土下層から出土している。24の土玉はP₃の覆土中から出土している。25~29の土玉は南壁側中央部の床面から出土している。31の支脚は甕火床部の西袖際から横位で出土している。32の砥石は南壁際中央部の覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀後葉と考えられる。重複している第717号住居跡より古い。

第718号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	土師器 杯	A 12.8	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は鋭い稜をなして屈曲し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・スコリア に多い褐色 普通	P7850 95% P L 93 甕西側床面
		B 3.8				
2	土師器 杯	A 14.0	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は稜をなして屈曲し、口縁部は直立する。頸部は丸く収まっている。	口縁部外面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。内面粗いヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 に多い黄褐色 普通	P7851 98% P L 93 甕西側床面
		B 5.1				
3	土師器 杯	B (5.2)	口縁部欠損。丸底。底部との境は稜をなして屈曲し、口縁部は軽く外反してほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部不定方向のヘラ削り。内面横ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア に多い黄褐色 普通	P7852 95% P L 93 甕西側床面
		A 13.1				
4	土師器 杯	A 13.1	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は稜をなして屈曲し、口縁部は内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア に多い黄褐色 普通	P7853 90% P L 93 甕西側床面
		B 5.1				
5	土師器 杯	A 13.4	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は稜をなして屈曲し、口縁部は若干内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英 に多い褐色 普通	P7854 90% P L 93 甕西側床面
		B 5.3				
6	土師器 杯	A 13.2	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は稜をなして屈曲し、口縁部は若干内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。内面中央ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 に多い黄褐色 普通	P7855 90% P L 93 甕西側床面
		B 4.4				

原図番号	器 種	寸法値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第121図 7	坏	A 14.4 B 4.7	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は段を有して屈曲し、口縁部は段をなして直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面へラ削り、内面横ナデ後、放射状のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・小石・長石 にぶい橙色 普通	P7856 95% P.L.93 貯蔵穴覆上面
	土師器					
8	坏	A 11.4 B 4.6	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は段を有して屈曲し、段をなして口縁部は若干内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。底部外面へラ削り、内面中央部ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア・チャート にぶい黄褐色 普通	P7857 95% P.L.93 貯蔵穴表面
	土師器					
9	坏	A 12.0 B 4.8	底部・口縁部一部欠損。丸底。底部との境は段を有して屈曲し、段をなして口縁部は若干内傾して立ち上がる。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。底部外面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・スコリア 灰黄褐色 普通	P7858 80% P.L.93 貯蔵穴表面
	土師器					
第122図 10	坏	A 14.8 B 4.2	口縁部一部欠損。丸底。底部から内側して口縁部にいたる。肩部はほぼ直立して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面へラ削り、内面ハケ状工具によるナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	P7859 95% P.L.93 貯蔵穴覆土上層
	土師器					
11	坏	A 13.8 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は段を有して屈曲し、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面へラ削り、内面横ナデの後、放射状のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P7860 93% P.L.93 貯蔵穴覆土上層
	土師器					
12	坏	A 13.8 B 4.9	口縁部一部欠損。丸底。底部から内側して口縁部にいたる。口縁部は直立し、肩部は丸く収められている。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。底部上位は輪積み痕を残すナデ。下位はへラ削り。内面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・スコリア 普通	P7861 95% P.L.93 北東コーナー部表面
	土師器					
13	坏	A 13.0 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は段を有して屈曲し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面、底部内面横ナデ。体部は輪積み痕を残すナデ。底部は木葉痕を残すへラ削り。内面中央はヘラナデ。内・外面赤影黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P7862 95% P.L.93 壺内
	土師器					
14	坏	A 14.4 B 5.1	口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部は輪積み痕を残すナデ。底部は木葉痕を残すへラ削り。内面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・スコリア 明褐色 普通	P7863 90% P.L.93 壺内
	土師器					
15	坏	A 13.3 B 4.7	定形。丸底。底部との境は段を有して屈曲し、口縁部はほぼ直立する。肩部は丸く収められている。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面不定方向のへラ削り。内面放射状のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・スコリア 緑灰色 普通	P7864 100% P.L.93 貯蔵穴覆土下層
	土師器					
16	坏	A 12.8 B 5.5	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は段を有して屈曲し、口縁部はやや内傾する。肩部は本来の面を残している。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面不定方向のへラ削り。内面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P7865 95% P.L.93 貯蔵穴覆土下層
	土師器					
17	坏	A 12.8 B 4.6	定形。丸底。底部との境は鋭い段を有して屈曲し、口縁部はほぼ直立する。肩部は丸く収められている。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面不定方向のへラ削り。内面ヘラナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P7866 100% P.L.93 典例西面 壺土下層
	土師器					
18	鉢	A [18.4] B (9.7)	体部からの口縁部にかけての破片。体部は内側して立ち上がり、軽く屈曲して口縁部は外反する。器縁は厚い。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のへラ削り。内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P7867 15% 中央部表面
	土師器					
19	寛	A 21.4 B 31.4 C 7.6	定形。平底。縦長の球形を呈する体部から、頸部は緩やかにくびれ、口縁部は緩やかに外反する。肩部は外方へつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。頸部内・外面ナデ。体部外面横位のヘラ磨き。内面ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P7868 100% P.L.93 壺内
	土師器					
20	寛	A 22.5 B 33.5 C 8.1	体部・口縁部一部欠損。平底。縦長の球形を呈する体部から、頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面、頸部外面横ナデ。体部上位ナデ。中位以下斜位のへラ磨き。体部内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P7869 85% P.L.93 壺内
	土師器					
第123図 21	寛	A [13.2] B 32.6 C 8.0	体部・口縁部一部欠損。平底。縦長の球形を呈する体部から、頸部は緩やかにくびれ、口縁部は外反する。肩部は外方へつまみ出されている。	口縁部内・外面、頸部外面横ナデ。体部外面ナデおよびヘラナデ。頸部内面ヘラナデ。体部内面ナデ。底部内面ヘラナデ。輪積み痕。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	P7870 60% 北東コーナー部と 中央部表面
	土師器					
第122図 22	鉢	A [20.8] B 11.8 C 7.4	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は内側して立ち上がり、口縁部は軽く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のへラ削り。内面横ナデの後、放射状のヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・石英 にぶい黄褐色 普通	P7872 25% P.L.94 南西中央部覆土下層
	土師器					
第123図 23	瓶	A 25.6 B 24.0 C 10.7	体部一部欠損。無蓋式。体部は外側して立ち上がり、口縁部は軽く外反する。肩部は上方へつまみ出されている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のへラ削り。内面ナデの後、縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P7873 95% P.L.94 貯蔵穴覆土下層
	土師器					

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第123図24	土玉	2.2	2.1	0.7	8.4	P, 覆土中	D P 7022 P L 101
25	土玉	2.1	1.9	0.6	6.45	南壁側中央部床面	D P 7023 P L 101
26	土玉	2.2	2.1	0.6	8.5	南壁側中央部床面	D P 7024 P L 101
27	土玉	2.4	2.1	0.7	10.0	南壁側中央部床面	D P 7025 P L 101
28	土玉	2.2	1.8	0.7	7.05	南壁側中央部床面	D P 7026 P L 101
29	土玉	2.2	1.9	0.7	7.15	南壁側中央部床面	D P 7027 P L 101
30	土玉	2.5	2.1	0.7	11.0	南壁側西側覆土下層	D P 7028 P L 101

図版番号	種別	計測値			出土地点	備考
		長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)		
第122図1	支脚	20.3	4.6~5.2	411.0	竈火床面	D P 7029 土製

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第122図2	礎石	17.0	7.4	7.4	1050.0	南壁側中央部覆土下層	Q 7027 砂岩

第721号住居跡 (第124~127図)

位置 調査7区北西部, L10e区。

重複関係 北部で第723号住居跡を掘り込み、西部の上位が第19号溝に、北東コーナー部の上位が第722号住居跡に掘り込まれている。さらに、中央部が第575~584号土坑に床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 北西コーナー部が調査区域外に位置している。長軸7.23m, 短軸7.17mの方形である。

主軸方向 N-31°-W

壁 壁高は35~53cmで、外傾して立ち上がる。

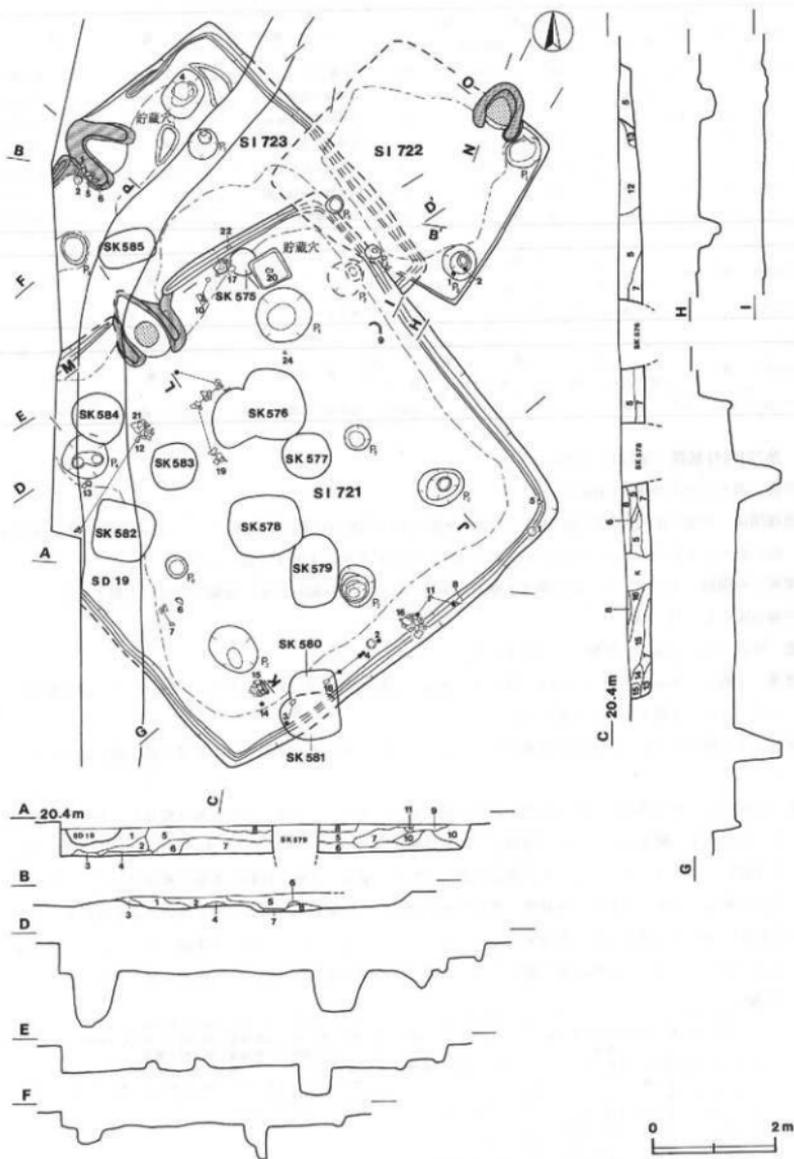
壁溝 上幅17~30cm, 下幅4~10cm, 深さ4~8cmで、断面形は逆台形状である。北西コーナー部は確認できなかったが、全周していたと推定される。

床 土坑に掘り込まれている部分は確認できないが、それ以外はほぼ平坦で、中央部が特に踏み固められている。

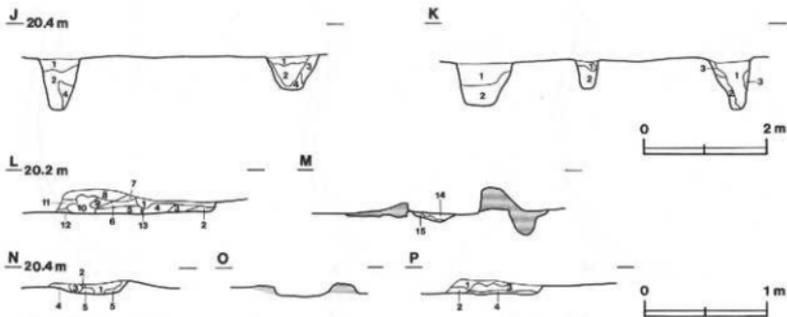
竈 西袖部から煙道部にかけての上部が第19号溝に掘り込まれているが、それ以外は残存しており、北壁中央部に砂質粘土で構築されている。規模は、両袖部幅113cmであり、火床部は、床面を5cm掘りくぼめており、赤変硬化しゴツゴツしている。天井部は崩落しており、第7~9層は砂粒が多量に検出されることから、天井部の崩落土と考えられる。西袖部の遺存状況は悪いが、両袖部の内側は火熱を受けて赤変硬化している。第14層は地山が火熱を受けて赤変硬化しゴツゴツしていることから、上面が火床面と考えられる。煙道部は確認できない。第1~13層は竈の覆土であり、第14・15層は袖部断ち割りの火床部土層である。

竈土層解説

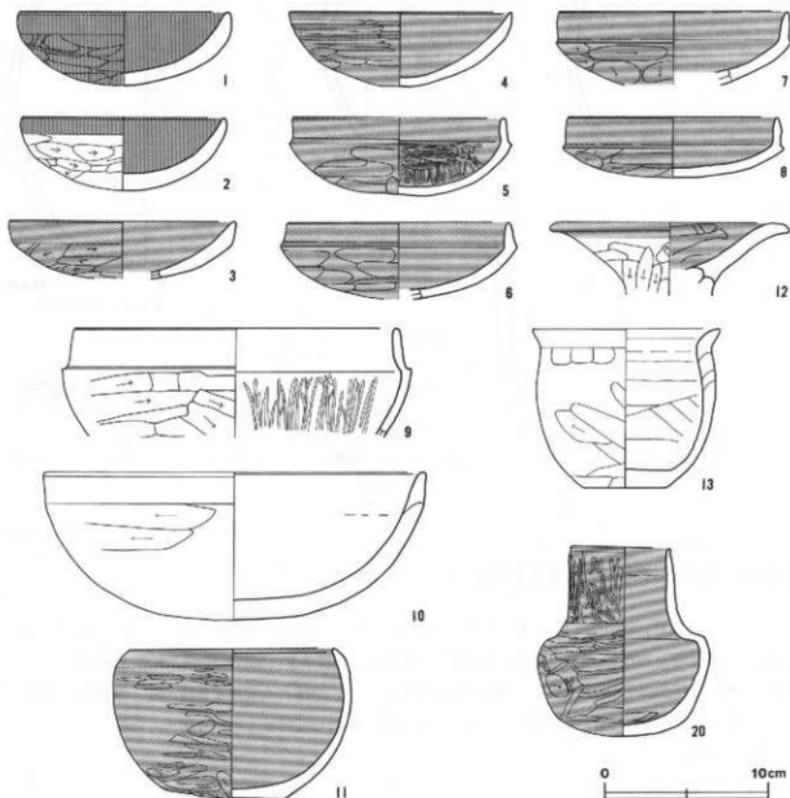
- | | | | |
|---------|---------------------------------|---------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 9 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 砂粒中量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム小ブロック・焼土小ブロック微量 | 10 黒褐色 | 砂粒少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子多量, 焼土ブロック中量, 炭化物・炭化粒子少量 | 11 にぶい黄褐色 | 砂粒多量, 焼土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土小ブロック中量, 炭化粒子少量 | 12 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 にぶい褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック・砂粒少量 | 13 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 砂粒少量, 焼土小ブロック微量 |
| 6 黒褐色 | 炭化粒子中量, 焼土粒子少量 | 14 地山が赤変硬化しゴツゴツしている | |
| 7 暗赤褐色 | 焼土粒子・砂粒多量, 炭化粒子少量 | 15 にぶい褐色 | 砂粒多量 |
| 8 黒褐色 | 砂粒多量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量 | | |



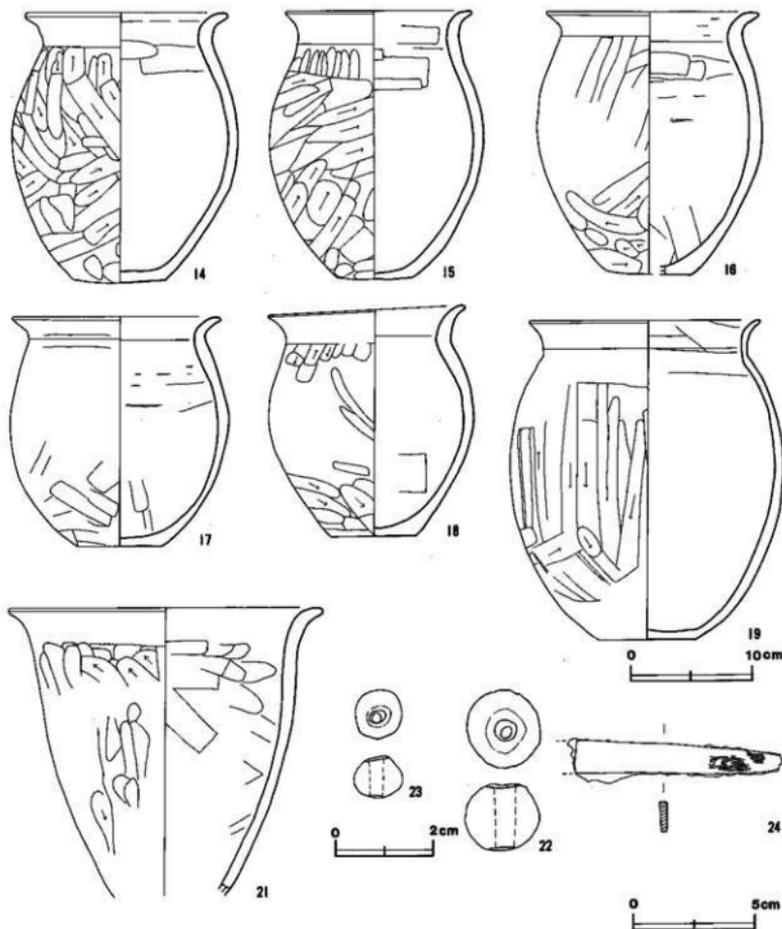
第124図 第721・722・723号住居跡実測図(1)



第125图 第721·722·723号住居跡实测图(2)



第126图 第721号住居跡出土遺物实测图(1)



第127図 第721号住居跡出土遺物実測図(2)

ピット 7か所 (P₁~P₇)。P₁~P₄は径75~90cmの円形で、深さ65~99cmであり、いずれも規模と配置から主柱穴と考えられる。P₄は底面に柱を据えた痕跡が2か所あり、同時に柱が2本あった可能性がある。P₅・P₆は径40cmと33cmの円形で、深さ26cmと50cmであり、いずれも規模と配置から、補助柱穴と考えられる。P₇は径55cmの円形で、深さ47cmであり、南壁側に傾斜していることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

P₁~P₄・P₆土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量、黄土粒子微量
2 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・炭化粒子微量
4 暗褐色 ローム中・小ブロック少量

貯蔵穴 北東コーナー部で確認され、一辺55cmの方形で、深さ50cmである。断面形は長方形である。覆土下層から土師器片と第126図20の土師器小形直口壺が出土している。

覆土 16層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子微量	9 黒褐色	炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 黒褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	10 暗褐色	砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子・粘土大ブロック少量、ローム中ブロック微量	11 黒褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量	12 黒褐色	ローム中・小ブロック少量
5 黒褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	13 暗褐色	ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・焼土粒子微量
6 黒褐色	ローム小ブロック・粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土中ブロック微量	14 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
7 暗褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・粘土中ブロック微量	15 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
8 暗褐色	ローム小ブロック・粒子少量、炭化粒子微量	16 褐色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物 土師器片1153点、土製品2点(土玉)、鉄製品1点(刀子)が出土している。図示した土器はすべて土師器である。第126・127図1の坏は南東コーナー部の床面から逆位で、5の坏も1と同位置の覆土下層から正位で出土している。2は斜位で、4は正位で南壁側中央部のほぼ床面から出土している。3の坏は南壁側やや西寄りの床面から、6・7の坏は中央部やや西寄りの床面から正位で出土している。8の坏は南壁側中央部やや東寄りの覆土下層から正位で出土している。9の大形の坏は東壁側中央部やや北寄りの覆土中層から、10の鉢は東東側の覆土下層から出土している。11の小形鉢は南壁側中央部の床面から、16の甕は11と同位置から土圧でつぶされた状態で、18の甕は覆土中層からそれぞれ出土している。12の高坏は竈前の西部の覆土下層から出土している。13の小形甕は西壁側中央部北側の覆土下層から正位で、14・15の甕は南壁側中央部やや西寄りの床面から、土圧でつぶされた状態で出土している。17の甕は東東側の覆土下層から土圧でつぶされた状態で出土している。19は竈前から中央部にかけての覆土下層にかけて出土した破片が接合したものである。20の直口壺は貯蔵穴の覆土下層から横位で出土している。21の瓶は竈前西側の覆土下層から横位で出土している。22の土玉は東東側の北壁際の覆土下層から出土している。23の土玉はP₄の覆土中から出土している。24の刀子は中央部やや北東寄りの覆土上層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀中葉と考えられる。重複している第723号住居跡より新しく、第19号溝、第722号住居跡、第575～584号土坑より古い。

第721号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	寸法値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	土師器 坏	A 12.8	口縁部一部欠損。丸底。底部から内帯して口縁部に向いた。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。底部内面中央ナデ、内面の中央部を陰いて赤彩。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	P7905 95% P L 95 南東コーナー部床面
		B 4.5				
2	土師器 坏	A 12.4	底部・口縁部一部欠損。丸底。底部から内帯して口縁部に向いた。口縁部は丸く収めている。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。底部外面横位のヘラ削り。内面中央ナデ。口縁部外面・体部内面赤彩。	砂粒・雲母・長石・石英 浅黄橙色 普通	P7906 75% P L 95 南壁側中央部ほぼ床面
		B 4.5				
3	土師器 坏	A 13.8	底部から口縁部一部欠損。丸底。底部との境は横をなして帯出し、口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面横位のヘラ削り。内面磨き状のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア・小礫 にぶい橙色 普通	P7907 70% P L 95 南壁側中央部ほぼ床面
		B (3.5)				
4	土師器 坏	A 13.6	口縁部一部欠損。丸底。底部から内帯して口縁部に向いた。口縁部は丸く収めている。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面ヘラ削りの後、ヘラ磨き。内面横位のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石・石英・小礫 にぶい褐色 普通	P7908 95% P L 95 南壁側中央部ほぼ床面
		B 4.6				
5	土師器 坏	A 12.8	底部・口縁部一部欠損。丸底。底部との境は横をなして帯出し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデの後、ヘラ磨き。底部外面ヘラ削り。内面放射状のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P7909 55% P L 95 南東コーナー部覆土下層
		B 4.8				

図版番号	器 種	寸法値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第126図 6	坏	A 13.5 B (4.7)	底部・口縁部一部欠損。丸底。底部との境は緩やかに屈曲し、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面横位のヘラ削り。内面横位のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・石英・小礫 淡黄褐色 普通	P7910 70% P.L.95 中央部や西寄り床面
	土師器					
7	坏	A 14.0 B (4.5)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。底部との境は緩やかに屈曲し、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。内面ヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 小礫 淡黄褐色 普通	P7911 45% P.L.95 中央部や西寄り床面
	土師器					
8	坏	A [12.8] B 3.7	底部から口縁部にかけての破片。丸底。底部との境は緩やかに屈曲し、口縁部は直立する。	口縁部、体部内・外面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。内面中央ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母・長石 小礫 淡黄褐色 普通	P7912 45% 南壁側中央部や 東寄り覆土下層
	土師器					
9	大形坏	A 19.8 B (6.7)	体部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境は段をなし、口縁部はやや内彎する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位の磨き状ヘラ削り。内面横ナデの後、放射状の粗いヘラ磨き。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P7913 15% P.L.95 東壁側中央部や 北寄り覆土中層
	土師器					
10	鉢	A [23.2] B 9.1	底部から口縁部にかけての破片。底部から内彎して口縁部にあまい境を有する。体部と口縁部との境にあまい境を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体・底部外面横位のヘラ削り。内面磨き状のナデ。輪痕み痕。	砂粒・雲母・長石・ 石英 褐色 普通	P7914 25% 東側覆土下層
	土師器					
11	小形鉢	A 12.6 B 9.8 C 7.4	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内彎する。体部と口縁部との境にあまい境を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位の磨き状ヘラ削り。内面磨き状ナデ。底部粗いヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P7915 50% P.L.95 南壁側中央部床面 二次焼成
	土師器					
12	高坏	A [14.8] B (4.5)	坏破片。坏部はラッパ状に割いて立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。坏部下位から脚部にかけての縦位のヘラ削り。内面ヘラ磨き。口縁部外面・体部内面黒色処理。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P7916 10% 東寄り覆土下層
	土師器					
13	小形甕	A [11.4] B 9.8 C 5.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部はやや内彎して上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位および横位のヘラ削り。内面横位のヘラ削り。輪痕み痕。	砂粒・雲母・長石・ スコリア 褐色 普通	P7917 30% P.L.96 西壁側 中央部北側覆土下層
	須恵器					
第127図 14	甕	A 16.8 B 22.1 C 7.6	底部・体部一部欠損。平底。体部は、倒卵形を呈し、頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面磨き状のヘラ削り。内面横位のヘラ削り。	雲母・石英・スコリア・小礫 にぶい褐色 普通	P7918 95% P.L.95 南壁側 中央部や西寄り床面 二次焼成
	土師器					
15	甕	A 15.4 B 22.0 C 6.4	底部・体部、口縁部一部欠損。平底。体部は、倒卵形を呈し、頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位横位のヘラ磨き。中位から下位にかけて斜位のヘラ削り。内面横位のヘラ削り。輪痕み痕。	砂粒・雲母・長石・ 石英 にぶい褐色 普通	P7919 95% P.L.96 南壁側中央部床面 二次焼成
	土師器					
16	甕	A 17.4 B 21.5 C [6.9]	底部・体部、口縁部一部欠損。平底。体部は、倒卵形を呈し、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。輪痕み痕。	砂粒・雲母・長石・ スコリア にぶい赤褐色 普通	P7920 85% P.L.96 体部外面磨減 南壁側中央部床面 二次焼成
	土師器					
17	甕	A 16.7 B 19.0 C 6.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は倒卵形を呈し、頸部が屈曲し、口縁部は外反する。肩部はやや尖る。	口縁部、頸部内・外面クロコナテ。体部外面上半部ヘラ削り、下半部横位のヘラ削り。内面横位のヘラ削り。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・ 石英・赤色粒子 にぶい褐色 普通	P7921 60% P.L.96 東側覆土下層
	土師器					
18	甕	A 16.0 B 19.1 C 7.0	体部・底部・口縁部一部欠損。平底。体部は倒卵形を呈し、頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒・雲母・長石・ スコリア にぶい褐色 普通	P7922 60% P.L.96 東側外 面下層付着 南壁側中央 部覆土中層 二次焼成
	土師器					
19	甕	A [18.8] B 26.4 C 7.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は倒卵形を呈し、頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位から中位横位のヘラ削り、下位斜位のヘラ削り。内面横位のヘラ削り。底部ヘラナデ。	砂粒・雲母・石英・ 赤褐色 黄褐色 普通	P7923 65% P.L.96 甕前から中央部に かけての覆土下層
	土師器					
第126図 20	直口壺	A 6.1 B 11.7	変形。丸底。体部は内彎して立ち上がり、肩部がやや張り、腹から口縁部はやや内彎して立ち上がる。口縁部直下に一状の比線を画らす。	口縁部、頸部外面横ナデの後、縦位のヘラ磨き。体部外面横位のヘラ磨き。頸部、体部内面ナデ。内・外面黒色処理。	長石・石英 にぶい褐色 良好	P7924 100% P.L.96 貯蔵穴覆土下層
	土師器					
第127図 21	甕	A 25.6 B (23.9)	底部・体部、口縁部一部欠損。無平底。体部はやや内彎気味に内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。内面上半横位のヘラ削り。下位斜位のヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P7925 70% P.L.96 甕前西側覆土下層
	土師器					

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		径 (cm)	長さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)		
第127図22	土玉	3.0	2.2	0.9	250	竈東側北壁階壇上下層	D P 7031 P L 101
23	土玉	0.9	0.9	0.3	0.68	P. 覆土中	D P 7032

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第127図24	刀子	(8.4)	13	0.3	(15.0)	中央やや北東側覆土上層	M7096

第723号住居跡 (第124・125・128図)

位置 調査7区北西部, L10d区。

重複関係 南東コーナー部の上部が第722号住居跡に, 南部が第721号住居跡に床面まで掘り込まれている。さらに, 中央部の上面が第19号溝に, 竈前面が第585号土坑に床面まで掘り込まれている。

規模と平面形 北西コーナー部は調査区域外に位置している。長軸5.47m, 短軸(5.2)mである。

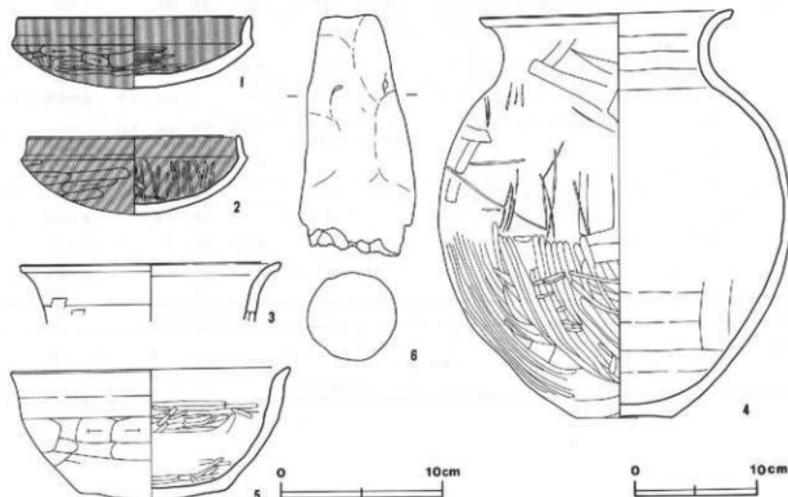
主軸方向 N-55°-W

壁 壁高は18cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 上幅12~26cm, 下幅4~11cm, 深さ4cmで, 断面形はU字形である。

床 土坑に掘り込まれている部分は確認できないが, それ以外はほぼ平坦で, 中央部が特に踏み固められている。

竈 攪乱を受けており遺存状態は悪いが, 北壁のほぼ中央部から袖部と思われる砂質粘土が確認された。規模は, 両袖部幅100cmである。天井部は確認できなかった。袖部の内側からは焼土ブロックが検出されている。火床部は赤変硬化している。煙道部は確認できなかった。



第128図 第723号住居跡出土遺物実測図

甕土層解説

- 1 暗赤褐色 砂粒・粘土・焼土粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子中量

ピット 3か所 (P₁~P₃)。P₁~P₃は径50~60cmの円形で、深さ30~60cmであり、いずれも規模と配置から主柱穴と考えられる。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土である。

貯蔵穴 北東コーナー部から確認され、長軸73cm、短軸60cmの隅九長方形で、深さ34cmである。

覆土 8層からなる。ブロック状の堆積状況から、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量, 焼土小ブロック微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・粒子少量
- 7 黒褐色 ローム中・小ブロック微量
- 8 褐色 ローム粒子中量, ローム中・小ブロック少量, 炭化粒子微量

遺物 土師器片235点, 須恵器片14点, 土製品1点(支脚), 礫1点が出土している。第128図1・2の土師器は正位で、5の土師器鉢は土圧でつぶれた状態で甕西側の覆土下層から出土している。3の土師器甕は甕の覆土中から、4の土師器甕は甕東側の覆土下層から横位で出土している。6の支脚は甕西側の床面から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して6世紀中葉と考えられる。重複している第721・722号住居跡、第19号溝、第585号土坑より古い。

第723 図住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	土師器 環	A [14.4]	体部・口縁部一部欠損。丸底。底部との境は線をなして直垂し、口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内・外側横ナデ。底部内・外面横位の線をヘラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P7928 90% P L 97 甕西側覆土下層
		B 4.3				
2	土師器 環	A 13.0	口縁部一部欠損。丸底。底部との境は線をなして直垂し、口縁部はやや外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面磨き状のヘラナデ。内面放射状のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	黄母・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P7929 70% P L 97 甕西側覆土下層
		B 4.8				
3	土師器 甕	A [21.0]	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き。	砂粒・黄母・長石 浅黄褐色 普通	P7931 5% 甕覆土中
		B (4.7)				
4	土師器 甕	A 20.7	口縁部一部欠損。平底。体部はやや縦長の線形を呈し、頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部・体部外面上半ナデ。中位以下縦位のヘラ磨き。内面横位のヘラナデ。	砂粒・黄母・長石・スコリア 褐色 普通	P7932 98% P L 97 甕東側覆土下層
		B 33.3				
		C 8.1				
5	土師器 鉢	A [17.0]	底部から口縁部にかけての破片。わずかに突出する平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反する。体部と口縁部の境に線を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ磨き。内面横位のヘラ磨き。底部ヘラナデ。	砂粒・黄母・長石・スコリア 褐色 普通	P7930 40% P L 97 甕西側覆土下層 二次焼成
		C [9.2]				
図版番号	機別	計 面 値			出土地点	備 考
		長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)		
6	支脚	(14.9)	3.7~7.3	(552.0)	甕西側床面	D P 7033 土製

② 奈良・平安時代

第111号住居跡 (第129図)

位置 調査7区中央部, M11g区。

重複関係 西部が第340号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.95m, 短軸2.90mの方形である。

長軸方向 N-10°-E

壁 壁高は20~28cmで, 外傾して立ち上がる。

壁溝 西壁下から南壁下にかけてと北東コーナー壁下に確認できた。規模は, 上幅10cm, 下幅5cm, 深さ5cmで, 断面形はU字形である。

床 西部が掘乱を受けている。ほぼ平坦で, 中央部が特に踏み固められている。

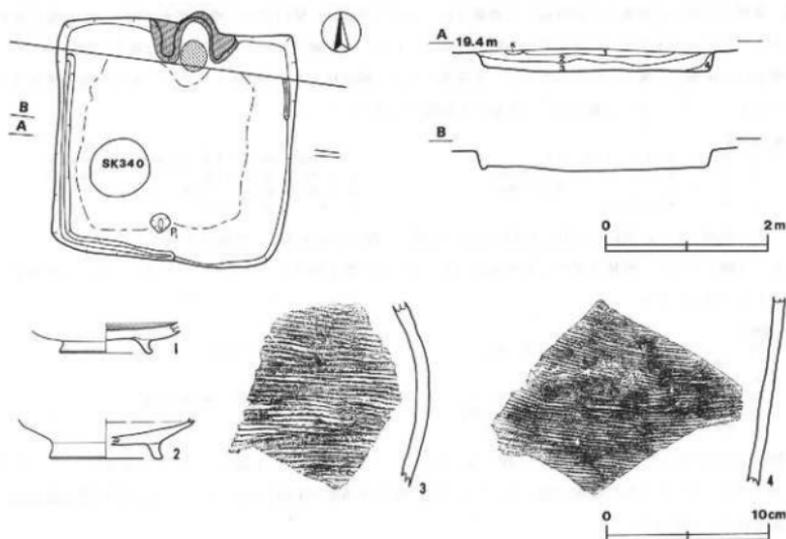
ピット 南壁際にあるP₁は径約20cmの円形で, 深さ14cmである。位置的に入入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり, 堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化物微量
- 3 褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量, やや軟らかい

遺物 土師器片89点, 須恵器片53点, 礫1点が出土している。第129図1の土師器高台付杯と2の須恵器高台付杯は北東側の覆土中層から出土している。3と4は須恵器壳体部片で, いずれも外面に横位の平行印きが施されている。



第129図 第111号住居跡・出土遺物実測図

所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。重複している第340号土坑より古い。なお、竈を含む北部は、平成7年度に調査されており、『茨城県教育財団文化財調査報告第120集』で第111号住居跡として報告されているので、今回も同じ番号で報告する。

第111号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 1	高台付環土器	B (1.4)	高台部から底部にかけての破片。高台は短く「ハ」の字状に開く。	底部外面ナデ、内面丁寧なヘウ磨き。高台貼り付け後ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母・白色粒子 褐色 普通	P7048 20% 北東部覆土中層
		D 5.7				
		E 0.7				
2	高台付環須恵器	B (25)	高台部から底部にかけての破片。高台はやや開く。	底部外面ヘウ割り、内面ナデ。高台貼り付け後ナデ。	砂粒・長石・石英 暗灰黄色 普通	P7049 20% 北東部覆土中層
		D 6.8				
		E 1.1				

第528A号住居跡(第130・131図)

位置 調査7区中央部, M11d区。

重複関係 北部が第528B号住居跡に掘り込まれているが、床面までは達していない。

規模と平面形 長軸3.40m, 短軸2.90mの長方形である。

長軸方向 N-92°-E

壁 壁高は14~18cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 第528B号住居跡との重複部分以外は確認できた。規模は、上幅10cm, 下幅4cm, 深さ8cmほどで、断面形はU字形である。

床 全体的に平埤で、中央部から南部が特に踏み固められている。

竈 東壁の中央から南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約95cm, 両袖部幅約80cmである。火床部は、床面を約10cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は確認できなかった。煙道は火床面から緩やかに立ち上がる。北袖部からは、補強材として使用したと考えられる土器器体部片が出土している。また、竈内からは多量の土器器片が出土している。

竈土層解説

1 暗褐色 炭土粒子・炭化粒子微量	5 にぶい赤褐色 炭土粒子多量、炭化物・炭化粒子少量、軟らかい
2 暗褐色 炭土粒子・炭化粒子・炭化物少量	6 暗赤褐色 炭土粒子多量、ローム中ブロック少量、軟らかい
3 暗褐色 ローム中ブロック・炭土粒子微量	7 暗赤褐色 炭土粒子・炭化粒子中量
4 暗褐色 炭土粒子中量	8 赤褐色 炭土粒子多量

ピット 南西コーナー部にあるP₁は径約40cmの円形で、深さ23cmである。性格は不明である。

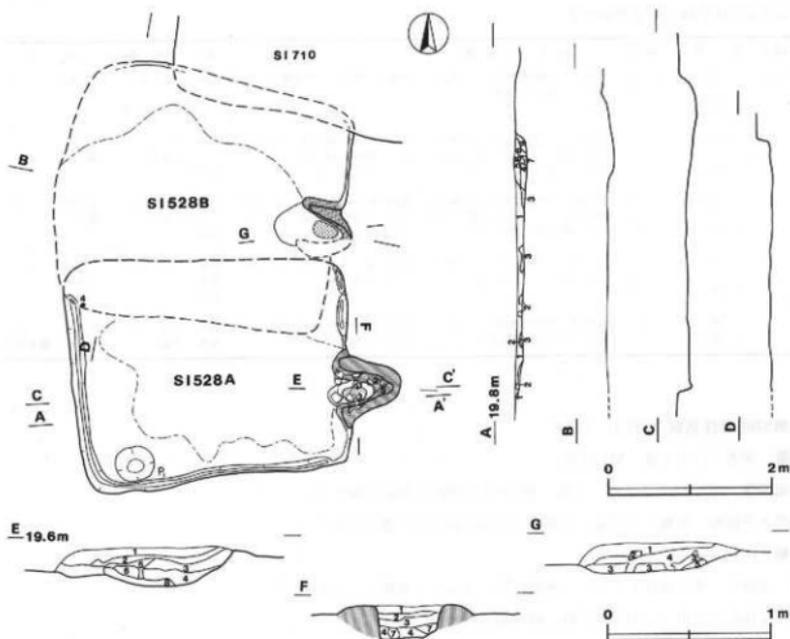
覆土 9層からなり、堆積状況から人為堆積と考えられる。第1層はロームブロックが含まれず、自然堆積したものと考えられる。

土層解説

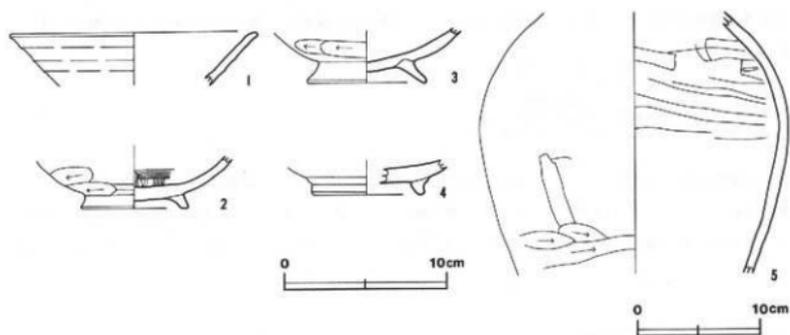
1 褐色 色 ローム粒子多量、純土・炭化粒子微量	7 暗褐色 炭土粒子多量、炭化粒子中量、ローム大・中ブロック少量
2 にぶい褐色 色 ローム小ブロック多量	8 暗褐色 炭化粒子中量
3 暗褐色 色 ローム大・中ブロック少量	9 褐色 色 ローム粒子・炭土粒子中量
4 暗褐色 色 ローム粒子・炭化粒子少量、やや軟らかい	
5 褐色 色 ローム粒子多量、炭土粒子・炭化粒子微量	
6 暗褐色 色 ローム小ブロック多量、純土粒子少量	

遺物 土器器片202点, 須恵器片26点, 礫6点が出土している。図示した土器はいずれも土器器である。第131図1の環, 2と3の高台付環は竈内から, 4の高台付環は西部の床面から出土している。5の堊は竈袖部の補強材として使用されていた。

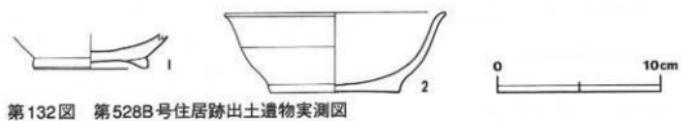
所見 本跡の時期は、出土遺物から判断して9世紀前半と考えられる。重複している第528B号住居跡より古い。



第130图 第528A・528B号住居跡実測図



第131图 第528A号住居跡出土遺物実測図



第132图 第528B号住居跡出土遺物実測図

第528A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第131図 1	環 土 師 器	A [15.0] B (3.3)	体部から口縁部にかけての破片。 体部、口縁部は外傾して立ち上 がる。	口縁部、体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英・ 赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7001 15% 壺内
2	高台付環 土 師 器	B (3.1) D [6.6] E 0.8	高台部から体部にかけての破片。 高台は短く「ハ」の字状に開く。 体部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り 付け。体部外面下層ヘラナデ、 内面丁寧なヘラ磨き。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P7002 30% 壺内
3	高台付環 土 師 器	B (3.3) D [6.6] E 1.3	高台部から体部にかけての破片。 高台は「ハ」の字状に開く。体 部は内彎気味に立ち上がる。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り 付け。体部外面下層ヘラナデ、 内面丁寧なヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P7003 20% 壺内
4	高台付環 土 師 器	B (1.7) D [6.4] E 1.1	高台部から底部にかけての破片。 高台は短く「ハ」の字状に開く。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り 付け。底部内面ナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P7004 15% 西部床面
5	壺 土 師 器	B (21.4)	体部片。体部は内彎して立ち上 がる。上位に最大径をもつ。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。 内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	P7005 30% P.L65 壺袖部内

第528B号住居跡 (第130・132図)

位置 調査7区中央部, M11d区。

重複関係 第528A号住居跡の北部, 第710号住居跡の南部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 [3.5]m, 短軸 [3.1]mの長方形と推定される。

長軸方向 N-103°-E

壁 東壁の一部が残存しており, 壁高は15~20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で, 中央部に特に踏み固められている。

竈 東壁の中央に砂質粘土で構築されている。南袖部は攪乱を受けているため, 確認できなかった。規模は, 焚口部から煙道部まで約95cmと推定される。火床部は, 床面を約10cm掘りくぼめており, 赤変硬化している。天井部は攪乱を受けているため, 確認できなかった。煙道は火床面から緩やかに立ち上がると推定される。

竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 山砂多量, 焼土粒子中量, 炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化物・炭化粒子少量

遺物 土師器片19点が出土している。第132図1の土師器高台付環と2の土師器環は, 壺内から出土している。

所見 本跡では, ビットは確認できなかった。壁が確認できなかった部分は, 床質から規模と平面形を推定した。時期は, 出土遺物から判断して9世紀中葉と考えられる。重複している第528A・710号住居跡より新しい。

第528B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第132図 1	高台付環 土 師 器	B (2.0) D [6.6] E 1.2	高台部から底部にかけての破片。 高台は短く「ハ」の字状に開く。	底部外面ヘラ削り, 内面ヘラ磨き。 高台貼り付け後ナデ。	砂粒・雲母・赤色 粒子 にぶい橙色 普通	P7006 15% 壺内
2	環 土 師 器	A [13.6] B 4.9 C 8.0	底部から口縁部にかけての破片。 平底。体部は内彎気味に立ち上 がり, 口縁部は外反する。	底部外面回転ヘラ削り, 内面ナデ。 体部内・外面横ナデ。	雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	P7007 30% 壺内

第531号住居跡 (第133図)

位置 調査7区西部, M10e区。

重複関係 北壁部分と南壁部分が第8号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 [2.7]m, 短軸2.60mの方形と推定される。

長軸方向 N-30°-E

壁 西壁の立ち上がりは確認できなかった。壁高は5~12cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、中央部が特に踏み固められている。床面を精査したところ、ほぼ中央部に長さ約100cm, 幅20cm, 深さ10cmの溝が検出された。性格は不明である。

竈 北東壁のやや南寄りに砂質粘土で構築されている。規模は、焚口から煙道部まで約100cm, 両袖部幅約80cmである。火床部は床面を約7cm掘りくぼめており、赤変硬化している。天井部は崩落しており、第8層は崩落土と考えられる。袖部は良好に遺存している。東袖部には、補強材として使用されたと考えられる土師器片が貼り付けられた状態で出土している。煙道は火床面から緩やかに立ち上がっている。覆土から多量の土師器片が出土している。

覆土層解説

- 1 褐色 色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 色 ロームブロック
- 3 褐色 色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 4 褐色 色 焼土粒子多量, ローム小ブロック少量, やや軟らかい
- 5 ちいばい黄褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 6 ちいばい黄褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 7 褐色 色 焼土粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 8 砂質粘土層
- 9 褐色 色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, やや軟らかい

覆土 2層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・炭化物少量

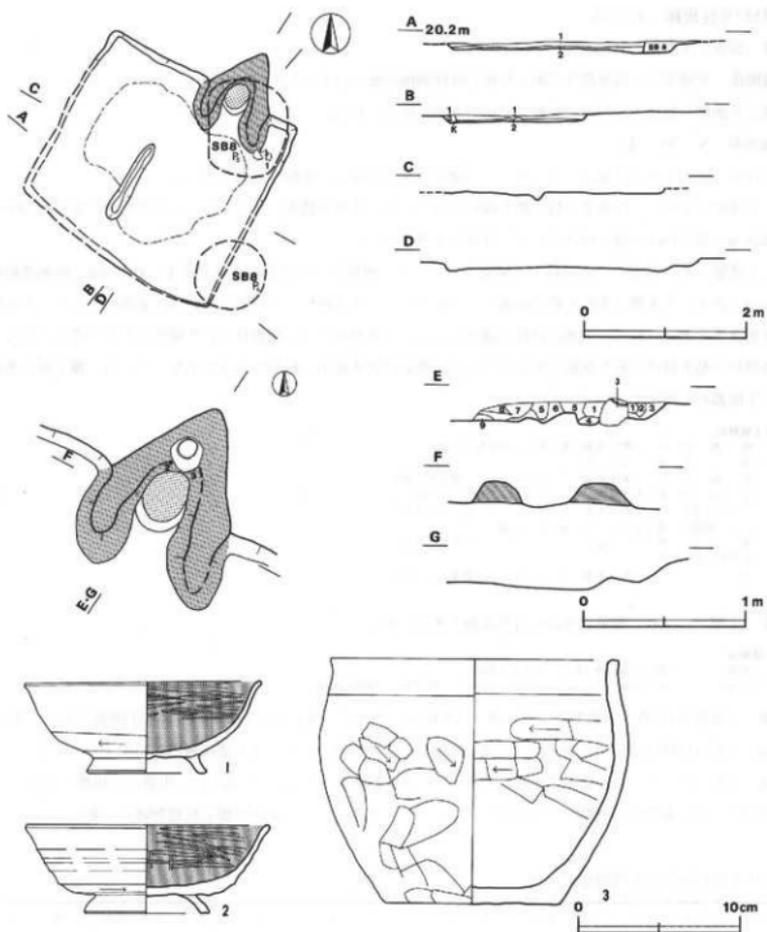
遺物 土師器片127点, 須恵器片16点, 礫3点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。第133

図1の高台付杯は逆位で北東コーナー部の床面から、2の高台付杯と3の甕は竈内から出土している。

所見 本跡では、ピットと壁溝は確認できなかった。壁が確認できなかった部分は、床面から規模を推定した。時期は、出土遺物から判断して9世紀と考えられる。重複している第8号掘立柱建物跡より新しい。

第531号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第133図 1	高台付杯	A 14.5 B 5.7 D 7.2	高台は短く「ハ」の字状に開く。体部は内帯気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り後ナデ。高台貼り付け後ナデ。体部外面下溝ヘラ磨り。上端横ナデ。内面ヘラ磨き。口縁部外面横ナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・赤色 粒子 ちいばい褐色 (外面) 普通	P7017 80% P L.65 北東コーナー部床面
	土師器	E 12				
	高台付杯	A 15.0 B 5.5 D 7.8 E 12	体部から口縁部一部欠損。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内帯気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。体部外面クロコナデ、下縁ヘラナデ。口縁部外面横ナデ。内面丁寧なヘラ磨き。内面黒色処理。	小石・赤色粒子 ちいばい褐色 (外面) 普通	P7018 80% P L.65 竈内
3	甕	A [18.0] B 15.2 C 10.7	体部から口縁部一部欠損。平底。体部は内帯気味に立ち上がり、上位に最大径をもつ。口縁部はやや外反する。	底部ヘラナデ。体部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英・赤色粒子 褐色 普通	P7019 70% P L.65 竈内
	土師器					



第133図 第531号住居跡・出土遺物実測図

第532号住居跡 (第134図)

位置 調査7区西部, M10g区。

重複関係 東壁際と南壁際を第12号掘立柱建物跡の柱穴に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.75m, 短軸3.72mの方形である。

主軸方向 N-7°-E

壁 壁高は25~30cmで, 外傾して立ち上がる。